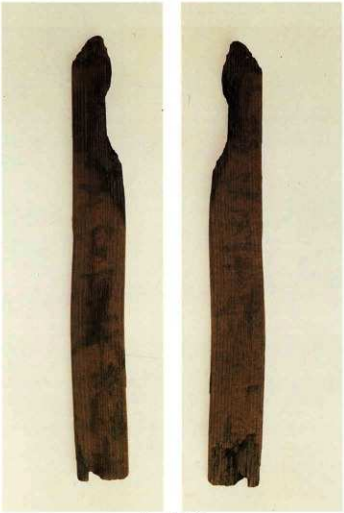
富山県大島町

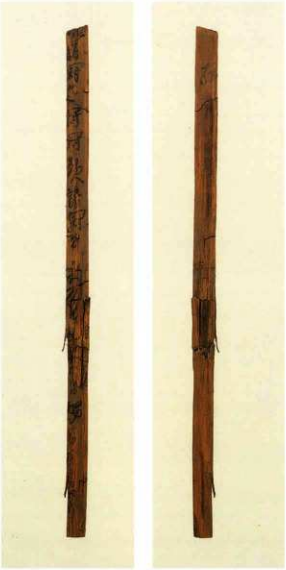
北高木遺跡
発掘調査報告書

1995

大島町教育委員会



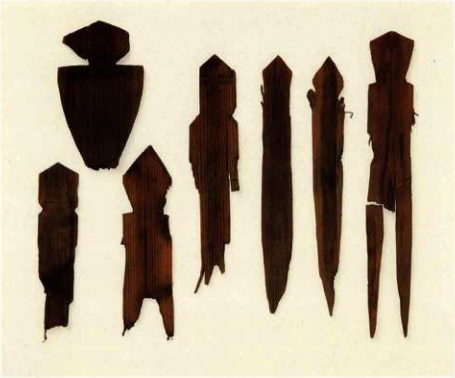
第1号木簡



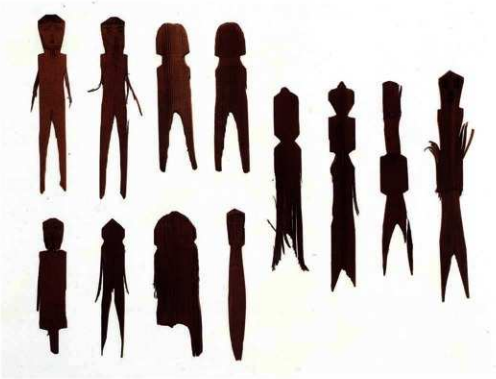
第2号木簡

第3・4号木簡　第5・7～10号木簡

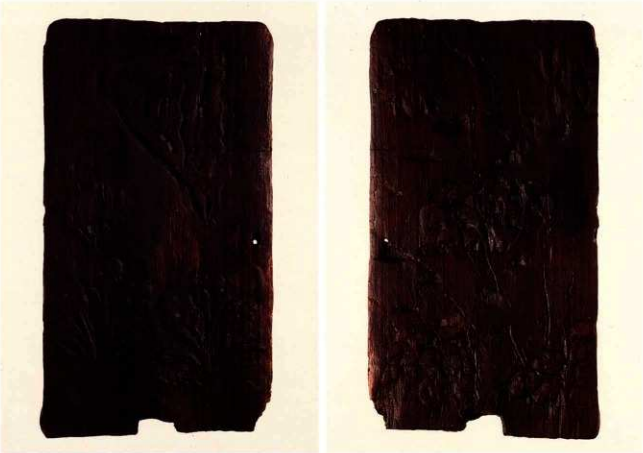
主な墨書



人　形



人　形



版木状木製品

人面墨書土器

富山県大島町

北高木遺跡
発掘調査報告書

1995

大島町教育委員会

序

この報告書は、大島町の企業団地拡張造成に伴い、大島町が平成４年度から３箇年に亙って調査を実施した北高木遺跡の発掘調査報告であります。

調査の結果、日本でも希有な出土遺物である版木や茶釜の鋳型など貴重な遺物が多く出土しました。さらに多く出土した木簡や人形などの遺物は、この北高木遺跡の地が奈良・平安時代には県内でも有数の祭祀場であったことを物語っており特筆すべきものです。

この成果が、今後の研究に参考となり、埋蔵文化財に対する理解ならびに保護の一助となれば幸いです。

終わりに、調査に協力していただきました地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターを始めとします関係諸機関の方々に心から感謝申し上げます。

大島町教育委員会

教育長　大　井　富　雄

凡　例

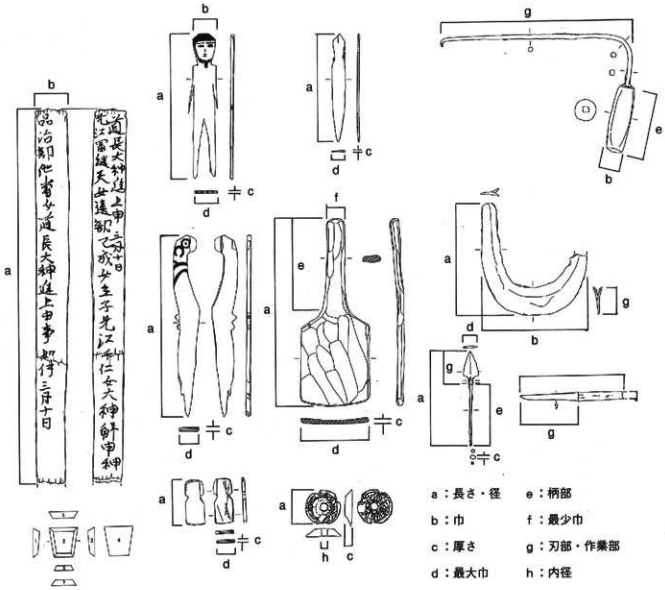
1．本書に記載した図版の縮尺は、原則として各地区の遺構全体図を1/400、各遺構図を1/80、遺物実測図の縮尺は1/3とした。ただし、一部の墨書土器、木簡、人形など祭祀に関する木製品は縮尺1/2で掲載した。

2．遺構図版中に提示した矢印は磁北を示し、水平の数字は海抜を表す。その他の表示については必要に応じて掲載し、各々ふれた。

3．木製品・金属製品・石製品は、原則として第三角投影法によって実測した。

4．図版中のトーンは、掲載した各々の頁に凡例を付した。

5．各遺物の計測値・各部の名称は、以下の記載例に従った。



目　次

第１章　位置と環境　1
　第１節　遺跡の位置と自然環境　1
　第２節　歴史的環境　2
第２章　調査の概要　5
　第１節　調査に至る経緯　5
　第２節　調査概要と経過　6
第３章　遺構と遺物　11
　第１節　Ａ・Ｂ地区　11
　　１　遺構　11
　　２　遺物　23
　第２節　Ｃ地区　49
　　１　遺構　49
　　２　遺物　66
　第３節　Ｄ地区　76
　　１　遺構　76
　　２　遺物　87
　第４節　Ｅ地区　92
　　遺構と遺物　92
第４章　ＳＤ１００　96
　第１節　概要と土層堆積状況　96
　第２節　出土遺物　98
　　１　木簡　98
　　２　須恵器　104
　　３　土師器　105
　　４　人面墨書土器　125
　　５　墨書土器　127
　　６　木製品　135
　　７　金属製品　166
　　８　石製品　166
第５章　まとめ
　第１節　土器
　　１　土器　168
　　２　墨書土器　169
　第２節　木製品　170
　　１　祭祀関連木製品　170
　　２　版木状木製品　174

図版目次

第１図　北高木遺跡の位置
第２図　北高木遺跡と周辺の遺跡
第３図　荒畑遺跡の発掘箇所
第４図　荒畑遺跡Ｂ発掘調査区遺構
第５図　北高木遺跡平成２年度試掘調査出土遺物（須恵器、瀬戸）
第６図　北高木遺跡試掘坑配置
第７図　北高木遺跡座標配置
第８図　北高木遺跡年度別本調査地区
第９図　北高木遺跡基本層序
第10図　北高木遺跡Ａ地区の遺構及び縄文土器出土状況
第11図　北高木遺跡Ａ地区東調査区の遺構配置
第12図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構配置
第13図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構１
第14図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構２
第15図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構３
第16図　北高木遺跡調査区付近の地割り図及び字名
第17図　北高木遺跡Ａ・Ｂ地区の遺構配置
第18図　北高木遺跡Ａ・Ｂ地区の遺構
第19図　北高木遺跡Ａ地区の遺物（縄文土器）
第20図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物１（須恵器１）
第21図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物２（須恵器２）
第22図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物３（須恵器３）
第23図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物４（須恵器４）
第24図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物５（須恵器５）
第25図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物６（須恵器６）
第26図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物７（須恵器７）
第27図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物８（須恵器８）
第28図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物９（須恵器９・土師器１）
第29図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物10（土師器２）
第30図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物11（土師器３・須恵器１・金属製品）
第31図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物12（須恵器２）
第32図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物13（弥生土器他）
第33図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物14（木簡・人形１）
第34図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物15（人形２・斎串）
第35図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物16（墨書土器１）

第36図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物17（墨書土器２）
第37図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物18（墨書土器３）
第38図　北高木遺跡Ｂ地区ＳＤ01内遺物出土状況１（墨書土器１・須恵器１）
第39図　北高木遺跡Ｂ地区ＳＤ01内遺物出土状況２（墨書土器２・須恵器２）
第40図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構配置
第41図　北高木遺跡C地区の遺構1（弥生土器出土状況）
第42図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構２（弥生時代の溝）
第43図　北高木遺跡C地区の遺構3（弥生時代の土坑）
第44図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構４（奈良・平安時代の遺構１）
第45図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構５（奈良・平安時代の遺構２）
第46図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構６（奈良・平安時代の遺構３）
第47図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構７（奈良・平安時代の遺構４）
第48図　北高木遺跡C地区の遺構8（中世の遺構1土坑）
第49図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構９（中世の遺構２）
第50図　北高木遺跡C地区の遺構10（中世の遺構３）
第51図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構11（中世の遺構４）
第52図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構12（中世の遺構５）
第53図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物１（弥生土器１）
第54図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物２（弥生土器２）
第55図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物３（弥生土器３）
第56図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物４（須恵器１）
第57図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物５（須恵器２）
第58図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物６（須恵器３）
第59図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物７（須恵器４・珠洲１）
第60図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物８（珠洲２）
第61図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物１（弥生土器）
第62図　北高木遺跡D地区の遺構1（弥生時代の遺構）
第63図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構２（奈良時代の遺構１掘立柱建物１）
第64図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構３（奈良時代の遺構２掘立柱建物２）
第65図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構４（中世の遺構１）
第66図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構５（中世の遺構２鋳造遺構）
第67図　鋳造鋳型復元図
第68図　北高木遺跡D地区の遺構6（中世の遺構3土坑）
第69図　北高木遺跡D地区の遺構7（中世の遺構4井戸）
第70図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構配置
第71図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物１（須恵器）
第72図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物２（土師器）
第73図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物３
第74図　北高木遺跡Ｅ地区の遺構配置
第75図　北高木遺跡Ｅ地区の遺物（須恵器・土師器）
第76図　北高木遺跡ＳＤ100グリッド配置
第77図　北高木遺跡ＳＤ100層序
第78図　北高木遺跡ＳＤ100木簡出土位置
第79図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物１（木簡１）
第80図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物２（木簡２）
第81図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物３（木簡３）
第82図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｃ地区）出土遺物４（須恵器１）
第83図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｃ地区）出土遺物５（須恵器２）
第84図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｃ地区）出土遺物６（土師器１）
第85図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物７（須恵器３）
第86図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物８（須恵器４）
第87図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物９（須恵器５）
第88図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物10（須恵器６）
第89図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物11（須恵器７）
第90図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物12（須恵器８）
第91図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物13（須恵器９）
第92図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物14（須恵器10）
第93図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物15（須恵器11）
第94図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物16（須恵器12）

第95図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物17
（須恵器13）
第96図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物18
（須恵器14）
第97図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物19
（須恵器15）
第98図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物20
（土師器２）
第99図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物21
（土師器３）
第100図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物22
（土師器４）
第101図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物23
（人面墨書土器）
第102図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物24
（墨書土器１「小野殿」・「秋万呂」他）
第103図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物25
（墨書土器２名詞他）
第104図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物26
（墨書土器３その他の文字）
第105図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物27
（墨書土器４「十」）
第106図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物28
（墨書土器５「十」・漆書・篦書）
第107図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物29
（墨書土器6「中」・「佐見御庄」・「富」他）
第108図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物30
（木製品１服飾具）
第109図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物31
（木製品２容器類１）
第110図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物32
（木製品３容器類２）
第111図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物33
（木製品４容器類３）
第112図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物34
（木製品５容器類４）
第113図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物35
（木製品６食事具他）
第114図　北高木遺跡SD100出土遺物36（木製品7火起）
第115図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物37
（木製品８工具類１）
第116図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物38
（木製品９農具・工具類）
第117図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物39
（木製品10工具類・武器）
第118図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物40
（木製品11工具類２）
第119図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物41
（木製品12部材）
第120図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物42
（木製品13工具類）
第121図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物43
（木製品14人形１）
第122図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物44
（木製品15人形２）
第123図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物45
（木製品16人形３）
第124図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物46
（木製品17斎串１）
第125図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物47
（木製品18斎串２）
第126図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物48
（木製品19斎串３）
第127図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物49
（木製品20舟形１）
第128図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物50
（木製品21舟形２）
第129図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物51
（木製品22その他祭祀関連遺物１）
第130図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物52
（木製品23その他祭祀関連遺物２）
第131図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物53
（木製品24付札状木製品）
第132図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物54
（木製品25版木状木製品）
第133図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物55（金属製品）
第134図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物56（石製品）
第135図　北高木遺跡出土木製品組成図
第136図　人面墨書土器・人形出土状況図
第137図　祭祀関連出土状況図
第138図　版木状木製品と古代文様
第139図　版木状木製品の文様構成図

写真図版目次

図版1　北高木遺跡付近の航空写真（1990年頃撮影）
図版2　町道地区1
（完掘状況・SD01完掘状況・遺物出土状況）
図版3　A地区1　全景（上空）
図版4　A地区2　西区（完掘状況）
図版5　A地区3　東区（完掘状況）
図版6　A地区4　出土遺物（縄文土器）
図版7　B地区1　全景（上空）
図版8　B地区2　SD01（遺物出土状況）
図版9　B地区3　その他の遺構
図版10　B地区4　出土遺物（1）須恵器1
図版11　B地区5　出土遺物（2）須恵器2
図版12　B地区6　出土遺物（3）須恵器3・土師器
図版13　B地区7　出土遺物（4）須恵器4
図版14　B地区8　出土遺物（5）須恵器5
図版15　C地区1　93年度調査区（1）全景（上空）
図版16　C地区2　93年度調査区（2）
弥生土器等出土状況1
図版17　C地区3　93年度調査区（3）
弥生土器等出土状況2
図版18　C地区4　93年度調査区（4）古代の遺構1
図版19　C地区5　93年度調査区（5）古代の遺構2
図版20　C地区6　93年度調査区（6）古代の遺構3
図版21　C地区7　93年度調査区（7）古代の遺構4
図版22　C地区8　93年度調査区（8）古代の遺構5
図版23　C地区9　93年度調査区（9）遺物出土状況
図版24　C地区10　94年度調査区（1）
図版25　C地区11　94年度調査区（2）
図版26　C地区12　出土遺物（1）弥生土器
図版27　C地区13　出土遺物（2）弥生土器
図版28　D地区1　93年度調査区（1）全景（上空）
図版29　D地区2　93年度調査区（2）完掘状況1
図版30　D地区3　93年度調査区（3）完掘状況2
図版31　D地区4　93年度調査区（4）
鋳造関係遺構群
図版32　D地区5　93年度調査区（5）
鋳造関係遺構（SD17）
図版33　D地区6　93年度調査区（6）鋳型
図版34　D地区7　93年度調査区（7）その他の遺構1
図版35　D地区8　93年度調査区（8）その他の遺構2
図版36　D地区9　94年度調査区（1）古代の遺構1
図版37　D地区10　94年度調査区（2）古代の遺構2
図版38　D地区11　94年度調査区（3）古代の遺構3
図版39　D地区12　94年度調査区（4）古代の遺構4
図版40　D地区13　94年度調査区（5）古代の遺構5
図版41　D地区14　94年度調査区（6）弥生時代の遺構
図版42　E地区1　全景（上空）
図版43　E地区2　遺構（土坑など）
図版44　SD100遺物出土状況1
図版45　SD100遺物出土状況2
木簡と人形等出土状況
図版46　SD100出土遺物1　須恵器（1）
図版47　SD100出土遺物2　須恵器（2）
図版48　SD100出土遺物3　土師器
図版49　SD100出土遺物4　木製品（1）木簡他
図版50　SD100出土遺物5　木製品（2）人形・斎串
図版51　SD100出土遺物6　木製品（3）鳥形他
図版52　SD100出土遺物7　木製品（4）容器類他
図版53　SD100出土遺物8　木製品（5）器物類他
図版54　SD100出土遺物9　木製品（6）
版木状木製品1
図版55　SD100出土遺物10　木製品（7）
版木状木製品2
図版56　SD100出土遺物11　墨書土器（1）人名他
図版57　SD100出土遺物12　墨書土器（2）地名他
図版58　SD100出土遺物13　墨書土器（3）
名詞他
図版59　SD100出土遺物14　墨書土器（4）数字他
図版60　SD100出土遺物15　墨書土器（5）
その他の文字

表目次

第1表　北高木遺跡とその周辺遺跡一覧表
第2表　SD100出土墨書土器観察表1
第3表　SD100出土墨書土器観察表2

例　言

1．本書は、富山県射水郡大島町北高木地内に所在する北高木遺跡（県遺跡番号384001）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、大島町産業課が事業主体となる大島町企業団地造成事業（第３次補完事業）に起因して実施したものである。

3．調査は、各年度とも大島町教育委員会に事務局を置き、富山県埋蔵文化財センターが調査を行なった。

4．この事業における各地区の調査年度・担当者は、以下のとおりである。

	調査区分	調査年月日	調査担当者	調査地区及び対象面積	
a	試堀調査	平成３年10月２日～10月31日	久々・島田	事業地全域	72,000㎡
b	第１次調査	平成４年６月22日～12月７日（実働100日）	安念	Ａ地区	2,000㎡
				Ｂ地区	6,000㎡
		平成４年５月11日～６月５日（実働17日）		町道地区	500㎡
c	第２次調査	平成５年５月20日～12月17日（実働126日）	安念	Ｃ地区（北川調査区）	6,000㎡
				Ｄ地区（中世面）	5,600㎡
d	第３次調査	平成６年４月11日～12月16日（実働160日）	安念・高橋	Ｃ地区（南側調査区）	800㎡
				Ｄ地区（古代面外）	3,900㎡
				Ｅ地区	7,300㎡

5．本遺跡の略号は「OKT（Ooshima･KitaTakagi）」で、以下に各地区の名称を付けた。また、複数年に調査が跨がるため、先頭に調査年度を付した。

・記載例：1994年大島町北高木遺跡Ａ地区「94OKT-A」

6．遺構の略記号は、以下のとおりである。

ＳＢ･･･掘建柱建物　ＳＤ･･･溝・河道　ＳＥ･･･井戸　ＳＫ･･･土坑　ＳＸ･･･性格不明遺構

7．現地の写真は、調査担当者が撮影した。また、一部の遺物写真には狩野睦氏・牛嶋茂氏、一部の実測図は、上野章氏・境洋子氏の協力を得た。

8．木簡の釈文及び解説は、富山大学人文学部助教授本郷真紹氏によるものである。また、墨書土器の判読にあたっても同氏の御教示を賜った。

9．本書の編集は、安念幹倫（埋蔵文化財センター調査課主任）・高橋真実（同課文化財保護主事）が行い、埋蔵文化財センター職員の他、12に掲げた諸氏・諸機関の協力を得た。

10．現地の調査における測量業務等は町教育委員会が発注し、㈱シン技術コンサル（本社札幌）に委託した。なお、測量の起点には、OSHIMA（X80921.880,Y-8915.890）・NUNOME（X82618.280,Y-7466.040）を使用した。

11．木製品・金属製品の保存処理は、㈱元興寺文化財研究所・㈱近畿ウレタンに委託した。

12．現地調査の際、検出した鋳型遺構の切取保存は、㈱近畿ウレタンが実施した。

13．現地調査の作業には、大島町シルバー人材センター・新湊市シルバー人材センターの協力を得た。

14．この調査にあたり、以下の諸氏・諸機関に御助言・御援助を賜った。

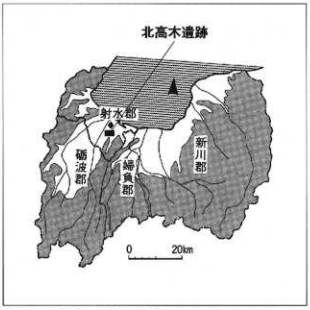
秋山　進午・牛嶋　茂・大山　明彦・鎌田　元一・木村　法光・切畑　健・櫛木　謙一
小林　謙一・佐原　真・関根　真隆・鎌野　孝・田中　琢・坪井　清足・西川　明彦
長谷川益夫・本郷　真紹・町田　章・三宅　久雄・三瓶　裕司・水野　正好・吉岡　暢康
吉岡　幸雄・木簡学会・富山考古学会

15．出土した遺物は、富山県埋蔵文化財センターで保管している。また、切取を実施した鋳型も同センターで展示公開されている。

第１章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と自然環境

北高木遺跡のある大島町は、富山県のいわゆる呉西（ごせい）にあたり、古代の郡制では越中四郡のうち射水郡に属する。射水平野の西部、庄川東岸にある人口約8,400人ほどの町である。座標上では東経137度３分13秒、北緯36度43分36秒に位置する。町に接する市町としては、東に小杉町、北に新湊市、また南側には大門町があり、特に大門町とは駅を共有するなど密接な関係にある。加えて庄川を挟み、西に高岡市に相対する。富山市との距離は約15㎞、高岡市までは約4.5㎞と比較的近い。旧北陸街道の通過地点でもあり、古くから交通の要所でもあった。



第１図　北高木遺跡の位置

地形的には、町域全域の地形は平坦で丘陵・山間地などは含まれず、標高約３～８ｍを測る。基本的には大門町との境界あたりから北へと低くなる傾向にある。このことは地質学の上では、「低地の形成は新湊市周辺に存在した古放生津潟の影響によるもの」とされる。時代的には縄文時代前期の海進の頃に古放生津潟が形成され、縄文時代後晩期頃にこの潟に流れる神楽川・下条川・鍛治川などの河川が周囲の丘陵の土砂を運び、少しずつ埋めていったとされている。従って基板層となる土壌は、沖積層でその厚さは数十ｍを測るといわれている。なお、ＪＲ北陸線の北側の地形は射水三角州にあたり、現在でも神楽川・下条川などの小河川は、放生津潟に向って流れる。

気候的には日本海沿岸気候に属し、温和である。風向きは、春・秋・冬は南西もしくは南風、夏は北もしくは北東の風が多くなる。また、周囲が高く丁度盆地状の地形となるため、フェーン現象が発生することもある。

北高木遺跡は、このような地形の中にあってちょうど大島町の北部、新湊市荒畑との境にあり、遺跡の東側には市境である神楽川が流れる。周囲の標高は、町内でも比較的低く約３ｍを測り、現況においては平坦地となっているが、周囲に縄文時代晩期の遺物などが点在することから、微高地状の島が点在する環境にあったと考えられる。ほ場整備以前のこの周辺は湿田で、今現在でも地下水位が高く、１ｍ程掘下げると水が自然に涌き出す状況である。なお、北高木地区のほ場整備は、昭和40年代で終了しており、調査前の状況は、３反田が広がる状況であった。歴史的環境の項とも重なるが、かつての北高木集落は、現在地よりやや南側に位置し、疫病によって今の地に移動したとされている。（高橋）

第2図　北高木遺跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
A	北高木遺跡	12	朴木A遺跡	24	若杉遺跡	36	八塚C遺跡	48	布目沢苗鳥遺跡
1	越中国府関連遺跡	13	高島A遺跡	25	中野遺跡（北）	37	二口五反田遺跡	49	甲田新遺跡
2	上牧野宮袋遺跡	14	高島B遺跡	26	中野遺跡（南）	38	八塚土出遺跡	50	小杉丸山遺跡
3	松木七口遺跡	15	作道遺跡	27	南高木遺跡（北）	39	赤井遺跡	51	小杉流団遺跡群
4	撰館塚遺跡	16	鏡宮北遺跡	28	南高木遺跡（南）	40	三ヶ遺跡	52	小杉伊勢領遺跡
5	中曽根西遺跡	17	松木中鹿遺跡	29	鳥取北遺跡	41	HS-03遺跡	53	HS-03遺跡
6	松木遺跡	18	沖塚原遺跡	30	小林遺跡	42	小島遺跡	54	愛宕遺跡
7	川原遺跡	19	沖塚原東A遺跡	31	鳥取遺跡	43	二口遺跡	55	中山北A遺跡
8	烏帽子形遺跡	20	沖塚原東B遺跡	32	新開発遺跡	44	下条B遺跡	56	福牧遺跡
9	背戸挟間遺跡	21	高木・荒畑遺跡	33	小杉南遺跡	45	布目沢北遺跡	57	HS-04遺跡
10	放生津城跡	22	寺塚原遺跡	34	八塚B遺跡	46	布目沢東遺跡	58	針原西遺跡
11	朴木B遺跡	23	中野北遺跡	35	八塚A遺跡	47	布目沢遺跡	59	太閤山ランド内遺跡群ほか

表1　北高木遺跡とその周辺遺跡一覧表

第2節　歴史的環境

歴史

大島町内で、遺物散布地を含め遺跡として、昭和46年度作成された『富山県遺跡台帳目録』に掲載された箇所は、鳥取地区で1箇所、八塚地区で3箇所の4遺跡であったが、その後、新たに19箇所が確認され平成4年度版県遺跡台帳では、23箇所となった。掲載された遺跡のうち、時期・性格・範囲など明確に状況が把握できるものは数少ない。

原始

大島町と新湊市の両市町にまたがる荒畑遺跡で、工業団地の造成に先だって実施された調査では、縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。この周辺では最も古い時期にあたる。

律令時代

北陸地方は大化改新以前から「越」（こし）の国と称されていた。史書における越中国の初見は、『続日本紀』大宝2年(702)の「分越中国四郡属越後国」（越中国に属していた4郡を越後国に属させた）とある記載である。この記載にから、越中国はこれ以前に成立していたこと示唆される。明確な時期は不明であるが、大宝律令の実施にともない「越中」も国として成立していた可能性が窺える。また考古学資料では、「越中国利波郡川上里鮒雑」その裏書きに「［脂一斗五升］和同三年正月十四日」(710)と記された木簡が、昭和36年(1961)平城宮跡東院地区の左京二条二坊大路の西側溝から出土している。

射水郡の初見は『万葉集』巻十七に収録されている、大伴家持が詠んだ「二上山賦一首」の制注に「此山者、有射水郡也」とある記載であり、天平19年(747)のものである。射水のよみを万葉集では伊美都・伊美豆、「先代旧事本紀」では伊弥頭、『和名類聚抄』では伊三豆の漢字をあてている。

和名抄の射水郡には10郷があり、その中の「三嶋郷」がこの地域に含まれる。三嶋郷については、「正倉院古裂銘文集成」所収の天平勝宝期(749～757)のものとみられる越中国射水郡三嶋郷戸主射水臣」とあり、当郷が奈良時代から存在したことが分かる。所在地について諸説あるものの概ね現在の射水郡域をでないものと考えられる。

また、『延喜式』によれば、古代北陸道の越中国の駅として西から坂本・川人・日理・白城・磐瀬・水橋・布施・佐味の8駅が記載されている。そのうち射水郡内に比定される駅としては川人・日理・白城の3駅がある。川人駅を経て日理駅に至り、その周辺で小矢部川を渡り白城駅進んだと考えられている。『万葉集』巻十八にある「射水郡駅館」とは状況から日理駅の可能性が高いとされている。富山県史古代通史編では、古代北陸道の駅比定地に関する諸説を掲げている。越中の最初の駅の坂本駅、次の駅の川人駅の比定地に関してはどの説とも同じである。しかし3番駅目となる日理駅、4番駅目となる白城駅の比定地からは少々異なる。県史では六渡寺周辺に日理駅、下村白石周辺に白城駅を比定している。

木下良氏は、官道とは、軍事的にも都からいかに早く目的地に到達できるかなど、律令体制を強化するため整備された道である。そのため武官人事と軍事一般をつかさどる兵部省が官道を所管している。このことから官道は、地形に多少左右さてながらも直線的である可能性が高いと説いた。そこで、あえて国分寺等を経由しなくてもよいこと、六渡寺周辺の軟弱な地質、高岡市の守護町にも「わたり」と言う地名があったこと、仮に守護町周辺に日理駅を比定した場合4番駅目の白城駅（下村白石周辺）とは最短でつながることな

どから、守護町周辺に日理駅を比定地とした。

仮にそうであった場合、古代北陸道は、北高木地区と沖塚原地区を区切る現西部８号排水路溯道あたり、つまり北高木遺跡の北を東西に走ったのではないかと推定できる。

当遺跡の西、約１㎞に大島町中野地区がある。この地名から諸説の一つに射水郡古代荘園の地に推定されている。中野荘は西大寺領とされたが、はじめは越中国司に属する官の牧の地であったと考えられている。西大寺資財流記帳によれば、その後神護景雲３年(769)～宝亀10年(779)の間に、射水郡　山荘・新川郡佐味荘とともに中野荘も西大寺に施入されたと記されている。古代初期荘園を解明する避けて通れない所である。

地形

北高木地区の農地は、昭和28年から昭和30年代前半にかけて実施された区画整備によって整えられ、今日みられる田地割りは、当時実施されたものである。その際、地区内を南北にぬけた幹線道草島往来（草島往来とは、２代目加賀藩主前田利長のころ、高岡城を築城するために富山市草島から大門を経て高岡に至る道のこと）は姿を消し、その代わりに一般県道八丁大門線が整備された。古来より射水平野の地形は、きわめて平坦で水田標高も低く、かつ湿田地帯であった。このことは水田耕作の障害となっていた。昭和38年から乾田化目的とした国営事業が実施され、従来から流れていた神楽川は、西部主要幹線排水路として、加えて昭和42年から県営事業が実施され、神楽川及び他の河川も西部１号・７号・８号の各排水路にそれぞれ整備された。これにより射水平野の水田は乾田化され、美田に生まれ変わった。（安念）

参考文献

富山県農地林務部ほ場整備課 1984『土地分類基本調査　富山』
富山県教育委員会 1972『富山県遺跡地図』
富山県教育委員会 1972『富山県遺跡台帳目録』富山県埋蔵文化財包蔵地調査報告書
富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
大島村役場 1965『大島村史』
大島町 1989『大島町史』
大島町教育委員会 1991『富山県大島町荒畑遺跡発掘調査概要』
大島町教育委員会 1992『大島町文化財の栞』
大島町企業団地協同組合 1992『平成３年度　活路開拓ビジョン調査報告書』
富山県 1970『富山県史　史料編Ⅰ　古代』
富山県 1976『富山県史　通史編Ⅰ　原始・古代』
木下良 1980「Ⅱ　越中における北陸道」『富山県歴史の道調査報告書－北陸街道－』富山県教育委員会
富山県教育委員会 1986『昭和60年　富山県埋蔵文化財調査一覧』
富山県埋蔵文化財センター 1989『富山県埋蔵文化財センター年報　昭和63年度』
富山県埋蔵文化財センター 1992『富山県埋蔵文化財センター年報　平成３年度』
奈良国立文化財研究所　『木簡』
竹内理三他 1982『日本歴史地図(原始・古代編〈下〉)』柏書房
竹内理三・坂井誠一他 1979『角川日本地名大辞典　16 富山県』角川書店
高瀬重雄他『富山県の地名』日本歴史地名大系第16巻　平凡社
木下良 1994「古代道路の研究」『季刊　考古学』第46号
久々忠義・林寺峻州 1994「射水平野の遺跡－神楽川流域を探る－」『大境』第16号　富山考古学会
久々忠義 1995『小杉町史』小杉町

第2章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

昭和40年代後半の高度成長は、国民に金銭的豊かさをもたらした。そのかわり日本全土に公害をまき散らした。大島町も例外でなく、一企業から排出された煙から公害問題が引き起こし、町民生活を脅かすようになった。そこで、町内の住宅地に点在する工場を一個所に集めようと言う気運が高まり、企業団地構想が町の商工会を中心に持ち上がった。

これを受けて昭和48年に、工業団地促進協議会が発足された。昭和52年には大島町企業団地協同組合が、大島町企業団地に進出を決めた企業10社によって設立された。それを機に、町内の北東に位置する北高木地内で、一般県道八町大門線(322号線)と、西部主要幹線排水路第が交差する南西側の一角に大島町企業団地が造成されることとなった。

第1次補完事業は同年9月から開始され、翌54年には、約23,200㎡もの広大な工業区画が完成した。翌55年には早くも第2次補完事業が施工され、翌56年には約23,200㎡の区画が完成した。昭和59年は企業団地敷地内の約9,000㎡が企業団地組合によって造成工事が施工された。補完第3次事業として平成4年からは、4カ年の予定で計画されており、完成のあかつきに約85,000㎡の企業団地が新たに誕生する。

企業団地計画当時、この周辺の遺跡は荒畑遺跡(新湊市作道字高木)だけが周知されていた。須恵器・土師器の散布は確認されていたものの、その正確な位置・時期・範囲等に関しては不明であった。

昭和60年、企業団地が敷地を拡大することとなったため、これを機に荒畑遺跡の隣接地であるため、拡張地区内を当センターで現地踏査を実施した。その結果、土器の散布がみとめられ、遺跡であることが確認された。また、その敷地が大島町と新湊市にまたがっていたため、遺跡も2市町にまたがることとなった。そのため2市町の教育委員会が主体となり、遺跡の遺存状況を確認するための試掘調査が実施された。

工業団地内の試掘調査2回　荒畑遺跡、その後、昭和63年に工場拡幅のため本調査が荒畑遺跡で実施された。

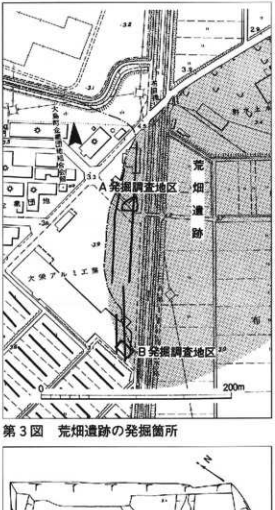
遺跡は大島町の北東部、新湊市との境界付近にあり、西部1号排水路と西部7号排水路が合流してなる西部主要幹線排水路や、東西に流れる西部8号排水路が同幹線排水路に合流する地点から南西方向、現企業団地の南西側、一般県道八町大門線(322号線)の両側の水田部に広がる。

(企業団地の経緯と荒畑遺跡・北高木遺跡の調査歴)

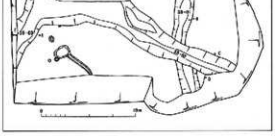
昭和48年	工業団地促進協議会が発足	
昭和52年	大島町企業団地協同組合が設立	
同	第1次補完事業開始	
昭和53年	完成	約23,200㎡
昭和56年	第2次補完事業開始　完成	約23,200㎡
昭和60年	組合の事業として一部造成	約9,000㎡
昭和60年(1985)	5/1～5/3	第1期試掘調査 (新湊市・大島町)
同60年	8/19～9/2	第2期試掘調査 (新湊市)
昭和63年(1988)	6/13～6/16	第1期試掘調査 (大島町)
同63年	10/17～10/21	第2期試掘調査 (大島町)
平成3年(1991)	10/2～10/31	第3期試掘調査 (企業団地関係)
平成4年	第3次補完事業開始	
平成7年	完成予定	約85,000㎡

(町道新湊北高木線と北高木遺跡の調査歴)

平成3年	工事開始	
平成3年(1991)	2/28	第1期試掘調査 (町道関係)
同3年	9/11	第2期試掘調査 (町道関係) (安念)



第3図　荒畑遺跡の発掘箇所



第4図　B発掘調査区遺構

第２節　調査概要と経過

試掘調査（第５・６図）

調査期間平成３年10月２日～10月31日。調査対象面積72,000㎡で、全体で77本のトレンチを設定した。その発掘調査面積は2,918㎡。検出した遺構は、溝・穴。出土した遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・珠洲等。須恵器・土師器の底部に「介」・「富」と記された墨書土器が出土した。

20Ｔ（トレンチ）から「介」の墨書土器などの須恵器が出土。

本調査（第８図）

１次調査（平成４年度）

企業団地造成地区の西側。遺跡の西部の水田部。調査期間平成４年５月11日～６月５日（延17日間）。調査面積500㎡（町道新湊北高木線の建設に先立つ発掘調査）。

Ａ地区、企業団地造成地区の西側。遺跡の北端部の水田部。調査期間平成４年６月22日～７月29日（延27日間）。調査面積2,000㎡。

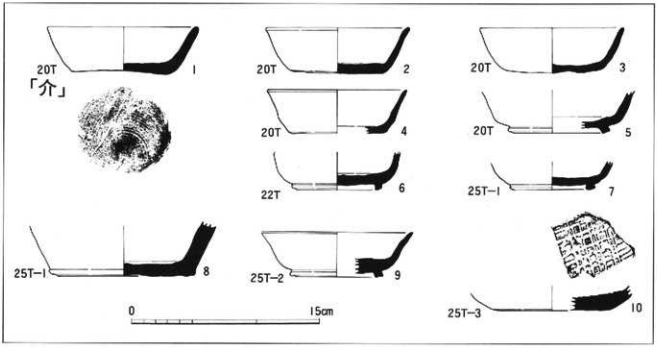
Ｂ地区、企業団地造成地区の西側。遺跡の西部の水田部。調査期間平成４年７月29日～12月７日（延73日間）。調査面積6,000㎡。

２次調査（平成５年度）

Ｃ地区、企業団地造成地区の南側。遺跡の中央部の水田部。Ｄ地区（北半分）、企業団地造成地区の東側。遺跡の東部の水田部。両地区合わせて、調査期間平成５年４月20日～12月17日（延126日間）。調査面積11,600㎡。

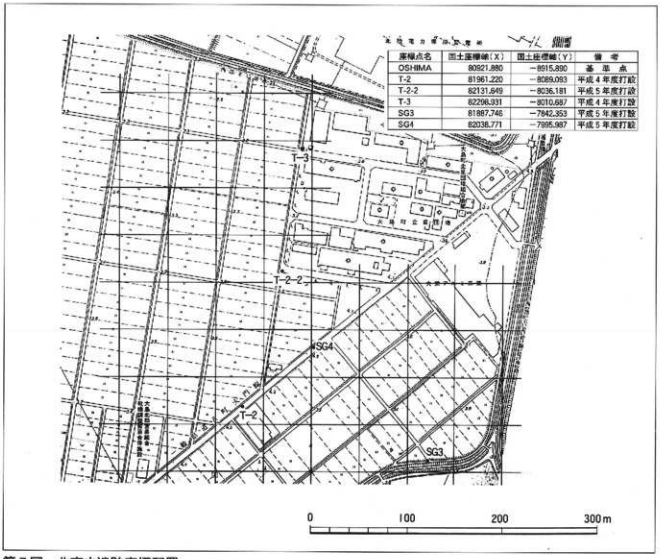
３次調査（平成６年度）

Ｃ（一部）・Ｄ（南半分）・Ｅ地区、企業団地造成地区の南東側。遺跡の東部の水田部。調査期間平成６年４月11日～12月16日（延160日間）。調査面積12,000㎡。



第５図　北高木遺跡平成２年度試掘調査出土遺物（須恵器、瀬戸）

第６図　北高木遺跡試掘坑配置



座標点名	国土座標値(X)	国土座標値(Y)	備考
OSHIMA	80921.880	−8815.200	基準点
T-2	81961.220	−8089.093	平成4年度打設
T-2-2	82131.649	−8036.181	平成5年度打設
T-3	82296.931	−8010.687	平成4年度打設
SG3	81887.746	−7842.353	平成5年度打設
SG4	82038.771	−7895.987	平成5年度打設

第7図　北高木遺跡座標配置

調査区のグリットについて（第7図）

平成4年度の調査は、遺跡の北側に位置する8,000㎡を対象に行った。これは、調査面積の1/3に相当する。

調査地区を2箇所に設定した（A・B地区）。そのため各調査地区をそれぞれ把握するようグリットを設定した。設定にあたっては、国家基準点から公共座標を導き、その座標を基に調査地区内に10m間隔のグリット杭を打設した。ただし、調査にあったてはその間隔を2m間隔の細部グリットを設定し、それぞれに座標値を与えた。この座標値にしたがって遺物等を取り上げた。南北軸は、南から北に向けて、東西軸は西から東に向けて昇順で番号を設定した。また、その表現として南北軸ー東西軸の順に記載した。

このグリット番号から出土遺物の取り上げを行った。また、それぞれの番号を公共座標値に変換することも可能である。

調査方法

発掘調査は、重機による耕作土等を除去した後、遺構検出を行った。測量にあたっては、調査地区ごとにラジコンヘリコプターで撮影した空中写真とやり方測量を基に遺構概略図を作成した。また、遺構の断面図

第８図　北高木遺跡年度別本調査地区

もその都度計測を図った。完掘した遺構は、写真測量（ケーブル方式【1】）と平板測量を用いて1／20の図化を行った。さらに、調査地区の発掘調査が完了した時点で写真測量（ラジコンヘリコプター方式【2】）にて1/100遺構図もあわせて図化し、記録保存した。

B調査地区SD01は、須恵器（杯の完形品が多く出土）・墨書土器・木簡・人形等が数多く出土したため、埋土の層位に従って順次掘り下げていった。現位置を記録することとしたため、遺物が出土した時点で現位置と標高を1点ごと計測しながら調査を実施した。

【1】遺構の両サイドに高さ12mのポール立てて、その間にロープを張り、計測用カメラを積んだジャイロをロープにつり下げ水平移動をさせながらリモートコントロールでシャッター操作を行い、ステレオ垂直空中写真を撮影するシステムである。

【2】ラジコンヘリコプターにカメラとモニター用のビデオカメラを搭載し上空を飛行させながら、地上でモニタリングしながらシャッター操作を行い、ステレオ垂直空中写真を撮影するシステムである。また、この方法はケーブル方式と違い、図化用の撮影の外に遺跡の全景写真及び斜め写真等の撮影も容易である。上記の方法で撮影した写真を解析図化機によって図化した。（安念）

第３章　遺構と遺物

第１節　Ａ・Ｂ地区

Ａ地区は、企業団地の西側で町道新湊北高木線を挟むよう設定した調査区である。また調査区が、東西に分かれるため便宜上それぞれを東区・西区とした。東区は、Ｘ０～27；Ｙ15～38に位置する台形状の調査区で面積は約1,600㎡である。西区は、Ｘ７～26；Ｙ２～15に位置する逆三角形状の調査区で面積は約400㎡である。

Ｂ地区は、企業団地の西側にある。調査区は、Ｘ５～60；Ｙ３～41に位置し100m（南北軸）×60m（東西軸）の長方形を呈し、その面積は6,000㎡である。Ｘ38～54の西縁では「町道新湊北高木線」の建設に先立ち実施した調査区と接する。

町道建設に先立ち発掘を実施した調査区（以下「町道調査区」という。）は、Ｘ38～54；Ｙ０～９に位置し33m（南北軸）×15m（東西軸）の長方形を呈し、その面積は約500㎡である。

Ａ・Ｂ地区は約70m離れているため、座標及び遺構名称は各調査区に設定した。ただし、町道調査区は、Ｂ地区と隣接し遺構が連続するためＢ地区で取り扱う。

１　遺構

Ａ地区（第10・11・17図）

確認した遺構は、溝・土坑である。しかしＳＤ01(縄文時代)を除く遺構は、近現代に帰属すると考えられる。

ＳＤ01

東西の両区、Ｘ04～22；Ｙ10～15で確認した東西溝。幅は上端４～７m、下端0.6～1.8m、深さ約40cmを測り、断面形は舟底形を呈す。埋土の大半は黒褐色系の粘質土だが底部は黄褐色砂質土である。底部からは縄文晩期中葉～後葉の縄文土器や流木等が出土した。

ＳＤ03

東西の両区、Ｘ03～20；Ｙ13～19で確認した東西溝。幅は上端30～50cm、下端20～30cm、深さ約５cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。埋土からガラス片・針金等が出土していることからほ場整備以前の区画溝（用水）と考えられる。

ＳＤ04

東西の両区、Ｘ04～24；Ｙ13～22で確認した東西溝。幅は上端25～50cm、下端20～30cm、深さ約３～８cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土である。

ＳＤ05

東西の両区、Ｘ11～26；Ｙ10～21で確認した南北溝。幅は上端60～70cm、下端50～70cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土である。

ＳＤ06

東西の両区、Ｘ13～26；Ｙ13～23で確認した南北溝。幅は上端約30cm、下端約20cm、深さ約４cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土である。

ＳＤ10

西区、Ｘ07～16；Ｙ05～10で確認した南北溝。幅は上端約70cm、下端約40cm、深さ約15cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は、上層は黒褐色粘質土で下層は暗灰褐色粘質土である。

ＳＤ12

西区、Ｘ09～14；Ｙ07～17で確認した東西溝。幅は上端70～80cm、下端約50cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。弥生土器が出土した。

ＳＤ13

東区、Ｘ25～26；Ｙ27～32で確認した溝。幅は上端30～50cm、下端約25cm、深さ約10cmを測り、断面形は形を呈す。埋土は暗黄灰褐色粘質土である。

ＳＤ14

東区、Ｘ23～25；Ｙ27～35で確認した溝。幅は上端50～70cm、下端約30cm、深さ10～15cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。

ＳＤ15

東区、Ｘ18～23；Ｙ24～26で確認した溝でＬ字状を呈する。幅は上端30～40cm、下端15～35cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土である。

ＳＤ16

東区、Ｘ27～37；Ｙ12～35で確認した南北溝。幅は上端40～60cm、下端35～45cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。

ＳＤ17

東区、Ｘ27～37；Ｙ05～34で確認した南北溝。幅は上端20～35cm、下端15～25cm、深さ約７cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黄灰色粘質土混じりの黒褐色粘質土である。

ＳＤ18

東区、Ｘ27～38；Ｙ07～32で確認した南北溝。幅は上端約40cm、下端約30cm、深さ約10cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は黄褐色粘質土混じりの暗灰色粘質土である。

ＳＤ19

東区、Ｘ17～Ｙ25で確認した溝。幅は上端約20cm、下端約15cm、深さ約10cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。

ＳＤ20

東区、Ｘ06～15；Ｙ33～35で確認した南北溝。幅は上端70～90cm、下端50～75cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。埋土から珠洲・土師器の破片が出土した。

ＳＤ22

東区、Ｘ03～04；Ｙ25～27で確認した東西溝。幅は上端約100cm、下端約70cm、深さ10～20cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。

ＳＤ24

東区、Ｘ03；Ｙ33～35で確認した東西溝。幅は上端約40cm、下端約35cm、深さ約５cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。

ＳＤ31

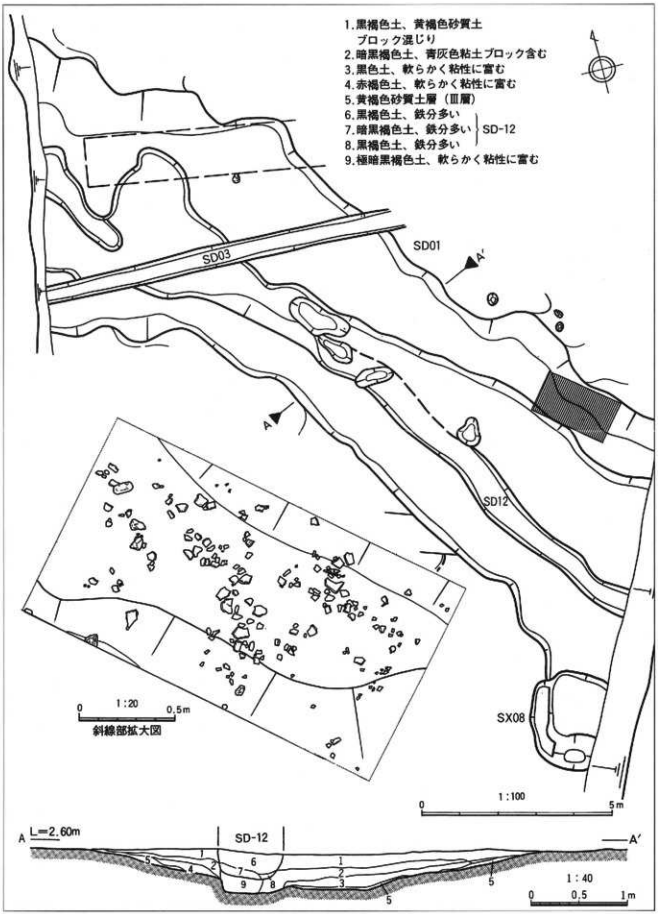
東区、Ｘ09；Ｙ19～22で確認した溝。幅は上端50～80cm、下端約50cm、深さ約10cmを測り、断面形は舟底形を呈す。埋土は暗褐色粘質土である。

ＳＤ32

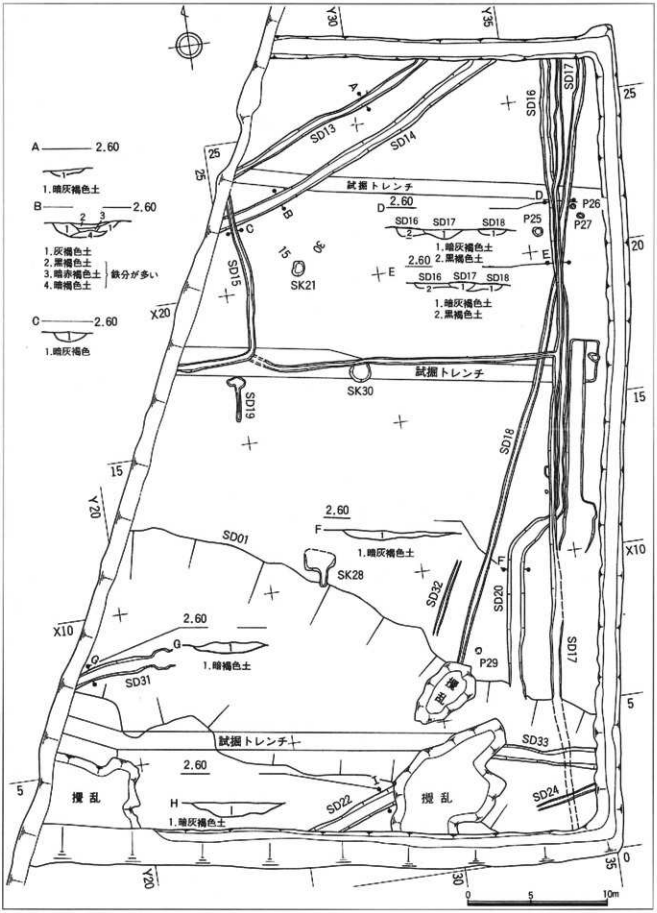
東区、Ｘ08～10；Ｙ31～32で確認した南北溝。幅は上端約20cm、下端約10cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘質土である。

ＳＤ33

東区、Ｘ03～04；Ｙ32～35で確認した東西溝。幅は上端約90cm、下端50～60cm、深さ約10cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。



第10図　北高木遺跡Ａ地区の遺構及び縄文土器出土状況



第11図　北高木遺跡Ａ地区東調査区の遺構配置

B地区（第12～15・17・18図）

確認した遺構は、溝・井戸・土坑である。

S D01

X43～54；Y01～40で確認した東西溝。調査区のほぼ中央部を横切るように流れる溝は、町道部分からの続きの溝で、北東方向へ約40m進んだ後南東方向へ屈折し約20m進む、その後東へ進み調査区外へ抜ける。溝の屈折は自然の蛇行よるものと考えられる。

溝幅は、西側部分は広く上端４～５m、下端２～３mであるが基本的には上端で約２m下端で約60cmを測る。深さは所々で異なるものの約80cmを測る。断面形は船底形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土である。検出状況から、上端の範囲で何度も流れが変わったことが窺える。

遺物には土器・木簡・祭祀具・木製品等であるが、その大半が土器である。土器は埋土上層から最下層まで空くことなく出土した。溝中央部にある屈折部分より西側で多く見られたが、町道部分との接する部分では特に多くの土器が出土した。また、溝の底部に貼りついた状態で出土した遺物が多いのも特異である。

主な遺物は、須恵器（杯・杯蓋・壺・甕）、土師器（鍋・壺・甕）、木簡、人形、斎串、下駄、加工木製品等である。須恵器が圧倒的に多く、中でも大半は杯類で占められる。また、丈部・秋・養・中・木・介・成・大・法・箕麻呂などを墨書き、廣・X・／などをヘラ書きした文字や記号が記された杯が多く出土した。硯に転用された杯蓋もかなり出土している。祭祀具の中には、県内で初めて確認された人形も出土した。奈良時代後半に属する。

S E05

X49；Y03で確認した素掘り井戸。直径80cm、深さ180cmを測る。埋土には須恵器の杯、杯蓋、甕、加工木、箸等があった。時期はS D01と同様である。

S D09

X52～55；Y15で確認した南北溝。幅は上端約30～40cm、下端約25cm、深さ約10cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。奈良時代後半の土師器・須恵器が出土した。

S D10

X53～55；Y16で確認した南北溝。幅は上端約20～30cm、下端約15～30cm、深さ10～20cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。奈良時代後半の土師器・須恵器が出土した。

S D11

X21～56；Y30で確認した南北溝。幅は上端約45cm、下端約25cm、深さ約10cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は灰褐色系の粘質土である。S D01・14を切りS D15へ続く。ほ場以前の用水路と考えられる。

S D13

X25～31；Y32～36で確認した溝。幅は上端約50～100cm、下端約30～80cm、深さ約20cmを測り、断面形は船底形を呈す。溝底部に凹凸がある。埋土は黒茶褐色粘質土である。S D14に切られる。

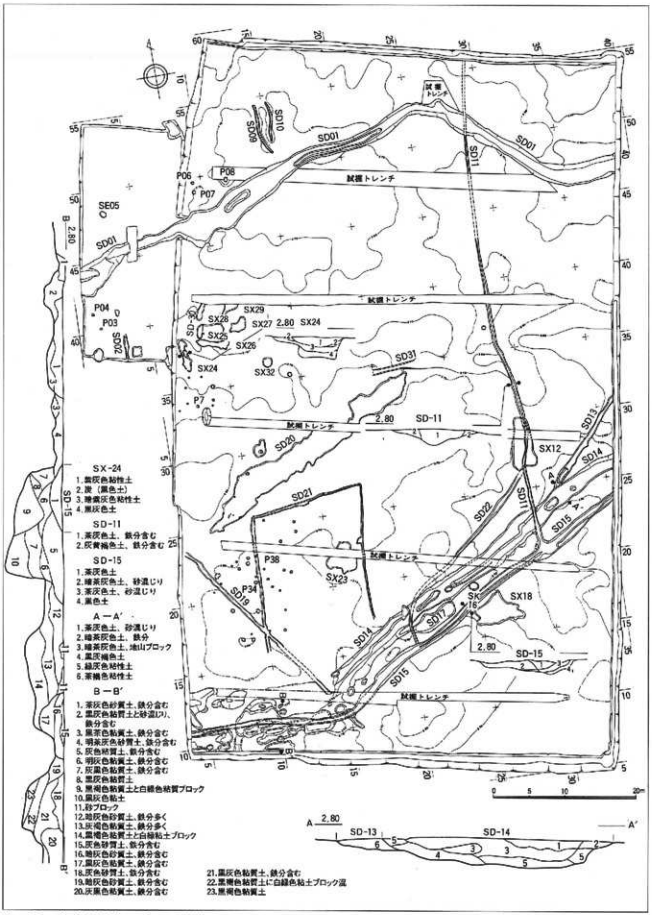
S D14

X10～26；Y05～36で確認した溝。幅は上端約２～３m、下端約1.5m、深さは約20～30cmと浅く断面形は船底形を呈するが、所々に60～40cmの深くなる箇所がある。埋土は黒茶褐色系の粘質土である。

S D15

X10～26；Y05～36で確認した溝。幅は上端約45cm、下端約25cm、深さ約10cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は灰褐色系の粘質土である。S D14を切りS D11へ続く。

旧地形図の地割り図をみれば、S D14・15を検出したあたりで両溝とほぼ同様の地割りラインを確認することができる。このラインは字江栫（エバカマ）、字五枚瀬町（ゴマイセマチ）字烏帽子（エボシ）等を分ける字境であり、現地では小道と小川で現されていた。したがって両溝は、ほ場以前の存在した用水路跡と



第12図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構配置

考えられる。また、調査区南西端部で検出した土坑群等は、ほ場整備によって削平されたＳＤ14の底部の一部と考えられる。

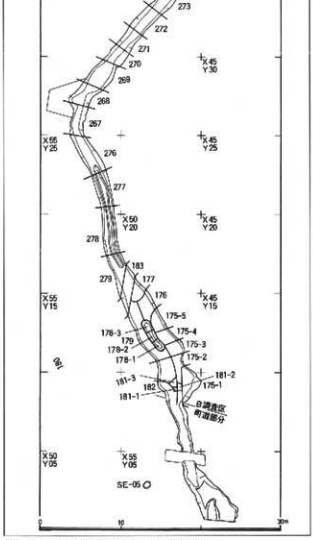
ＳＫ16、ＳＤ17、ＳＤ22はＳＤ14またはＳＤ15を切る遺構であるため、同様に現代遺構を考えられる。

ＳＤ19とＳＤ21

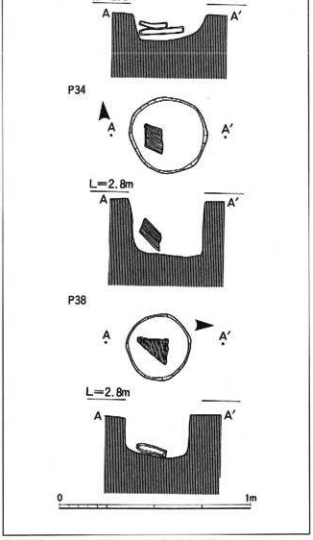
Ｘ12～27；Ｙ05～18で確認した溝。19は南北溝、21はコの字状を呈する溝で互いに交差する。幅は上端約40～60cm、下端約30cm、深さ約10cmを測り、断面形は船底形を呈す。埋土は灰褐色系の粘質土である。状況から区画溝と考えられる。

穴（頭にＰが付く遺構）

Ｘ35；Ｙ08周辺及びＸ23；Ｙ10周辺で確認した穴群については、礎板と考えられる板材が穴底部から出土したＰ－７・Ｐ－34・Ｐ－38や、穴と穴が等間隔にあり掘立柱建物の柱穴として使用が可能な穴もあるが、全体としてのまとまりがなく掘立柱建物としては確認できなかった。また、穴の性格及び用途等についてはは不明である。



第13図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構１



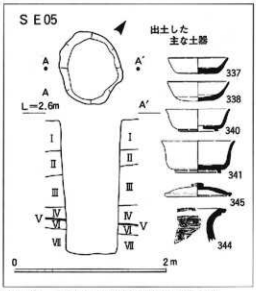
第14図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構２

ＳＥ05

Ｂ地区の西、町道建設部分で確認した。遺構検出面では楕円形を呈するが、基本的なプランは直径90cmの円形で底までの深さ250cmを図る素掘りの井戸である。埋土は、上層より茶灰色粘質土（鉄分を含む）層が14cm前後、次に黒灰色粘土層が20cm前後、以下底部まで黒色粘土（ところどころに砂のブロックを含む）であった。なお、遺物はこの黒色粘土層から出土した。埋土の色調等にあまり変化が見られないことから、埋土は人工的に埋められたものと考えられる。

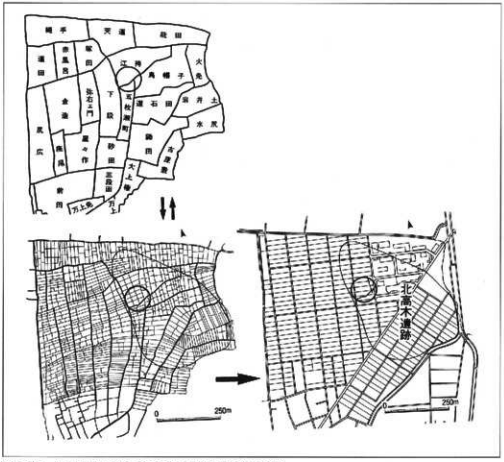
出土した遺物はすべて奈良時代後半の須恵器である。341はＳＤ01から出土した破片と接合した。

（安念）

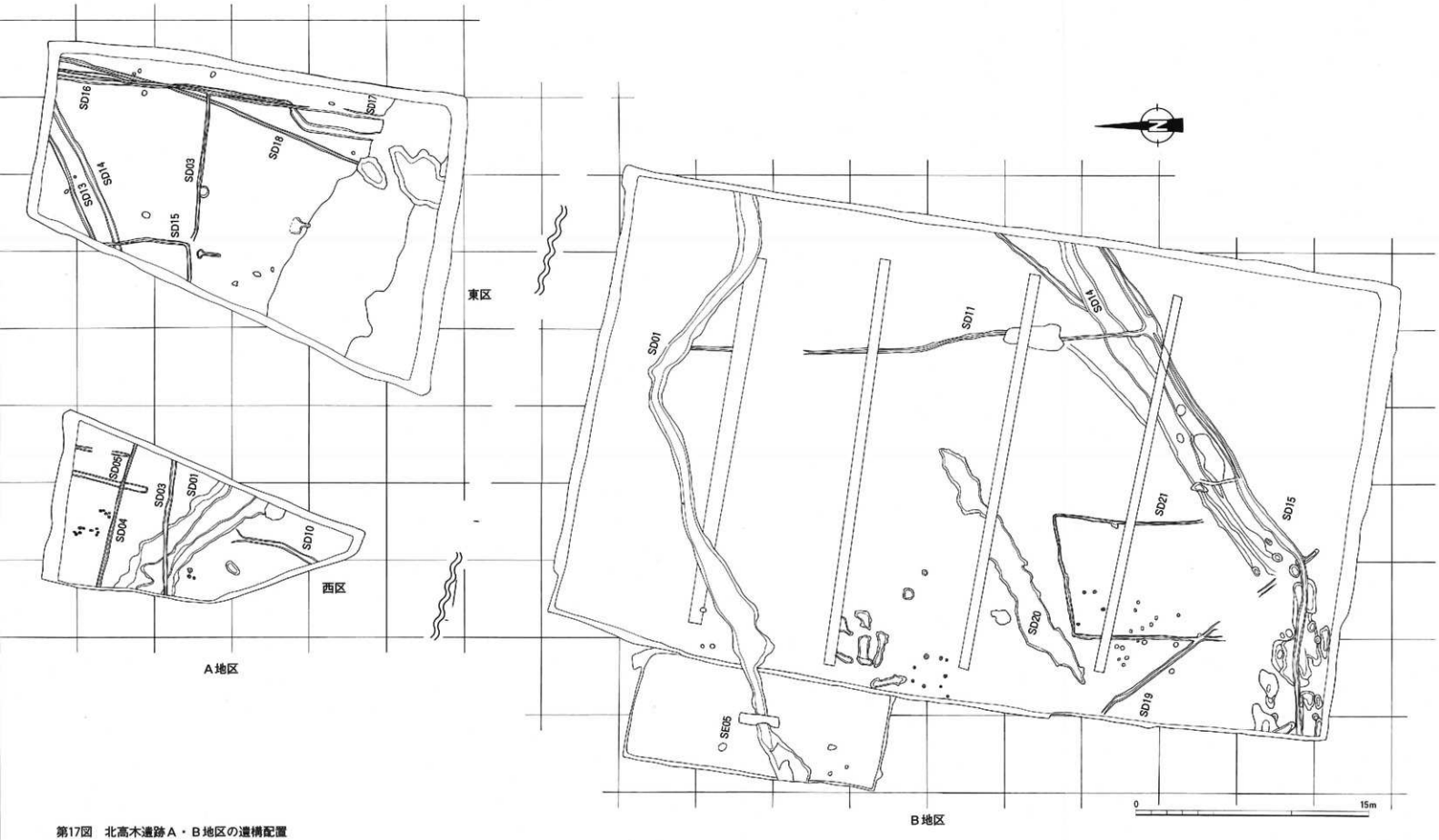


第15図　北高木遺跡Ｂ地区の遺構３

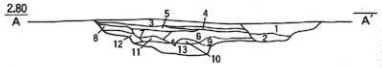
Ⅰ 青白色粘土（110cm前後）
Ⅱ 砂と黒灰色粘質土の混合層（25cm前後）
Ⅲ 黒白色粘土質土（砂を含む、50cm前後）
Ⅳ 白灰色粘土（20cm前後）
Ⅴ 木の炭等の腐食層（１～２cm前後）
Ⅵ 茶灰色粘質土（12cm前後）
Ⅶ 黒灰色粘土



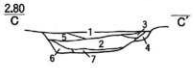
第16図　北高木遺跡調査区の地割り図及び字名



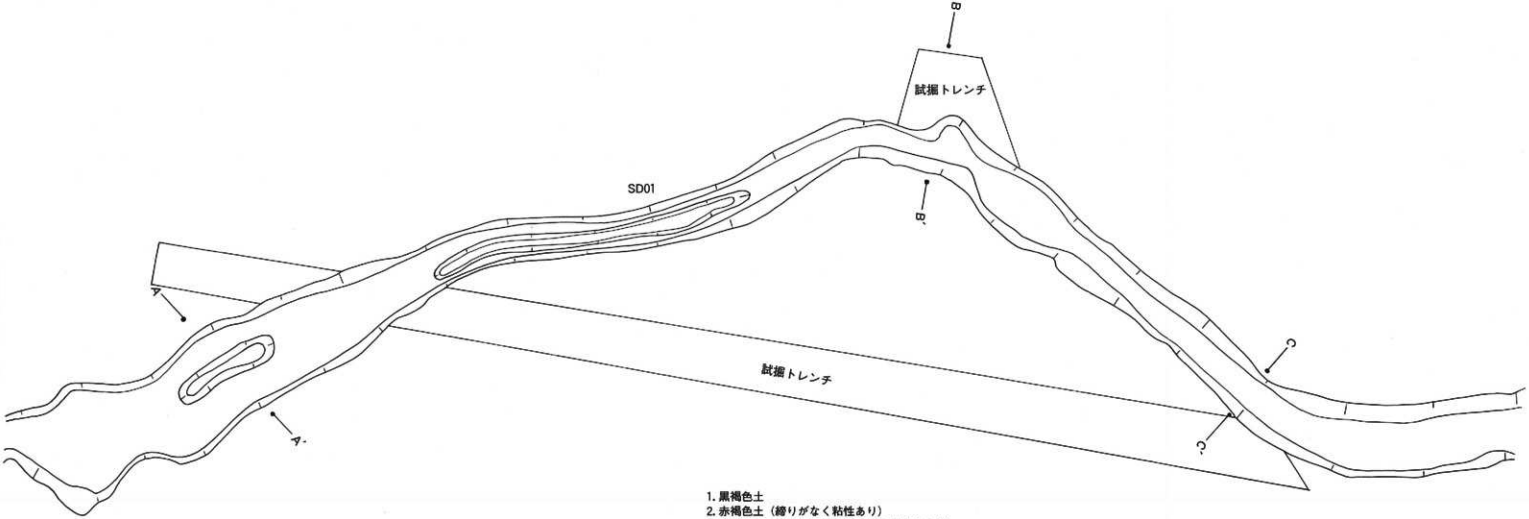
第17図　北高木遺跡Ａ・Ｂ地区の遺構配置

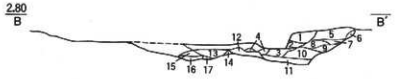


1. 赤褐色土
2. 暗赤褐色土（乳灰色粘質ブロック混じる）
3. 暗褐色土
4. 暗茶褐色土（締りが弱い）
5. 暗褐色土（乳灰色砂質土が層状に混じる）
6. 暗黒灰色土（乳灰色、褐色砂質土混じる、締りが弱い）
7. 暗黒灰色土（層状、塊状に多く混じる、締りが軽い）
8. 暗褐色土（黒色土ブロック、乳灰色砂質土混じる）
9. 暗褐色土（乳灰色土ブロック、層状に混じる）
10.黒褐色土（黒色土ブロック、暗灰色土ブロック多量に混じる）
11.黒褐色土（わずかに乳灰色砂質土混じる、締りがなく軟らかい）
12.暗褐色土（８層より混入土が多い）
13.極暗茶褐色土（乳灰色・黒色土ブロック混じる、締りがなく軟らかい）

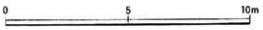


1. 黒褐色土
2. 暗赤褐色土（鉄分混じる）
3. 暗褐色土（乳灰色粘土塊混じる）
4. 黒褐色土（乳灰色粘土塊混じる）
5. 茶褐色土（鉄分多い）
6. 黒灰色土（緑灰色シルト質土混じる）
7. 暗黒褐色土（灰褐色砂が粘土塊含む　マーブル状混じる）





1. 黒褐色土
2. 赤褐色土（締りがなく粘性あり）
3. 暗褐色土（鉄分混じり、締りがなく粘性あり）
4. 黒褐色土と黄褐色砂の混合
5. 赤褐色土（２層より明るい、粘性あり）
6. 黒褐色土（黄灰色粘土ブロック混じる）
7. 赤褐色土（黄褐灰色・砂粒混じる、締りが弱く粘性あり）
8. 暗褐色土（粘性あり）
9. 茶褐色土（黄褐色砂少量混じる、粘性あり）
10.暗褐色土（黄褐色砂混じる、鉄分含む粘性あり）
11.暗黒褐色土（緑灰色粘土塊、緑灰色砂混じる、粘性わずかにあり）
12.明黒褐色土（乳灰色シルト質土混じる、パサパサした感じの土）
13.茶褐色土（地山ブロック混じる）
14.黒褐色土（地山ブロック混じる）
15.極暗褐色土（緑灰色粘土ブロック混じる）
16.極暗褐色土と緑灰色粘土の混土
17.極暗褐色土と緑灰色粘土の混土



第18図　北高木遺跡Ａ・Ｂ地区の遺構

2　遺物

縄文時代の遺物（第19図）

縄文土器は、ＳＤ01の下層から出土した。総量は整理箱で２箱と少ない。時代は、後期後半のものが１点みられるほかは、晩期中葉から後葉のものである。

11は、帯状の磨り消し縄文帯をもつ深鉢の胴部破片で、後期後半のものである。同一個体片が２点ある。

「く」の字状口縁の深鉢（６・８・９・12～14）に分けられるものは、大型で横方向の貝殻条痕を施すものがほとんどで、口縁部を刻む６・14や口縁部下に小波状の粘土帯接合痕を明瞭に残す12がある。口縁の外反度は弱い。９は、無文で口縁を小波状とする小型の深鉢。頸れをもたない深鉢（４・５・７・16～18）

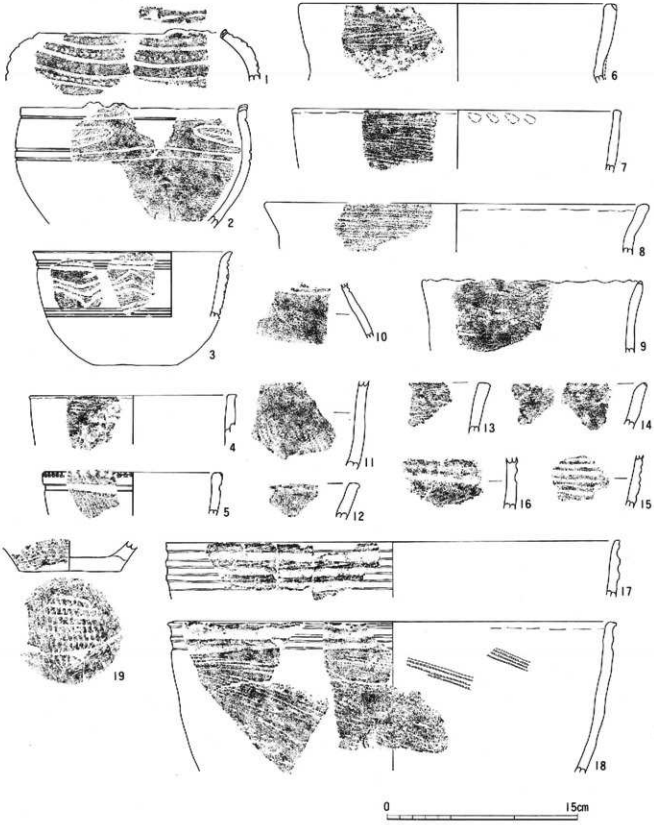
底部から口縁部へ開きぎみにたつもので、口縁端部は、外側へ折り返したように小さく出る。いずれも貝殻条痕が施される。４・７は、粗文の深鉢の大小。16～18は、口縁部に条痕施文後に２～３条の凹線を施すもので、作りは雑である。５は、小型の深鉢で口縁部に幅広で断面「コ」の字状の沈線を１条施し、口縁端部には擦状工具で連続刺突を行いその上を刻む。胴部は、斜条痕。19は、深鉢の底部で外面に条痕を施し、底部には網代痕を残している。

小型の鉢（１～３・15）に分けられるものは、２は、有文の鉢で、沈線による横区画の中に縄文を地文とした楕円文を施す。楕円文は、６単位。口縁部には、頂部を刻んだ山形の突起が付けられているが、単位はわからない。３・15は、押し引き沈線により工字状文風の文様を施すもので、３のように口縁端部が小さく外反する鉢と考えられる。15は、楕円文風の文様になると考えられる。１は、内屈し球胴となる鉢、あるいは無頸の壺と考えられるもので、外面に沈線を引きその間に連続刺突文を施している。口縁は波状または、突起がつくと考えられ「ハ」状の刻みを施す。また、外面は赤彩される。10は、頸部に２条の半截竹管による半隆起線を施す壺状の器形となるもので、外面は良く研かれている。内面は、ヘラケズリ状の成形痕を残す。時期不明。

「く」の字状口縁の深鉢６・８は、頸れが緩くなり口縁部が長く伸びている。また、中屋式期の特徴である小波状口縁が失われつつある。このような例は、井口遺跡にみられ大洞Ｃ２式の古い段階に位置づけられている［酒井1986］。また、９は、中屋式にみられる無文の小波状口縁の深鉢である。12は、粘土接合痕を残すものでこのようなものもまた中屋式期の特徴である［高堀1983］。また、５の文様は、中屋期にはみられず新しい要素と考えられる。鉢をみると楕円文をもつ１や口縁部を「ハ」状に刻む１などがみられ、後出的な要素が強く認められる。このようなことから一部中屋式を含むが、それに後続する時期のものであろう。

３・15・17・18は、工字文風の文様をもつ鉢と凹線文の深鉢である。これらは、大洞Ａ式期以降の特徴とされている［酒井1976］。

このようにみると遺跡は、縄文時代後期後半に人々の営みが始まり、晩期の中頃から後半にかけて断続的に小規模な営みが続けられていたことをうかがわせる。（酒井）



第19図　北高木遺跡Ａ地区の遺物（縄文土器）

奈良・平安時代の遺物（第20～31・33～39図）

須恵器

杯A（20～141，337・338，353～361）

杯で高台をもたないもの。口径の大きさから、10cm前後のもの（Ⅰ）、11.5cm前後のもの（Ⅱ）、12cm前後のもの（Ⅲ）、13cm前後のもの（Ⅳ）の4タイプに分類できる。杯の成形はロクロからヘラで切り離した後そのヘラ切り跡を手でなで消すため、底部はやや平坦なものや平らなものが大半である。なかには底部中央がとびでるもの（127など）、上げ底状となるもの（60など）がある。体部は斜上に伸びるもの（a）、ほぼ垂直に伸びるもの（b）がある。体部から口縁部までの外内面は、ロクロなでで調整する。

なかでも、Ⅲaタイプの土器が最も多く出土している。土器の口径と高さとの割合を表すために用いられる径高指数で（高さ／口径×100）無台杯を数値化すると、Ⅰは32、Ⅱは28～33、Ⅲは27～30、Ⅳは27～30である。

杯B（142～231，339～343，362～370）

高台を有するもの。内外面の調整は無台杯と同様である。高台には、外に力強く張り出すものや垂直に下がるものがある。口径の大きさから、10cm前後のもの（Ⅰ）、12cm前後のもの（Ⅱ）、14cm前後のもの（Ⅲ）、15cm前後のもの（Ⅳ）の4タイプに分類できる。なかでも、Ⅱaタイプの土器が最も多く出土している。径高指数で有台杯を数値化すると、Ⅰは32、Ⅱは28～33、Ⅲは27～30、Ⅳは27～30であり、無台杯を同様の値を示す。

杯蓋（232～263，345～351，371～375）

頂部及び体部の形態から、ほぼ平坦な頂部のみのもの（a：236・237）、平坦な頂部と斜下に伸びた体部とからなるもの（b：234・239）、頂部が丸く笠形を呈するもの（c：232・233）の3分類に、縁端部では断面三角形で外に張り出すもの（232・233）、丸込めるもの（239）、内向するもの（234・237）の3分類に、つまみでは、擬宝珠つまみのもの（234・235）、平らなつまみものも（232・233）の2分類できる。径の大きさから、11.5cm前後のもの（Ⅰ）、14cm前後のもの（Ⅱ）、15cm以上のもの（Ⅲ）3タイプに分類できる。

稜椀（264～266）

外反する口縁部から体部中央の稜あたりまでしかない破片。口径は264は12cm、265は10cm、266は10.8cmを測る。

鉢（291）

口径約33cmで、口縁部は短く外反しその端部は肥厚し水平な面をもつ。体部は球形と考えられる。なお、高台の付くもの、付かないものがある。

高杯（286・385）

高杯の脚部。286は径15cm、385は径11cmで円形の透かしがある。

壺（267～279，378～380）

短頸壺（267～269）には球の上下をややつぶしたような球形に、1.5cm程の短く直立した口縁部をつけたもの（267）、1.5cm程の短く内向する口縁部をつけたもの（269）、体部中央及び頸部近くに沈線を施すもので、高台をもつものが多い（267～269）、円筒状の体部に緩やかに傾斜する肩部に短く直立した口縁部を

付けたものである。ここの器種も体部中央及び頸部近くに沈線をめぐらす。平底のものが多い（270）。

長頸壺（271～279）には肩部が張り「く」の字状になる体部に細長い口頸部がついたもの。口頸部及び肩部に沈線を施すものが多い。高台付く。276の底部には、「廣」の文字がヘラで記されている。380は耳付き壺である。

壺蓋（376）

壺の蓋。径約11cmで平坦な頂部と直角に折れ3cm程下がるの端部からなる。頂部中央にはつまみが付く。

甕（288～290，292・293，381～384）

口縁端部の形態には、内面は肥厚し水平な面をもつもの（288・291・383）。水平な面をもつもの（381）、斜めな面となるもの（289・290）、上方へつまみ上げたもの（382）がある。口縁部から体部には、外面タタキ目、内面は同心円を施す。

横瓶（280～284、377）

口径約12cmの短くほぼ垂直な口縁部で、その口縁端部は肥厚し面をもつ（280・281・377）。体部外面中央部はタタキ目、内面は同心円を施す（282～284）。284は横全長約33cm縦約23cmの俵形である。

土師器

杯（295）

内湾しながらも外反する口縁部。口縁端部の外面には、浅い凹線がある。また、外面には赤彩、内面には黒色化されている。

椀（296～299）

糸切り根を残す平坦な底部に、内湾しながら口縁部あたりでほぼ垂直となるもの（296）、内湾しつつも外反するもの（297～299）がある。口径は12～14cmを測る。296・297の内面は黒色処理されている。

甕（301～336）

301～307は小形甕で、強く外反した口縁部に半球に近い胴部が付き、底部は平底である。口縁部端部に特徴があり、丸くおさめるもの（302・304・305）、上方につまみ上げるもの（301・303）がある。口縁は10cm～13cm、器高は9cm～12.2cmである。調整は、底部外面は成形時の凹凸をそのまま残すもの（306）、ヘラ削りし平らにするもの（307）がある。体部から口縁部までの外面全体をヘラ削りする。

308～332は長胴甕で、外傾し口縁端部を丸めるもの（a：308～310など）、外傾し口縁端部が肥厚するもの（b：313など）、口縁端部を上方へつまみ上げるもの（c：317など）、口縁端部を上方につまみ上げ、その端部を丸めるもの（d：321など）のような形態をなす口縁部と体部が卵形の形態をなすものである。体部と口縁部の接合形態は「く」の字状となるが、その角度が鋭角なもの(A：309など)、鈍角なもの(B：310など）がある。調整は、口縁部はロクロナデであり、体部内外面はカキ目であるものが大半を占めるが、312は内面を横方向のナデ、外面は縦方向のナデで、332は内面は横方向のナデで仕上げる。口径の大きさから12cm前後のもの（Ⅰ）、16cm前後のもの（Ⅱ）、20cm前後のもの（Ⅲ）の3タイプがある。このなかでもⅡBcタイプが多い。

その他に、内面に炭化物が付着した蓋（294）、内面を黒色処理した高杯（300）がある。　　（安念）

木簡

第1号木簡（395）　表　・×本 利 并 七 十 五 束 又 同 本 □
利カ

裏　□ □ □ 十 五 又 □ □ ×　・
束カ

（130）×18×6　081

第1号木簡（395）は、ＳＤ01から出土した出挙木簡である。表面には十…文字が記載され、文意は「貸し付けた稲とその利息分を合わせると七十五束。また同じく本利…」となる。仮に利率を五割と置くと元金・利子合わせて七十五束から類推すると、貸し付けた稲五十束を元として利息で二十五束となる。

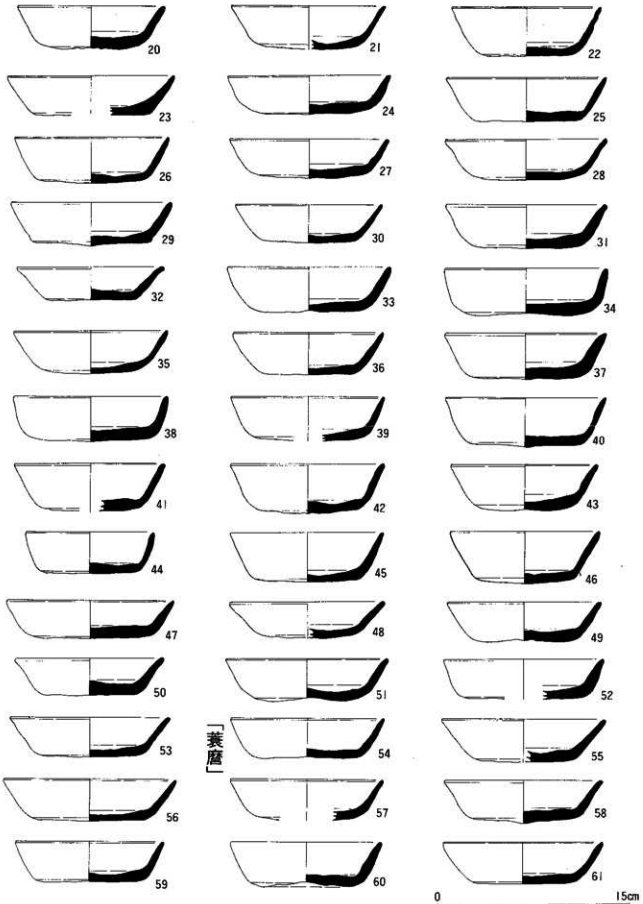
「束」の字は、略字を用いる。なお、裏面には「…又五十…」と部分的に読解できる八文字が記載されているが、表面の文章に対し逆方向に記載されている。なお、正面下部に炭化が確認されるが、状況から人為的な行為の結果と考えられる。

木製品

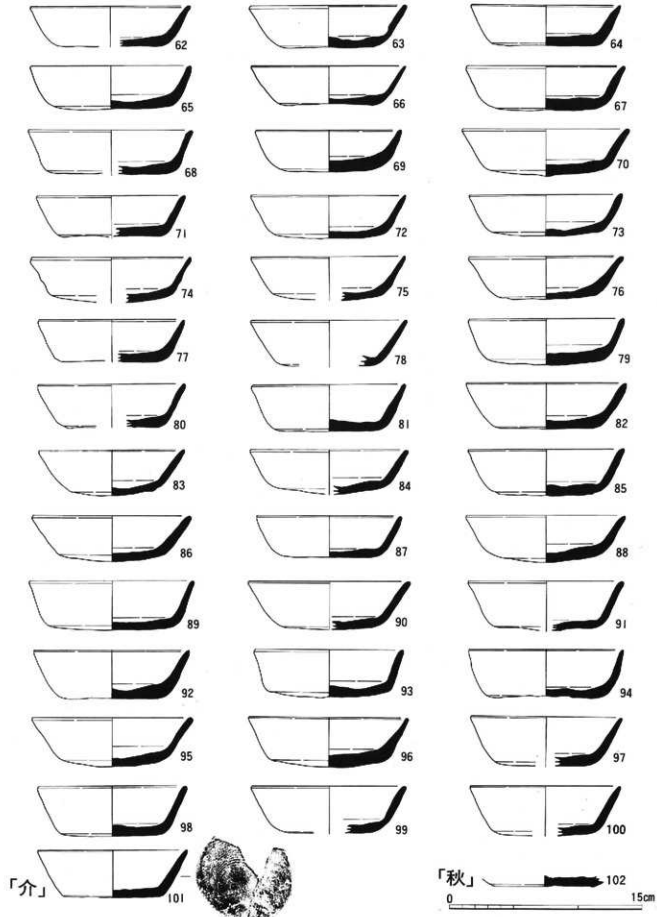
ＳＤ01から出土した祭祀関連の木製品は、人形6点のほか斎串などを含む。以下に記載する。

396～401は人形で、すべて正面全身人形に分類されるものである。遺存状況はいずれも良好でない。396は、頭部のみの遺存であるが、冠から顎までの高さが6.8cmと大型である。冠の表現は細かく細線を格子状に組合せて描く。397は、おぼろげながらも顔の表現が観察できる人形である。腕部・脚部察できる。ただし脚部を欠損しており、長さは11cm、最大幅2.4cmを測る。残りの人形は頭部・胴部・脚部の表現がなされるものの、顔等の墨痕は観察できない。

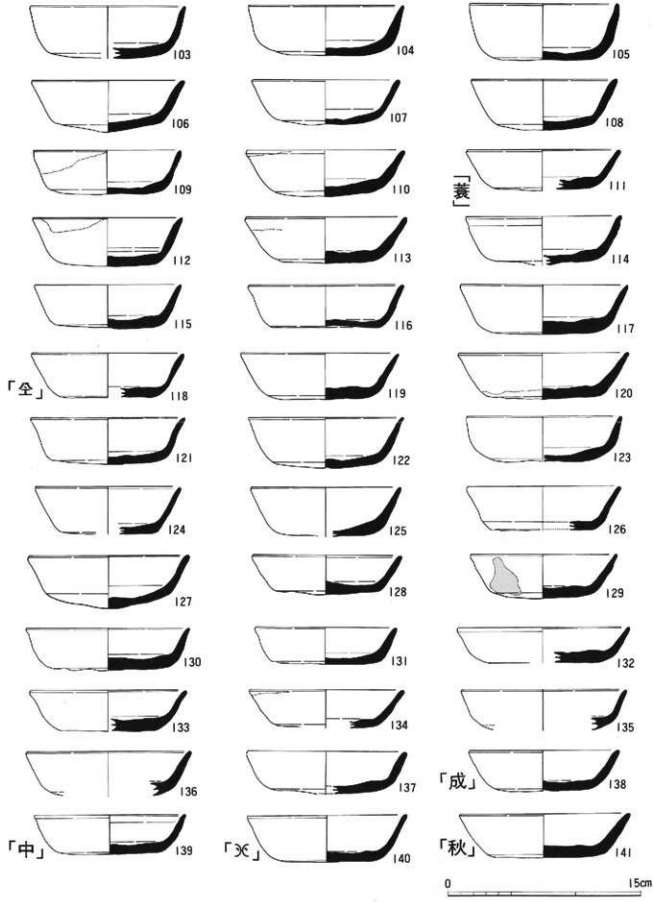
402～406は、斎串である。人形と同じく遺存状況は極めて悪い。すべてＣ－４形式である。404の斎串は、ほぼ完形品で長さ11.8cm、幅1.6cmを測る。　（高橋）



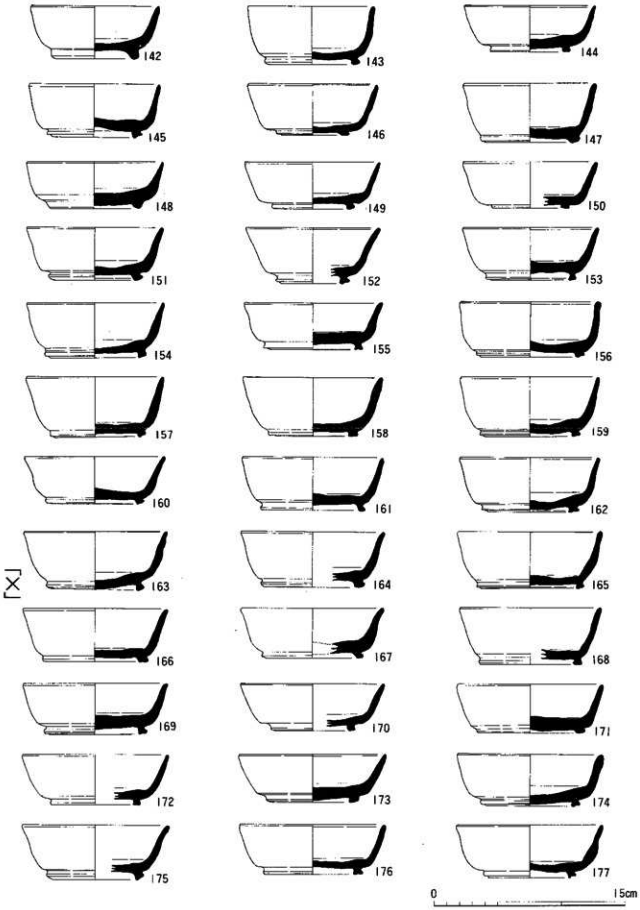
第20図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物１（須恵器１）



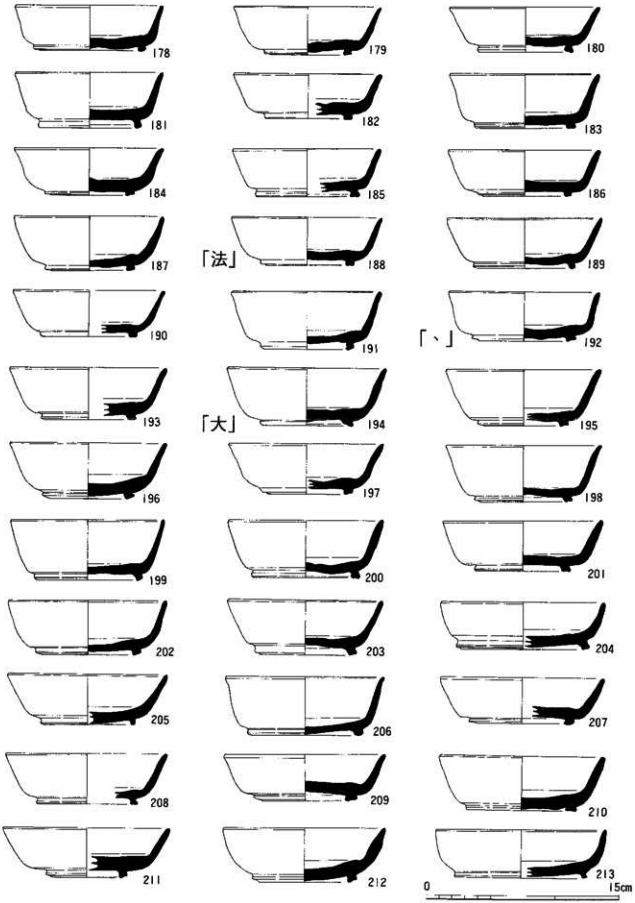
第21図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物２（須恵器２）



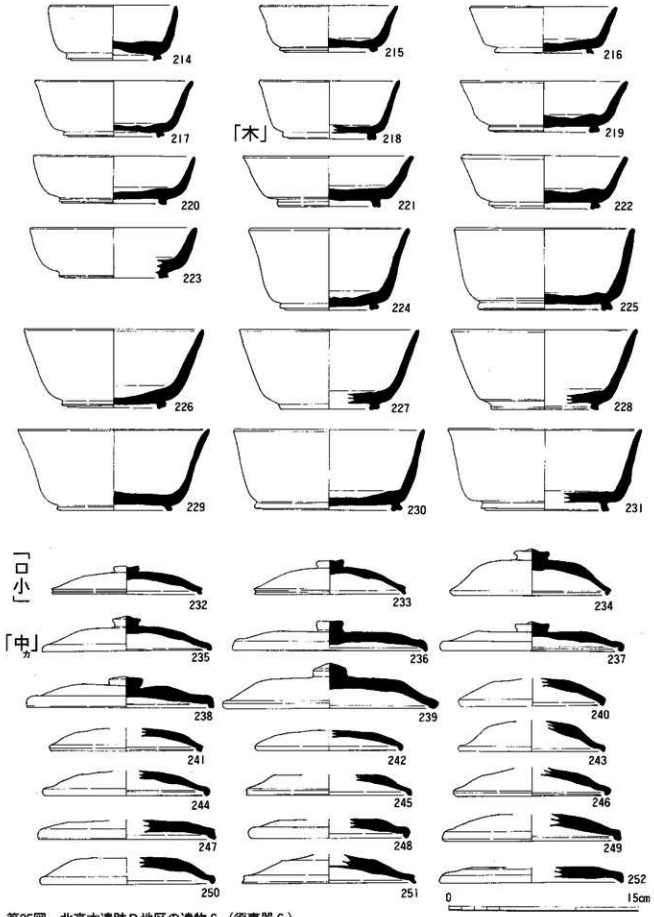
第22図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物３（須恵器３）



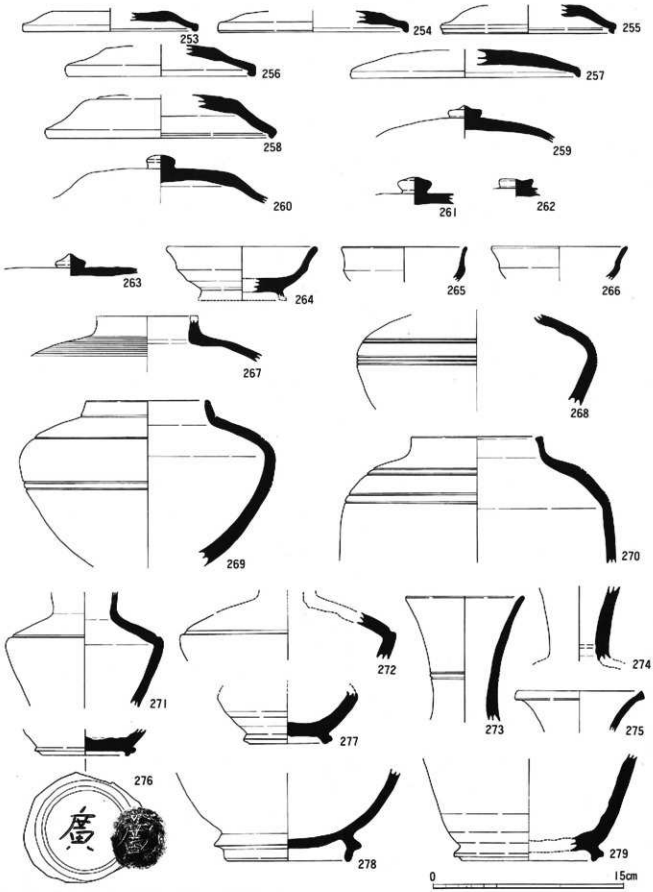
第23図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物４（須恵器４）



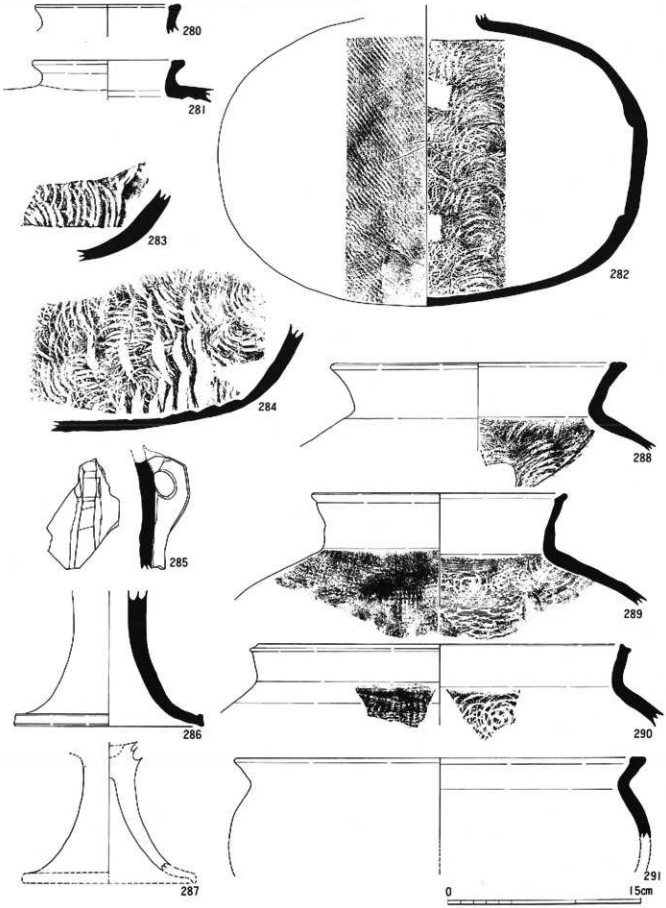
第24図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物５（須恵器５）



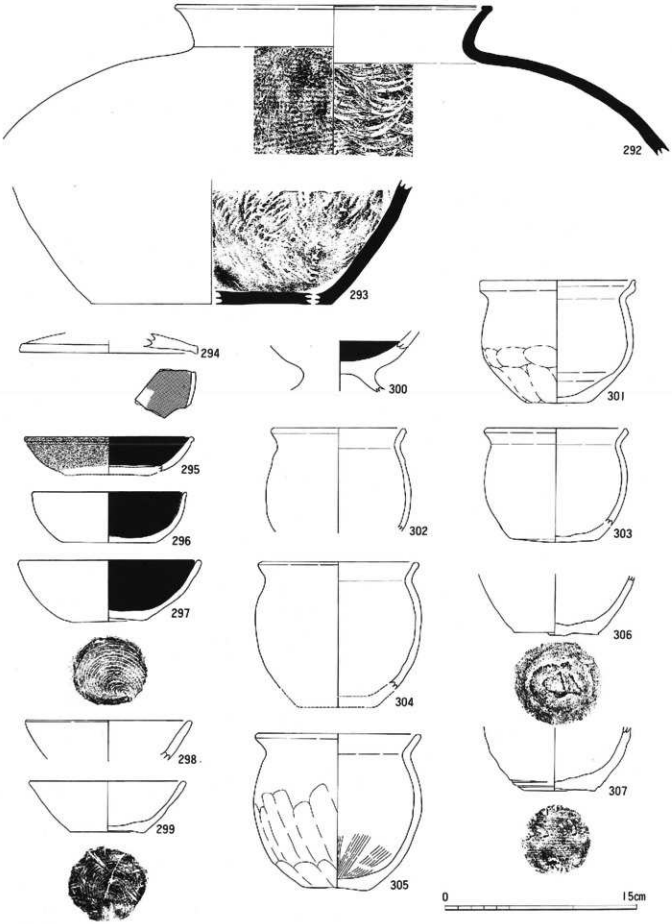
第25図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物６（須恵器６）



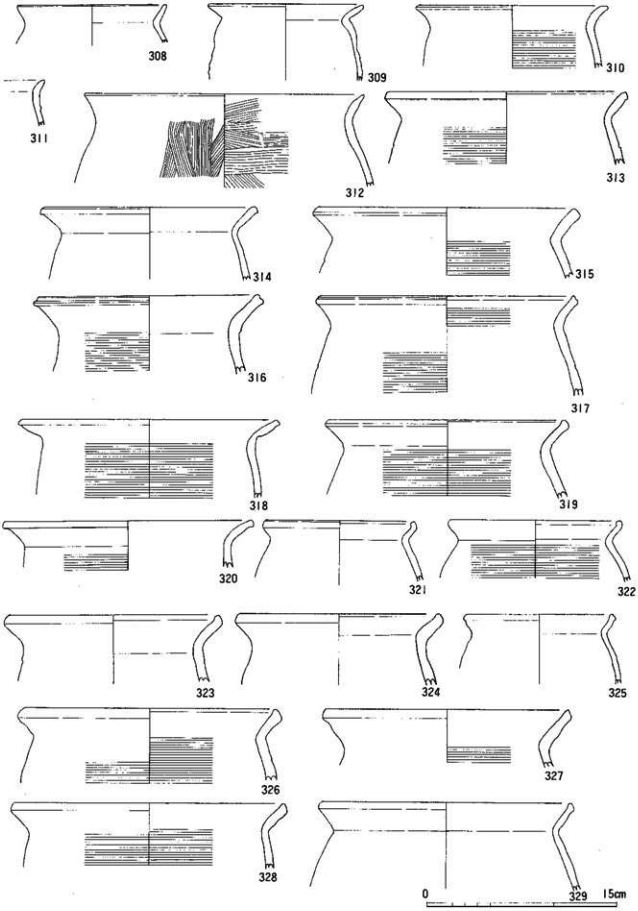
第26図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物７（須恵器７）



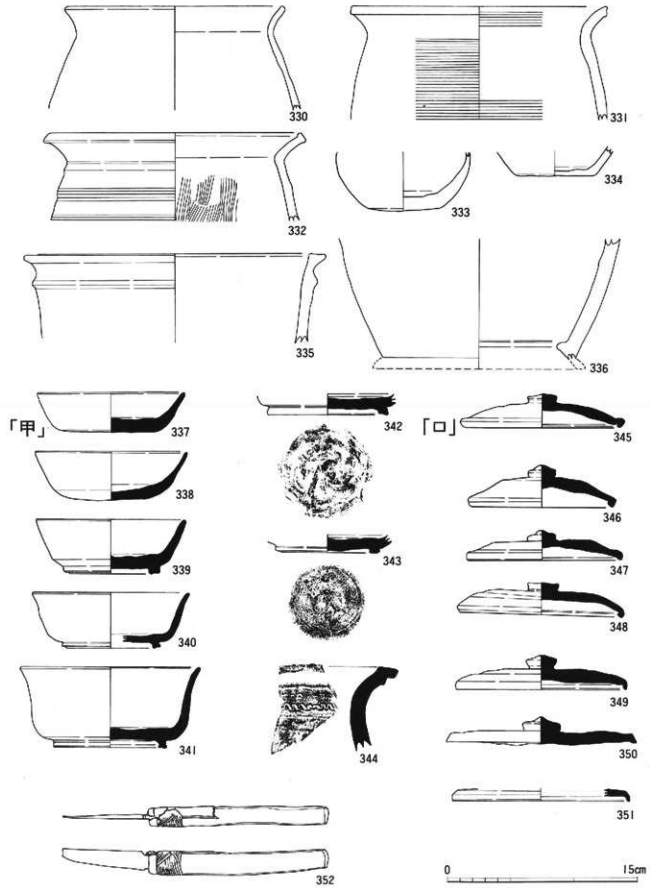
第27図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物８（須恵器８）



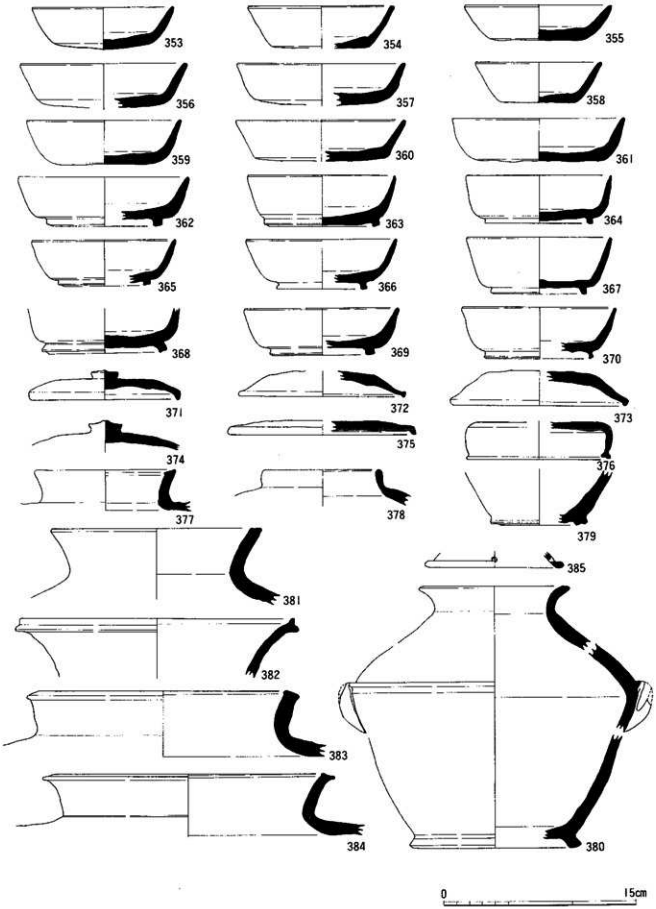
第28図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物９（須恵器９・土師器１）



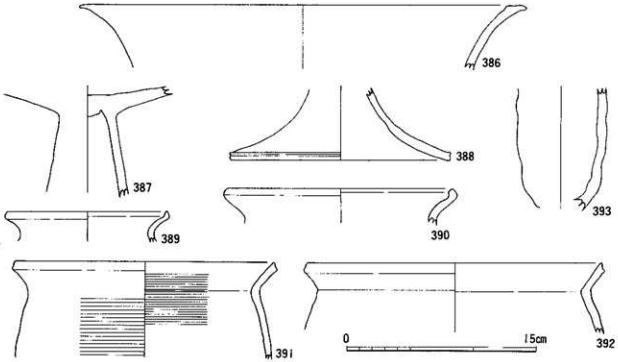
第29図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物10（土師器２）



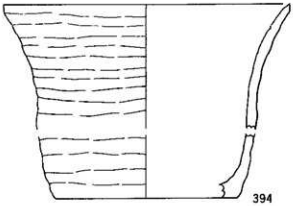
第30図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物11（土師器３・須恵器１・金属製品）

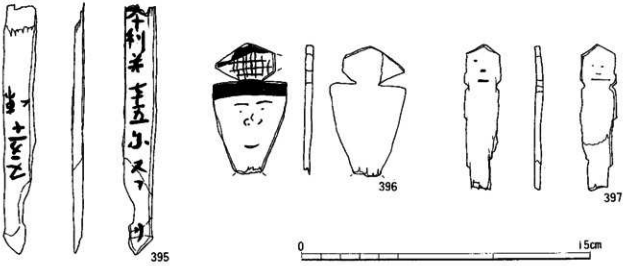


第31図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物12（須恵器２）

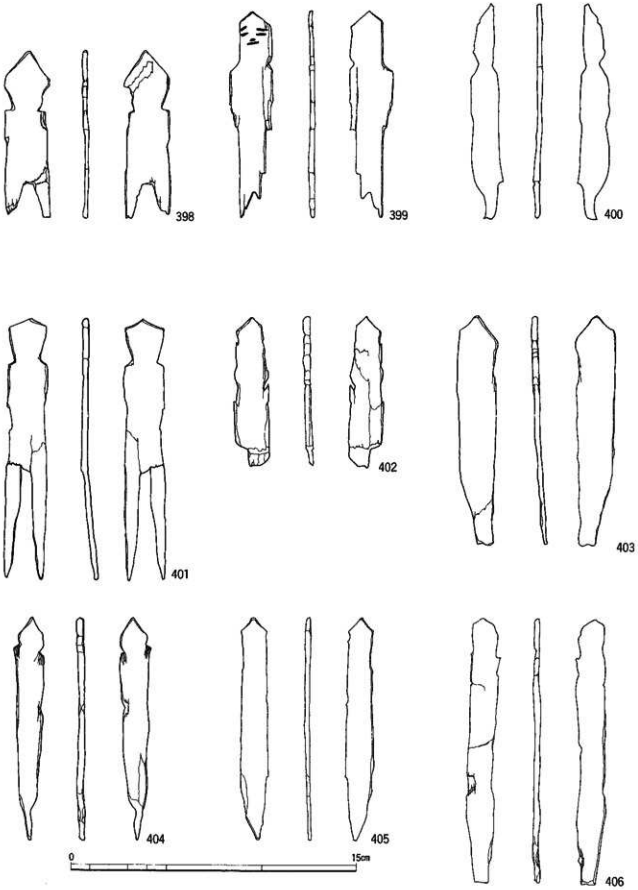


第32図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物13（弥生土器他）

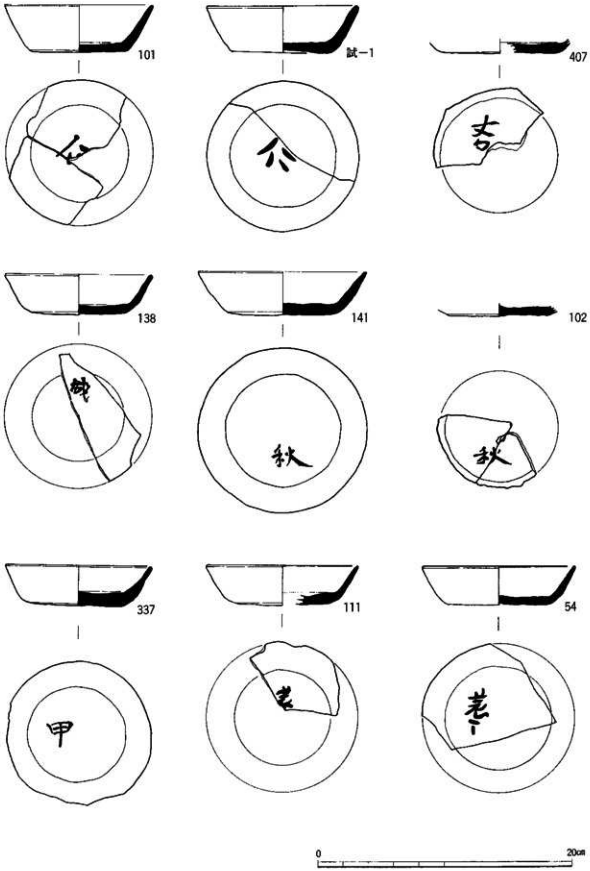




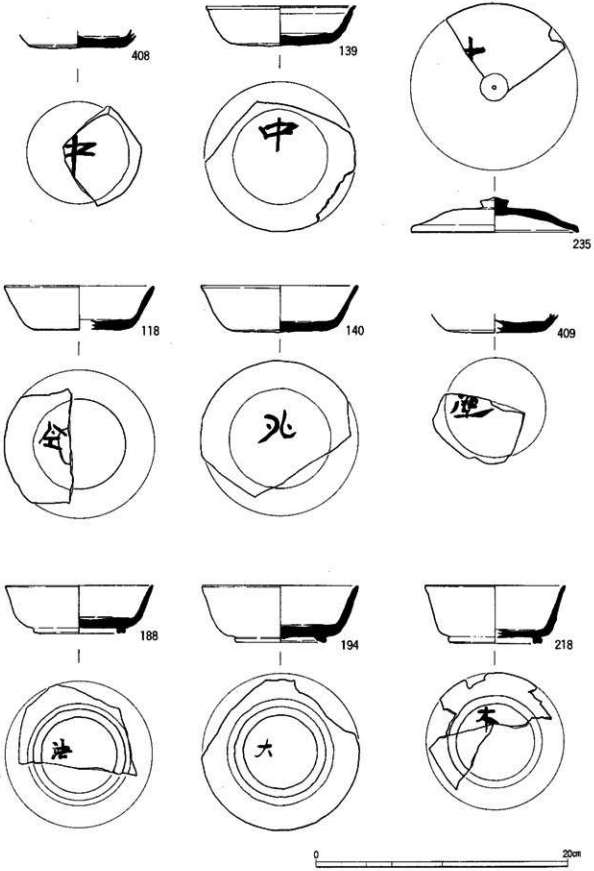
第33図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物14（木簡・人形１）



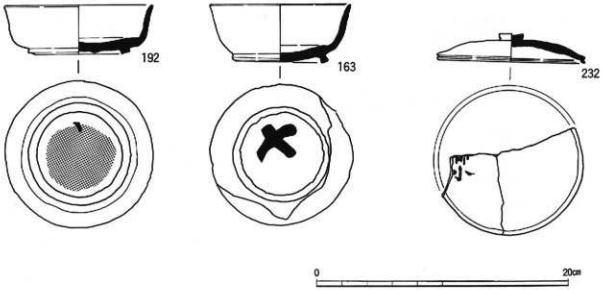
第34図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物15（人形２・斎串）

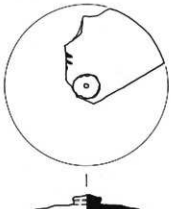


第35図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物16（墨書土器１）



第36図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物17（墨書土器２）





第37図　北高木遺跡Ｂ地区の遺物18（墨書土器３）

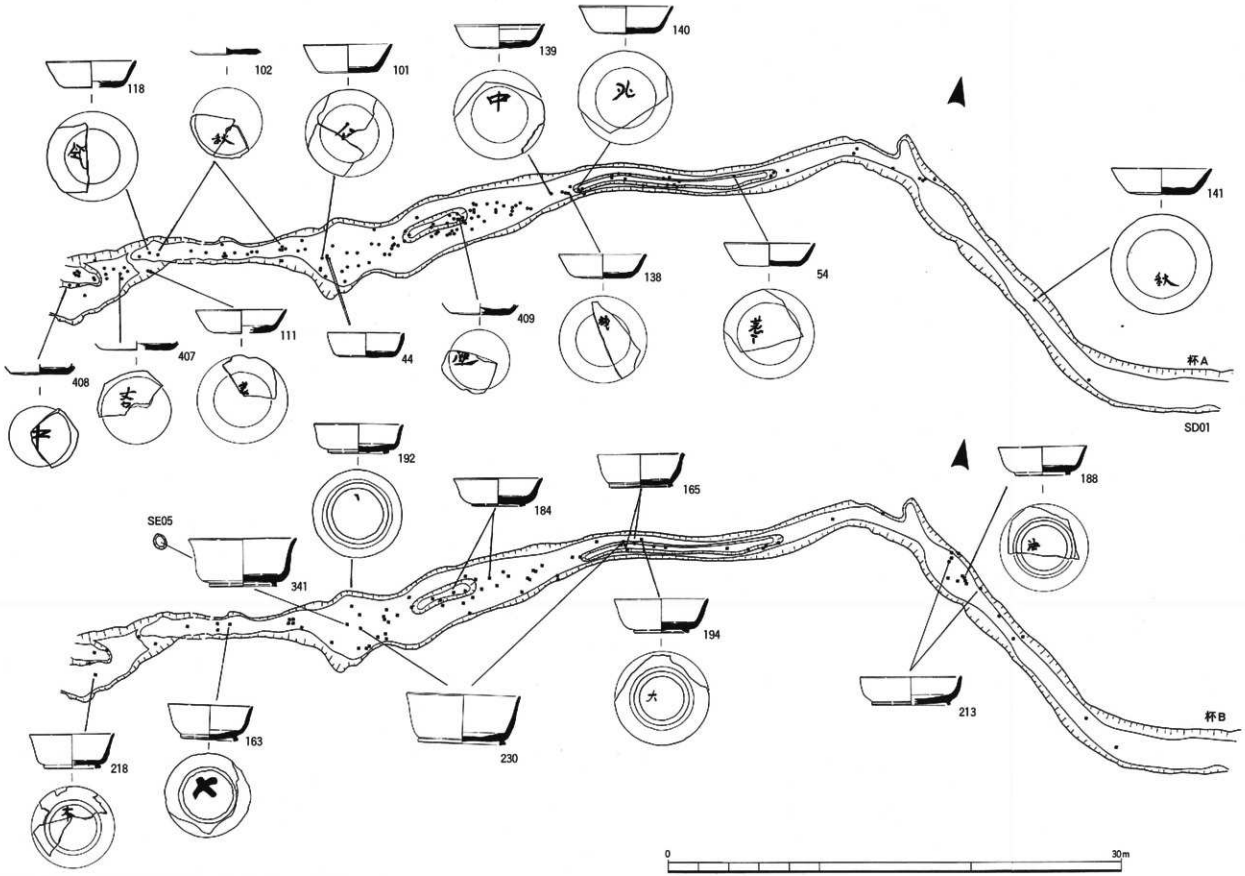
弥生・古墳時代などの遺物（第32図）

高坏・甕などがある。包含層・遺構内遺物共にあるが、本地区で弥生・古墳時代に帰属する遺構の検出はないため、すべて流入した遺物と考える。また、包含層も明確でなく奈良・平安時代の遺物と混在する状況にある。

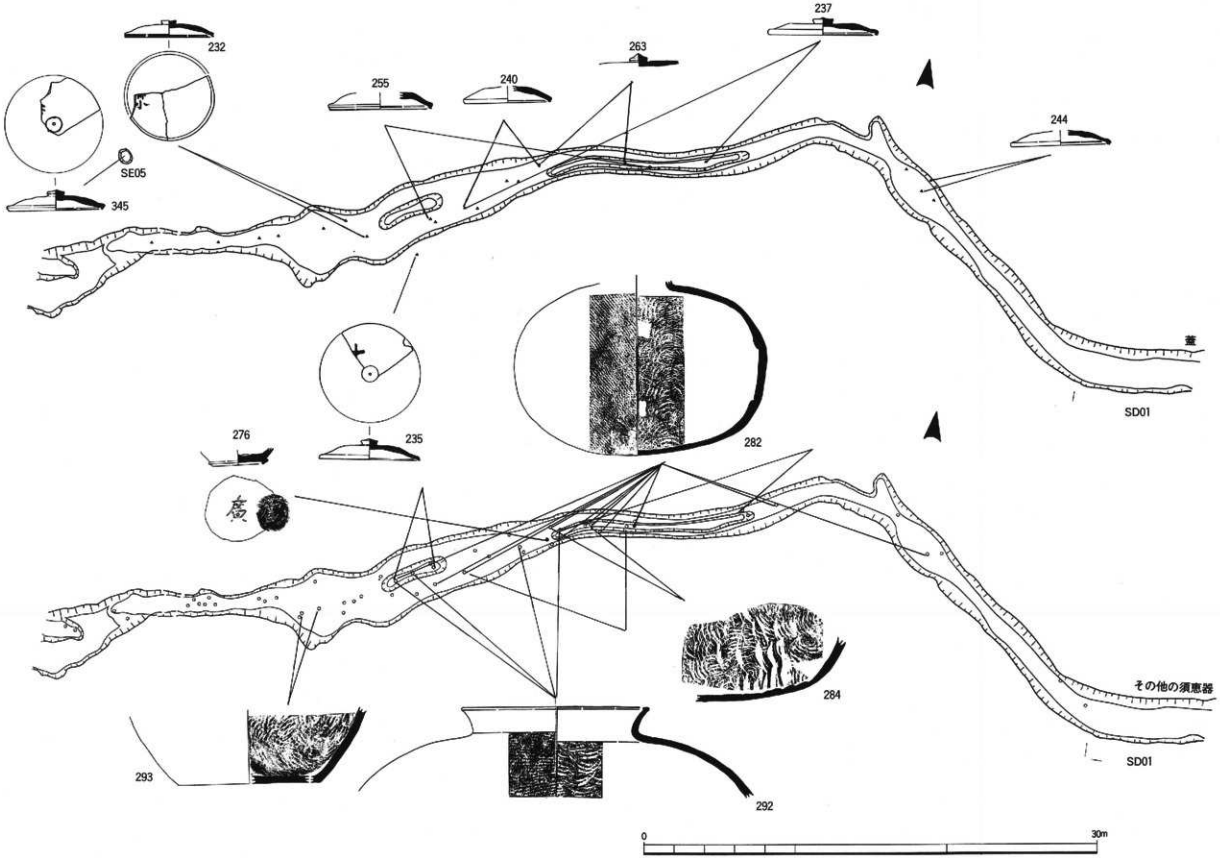
386は、Ｘ21；Ｙ16の包含層中から出土した甕の口縁部破片である。推定口径35.2cmを測る大型の甕で頸部から上部を掲載した。387・388は、Ｘ25；Ｙ19包含層中から出土した高坏である。共に脚部のみの検出である。２点とも遺存状態は極めて良く丁寧な磨きによって調整する。両者ともに内面の状況から粘土塊の削出しによる整形により調整する。388の底部径は、17.4cmを測り、端部に沈線を加え文様効果を出す。古式土師器として報告する。

389・390は、ＳＤ14の埋土から出土した甕の口縁部である。共に折返し口縁が明確である。基本的に古代の溝からの出土であるため混入と考えられる。391は、ＳＤ10の埋土から出土した甕の口縁部破片である。破片で口縁部から胴部まで推定復元でき、残存する器高は7.8cm、口縁部径は20.4cmである。392は、ＳＤ14から出土した甕である。391とほぼ同様な時期に帰属する。口縁部径は、23.7cmである。

394は、製塩土器である。ＳＤ01の埋土から単独で出土した。帰属する時期は、器形などから８世紀代である。推定復元される器高は約10cmで胴部の最大径は約７cm程である。なお、想定される底部形態は、乳房状突起のつく土器である。（高橋）



第38図　北高木遺跡Ｂ地区ＳＤ01内遺物出土状況１（墨書土器１・須恵器１）



第39図　北高木遺跡Ｂ地区ＳＤ01内遺物出土状況２（墨書土器２・須恵器２）

第2節　C地区

1　遺構

弥生・古墳時代の遺構（第40～43図）

C地区における弥生・古墳時代の遺構として捉えるものは、基本的には溝状遺構と土坑数基のみである。いずれの遺構も後世の古代・近現代の用水などの影響を受け、遺存状況は良くない。遺物は、座標軸X82・Y12～X85・Y8にかけてほぼ一直線上に並ぶ。特に座標軸X83・Y10付近は、流路に面した微高地状の地形のためか遺物が集中して出土する状況にある。土器は遺存状態が悪いため総点数などは不明だが、出土した土器の器形には、日常雑器的な土器は基本的に含まれず、高坏・甕形土器・壺形土器・器台・小形丸底壺などがあり、赤彩されたものが多い。またその他の遺物には流路内から出土した板状の木製品などがある。

土坑

ＳＫ201

座標軸X79・Y17で検出した。ほぼ円形の土坑で、断面形状は擂り鉢形である。埋土の状況はレンズ状であり人為的な埋め戻しによらないと考える。土坑埋土及び土坑東側に数個体の甕が確認された。

ＳＫ205

ほぼ南北方向に主軸を持つ長楕円形の土坑である。ただし、北端をＴ－40・ＳＫ－06が切るため、長軸の長さは不明であるが、幅は40cmを測り、断面形状は船底形である。座標軸X79・Y17で検出。

溝状遺構

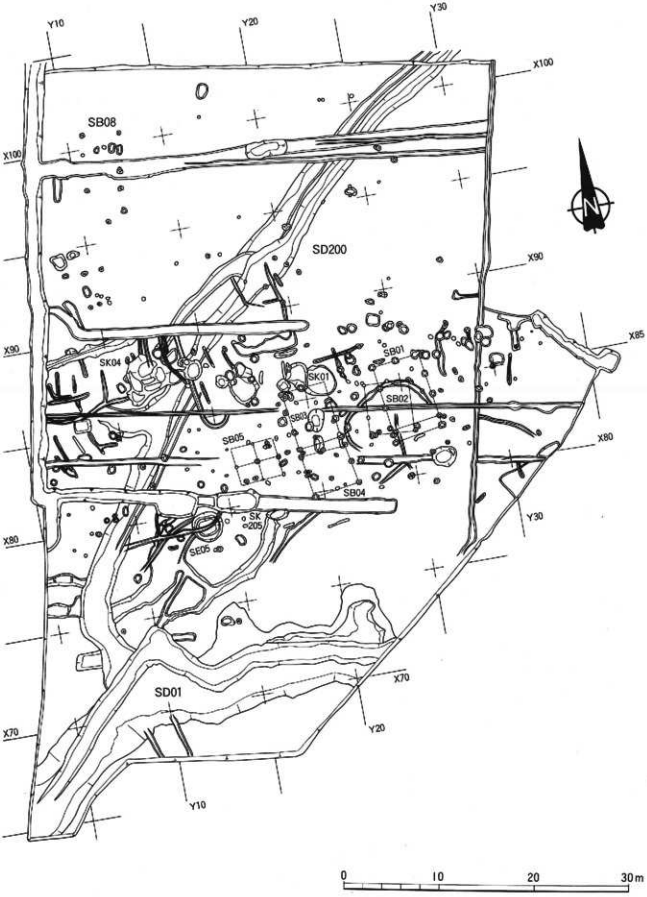
幾筋か確認できたが、比較的遺存状況の良いものを記載した。ただし溝には水路として機能した遺構のほかに半円を描くもの、サク状に連続するものなどがある。

ＳＤ200

出土した遺物には、甕・長頸壺の頸部・壺・小形丸底壺・高坏などが出土する。時期的には最下層から出土した土器の爛風時期から弥生時代終末から古墳時代初頭に流れた流路である。

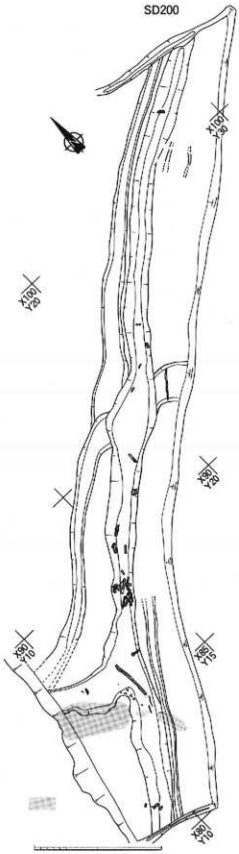
ＳＤ01

ほぼ南西から北東方向に延びる。地形的に北東方向へと流れをもつ。埋土中には自然木のほか板状に加工されるものなどがあるが、いずれも遺存状況が悪いため図示していない。なお、埋土の状況はきめの細かい砂が基本となることからある一定の流れのある溝であったと考える。　（高橋）

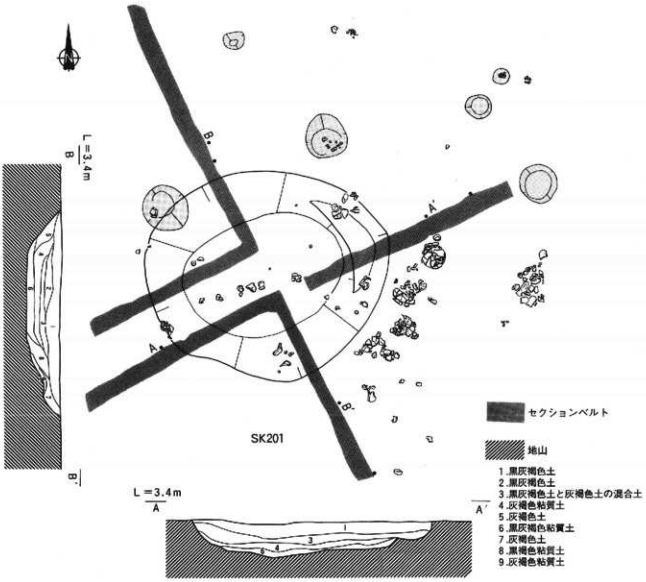


第40図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構配置

第41図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構１（弥生土器出土状況）



第42図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構２（弥生時代の溝）



第43図　北高木遺跡C地区の遺構３（弥生時代の土坑）

奈良・平安時代・中世の遺構（第44～52図）

掘立柱建物

ＳＢ01

Ｘ82～86.5；Ｙ23.5～27にある、３間(7.12m)×２間(5.2m)の南北棟の建物である。行寸法は桁行24尺・梁行17尺で、柱間は桁行・梁行とも８尺の等間である。また桁行の方向はＮ－8.5°－Ｗ、平面積は42.3㎡である。（１間分の出っぱりを注記必要あり）

ＳＢ02

Ｘ82.5～85.5；Ｙ23～25.5にある、３間(5.32m)×２間(4.72m)の南北棟の建物である。行寸法は桁行18尺・梁行16尺で、柱間は桁行は６尺(外側)と５尺(内側)・梁行は８尺の等間である。また桁行の方向はＮ－２°－Ｅ、平面積は25.1㎡である。

ＳＢ03

Ｘ82.5～86；Ｙ18.5～21.5にある、３間(6.14m)×２間(4.68m)の南北棟の建物である。行寸法は桁行20尺・梁行16尺で、柱間は桁行７尺・梁行８尺の等間である。また桁行の方向はＮ－10.5°－Ｗ、平面積は28.7㎡である。

ＳＢ04

Ｘ79.5～82.5；Ｙ19～22にある、２間(4.86m)×２間(4.38m)の東西棟の建物である。行寸法は桁行16尺・梁行15尺で、柱間は桁行は８尺の等間・梁行は６尺(北側)と８尺(南側)である。また梁行の方向はＮ－10°－Ｗ、平面積は21.3㎡である。

ＳＢ05

Ｘ81～83.5；Ｙ15.5～18にある、２間(4.39m)×２間(4.03m)の東西棟の総柱建物である。行寸法は桁行15尺・梁行13尺で、柱間は桁行・梁行とも７尺の等間ある。また梁行の方向はＮ－2.5°－Ｅ、平面積は17.7㎡である。

ＳＢ06

Ｘ84～87.5；Ｙ14～17.5にある、３間(6.46m)×２間(5.57m)の東西棟の総柱建物である。行寸法は桁行22尺・梁行19尺で、柱間は桁行は７尺の等間・梁行は10尺(南側)と８尺(北側)である。また梁行の方向はＮ－90°－Ｗ、平面積は36㎡である。

ＳＢ07

Ｘ91.5～93.5；Ｙ8.5～10.5にある、２間(3.9m)×１間(3.5m)の東西棟の建物である。行寸法は桁行13尺・梁行12尺で、柱間は桁行は７尺の等間・梁行は12尺である。また梁行の方向はＮ－2.5°－Ｗ、平面積は13.7㎡である。

ＳＢ08

Ｘ97.5～101；Ｙ10.5～13にある、３間(5.78m)×２間(3.8m)の南北棟の建物である。行寸法は桁行19尺・梁行13尺で、柱間は桁行は７尺・梁行は６尺の等間である。また桁行の方向はＮ－５°－Ｅ、平面積は22.0㎡である。

ＳＢ09

Ｘ94～96.5；Ｙ22.5～25にある、２間(3.02m)×２間(3.04m)の南北棟の建物である。行寸法は桁行10尺・梁行10尺で、柱間は桁行・梁行とも５尺の等間である。また桁行の方向はＮ－37.5°－Ｗ、平面積は9.2㎡である。

ＳＢ10

Ｘ95～97；Ｙ24.5～26.5にある、２間(3.36m)×２間(2.98m)の南北棟の総柱建物である。行寸法は桁行11尺・梁行10尺で、柱間は桁行は６尺(南側)と５尺(北側)・梁行は５尺の等間である。また桁行の方向はＮ－４°－Ｗ、平面積は10.0㎡である。

ＳＢ11

Ｘ90.5～93.5；Ｙ18～21にある、３間(4.36m)×１間(3.58m)の東西棟の建物である。行寸法は桁行15尺・梁行12尺で、柱間は桁行は５尺の等間・梁行は12尺である。また梁行の方向はＮ－49°－Ｗ、平面積は15.6㎡である。

土坑

ＳＫ01

Ｘ86～87；Ｙ19～22にある、掘形は径３ｍ程の円形土坑と長軸３ｍ・短軸２ｍの楕円形土坑が組み合った形を呈し、深さは土坑中央で約40㎝を測る。埋土は黄灰褐色土、黒灰褐色土である。埋土からは須恵器の杯・蓋、土師器の皿等が出土した。ＳＢ02北東隅柱穴を埋土を除去した後、確認した。

ＳＫ03

Ｘ86～87；Ｙ17～18にある、掘形は長軸３ｍ・短軸2.5ｍの楕円形を呈し、土坑中央で深さ20㎝を測る。須恵器の杯・蓋が出土した。ＳＫ29を切るが、ＳＥ14・15・16・49に切られる。埋土は、灰褐色土系である。

ＳＫ04

Ｘ87～89；Ｙ12～15にある、掘形は不定形で、掘込みは浅い。大小さまざまな円形・楕円形が切り合って形成された土坑である。埋土は、暗灰褐色土系である。

ＳＫ06

Ｘ80；Ｙ18にある、掘形は長軸2.5ｍ・短軸1.1ｍの楕円形を呈し、深さは土坑中央は約20㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土である。

ＳＫ09

Ｘ87；Ｙ22にある、掘形は径60㎝程の円形を呈し、深さは約25㎝を測る。ＳＤ65を切る。

ＳＫ29

Ｘ86.5～88；Ｙ16.5～17.5にある、掘形は長軸２ｍ・短軸１ｍの不定形な楕円形を呈し、深さは土坑中央で約10㎝を測る。ＳＫ03に切られる。

ＳＫ30

Ｘ87；Ｙ27.5にある、掘形は径80㎝程の円形を呈し、深さは約35㎝を測る。ＳＥ25・ＳＤ97を切る。埋土は、黒灰褐色土系である。

ＳＫ34

Ｘ89；Ｙ24.5～25にある、掘形は長辺1.4ｍ・短辺1.1ｍの隅丸方形を呈し、深さ約40㎝を測る。埋土は黒灰褐色土系である。須恵器の蓋が出土した。

ＳＫ35

Ｘ89；Ｙ24にある、掘形は径１ｍ程の円形を呈し、深さは約10㎝を測る。埋土は、黒灰褐色土系である。須恵器の蓋が出土した。

ＳＫ36

Ｘ89；Ｙ23にある、掘形は長軸１ｍ・短軸60㎝の楕円形を呈し、深さ約10㎝を測る。埋土は黒灰褐色土系である。

ＳＫ39

Ｘ86；Ｙ23にある、掘形は長軸1.1ｍ・短軸60㎝の楕円形を呈し、深さ約15㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土である。

ＳＫ43

Ｘ87；Ｙ29にある、掘形は長辺１ｍ・短辺70㎝の隅丸方形を呈し、深さ約15㎝を測る。埋土は灰褐色土系である。ＳＫ44をを切る。

ＳＫ44

Ｘ87.5.；Ｙ29にある、掘形は楕円形と推定できる。深さ約15㎝を測る。埋土は褐灰色土系である。須恵器の杯・蓋が出土した。ＳＫ43に切られる。

ＳＫ48

Ｘ86.5；Ｙ26にある、掘形は長軸１ｍ・短軸50㎝の楕円形を呈し、深さ約15㎝を測る。埋土は黒褐色土系である。ＳＢ01－９柱穴を切る。

ＳＫ95

Ｘ83；Ｙ20.5にある、掘形は長軸1.7ｍ・短軸１ｍの楕円形を呈し、深さは土坑中央で約20㎝を測る。埋土は灰褐色土系である。ＳＢ03－５の柱穴を切る。

ＳＫ98

Ｘ87；Ｙ16.5にある、掘形は長軸１ｍ・短軸70㎝の楕円形を呈し、深さ約20㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土である。ＳＥ14・49に切られる。

井戸

ＳＥ02

Ｘ83.5；Ｙ20にある、掘形は径１ｍ程の円形を呈し、深さは約１ｍを測る。ＳＥ31を切る。

ＳＥ05

Ｘ78.5～80；Ｙ13～14.5にある、掘形の上端は径３ｍの円形だが、下端は長辺1.8ｍ・短辺1.5ｍの隅丸方形を呈し、深さは約１ｍを測る。掘形の途中には段を有する。調査区で、最大の井戸である。埋土は、黒褐色粘質土　灰褐色粘質土が基調である。

ＳＥ09

Ｘ83；Ｙ9.5にある、掘形は径１ｍ程の円形を呈し、深さは約100㎝を測る。埋土は、灰褐色粘質土、黒褐色粘質土を基調とする。須恵器の杯が出土した。

ＳＥ10

Ｘ86；Ｙ7.5～8.5にある、掘形は長辺1.8ｍ・短辺1.3ｍの隅丸方形を呈し、深さ約90㎝を測る。埋土は灰褐色土、灰黒色粘質土である。

ＳＥ13

Ｘ83；Ｙ6.5にある、掘形は径70㎝ 程の円形を呈し、深さは約100㎝を測る。埋土は、褐灰色土、灰褐色土を基調とする。須恵器の杯が出土した。

ＳＥ14

Ｘ87；Ｙ16にある、掘形は円形だが、断面形は上端は径1.3ｍ・下端は径60㎝でじょうご状を呈し、深さは約１ｍを測る。須恵器の蓋、珠洲の鉢が出土した。

ＳＥ15

Ｘ85.5；Ｙ17.5にある、掘形は径80㎝程の円形を呈し、深さは約120㎝を測る。ＳＫ03を切る。埋土は、灰褐色土が基調である。

ＳＥ16

Ｘ86.5；Ｙ17.5にある、掘形は径80㎝程の円形を呈し、深さは約90㎝を測る。ＳＫ03を切る。埋土は、灰褐色土が基調である。

ＳＥ17

Ｘ87.5；Ｙ17.5にある、掘形は径80㎝程の円形を呈し、深さは約100㎝を測る。埋土は、灰色粘質土、暗灰褐色土を基調とする。

ＳＥ18

Ｘ89；Ｙ17.5にある、掘形は径60㎝程の円形を呈し、深さは約100㎝を測る。埋土は、灰褐色粘質土を基調とする。須恵器の杯が出土した。

ＳＥ19

Ｘ84；Ｙ19にある、掘形は径90㎝程の円形を呈し、深さは約120㎝を測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。珠洲の鉢が出土した。

ＳＥ20

Ｘ81；Ｙ24にある、掘形は径80㎝程の円形を呈し、深さは約90㎝を測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。

ＳＥ21

Ｘ83；Ｙ12にある、掘形は径70㎝程の円形を呈し、深さは約100㎝を測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。

ＳＥ22

Ｘ81；Ｙ15にある、掘形は径60㎝程の円形を呈し、深さは約85㎝を測る。埋土は、黒灰色粘質土を基調とする。

ＳＥ23

Ｘ81.5；Ｙ22.5にある、掘形は径60cm程の円形を呈し、深さは約75cmを測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。須恵器の杯が出土した。

ＳＥ24

Ｘ80.5；Ｙ23にある、掘形は径80cm程の円形を呈し、深さは約75cmを測る。埋土は、灰褐色粘質土を基調とする。須恵器の杯が出土した。

ＳＥ25

Ｘ87；Ｙ28にある、掘形は径１ｍ程の円形を呈し、深さは約100cmを測る。埋土は、黒灰色粘質土を基調とする。ＳＫ30に切られる。

ＳＥ26

Ｘ86；Ｙ27にある、掘形は径80cm程の円形を呈し、深さは約90cmを測る。埋土は褐灰色粘質土を基調とする。

ＳＥ27

Ｘ81；Ｙ20にある、掘形は径70m程の円形を呈し、深さは約70cmを測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。

ＳＥ31

Ｘ83～84.5；Ｙ20～21にある、掘形の上端は長軸2.4ｍ・短軸1.6ｍ、下端は長軸1.1ｍ・短軸80cmの楕円形を呈し、深さ約120cmを測る。ＳＥ02に切られる。珠洲が出土した。埋土は灰褐色土、黒灰褐色粘質土を基調とする。

ＳＥ32

Ｘ88；Ｙ26にある、掘形は径１ｍ程の円形を呈し、深さは約110cmを測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。

ＳＥ33

Ｘ88；Ｙ25にある、掘形は径80cm程の円形を呈し、深さは約100cmを測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。

ＳＥ37

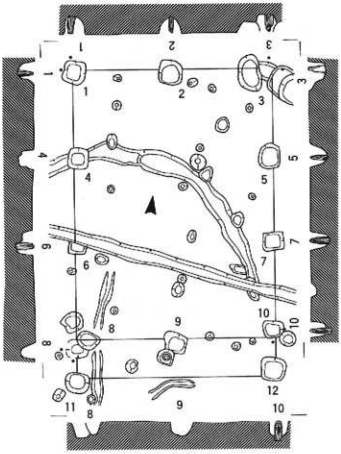
Ｘ87；Ｙ22.5にある、掘形は径70cm程の円形を呈し、深さは約60cmを測る。埋土は、黒灰色粘質土である。ＳＫ38を切る。

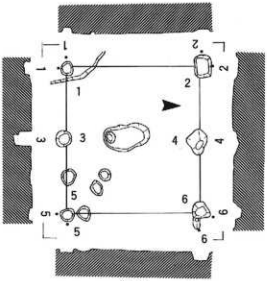
ＳＥ46

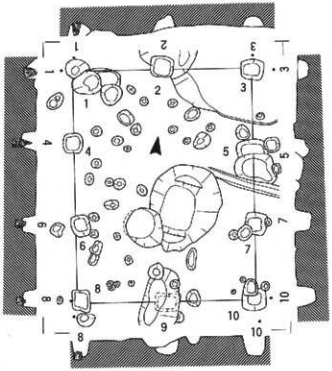
Ｘ86；Ｙ26.5にある、掘形は径70cm程の円形を呈し、深さは約90cmを測る。埋土は、黒灰褐色粘質土を基調とする。

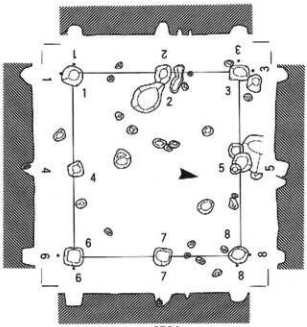
ＳＥ49

Ｘ86.5；Ｙ16.5にある、掘形は径70cm程の円形を呈し、深さは約80cmを測る。ＳＫ03を切る。埋土は、黒灰褐色粘質土が基調である。　（安念）



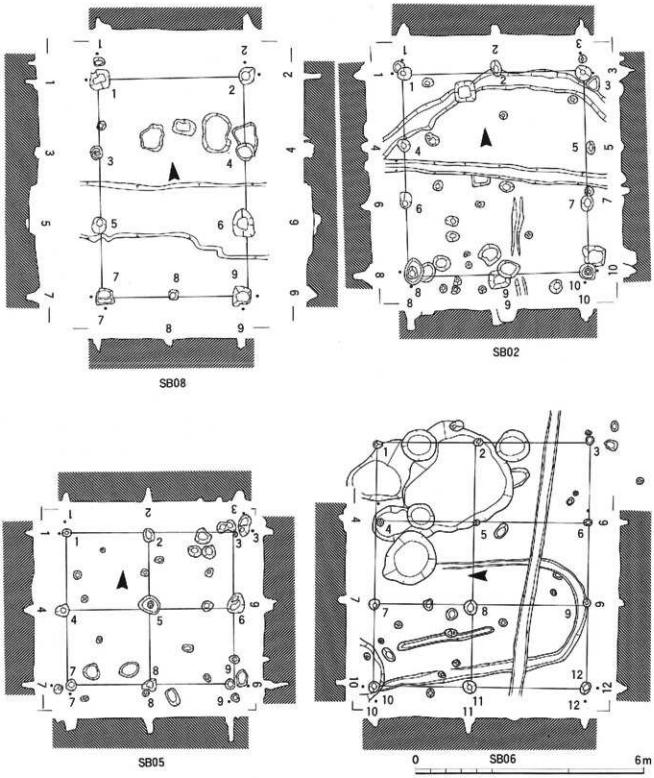




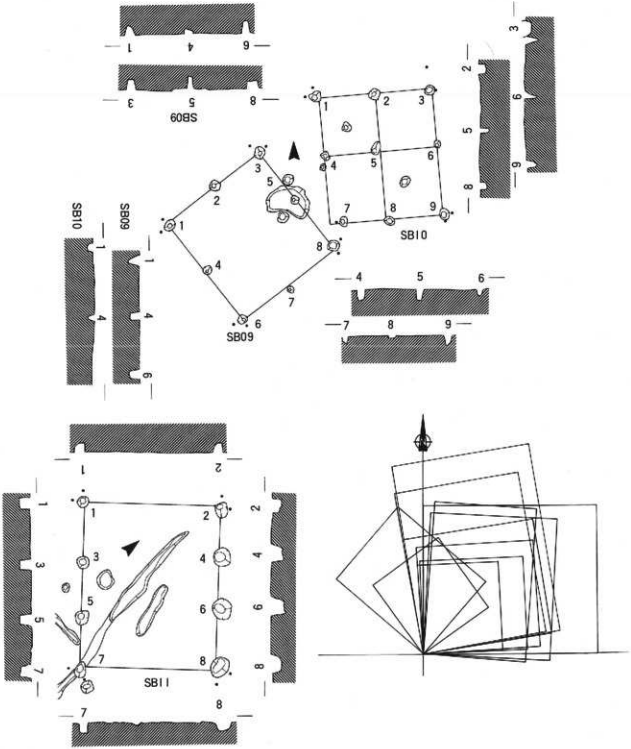


0 6m

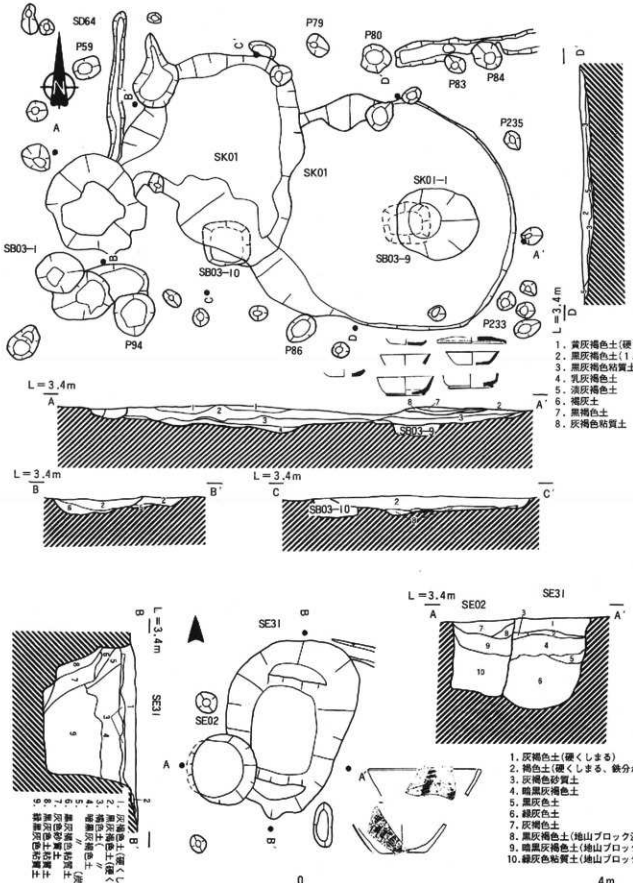
第44図　北高木遺跡C地区の遺構４（奈良・平安時代の遺構１）　L＝3.4m



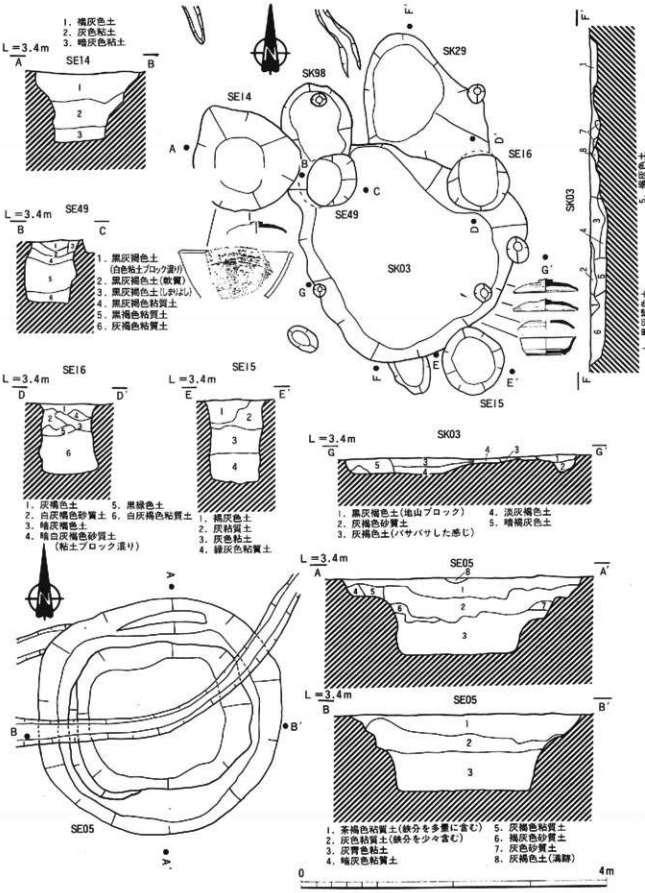
第45図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構５（奈良・平安時代の遺構２）　Ｌ＝3.4m



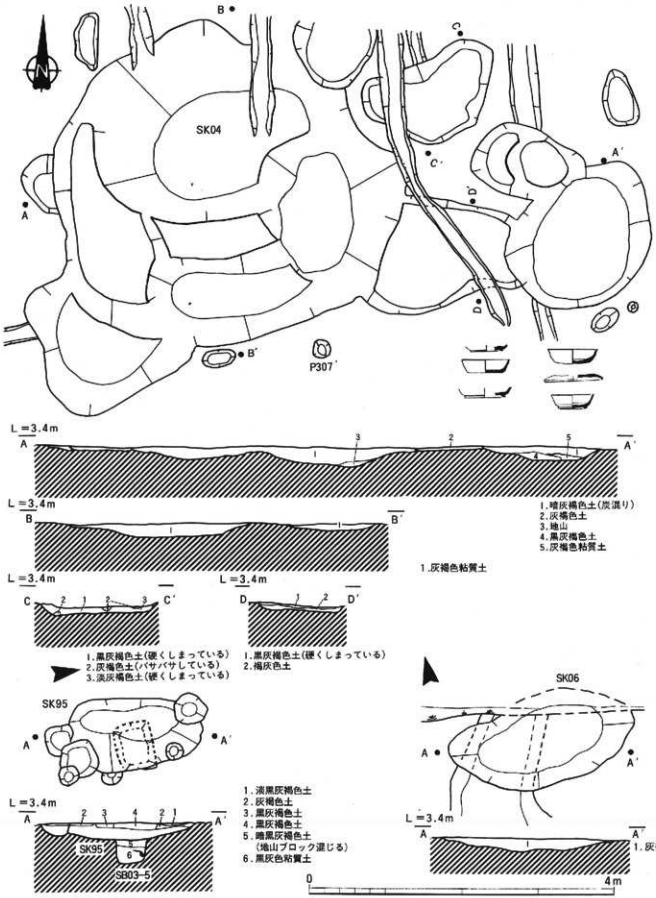
第46図　北高木遺跡C地区の遺構６（奈良・平安時代の遺構３）　L＝3.4m



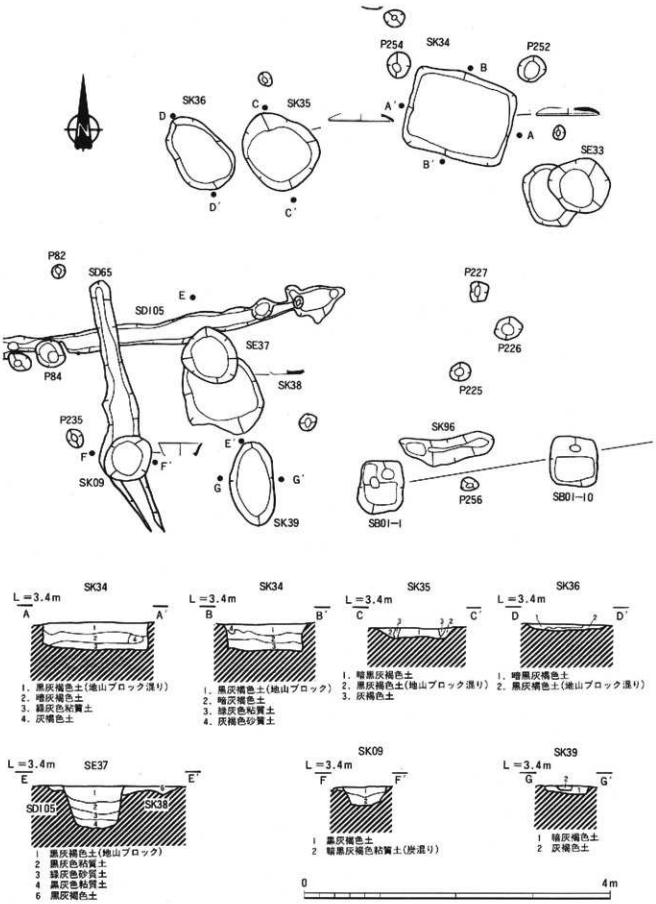
第47図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構７（奈良・平安時代の遺構４）



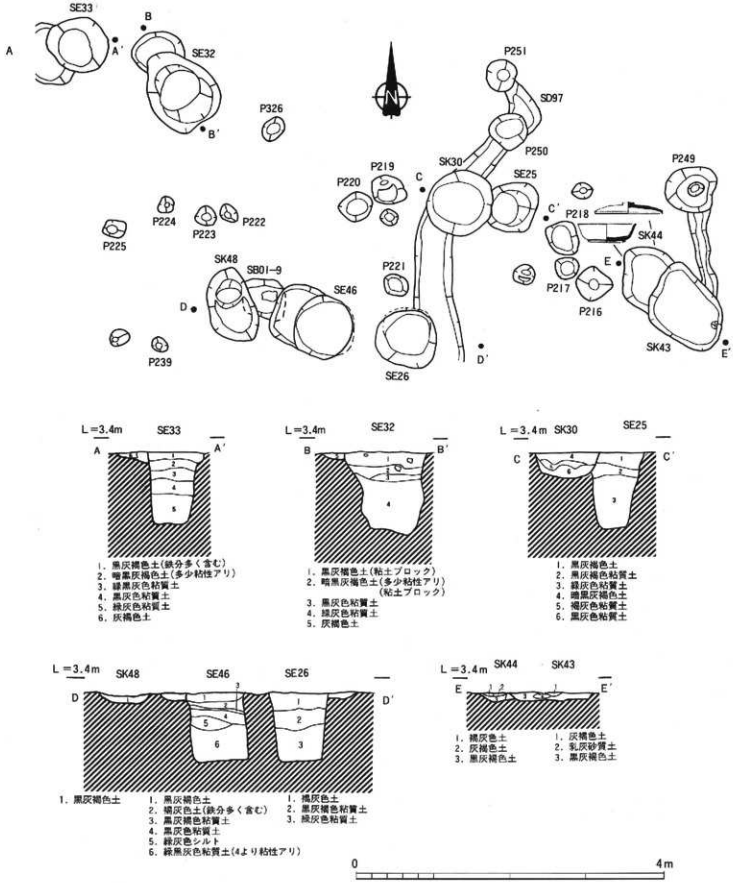
第48図　北高木遺跡C地区の遺構８（中世の遺構１土坑）



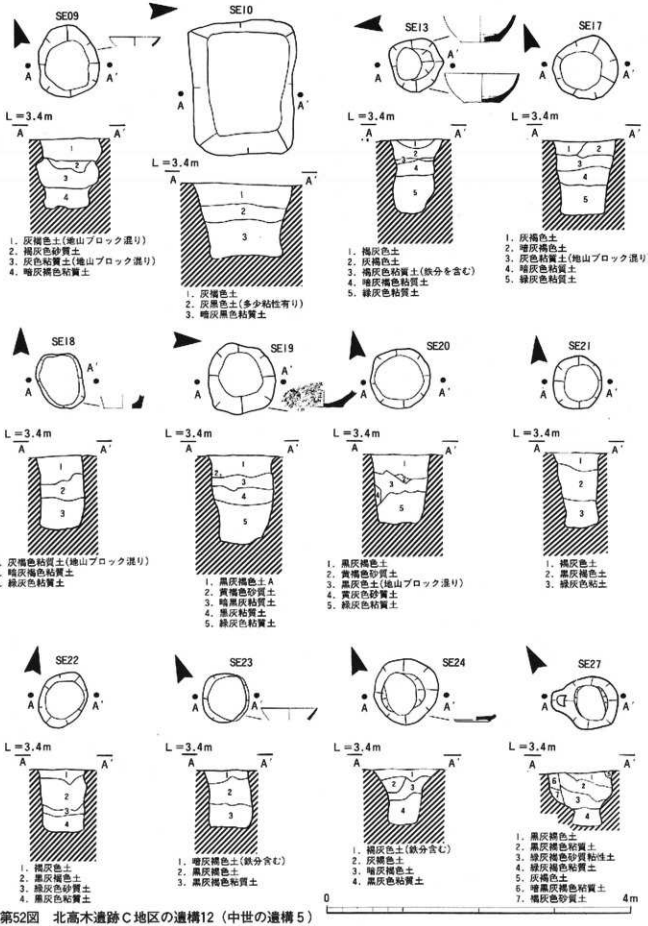
第49図　北高木遺跡C地区の遺構９（中世の遺構２）



第50図　北高木遺跡C地区の遺構10（中世の遺構３）



第51図　北高木遺跡Ｃ地区の遺構11（中世の遺構４）



第52図　北高木遺跡C地区の遺構12（中世の遺構５）

2　遺物

弥生・古墳時代の遺物（第53～55図）

基本的に遺構内出土の遺物を掲載した。選定には遺存状況や器形的な特徴がはっきりするものを選んだため、必ずしも図版掲載した遺構と一致しない。また、流路内から板状の木製品・自然木などが数点出土しているが、いずれも遺存状況が悪く実測図などは提示しなかった。

ＳＤ200出土の遺物

埋土に包含されていた遺物は最も多く、器形的にもさまざまであるが、壺形土器（416～426）・高坏（427～431）・甕形土器（432・433）が構成する器種の主体を占める。壺形土器には、有段口縁を持つもの（417～420・422・423・425）や、長頸壺（421・赤彩土器）、底部に焼成前穿孔を持つタイプ（426）が含まれ、高坏には古い様相を持つタイプ（430）がある。424の壺形土器の底部は、焼成後に磨きを施され、やや安定性に欠ける土器である。帰属時期は、古墳時代前期前半と考える。また、下層部分からは月影式期に属する土器群（410～414）が含まれており、器種的にも鉢（410）、甕形土器（411）、高坏（412・413）、器台（414）を確認した。ただし、410の鉢は内面の調整が丁寧なことから壺形土器の底部の可能性をもつ。

ＳＤ206出土の遺物

本土坑内の遺物には、有段口縁をもつ壺形土器（415）がある。上部のみの残存であるが、弥生時代終末期に帰属する土器である。

ＳＤ205出土の遺物

この遺構からは、セット関係になると考えられる小形丸底壺（438）と、赤彩が明瞭に残される器台（440～442）が出土した。器台には、脚部に穿孔を持つタイプ（440・441）、持たないタイプがある。加えて小形の壺形土器（439）も出土した。

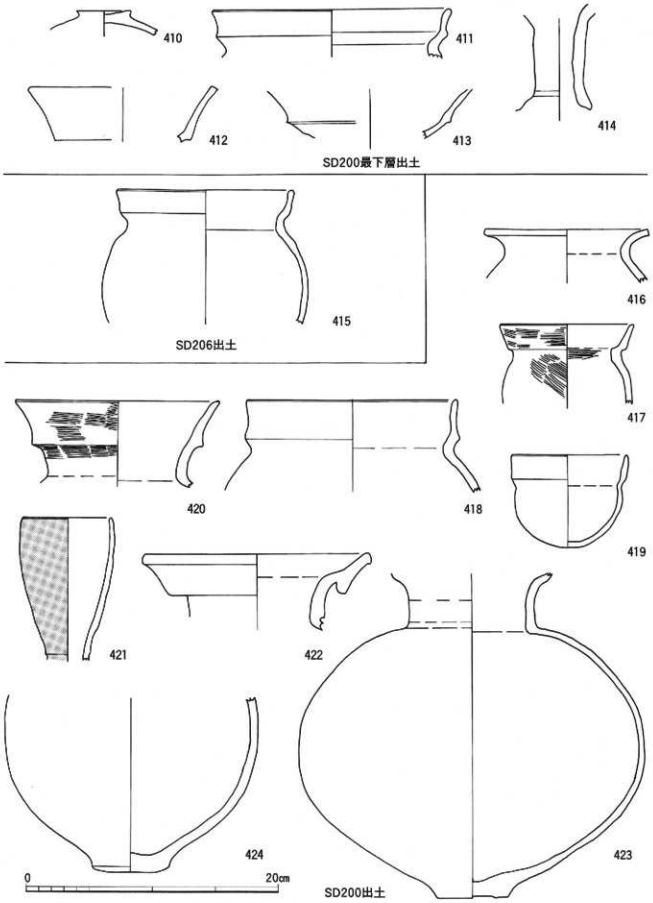
ＳＤ100出土の遺物

この遺構は、基本的に古代の河川であるが、流入と捉えられる弥生・古墳時代の土器が含まれ、器形的には、甕形土器（434・435）、壺形土器（437）、器台（436）などがある。壺形土器は、口縁部が内反するタイプの土器である。

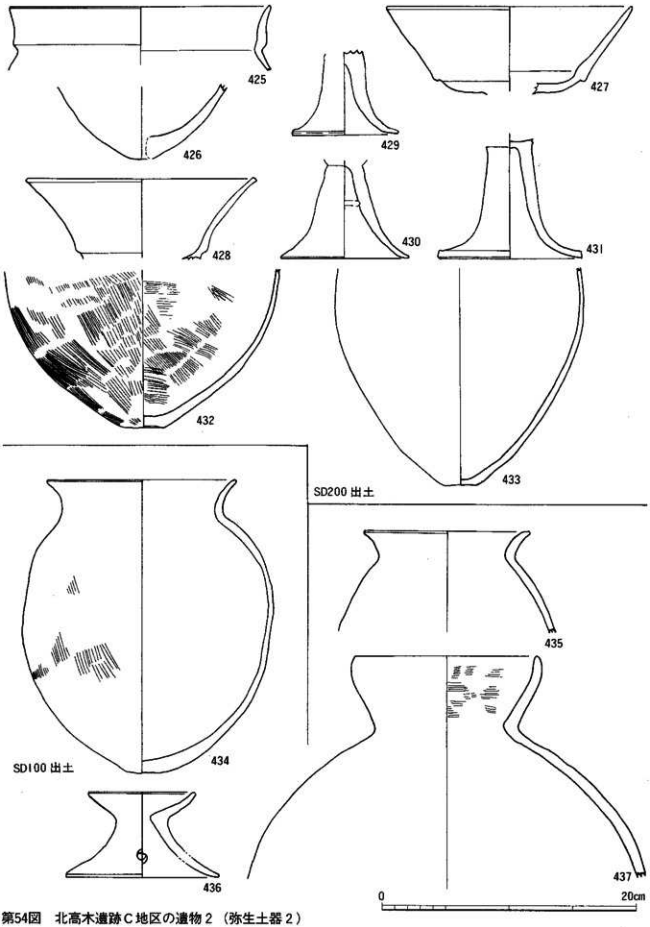
包含層出土の遺物

包含層から出土した土器には、古墳時代初頭に帰属する土器が多い。小形丸底壺（445～448）、鐙（449）、甕形土器（450・452～455）、坏（451）を提示する。447の小形丸底壺は、ほぼ全面を赤彩する土器である。鐙は、胴部のほぼ中央に穿孔を有し、竹管などを注口とした。想定される注口の角度は水平方向に対し10度を測る。

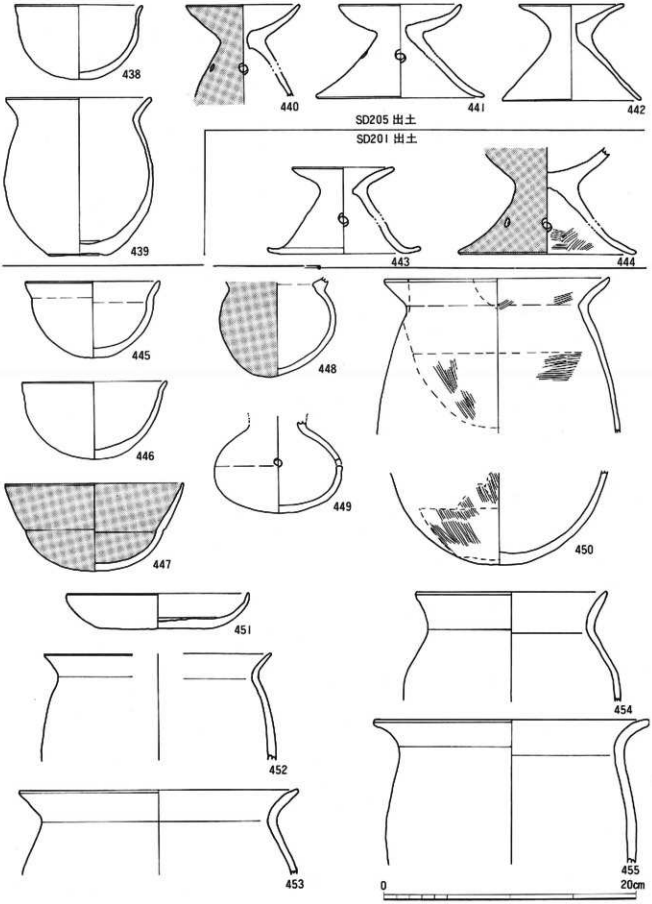
（高橋）



第53図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物１（弥生土器１）



第54図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物２（弥生土器２）



第55図　北高木遺跡C地区の遺物３（弥生土器３）

奈良・平安時代の遺物

須恵器(第56～59図)

杯類(20～231・337～343・353～370)

杯A(456～488)、高台をもたない杯。図化したのは約140個体である。

成形及び調整は、底部外面を除く内外面はロクロナデ、底部外面はヘラ切り痕跡を消すためナデを施すものが大半を占める。少量だが底部内外面を簡易なナデを施すものもある。

形態は、底部はほとんどが平底である。外形で底部と体部の境界がやや不明瞭なものがあるものの、大半は明瞭である。また丸底は少量だが存在する。これはヘラ切り後の成形の不備からなったと考えられる。体部は、斜上に伸びるもの、ほぼ垂直に伸びるもの、湾曲しながら伸びるものがある。口縁端部は、肥厚し丸めるもの、斜上方へつまみ上げるものがある。

口径の大きさは9.8～13.4cmを測る。口径の大きさ及び個体数等から、10cm前後のもの(Ⅰ)、11.5cm前後のもの(Ⅱ)、12cm前後のもの(Ⅲ)、12.5cm前後のもの(Ⅳ)、13cm以上のもの(Ⅴ)にそれぞれ分類できる。Ⅰは2個体、Ⅱは約30個体、Ⅲは約50個体、Ⅳは約40個体、Ⅴは12個体であり、Ⅲタイプの杯が最も多く出土した。径高指数値(h/2rX100)では、Ⅰは32、Ⅱは29～31、Ⅲ・Ⅳは28～30、Ⅴは24～25が最も多い値である。

杯B(489～534)、杯Aに高台を貼付けたもの。図化したのは約100固体である。内外面の調整は杯Aと同様である。高台は外に力強く張り出すもの、垂直に下がるものがあり、また貼付け部が底部の内側または外側とさまざまである。形態は、内外面とも同様で、底部と体部の境界に明瞭な稜があるもの、やや不明瞭なもの、不明瞭なものがある。体部では、体部が斜上に伸びるもの、ほぼ垂直に伸びるもの、体部が湾曲しながら伸びるものがある。

口径の大きさは、9.8～15.1cmを計る。口径の大きさ及び固体数等から、10cm前後のもの(Ⅰ)、10.6cm前後のもの(Ⅱ)、11cm前後のもの(Ⅲ)、12cm前後のもの(Ⅳ)、13cm前後のもの(Ⅴ)、14.5cm前後のもの(Ⅵ)、16cm以上のもの(Ⅶ)に分類した。

杯蓋(535～561)

杯Bにともなう蓋。頂部がまるく笠形を呈すもの、平坦な頂部となだらかに縁部からなるものに分類できる。縁部が三角形、丸込めるもの、屈曲するもの、しないもの等がある。つまみは擬宝珠状のもの、扁平なものがあり、それぞれが組合せで形成される。径によって大小あるが、径12cm前後の蓋が最も多い。

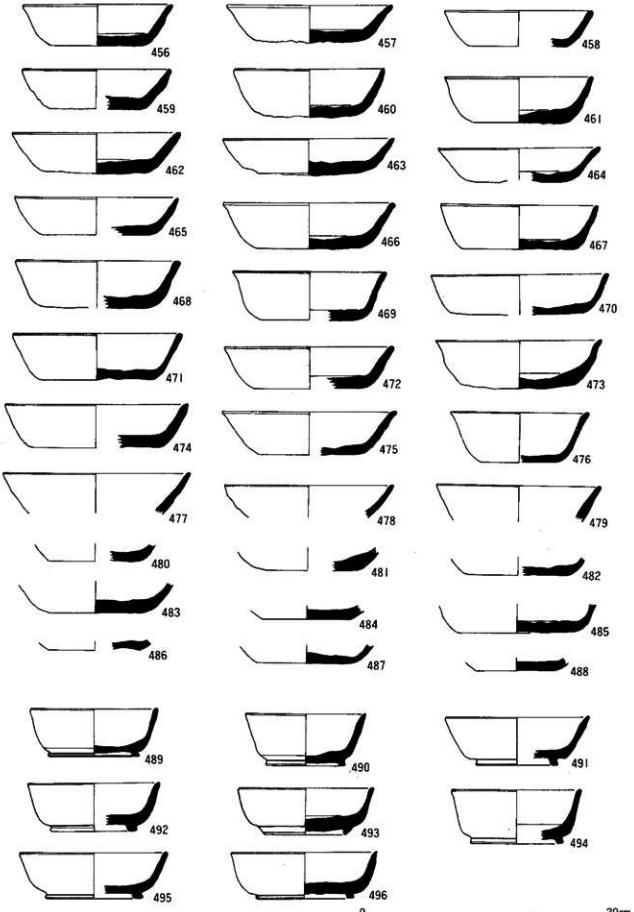
壺(562～579)

564は長頸壺の口頸部。563、565～567は撫で肩で卵形の体部となる壺の口縁部。562は平底で肩に稜をもたない徳利状の小型壺である。

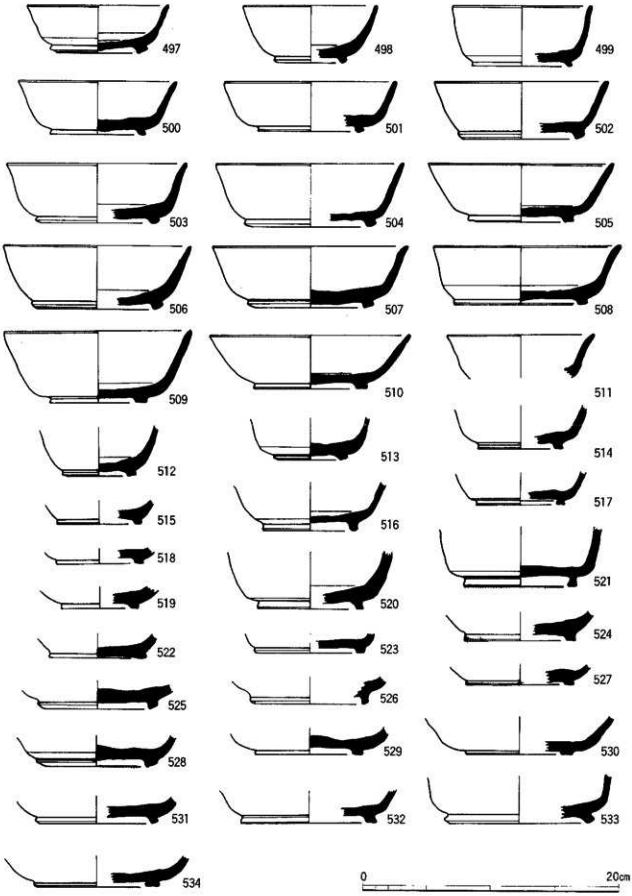
中世の遺物(第59・60図)

珠洲の鉢(592～599)である。

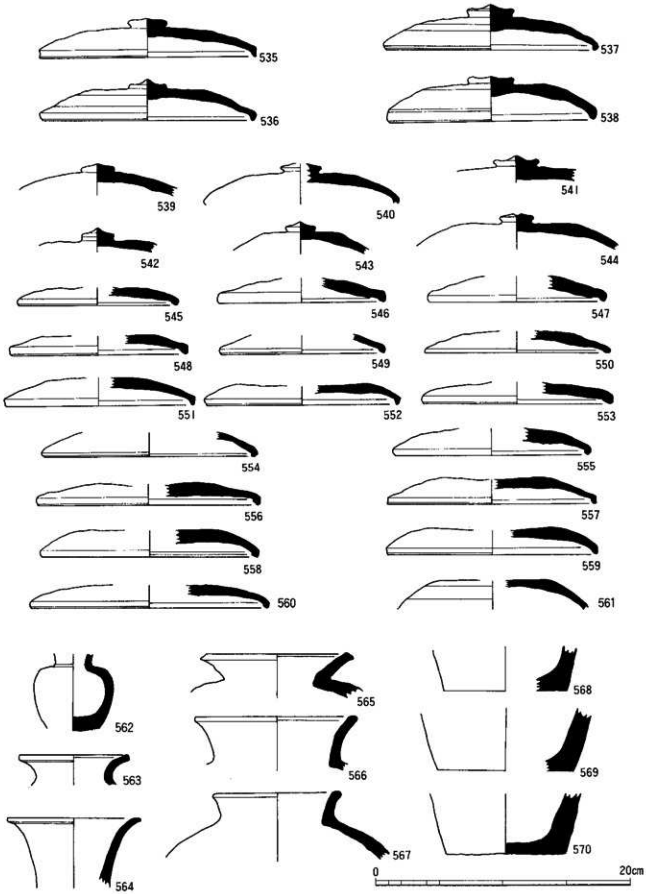
592・593はＳＥ13、594はＳＥ19、596・596はＳＥ50、597・598はＳＥ31、599はＳＥ14から出土した。その他は包含層である。593はⅡ期(13世紀前半)、597・599はⅢ期(13世紀前半)である。その他、大部分はⅢ期を中心で、Ⅳ期に及ぶ。 (安念)



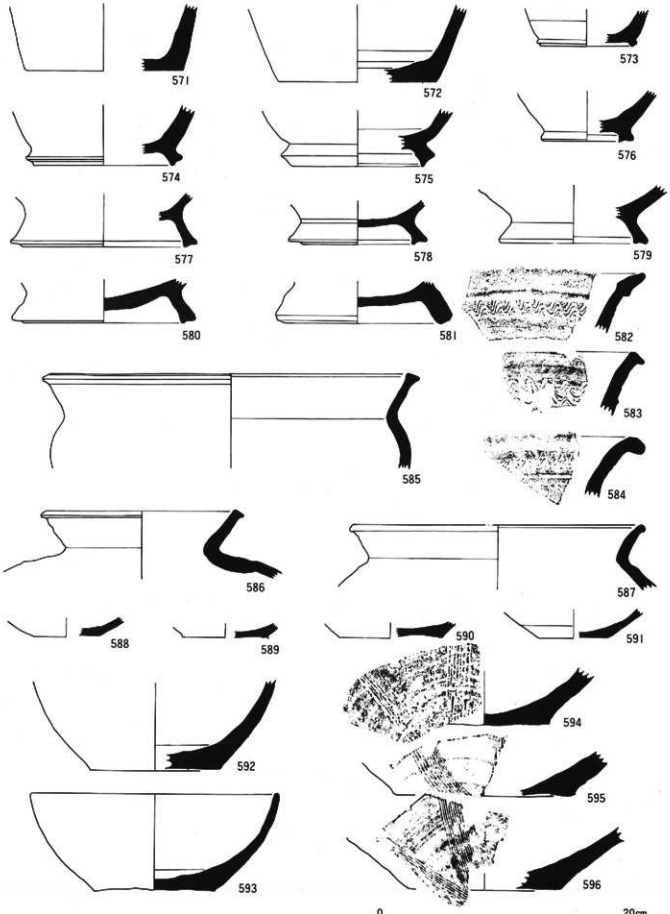
第56図　北高木遺跡C地区の遺物４（須恵器１）



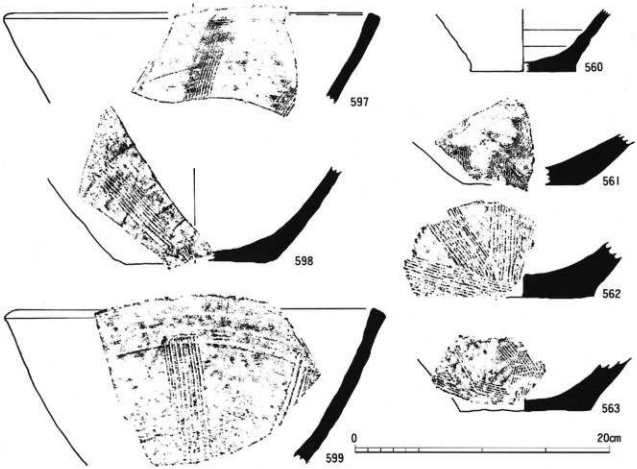
第57図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物５（須恵器２）



第58図　北高木遺跡C地区の遺物6（須恵器3）



第59図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物７（須恵器４・珠州１）



第60図　北高木遺跡Ｃ地区の遺物８（珠州２）

第3節　D地区

1　遺構

弥生・古墳時代の遺構（第62図）

D地区における弥生・古墳時代の遺構として捉えるものは、基本的には溝状遺構のみである。溝状遺構の検出状況は、基盤層として考えられる地山直上においてである。遺構埋土は、例外なくきめの細かい砂であり、地山の大半を占める粘質土と明確に区別される。当初自然流路として考えたものの一部に矢板を数枚組合せて閂状に組んだ遺構が観察できることから水などを導入するための人工的な加工を加えた遺構として把握できる。ただし、座標軸X－95より以北では遺存状態が悪く検出できず、更に古代以降の溝状遺構で切られる。また、遺構とは言い難いがいわゆる土器置状遺構（注）が3ヶ所で確認されている。

ＳＤ２（弥生）

北東方向に流れを確認した。遺構の断面形状は船底形である。切合い関係などから溝群の中では最も古い段階の溝として把握できるが、遺物などの包含は確認できない。

ＳＤ２－１（弥生）

北東方向に流れを確認した。遺構の断面形状は船底形である。壷形土器（201）を検出した。一部に矢板を交差するように取り付け閂とする遺構が付帯する。

ＳＤ２－２（弥生）

北東方向に流れを確認した。遺構の断面形状は船底形である。遺物は確認できない。

第１土器置状遺構

直径１ｍの土器集中が確認され、器台・壷形土器などを確認した。

第２土器置状遺構

ほぼ方形の検出状況で一辺70cmの土器集中が確認され、器台・壷形土器などを確認した。検出した状況から祭祀遺構として捉えられる。大きく見て上層と下層に分離できるが、上層の土器群は風化が著しく遺存状況はきわめて悪い。

第３土器置状遺構

甕形土器が、正の位置方向で埋納された状態で検出した。周囲に柱穴などの土坑は確認できず、単独の出土である。

奈良・平安時代の遺構（第63・64・70図）

掘立柱建物

ＳＢ01

X85～87；Y62～64にある、２間（４ｍ）×２間（４ｍ）の南北棟の総柱建物である。行寸法は桁行・梁行とも13尺で、柱間は桁行・梁行ともに７尺の等間である。柱穴の規模は径30～40cm、深さ40cm前後を測る。桁行の方向はN－2°－E、平面積は16m²である。ＳＤ２－１を切って構築されている。

ＳＢ02

X84～87；Y67～70にある、３間（3.16m）×２間（2.58m）の東西棟の建物である。行寸法は桁行11尺・梁行９尺で、柱間は桁行は４尺の等間・梁行は４尺である。また梁行の方向はN－10°－W、平面積は8.2m²である。

ＳＢ04

X81～83；Y61～63にある、３間（2.8m）×２間（2.5m）の南北棟の建物である。行寸法は桁行９尺・梁行

（注）C区での出土状況と異なり、出土した地点で祭祀的な行為を繰り返していたと考えられるため単なる土器溜り（遺物集中区）とせず、「土器置状遺構」とした。

8尺で、柱間は桁行は3尺・梁行4尺の間隔である。しかし、東及び南側では隅柱しか検出していない。1つを除く全ての柱穴では切り合う柱穴があり、建て替えが行われて可能性がある。また桁行の方向はN－4°－E、平面積は7㎡である。

ＳＢ05

X83～85；Y50～55にある、4間(4.2m)×2間(2.4m)の東西棟の建物である。行寸法は桁行14尺・梁行8尺で、柱間は桁行・梁行とも3尺の等間である。また桁行の方向はN－3°－W、平面積は10.1㎡である。

中世の遺構（第65～70図）

掘立柱建物

ＳＢ06

X108～110；Y101～104にある、3間(5.8m)×3間(5.6m)の南北棟の総柱建物である。行寸法は桁行19尺・梁行18尺で、柱間は、桁行は北側から6尺・8尺・5尺、梁行ともに東側から6尺・6尺・7尺である。柱穴の規模は径20～30cm、深さ30cm前後を測る。桁行の方向はN－1°－E、平面積は32.5㎡である。

井戸

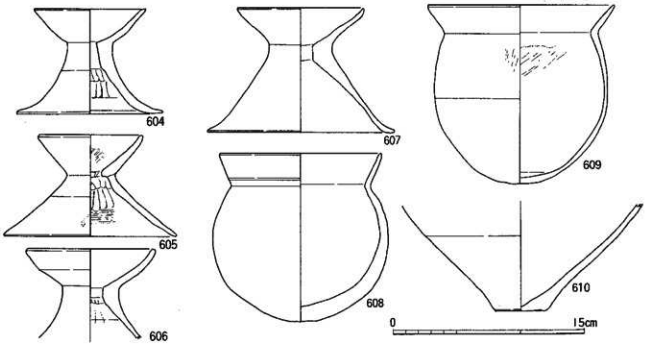
概要を報告する前に、井戸周辺の基本層位について説明する。

井戸を検出した面いわゆる遺構検出面は、暗灰褐色粘質土層（酸化鉄分が多く、炭化物が少量を含まれる）であるが、これを仮にⅠ層とする。この層は20～40cmの厚さがある。その下層に、Ⅱ層は灰褐色粘質土で、厚さ約40～60cm。Ⅲ層は緑灰褐色粘土で20～30cmの厚みであるが、ＳＥ周辺では10cm前後である。Ⅳ層は緑灰色砂質土で、厚さは20～30cm。これが湧水層となる。Ⅴ層は緑灰色粘質土である。

なお、井戸の略語は「ＳＥ」であるが、検出時に土坑として扱った遺構で、井戸となったものに対しても「ＳＫ」をして扱った。

ＳＫ2

X104；Y106にある、掘形の平面形は長軸2.2m・短軸1.3mの楕円形を呈し、断面形は、西側を除くは3方はほぼ垂直に掘込むのに対し、西側は垂直に約1m掘り下げた後、緩やかに傾斜しながら井戸の中心へ向



第61図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物1（弥生土器）

かう掘方である。深さは2.2mを測る。井戸枠には7段の曲物を使用した、曲物積み上げ井戸である。曲物は、幅約50～80cmの板を一重に巻いた径約60～70cmの筒で、全ての内面にはケビキがある。下から1・2段目の曲物のタガは上・下2段で巻かれているが、その他の曲物には、一段分または一部のタガだけ残存しているが、痕跡から全て2段巻であったと考えられる。

SE07

X103；Y102にある、掘形は径が約90cmの円形を呈し、深さ約90cmを測る。埋土は灰褐色粘質土、灰黒色粘質土である。

SK09

X104；Y102にある、掘形は長軸1.5m・短軸1.2mの楕円形を呈し、深さ約1mを測る。埋土は灰褐色粘質土、灰黒色粘質土であるが、焼土・炭化物が多量に出土した。

SK10

X100～101；Y98にある、掘形は径が約2mの円形を呈し、深さ約1.2mを測る。埋土は灰褐色粘質土、灰黒色粘質土である。焼土・炭化物が多量に出土したが、その中には鋳型の破片も多量に含まれていた。

SK23

X102；Y98にある。掘形は、平面形では長辺1.5m・短辺1.1mの隅丸方形状を呈するが、底部周辺では径80cmの円形となる掘方である。断面形はすり鉢状である。深さは1.2mを測る。井戸枠として使用された曲物は3段である。曲物は、幅約50cmの板を一重に巻いた径約50cmの筒で、内面にはケビキがある。タガは上・下2段で巻かれていたと考えられるが、下部のみが遺存した。曲物の底が井戸の底部となり、Ⅳ層を貫通しⅤ層上面に至る。

SE83

X99；Y104にある。掘形はほぼ円形を呈し上端で径約1mを測るが、深さは約30cmを掘り下げたあたりで、東部から南部側に10cm前後の面があり段を呈する。掘形は径70cm程の円形となる。この面で井戸枠として使用された曲物を検出した。出土した曲物は1段である。曲物は、幅約50cmの板を一重に巻いた径約50cmの筒で、内面にはケビキがある。タガは上・下2段で巻かれていたと考えられるが、下部のみが遺存した。曲物の底が井戸の底部となり、Ⅳ層上面である。

土坑

SK28

X110～112；Y93～95にある、掘形は長辺5m・短辺3.6mの隅丸方形状を呈する。深さは約60cmで平坦な底部を呈する。埋土は灰褐色系の粘質土であり、4層に分層できる。また、1層には多量の炭化物と酸化鉄分、2層には多量の酸化鉄分、3層には炭化物がそれぞれ含まれる。南東隅では、SK30を切るが、南側の一部はSK29に切られる。

SK29

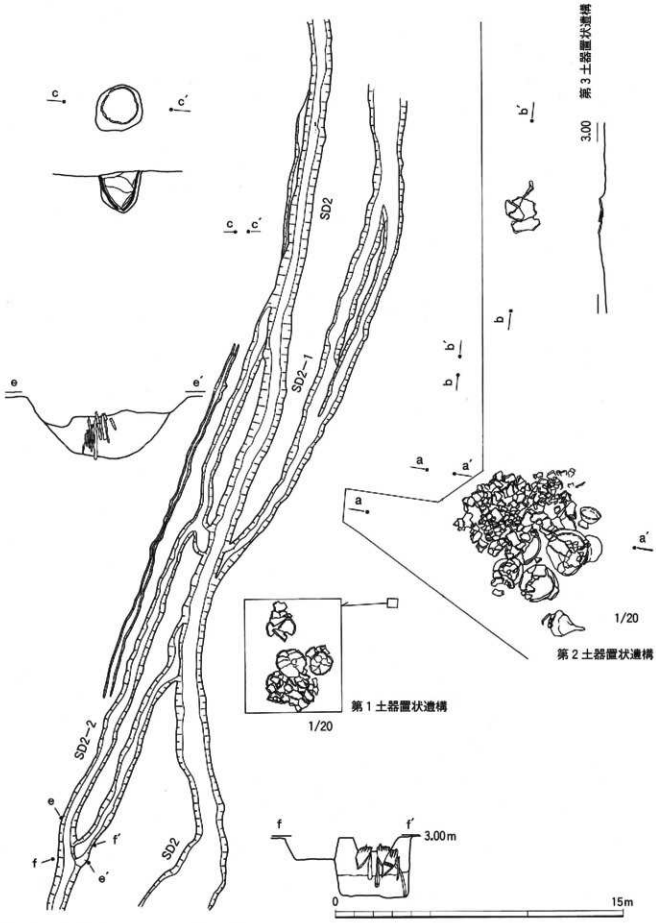
X111～112；Y92～93にある、掘形は長辺3.2m・短辺2.4mの方形状を呈する。深さは約15cm前後と浅く、平坦な底部である。埋土は、炭化物を含む灰褐色粘質土である。またSK28・30を切るが、西側でSK111に切られる。

SK30

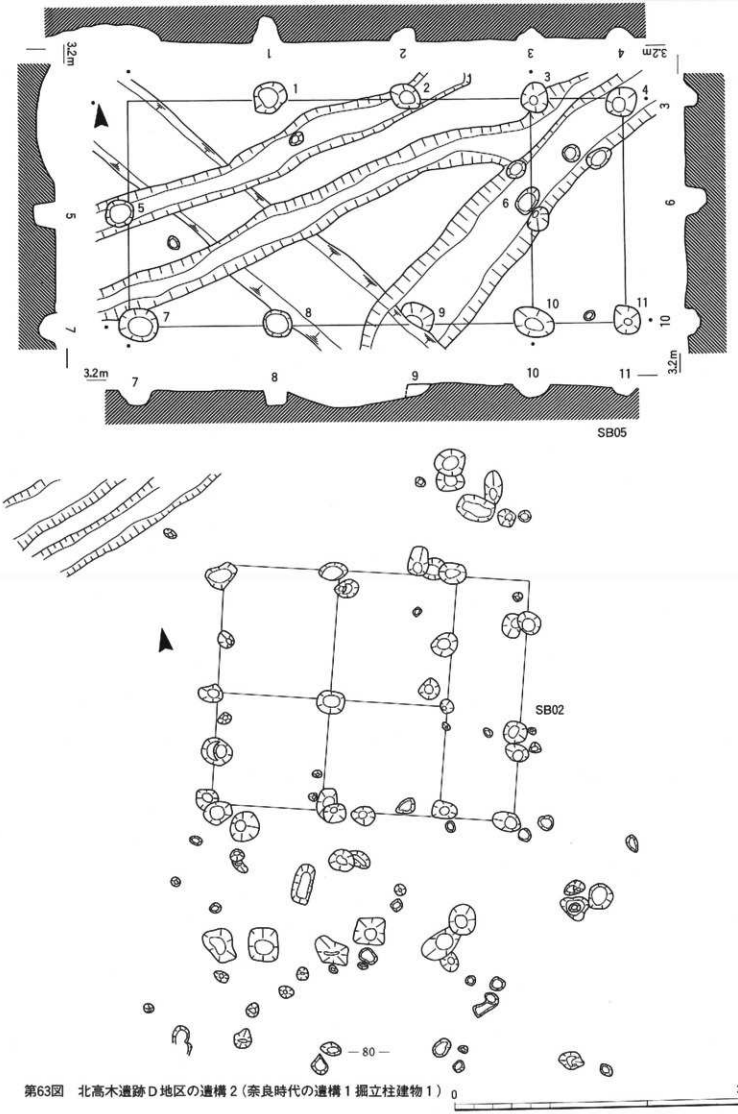
X112～113；Y92～93にある、掘形は長辺3.4m・短辺2.4mの方形状を呈し、深さは約50cmで、平坦な底部を呈する。埋土は灰褐色系の粘質土であり、6層に分層できる。また、量は異なるが、各層に炭化物が含まれる。西側半分は、SK28・29に切られる。

SK111

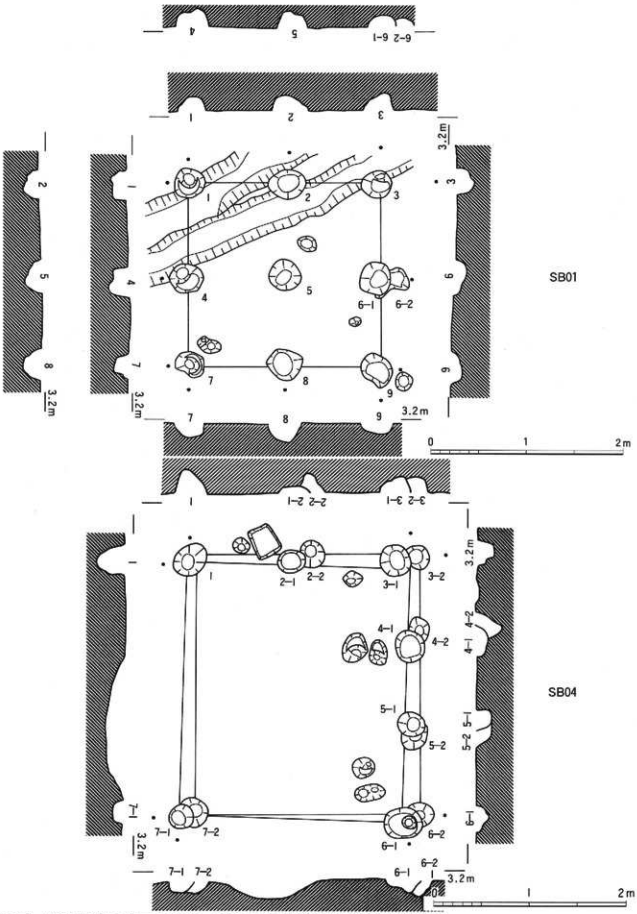
X110～111；Y92～93にある、掘形は長軸2.4m・短軸2mの楕円形を呈する。深さは約20cm前後と浅い。



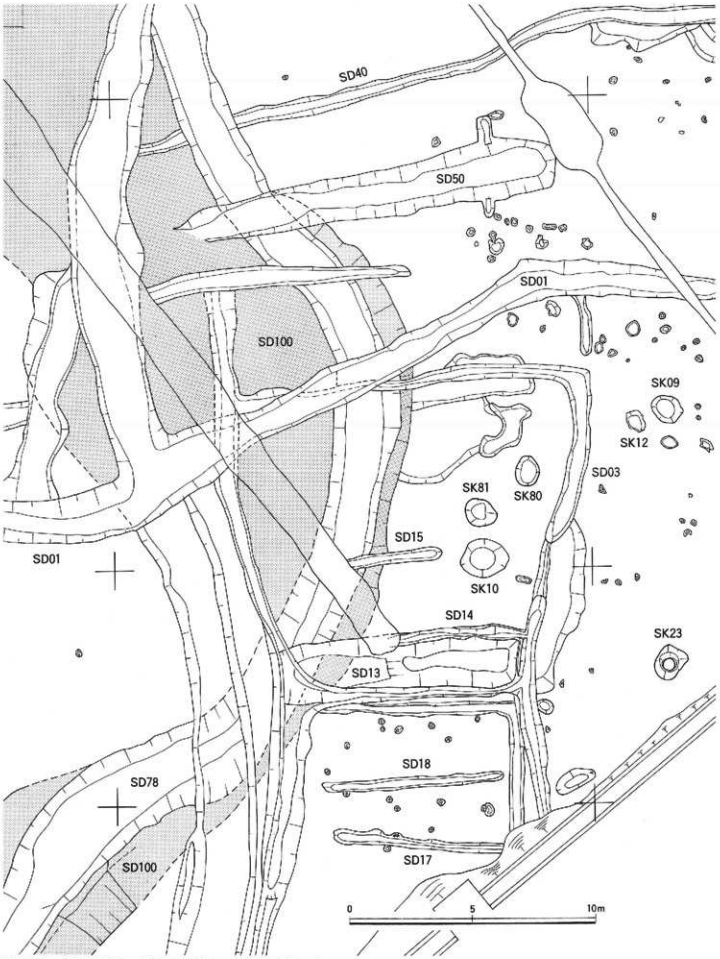
第62図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構１（弥生時代の遺構）



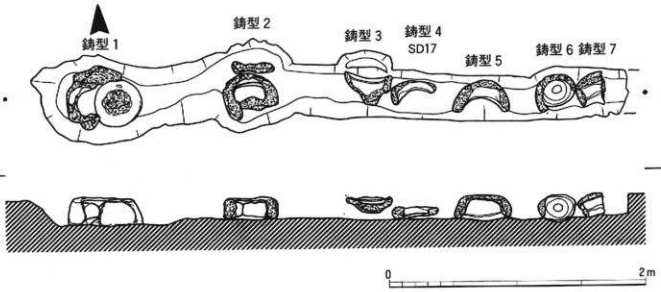
第63図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構２（奈良時代の遺構１掘立柱建物１）



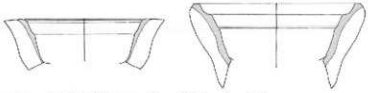
第64図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構３（奈良時代の遺構２掘立柱建物２）



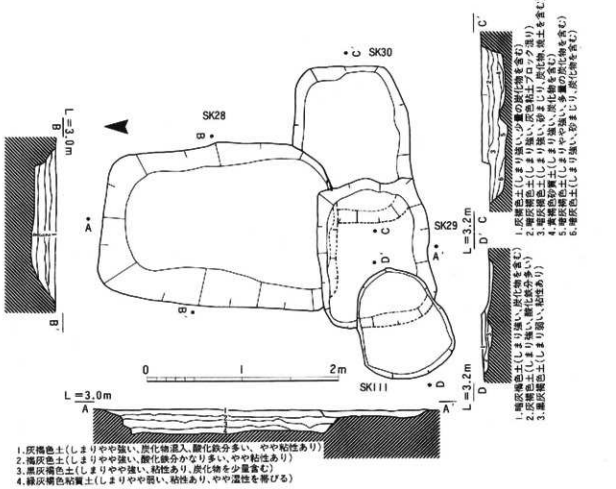
第65図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構４（中世の遺構１）



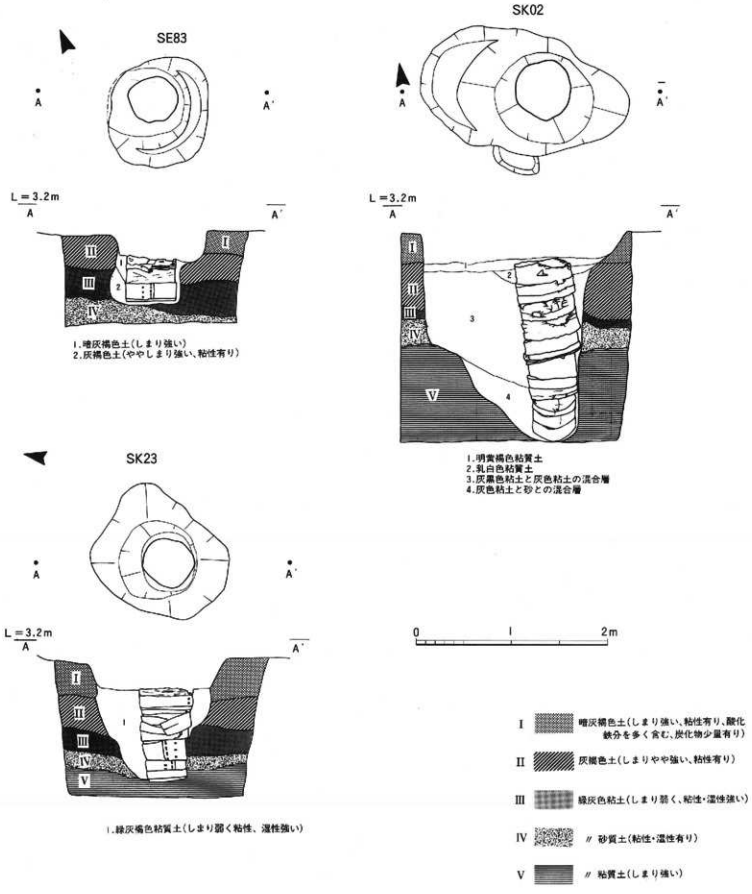
第66図　北高木遺跡D地区の遺構5（中世の遺構1鋳造遺構）



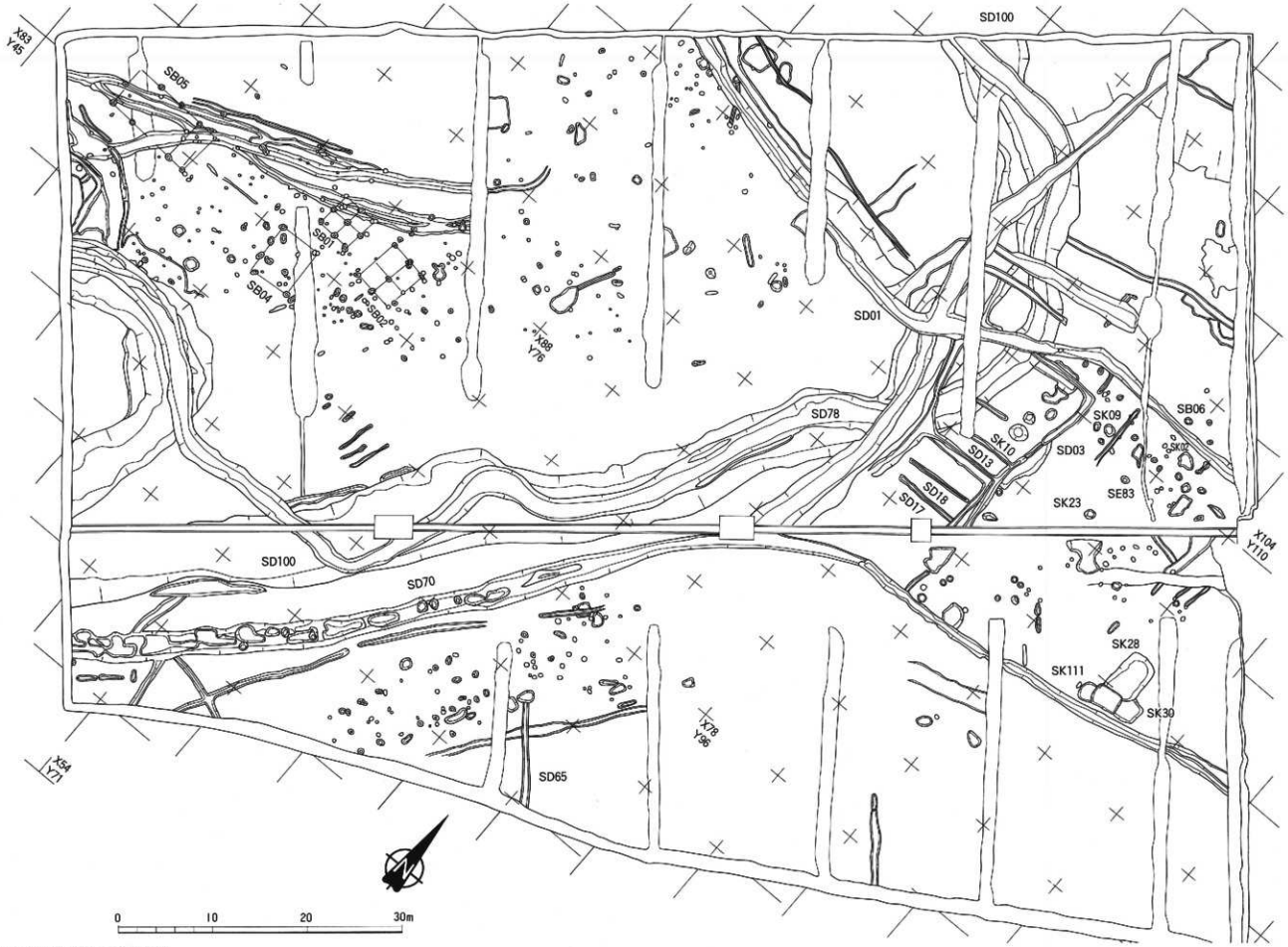
第67図　鋳造鋳型復元図（右；茶釜　左；鍋）



第68図　北高木遺跡D地区の遺構6（中世の遺構2土坑）



第69図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構７（中世の遺構４　井戸）



第70図　北高木遺跡Ｄ地区の遺構配置

埋土は灰褐色系の粘質土であり、3層に分層できる。また、1・2層には炭化物と酸化鉄分がそれぞれ含まれる。SK29を切る。

鋳造関連遺構

SD100が北側へ大きく蛇行する周辺のX94～104、Y96～100で確認したSD3、13～18、22等は、鋳造に関連する遺構と考えられる。

SD3、13～18、22等は、遺構検出順に個々の遺構番号を与え掘り下げた。、しかし、遺構検出面、埋土及びその形態からみて同一の遺構と考えられる。

その状況は、SD3、16と22からなる南北溝と、それに垂直する東西溝（SD13～18）からなる。SD13、14は南北溝に接するが、SD15・18は接しない。

SD3・22は幅70～100cm、深さ50cm前後、埋土はしまりの弱く炭化物や酸化鉄を多く含む層である。SD13～15・18は幅50cm前後、深さ30～50cmで、埋土には多くの炭化物や酸化鉄に交じり、細かく砕かれた鋳造鋳型の少破片が数多く含まれていた。

SD17の埋土も上記と同様であるが、加えて細かく破砕されずに放置された大型の鋳型も出土した。大型の鋳型は7破片ある。いずれも双型技法により形成された鍋（5破片）と茶釜（2破片）の鋳型である。破片1・2は円形こそ崩れているものの残存率は高く、内面に有段を呈し直径30～40cm、深さ20cm以上の鍋の鋳型であったことが窺えられる。破片3・4は直径30～40cmの鍋の鋳型を割ったもの。両方とも内面の形状が類以していることや隣接してあったことから同一の鋳型と考えられる。破片5も直径30～40cmの鍋の鋳型で半切部分。破片6・7は茶釜の鋳型。破片6は中央部に直径6cm程の穴のある直径約30cmのドーナツ状を呈する鋳型である。

鋳型は、鋳造品を取り出す際に細かく砕かれる。また、非常に脆いため原型を止めにくい。そのため少破片で出土することが多い。ところが、ここでは大きな破片で残されていること、遺構壁面に焼土が見られるとから、SD17内の大型鋳型以外の部分で鋳造が行われていた可能性が高い。しかし、SD16・17・22の遺構の一部は現代用水路により破壊されているため、その全容はわからない。したがって、実際どのような遺構（覆う屋等）・方法で鋳造が実施されていたは、現状からは明かにすることはできない。

SK28～30からも破砕された小破片の鋳型が多量に出土した。遺構壁面に焼けた痕跡が認められないことから、鋳型の捨て場と考えられる。（安念）

2　遺物

弥生・古墳時代の遺物（第73図）

前述した土器埴状遺構に包含されていた土器のみが実測可能であった土器のみを提示した。604～607までは器台、608・609は小形丸底壺、610は壺である。いずれも弥生時代末から古墳時代初頭の土器群に含まれる。各々観察を記載する。

604の器台は、ほぼ外面全面に篦磨きを施し、赤彩した土器である。中央の穿孔は、整形後に棒状工具によって上部から脚部に向って施す。脚部内面は篦削りによって整形する。口縁部径8.8cm、器高は8.9cmを測る。第2土器置状遺構下部出土。

605は、第1土器置状遺構内で検出した器台である。他の土器と比べ、遺存状況は良く赤彩なども明確である。内外面ともに篦磨きによる調整を仕上げに施す。括れ部に脚部の接合痕が観察される。中央の穿孔は篦状工具による調整である。口縁部径8.2cm、器高は8.1cmを測る。

606は、脚部を欠損する器台である。当初、全面に赤彩されていたと考えられるが、部分的に遺存するのみである。上部の坏胴部には稜線が観察され、他の器台とやや異なる。口縁部径8cm、残存する器高は7.1cmを測る。第2土器置状遺構上部出土。

607は、第2土器置状遺構から出土した器台である。風化が著しく表面の調整などの観察は、ほとんど出

来ない。口縁部径は10cmと大きく器高も10cmを測る。

608は、丸底の底部を持った壺である。第２土器溜状遺構の下部からほぼ完形で出土した。赤彩を施した土器で、頸部括れ部に強い指撫でを加え、二重口縁の様な効果を持つ。口縁部の内外面は、篦磨きにより調整を施す。ただし底部の器壁は、約10mmと厚いのが特徴である。口縁部径は12.8cmを測り、器高は13.5cmである。

609は、丸底の底部をもった壺である。口縁部径14.6cm、器高は14.3cmを測る。

201は、ＳＤ２（弥）から出土した壺形土器の胴部下半である。表面は薄く剥離しているため、調整などは観察できない。底部径は、約４cmを測る。（高橋）

奈良・平安時代の遺物（第71～73図）

須恵器（第71図）

杯Ａ（611～615）

杯で高台をもたないもの。口径の大きさから、11.5cm前後のもの（Ⅰ）、12.6cm前後のもの（Ⅱ）、13cm前後のもの（Ⅲ）の３タイプに分類できる。成形はロクロからヘラで切り離した後そのヘラ切り跡を手でなで消すため、底部はやや平坦なものや平らなものが大半である。体部は斜上に伸びるもの（ａ：611など）、ほぼ垂直に伸びるもの（ｂ：615など）がある。体部から口縁部までの内外面はロクロナデ調整する。なかでもⅢａタイプの土器が最も多く出土している。径高指数ではⅠは28～33、Ⅱは23～24、Ⅲは25～28である。612は口径10.8cm・器高４cmで、径高指数は37と大きい値となり、深い杯である。

杯Ｂ（616～632）

無台杯に高台をつけたもの。内外面の調整は無高台と同様である。高台は、外に力強く張り出すもの、垂直に下がるものがある。口径の大きさから、10cm前後のもの（Ⅰ）、11.3cm前後のもの（Ⅱ）、14.5cm前後のもの（Ⅲ）、15cm以上のもの（Ⅳ）の４タイプに分類できる。

内部で底部と体部が明瞭で、体部が斜上に伸びるもの（ａ：616など）、底部と体部の境界が不明瞭で、体部が湾曲しながら伸びるもの（ｂ：617など）がある。中でもⅢａタイプの土器が最も多く出土している。径高指数は33～35のものが多い。

626は口径15.5cm・器高4.3cmで、径高指数は28と小さい値の浅い杯である。

杯蓋（633～652）

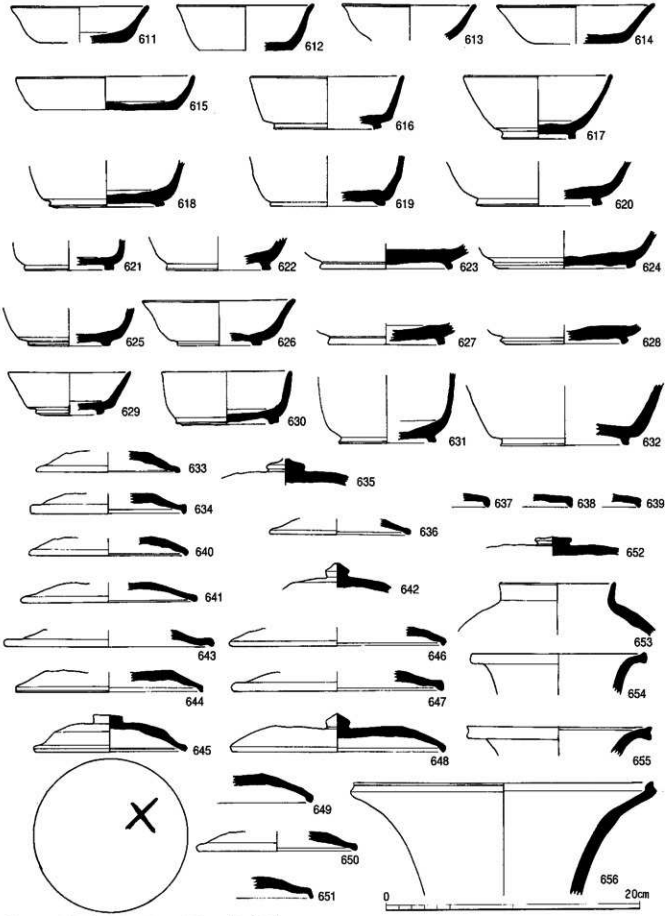
頂部及び体部の形態から、ほぼ平坦な頂部のみのもの（ａ）、平坦な頂部と斜下に伸びた体部とからなるもの（ｂ：641・644など）、頂部が丸く笠形を呈するもの（ｃ：640など）の３分類に、縁端部では断面三角形で外に張り出すもの（640など）、丸込めるもの（643など）、内向するもの（644など）の３分類に、つまみでは、擬宝珠つまみのもの（648など）、平らなつまみものも（645など）の２分類できる。

径の大きさから、11.5cm前後のもの（Ⅰ）、14cm前後のもの（Ⅱ）、15cm以上のもの（Ⅲ）３タイプに分類できる。

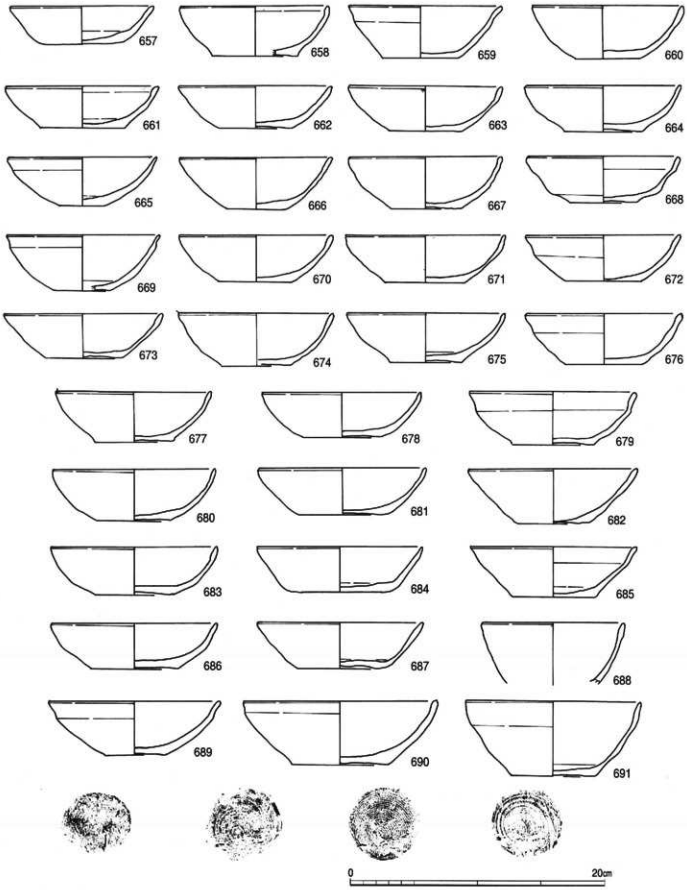
なかでも、Ⅱａタイプの土器が最も多く出土している。

壺（653～656）

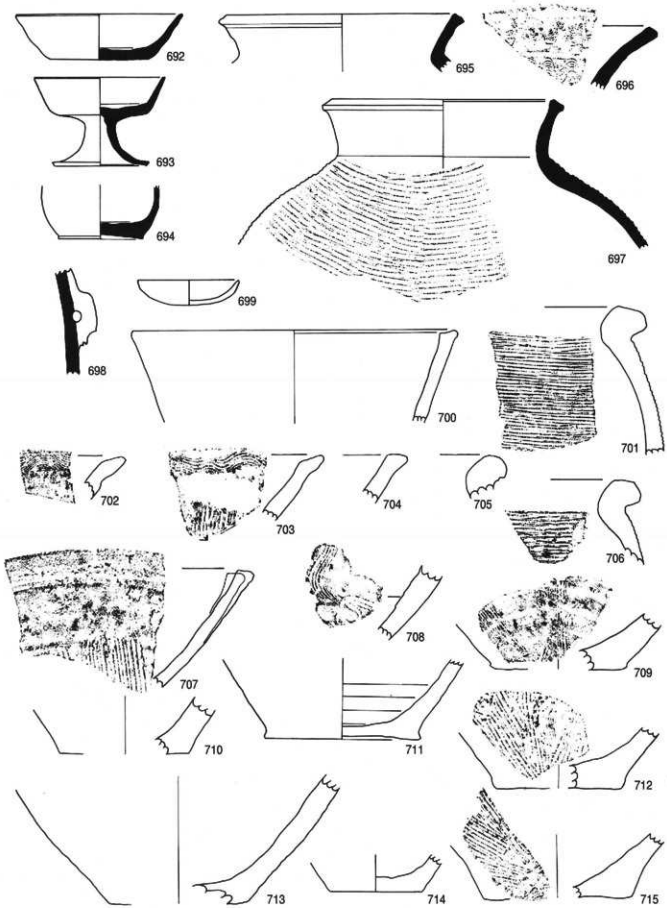
短頸壺には球の上下をややつぶしたような球形に、1.5cm程の短く直立した口縁部をつけたもの（653）（安念）



第71図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物１（須恵器）



第72図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物２（土師器）



第73図　北高木遺跡Ｄ地区の遺物３

0　20cm

第4節　E地区

調査区は、北高木遺跡中最も東寄りで新湊市との境である神楽川に接する調査区である。調査対象面積は約7,300㎡を測る。調査前の旧状は、水田で他の調査区と同様すでにほ場整備が終了している。このため、確認できた層序では、従来存在した遺物包含層（第2層）土は、開墾等によって削平され部分的に確認できたのみである。

1　遺構と遺物（第74・75図）

本地区における遺構は、切合い関係を持つ古代の溝状遺構が2条観察でき、他の溝状遺構は近世以降の用水と考えられる。また、長方形を基本とする不定形の大型土坑が切合いを持ちながらも数基確認した。

溝状遺構

ＳＤ01

現在の神楽川にそって北流する河道である。方向的に隣接する荒畑遺跡で検出した自然流路に継続する流路と考えられる。埋土中の出土遺物には瓦・墨書土器・斎串などがあり、他の調査区で検出した溝状遺構と同じく祭祀にかかる遺構である可能性がある。確認面からの深度は最深部で50㎝、最大幅70㎝を測り、断面形状は浅いＵ字形である。

ＳＤ02～ＳＤ15

区画整理前の水出割りと方向性が似ることから、旧用水路と考えられる。埋土は、単層で断面形状はＵ字形を呈する。確認面からの深さは、約40㎝である。

ＳＤ16

ＳＤ01と同時期の溝と考えられるが、切り合い関係を有しており若干の時期差を持つと考えられる。遺物には須恵器などが含まれる。やや東側に流れを有する河道である。確認面からの深度は最深部で30㎝、最大幅50㎝を測り、断面形状は浅いＵ字形である。

土坑群

本地区で確認した土坑は、総数で15基を数える。これらの土坑は、長軸で５ｍを測る遺構が多い。当初、掘建て柱に伴う土坑群との認識であったが、周囲に建物を構成する柱穴などが無いこと、また、土坑の形態などが一定でないことなどから土採り用の土坑群として報告する。

須恵器

杯（716～722）716～719は高台をもたないもの、719～722は高台付きのものである。成形及び調整はいずれも同じで、底部外面はヘラ切り痕跡を消すためナデるが、それ以外の内外面はロクロナデを施す。716の外面には漆が付着している。

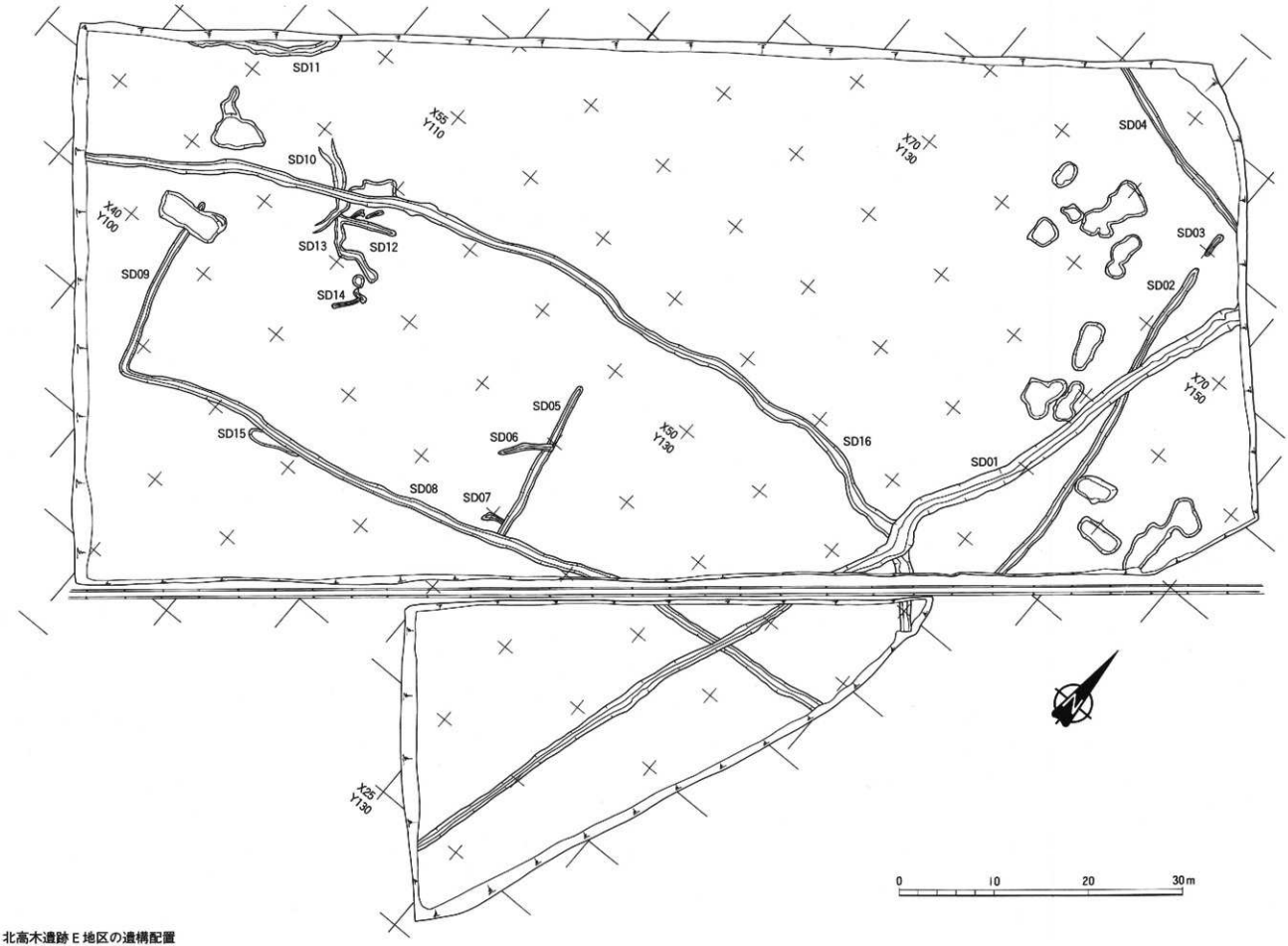
杯蓋（723～725）頂部はまるく笠形を呈する。縁部は丸込める。724は完形であり頂部には擬宝珠状のつまみが付く。725の頂部外面には「田」と記された墨書がある。723の頂部内面には漆が付着している。

蓋（726・727）726は小型の広口壺。727は広口壺の体部。

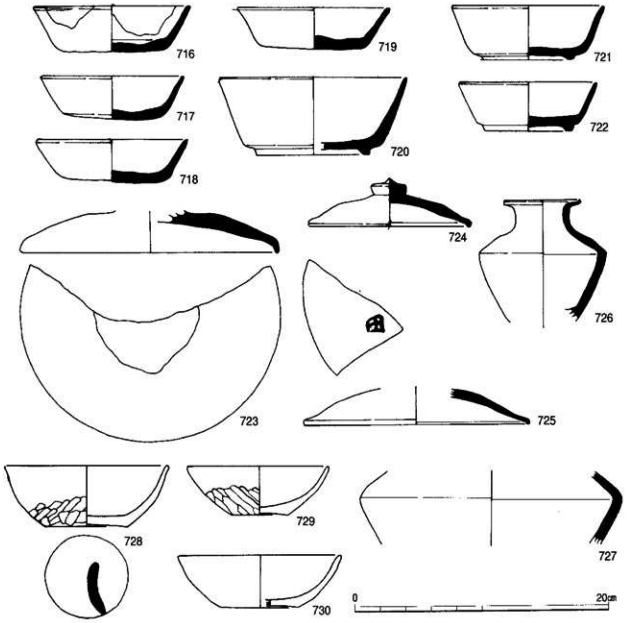
土師器

椀（728～730）成形及び調整は内外面ともナデにより調整するが、外面下部にはヘラみがき痕がみられる。外面底部にはロクロからの切り離しの際できた糸切り痕がある。728の外面底部には墨痕がある。

（高橋）



第74図　北高木遺跡Ｅ地区の遺構配置



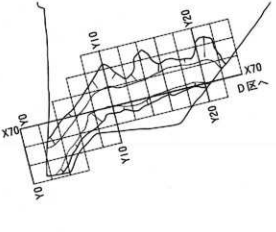
第75図　北高木遺跡E地区の遺物（須恵器・土師器）

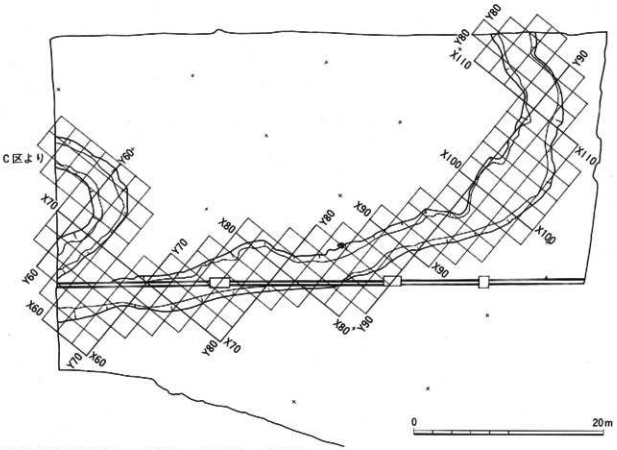
第４章　ＳＤ100

第１節　概要と土層堆積状況

ＳＤ78とほぼ同様な軌跡を描く河道である。ただし、Ｘ70・Ｙ60付近で南に蛇行して大きく南側に流れ一旦調査区外に流れる。再度、調査区のほぼ中央を北流し、Ｘ100・Ｙ95以北で西側に大きく曲がり調査区外へ移行する。出土遺物の層位的関係から８世紀台から10世紀まで流れていた河道と考えらる。これは、第16層とした青灰色粘土層に遺物が含まれていないこと、上層（12層～15層）とした層位には基本的に９世紀末から10世紀初頭の土師器の椀が主体を占め、その中心が座標軸座標軸Ｘ75・Ｙ60付近となること、更に下層遺物の分布の中心を座標軸Ｘ80・Ｙ75付近として主に8世紀末から９世紀初頭の須恵器と木製祭祀遺物によって構成されることなどの状況による。加えて、下層の遺物分布範囲の中心である座標軸Ｘ80・Ｙ75付近では、写真図版44にて提示したように、西岸の一部に杭列を打設し護岸工事を施す状況を検出した。

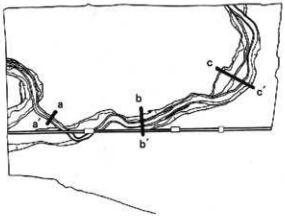
なお、土層の堆積状況・遺物の遺存状況などから、流れのない澱みのような状況の河道であったと考えられる。基本となる層位・層順については、キャプションで示したとおりである。このうち１層から８層まではＳＤ78の覆土である。

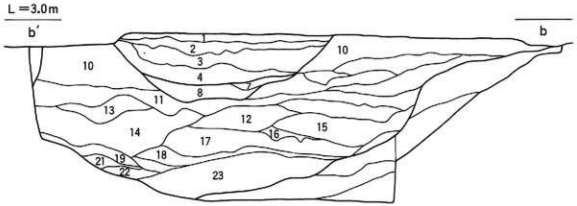


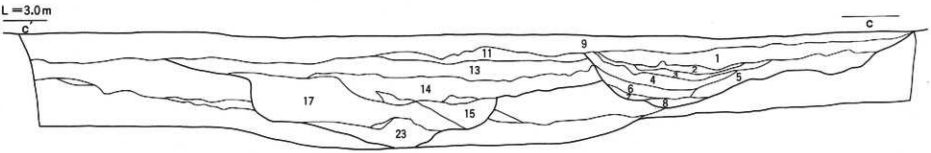


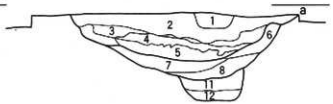
第76図　北高木遺跡Ｃ・Ｄ地区ＳＤ100グリッド配置

第77図　北高木遺跡ＳＤ100層序









土層説明

ＳＤ78部分

1．黒褐色粘質土
2．腐植土層
3．腐植土と鉄分層の混合層
4．乳白色シルト層
5．褐色粘土層
6．灰褐色粘質土層
7．黒灰褐色粘土層（炭化物を多く含む）
8．黒灰褐色混砂土層（部分的な遺物包含層）

ＳＤ100部分

9．暗褐色粘土層
10．青灰色混砂土層
11．褐色混土砂層
12．暗褐色粘土層（遺物包含層）
13．青灰色粘土層（遺物包含層）
14．青灰色混砂土層（遺物包含層）
15．暗青灰褐色混砂土層（炭化物多、遺物包含層）
16．青灰色粘土層（間層、無遺物層）
17．暗青灰色砂層（遺物包含層）
18．暗青灰褐色混砂土層（遺物包含層）
19．青灰色土層（遺物包含層）
20．暗褐色混土砂層（遺物包含層）
21．青灰色砂層（遺物包含層）
22．暗褐色混土砂層（遺物包含層）
23．青灰色砂層（遺物包含層）

第２節　出土遺物

１木簡（第79～81図）

この遺構から出土した木簡は、第２号木簡から第10号木簡までの計９点出土している。内訳としては、出挙木簡１点、習書木簡５点、帳簿用木簡１点、付札木簡１点、不明木簡１点である。

第２号木簡（731）表　・×□ 諸 冠 □ 冠 冠 □ 請 冠 □ □ 万 呂 楊 麻 □ 呂 楊 □ 万 呂 □ 万 呂
　　歟ヵ　　安ヵ　　呂ヵ　　楊ヵ　　楊ヵ

裏　・×□ 右 □ □ □ □ □ □

(520) ×24×3　019

ＳＤ100の両岸を確認するために設定した試掘トレンチ内から出土した習書木簡である。この木簡には、「安万呂」と「麻万呂」もしくは「楊万呂」という名の二名の人名が確認できる。「冠」の文字が記された木簡の出土は全国的にも稀であり、藤原京跡（奈良県）・白山遺跡（静岡県）の２遺跡で確認されているのみ（注１）である。両遺跡では「加冠」と言う表現で用いられているのに対し本遺跡の出土例は「請冠」であり極めて稀な表現といえる。また、時期的には平安時代後半と考えられる。裏面には八文字観察されるが、三文字目の「右」のみ判読可能である。

長幅比が非常に大きい木簡で本遺跡ではもっとも長いものである。また表面の記載が左側に大きくよることから欠損している可能性もある。木簡の形状は短冊状である。

第３号木簡（732）表　・「　道 長 大 神 進 上 申 三 月 十 日

兄 江 富 継 天 女 建 部 乙 成 女 生 子 兄 江 千 仁 女 大 神 解 申 神 ×

裏　・「　品 治 部 他 当 女 道 長 大 神 進 上 申 事 如 件 三 月 十 日

(410) ×33×3　019

ＳＤ78の北端で出土した習書木簡である。両面合わせて54文字の記載が認められ、この文中には固有名詞と考えられる「道長大神」と四人の名前「兄江富継天女」「建部乙成女」「兄江千仁女」「品治部他当女」と「三月十日」という日付が観取される。表面の文意は捉え方によって幾通りかに解釈される。その一つとして「道の長の大神に進上し申す三月十日　兄江の富継天女と建部の乙成女が生んだ子である兄江の千仁女が大神に対して解し申すには神…」、裏面「品治部の他当女が道の長の神に対して進上申し上げたのは以上のことである。　三月十日」となる。本文中の「道の長の神」を隣接する新湊市所在の「道神社」と関係のある神として仮定でき、「三月十日」は、「道神社」では琴平祭の例祭日にあたる（注２）。また、「兄江」姓は現時点で知られていない姓であり今後に課題を残す。木簡の状況は、下部を欠損しており、下端の形状は不明である。上部には両側にノッチが遺存する。

第4号木簡（733）表　・「［　　］□ 万 呂 二 合 六月廿七八日米三升□万呂一升二合
□ 万 □ □ 合　　□万呂一升二合
□ 万 呂 六 合　　浦万呂一升二合」
裏　・「　　［　　］」

（424）×54×5　019

ほとんど肉眼での判読は不可能な木簡ではあるが、「浦万呂」の他5名分の人名と「六月廿七八日」「三升」などの日付・数量を示す記述が見られることから帳簿用木簡と考えられる。上部の記述は不明だが、下部の記述は、数字的には合わないものの米の分配を示す記述と思われる。ほぼ完形の木簡で表面上部右側を欠くのみである。短冊形の形態を有する。X66－Y68グリッドから出土した。

第5号木簡（734）表　・「× 春 三 千 百 六 十 束 交 易 又 夏 一 千 七 百 卅 二 ……＝
＝十 三 束 本 利 二 □ 四 百　六 □ ×
千カ　束カ
裏　・「□ 白 米 十 二 □ 廿 □ □ □ □ □ 百 六 十 □……＝
月カ　六カ日カ　束カ
□ □ □ □ □
＝廿 二 束 □ □ □ □ □ □ □ ×
在カ糞カ　戸カ

（182＋88）×20×3　019

出挙に関する記述の見られる木簡である。SD－100の埋土中より狭い範囲で三点以上に分割された状態で出土した。それぞれの長さが似た状況であることから人為的に切断された可能性を有する。文章は、両面に記載されているものの裏面は文字を記入後、削りが施され判読しにくい。表面の文意は「…春三…六十束、夏一七三二（束、合わせて四八九）二束を本稲とし、その利稲が二四四六束になる」ということで春夏の出挙の実施とその利が五割であることが窺える。なお「春」は、「日」部が「白」とも観察出来るため、「春」としても判読可能であるが、文意から「春」とした。裏面は、「…白米を十二月二六日…百六十束…廿二束…糞万呂の戸に在り」となる。一部削書きされており、日付・人名等の記載が観察できる。また、「束」は、略字を用いる。切断された3点の出土グリッドは734がX81－Y81、残りはX82－81グリッドから出土した。

第6号木簡（735）表　・「［　　］□ □ □
裏　・「□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □」
有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ 有カ

（232）×17×5　019

習書木簡である。表面には文字数は不明であるが、下方に三文字以上の字が記載される。部首の邑偏に似た字である。裏面は、「有」のみが記載される。16文字分記されているが、判読可能な文字は一番上の文字のみである。他は、筆運びなどから「有」と判読した。X81・Y80グリッド出土。

第７号木簡（736）表　・×□二百六十四百」

□□［　　］
抜ヵ

裏　・×百　□□□三
直ヵ

［　　］」

（142）×61×4　019

両面に各々数字が書かれている木簡である。上部を大きく欠損しており、全体の文章は、不明だが、表面に「二六四」とあり、裏面中央に「百」その下三行に割書きしてあるが、「□（抜ヵ）」「□□(直ヵ三ヵ)」のみが読めるだけである。幅の広い板材を素材としているが、表面の削りは雑である。Ｘ80・Ｙ77グリッドから出土した。

第８号木簡（737）表　・「＜小黒六斗」

66×12×５　033

付札木簡である。品名（小黒）と数量（六斗）の記載が観察される。上端両側にノッチが施され、結紐部分と考える。Ｘ64－Ｙ68グリッドから出土した。

第９号木簡（738）表　・×□木□×

裏　・×□□□□×

（115）×（34）×4　019

習書木簡である。「木」と考えられる字が、正面に記載される。裏面にも幾つかの墨痕が認められるが、左側を失っているため不明である。木簡の状態は、上下両端を欠くため長さ等は不明である。また、素材となる板材は、粗割された状態で木簡用に用意された木材と考えにくい。木簡の中央下部に木釘が観察されることから、部材の転用とも考えられる。Ｘ99－Ｙ94グリッドから出土した。

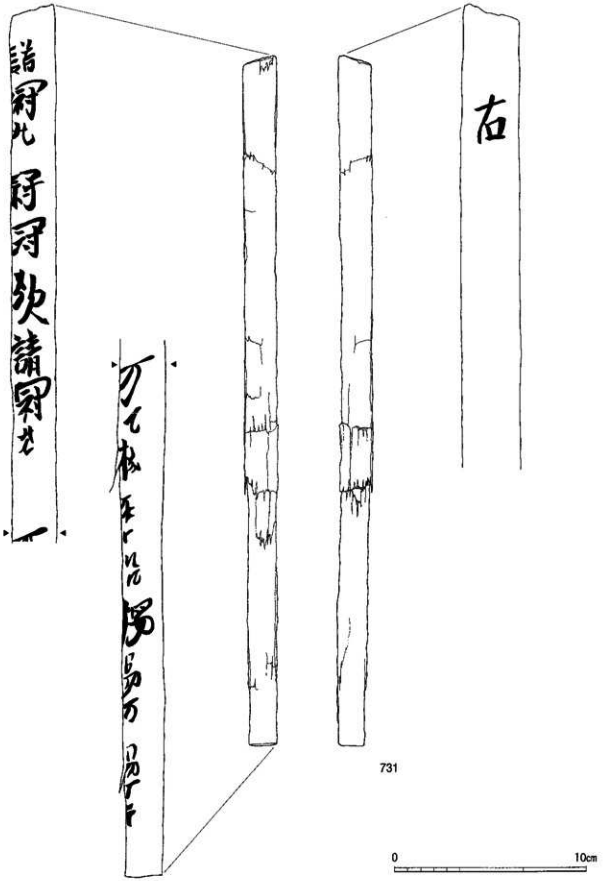
第10号木簡（739）表　・×［　　］□×

（130）×（21）×4　019

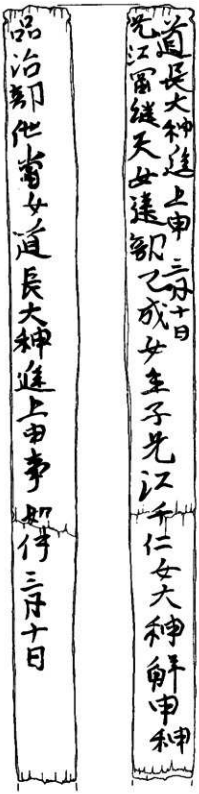
両端を欠き、削りによる調整も非常に粗い。全体的に墨痕が残るが、記載される文字数は、不明である。なお、下部に１文字分確認されるが、判読できない。　（高橋）

（注１）館野氏・本郷氏の御教示による。

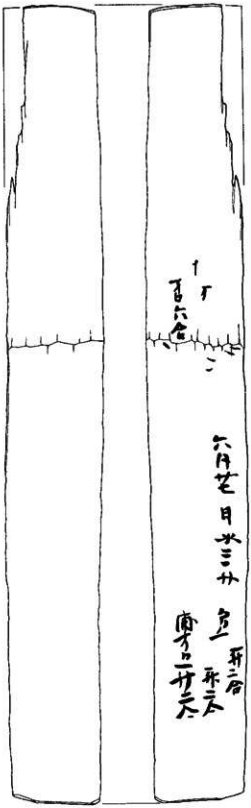
（注２）式内社研究会編1985「式内社調査報告」による。なお、本遺跡から道神神社まで直線距離で約300mである。



第79図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物１（木簡１）



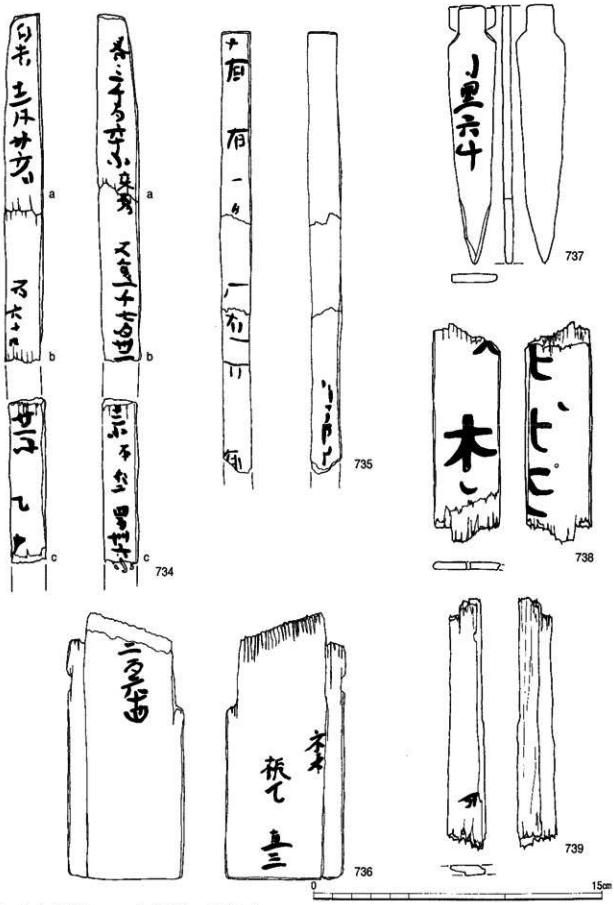
732



733

0　15cm

第80図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物２（木簡２）



第81図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物３（木簡３）

2 須恵器(第82～97図)

杯A(740～754、810～968)、高台をもたない杯。図化したのは完形品もしくは完形品に近いものの中から選び出した約190個体である。成形及び調整は、底部外面を除く内外面はロクロナデを施し、底部外面はヘラ切り痕跡を消すためナデを施すものが多い。少量ではあるが底部内外面を簡易なナデを施すものもある。形態は、底部はほとんどが平底である。外形で底部と体部の境界に明瞭な稜があるもの(740など)、やや不明瞭なもの(750など)、不明瞭なもの(749など)がある。また丸底は全体の2％程度だが、その大半は底部と体部の境界は不明瞭である(753など)。内形も外形と同様で、底部と体部の境界に明瞭な稜があるもの(741など)、不明瞭なもの(749など)がある。体部は、斜上に伸びるもの(742など)、ほぼ垂直に伸びるもの(745など)、湾曲しながら伸びるもの(750など)がある。口縁端部では、肥厚し丸めるもの(743など)、斜上方へつまみ上げるもの(753など)がある。

口径の大きさは10.7～14.8cmを測る。口径の大きさ及び個体数等から、11cm前後のもの(Ⅰ)、11.5cm前後のもの(Ⅱ)、12cm前後のもの(Ⅲ)、12.5cm前後のもの(Ⅳ)、13cm前後のもの(Ⅴ)、14.5cm以上のもの(Ⅵ)と6分類した。Ⅲタイプの土器が最も多く出土した。径高指数値(h/2r＊100)では、Ⅰ～Ⅴタイプは28～30、Ⅵタイプは37が最も多い値である。

杯B(755～763、969～1096)、杯Aに高台を貼付けたもの。図化したのは完形品もしくは完形品に近いものの中から選び出した約140固体である。内外面の調整は杯Aと同様である。高台は外に力強く張り出すもの、垂直に下がるものがあり、また貼付け部が底部の内側または外側にあるものとさまざまである。形態は、内外面とも同様で、底部と体部の境界に明瞭な稜があるもの(755など)、やや不明瞭なもの(761など)、がある。体部では、体部が斜上に伸びるもの(758など)、ほぼ垂直に伸びるもの(756など)、体部が湾曲しながら伸びるもの(755など)がある。

口径の大きさは、8.8～14.8cmを計る。口径の大きさ及び固体数等から、9cm前後のもの(Ⅰ)、10cm前後のもの(Ⅱ)、11cm前後のもの(Ⅲ)、12cm前後のもの(Ⅳ)、13cm前後のもの(Ⅴ)、14.5cm前後のもの(Ⅵ)、16cm以上のもの(Ⅶ)に分類した。

杯蓋(764～767、1097～1176)

杯Bにともなう蓋。頂部がまるく笠形を呈するもの、平坦な頂部となだらかに縁部からなるものに分類できる。縁部が三角形、丸込めるもの、屈曲するもの、しないもの等がある。つまみは擬宝珠状のもの、扁平なものがあり、それぞれが組合せで形成される。径によって大小あるが、径12cm前後の蓋が最も多い。

皿(768～772、1177～1179・1181・1182)

1177は垂直に伸びた短い口縁部をもつ皿に高台を貼り付けたもので、内外面はロクロナデで調整する。そのほかは広く平坦な底部と斜上に伸びた短い口縁部からなる皿である。1179・1181・1182は皿に高台がついたもので、底部は糸切りした後、ナデで調整する。体部・脚部の内外面はロクロナデである。

鉢(1209)

内彎する体部には3条を単位とする沈線を4カ所に施す。口縁部あたりでは立ち上がり、口縁端部では面をもつ。底部はないが、丸びをおびた尖底となると思われる。

高杯(1180・1183)

1180の口縁端部は内側に巻き込み肥厚する皿に短い脚が貼り付いたもの。1183は体部に稜を有する稜椀のような杯に脚がつくもの。

壺(1185～1195・1198～1206)

1186～1190・1199～1206は長頸壺。細長く直線に伸びて上部で外反する口頸部と、肩が張り稜角を呈する体部からなり、口頸部や体部に沈線を施すものもある。1193～1195は短頸壺。撫で肩で卵形の体部に垂直で短頸の口縁部ついたもので、肩部に1～2条の沈線を施す。1191は広口壺。肩部が稜角をなす胴長の体部に、

大きく外反する広口の口縁部と外傾する高台がつくもの。1211は双耳壺。1207は平底で肩に稜をもたない徳利状の小型壺である。

壺類(1196・1197)

平坦な頂部と直角におれる口縁部からなる。口縁端部を若干外へ張り出すのも(1196)、丸くおめるもの(1197)がある。

瓶(1207・1210)

1207は体部全体が丸みおびた小型の平瓶。1210は横瓶。

甕(1217～1226)

口縁端部の形態には、内面が肥厚し水平な面をもつもの（1217・1226）。水平なもの（1220・1223）。斜めなもの（1218・1219）上方へつまみ上げたもの（1224・1225）などがある。

3 土師器(第98～100図)

椀(1227～1290・1300・1301)

高台をもたない椀、椀A。図化したのは完形品もしくは完形品に近いものの中から選び出した約70個体である。ロクロからの切り離しは糸切り手法による。底部外面の糸切り痕跡をナデ消さないものが大部分を占めるが、簡易なナデを施し糸切りの痕跡ナデ消すものも少量だがある。底部は糸切り手法によるため平底である。体部は、斜上に伸びるもの(1277など)、ほぼ垂直に伸びるもの(1274など)、湾曲しながら伸びるもの(1227など)がある。口縁端部では、肥厚し丸めるもの(1290など)、斜上方へつまみ上げるもの(1228など)がある。

口径は、11～17.2cmを計る。口径の大きさ及び個体数等から、11cm前後のもの(Ⅰ)、11.5cm前後のもの(Ⅱ)、12cm前後のもの(Ⅲ)、12.5cm前後のもの(Ⅳ)、13cm前後のもの(Ⅴ)、15cm以上のもの(Ⅵ)と6分類した。Ⅲタイプの土器が最も多く出土した。径高指数値(h/2 r*00)では、Ⅰ～Ⅴタイプは28～30、Ⅵタイプは37が最も多い値である。

皿(1291～1299)

1291は広く平坦な底部と斜上に伸びた短い口縁部からなり、高台を有しない。底部は糸切りした後、ナデで調整する。体部・脚部の内外面はロクロナデである。1292は垂直に伸びた短い口縁部をもつ皿に高台を貼り付けたもので、内外面はロクロナデで調整する。

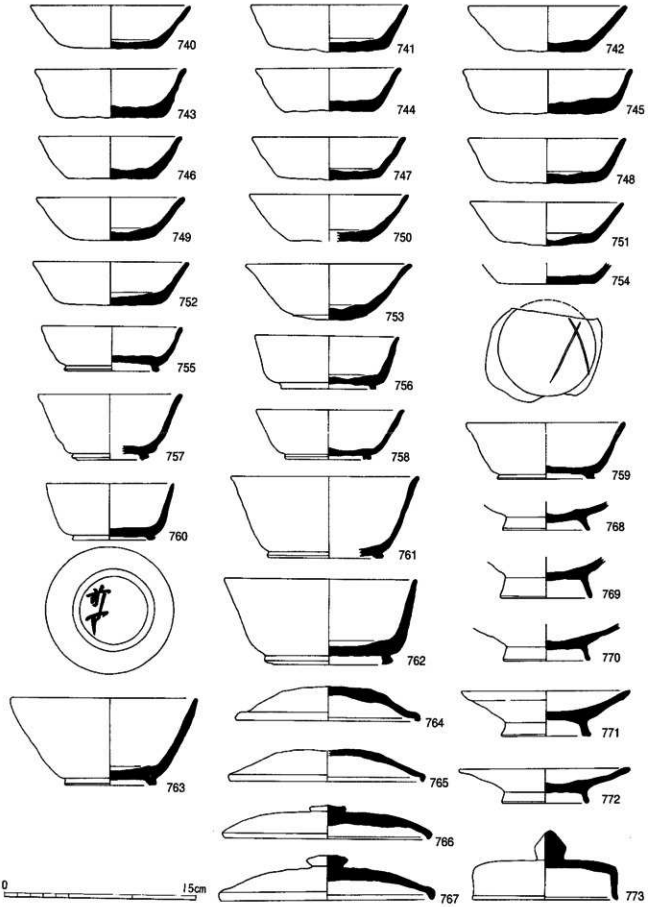
甕(1312～1321)

口径が10.8～13cmを測る1312～1314は小型甕、口径が17.1～27cmを測る1315～1321は大型甕である。小型甕は口縁部及び胴上部を内外面ともナデを施し、1312の胴下部はヘラケズリである。口縁端部は外傾し端部を巻き込む、内面には巻き込み段がつくもの(1312)、S字状の口縁部で端部を丸く肥厚するもの(1313)、くの字状の口縁部で端部が外傾するもの(1314)がある。大型甕の胴部外面は上部はカキメ下部はヘラケズリ、内面は上部ではハケメの後ナデを施す。口縁部はくの字状の口縁部であるが、端部は外傾するもの(1315など)、上方へつまみあげるものがある(1320など)。

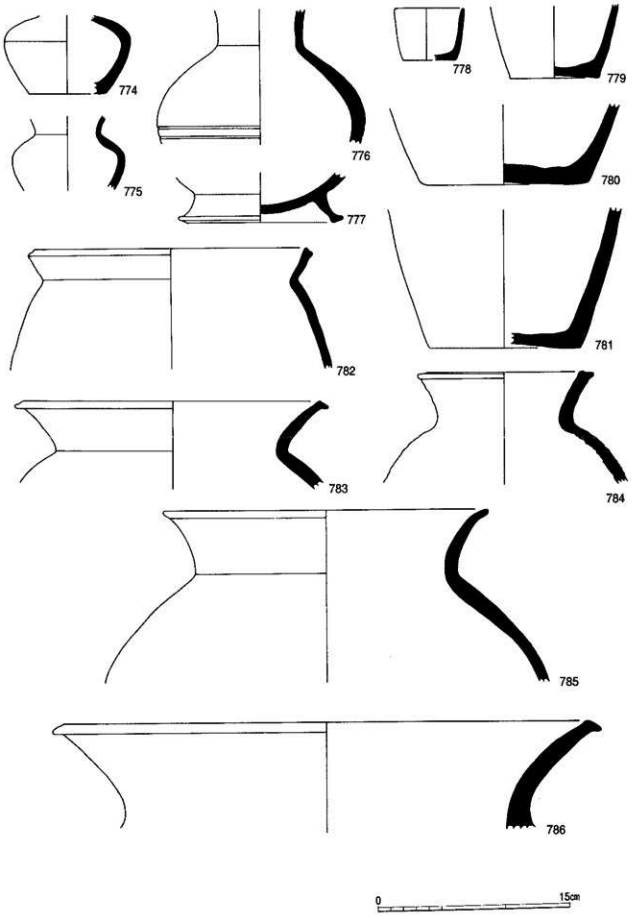
その他

高杯(1302～1309)、土鍋(1310・1311)がある。

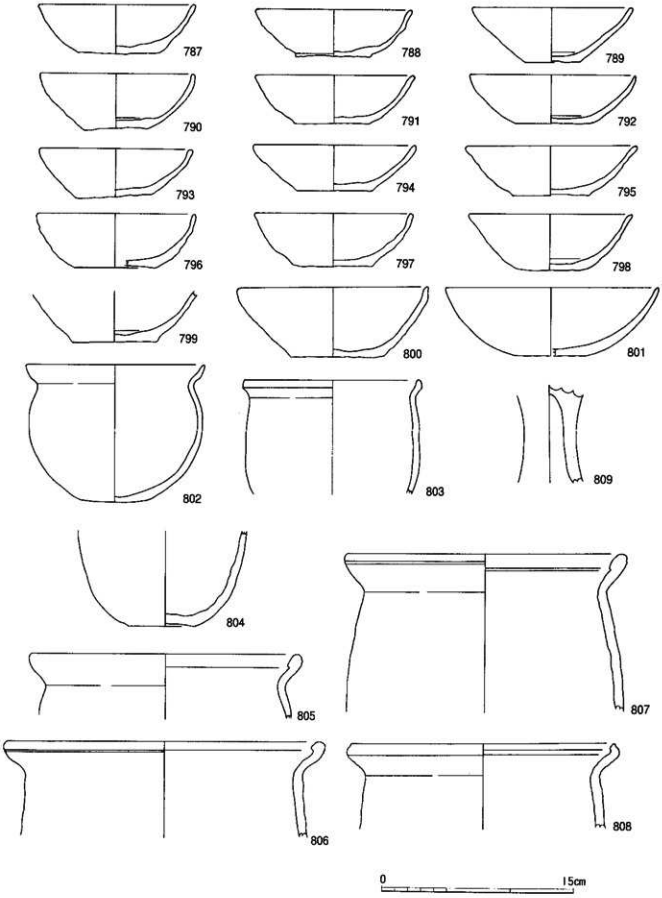
(安念)



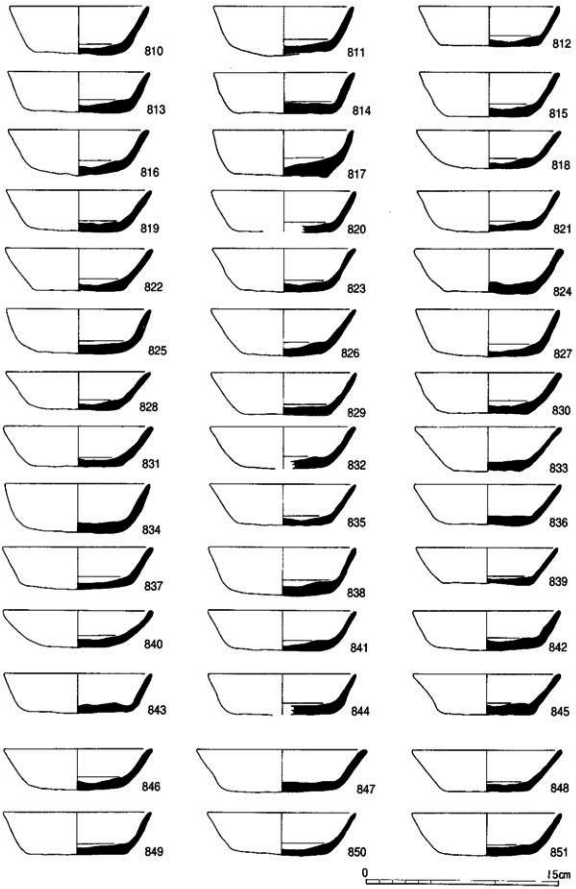
第82図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｃ地区）出土遺物４（須恵器１）



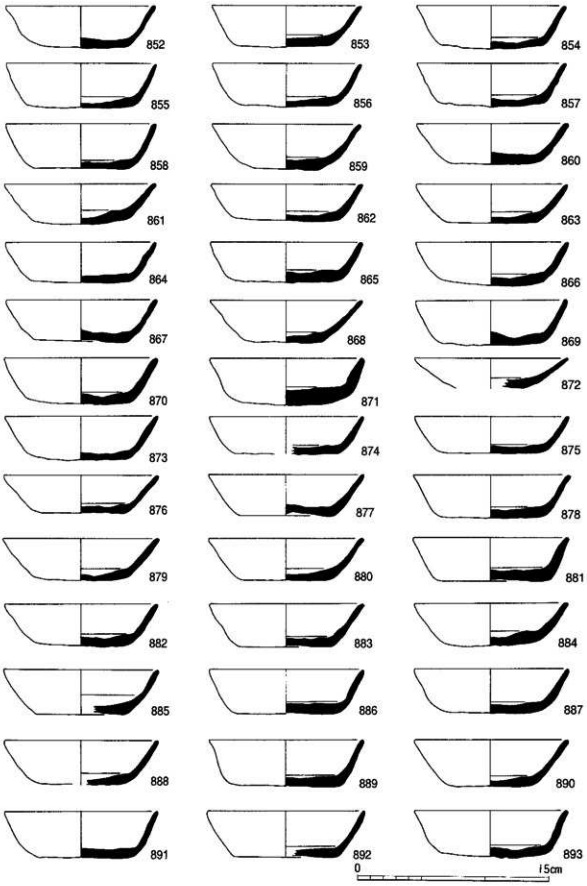
第83図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｃ地区）出土遺物５（須恵器２）



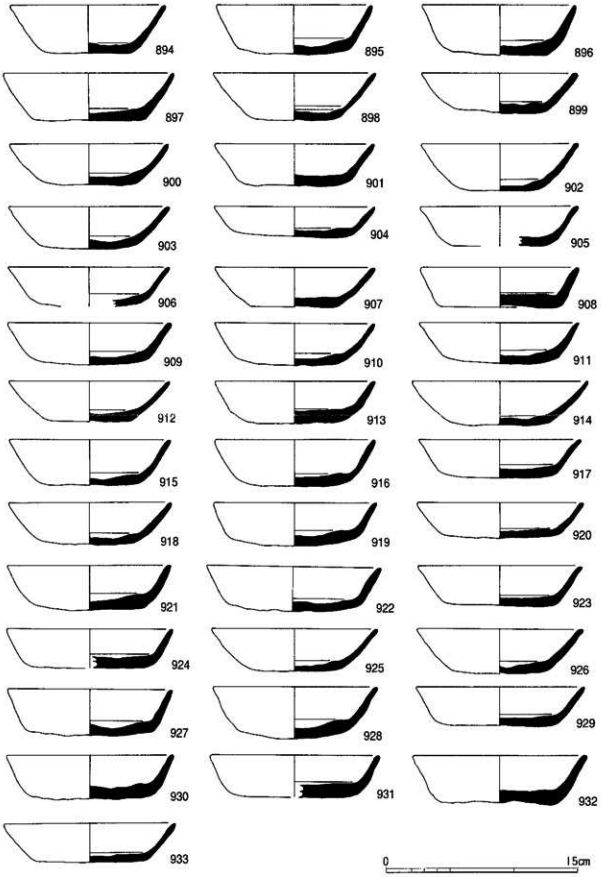
第84図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｃ地区）出土遺物６（土師器１）



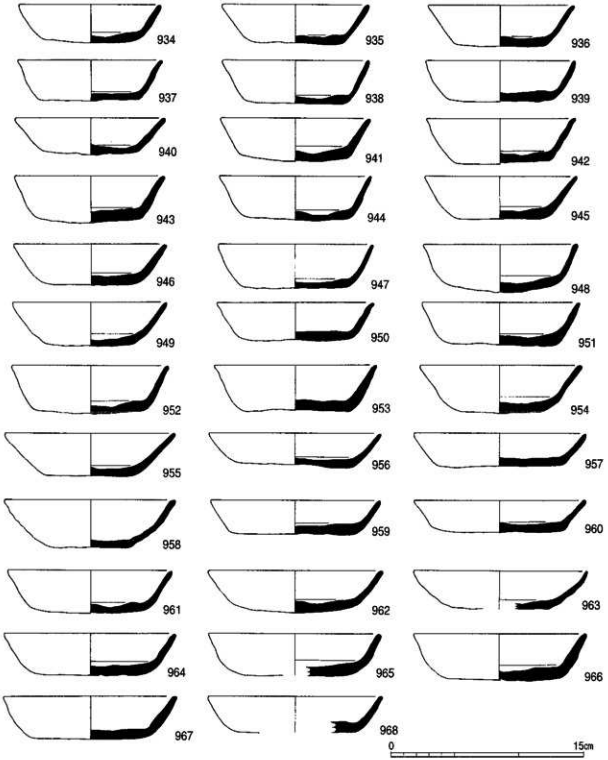
第85図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物７（須恵器３）



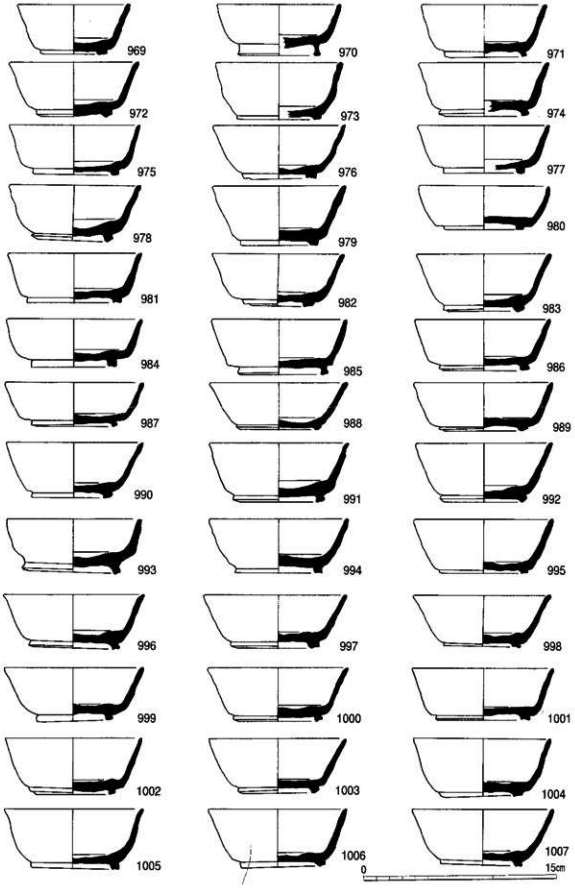
第86図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物８（須恵器４）



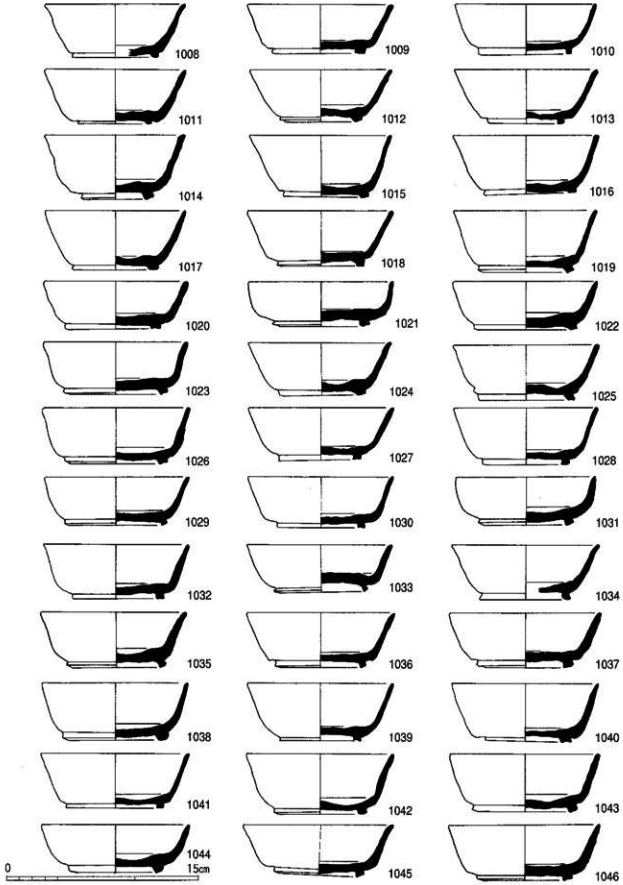
第87図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物９（須恵器５）



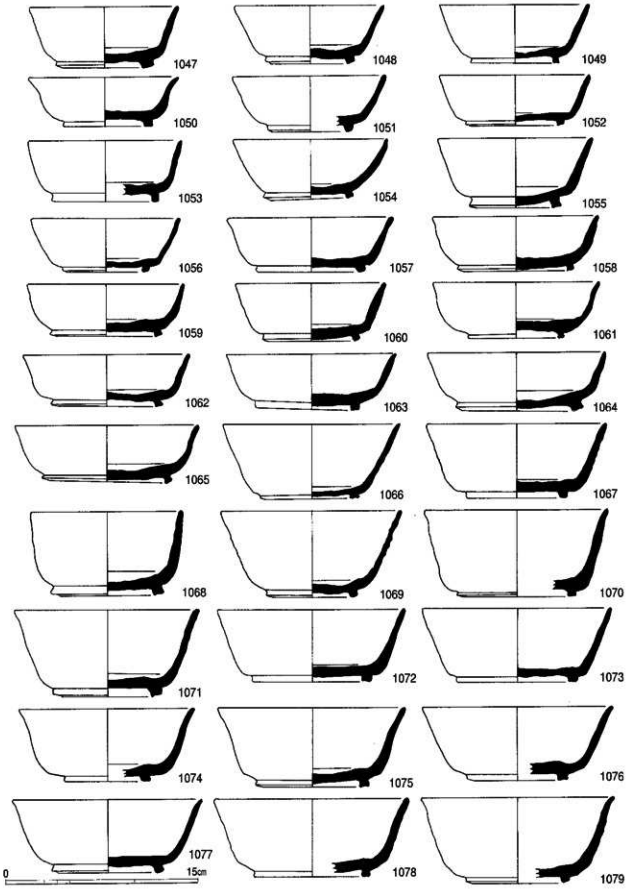
第88図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物10（須恵器６）



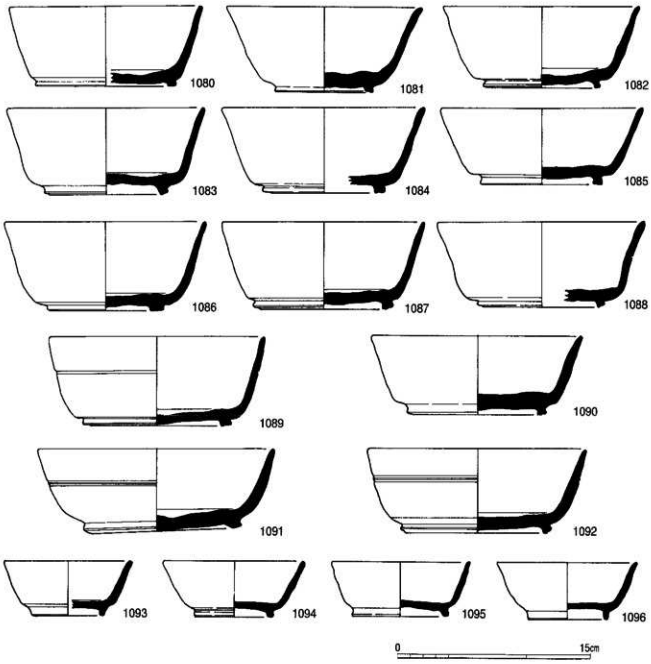
第89図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物11（須恵器７）



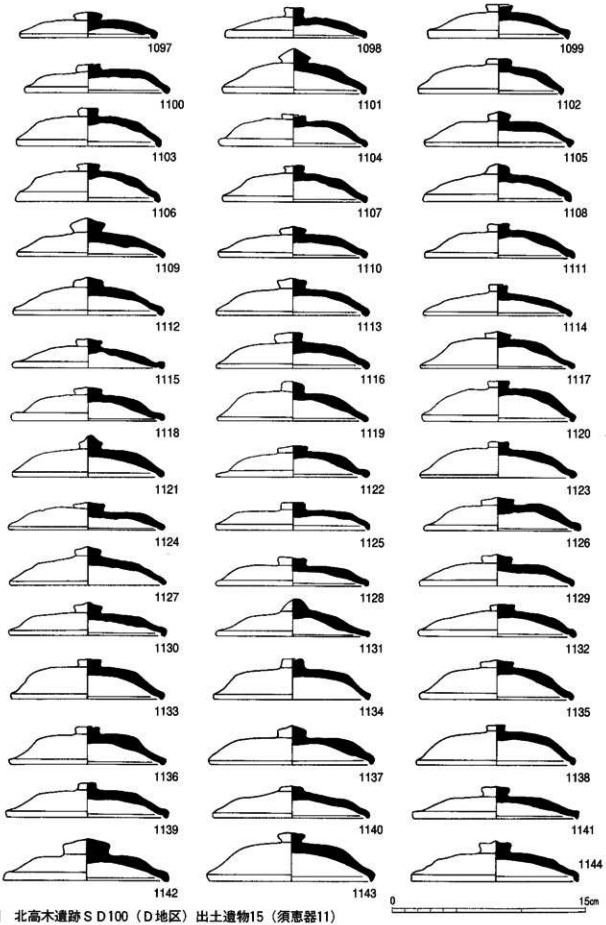
第90図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物12（須恵器８）



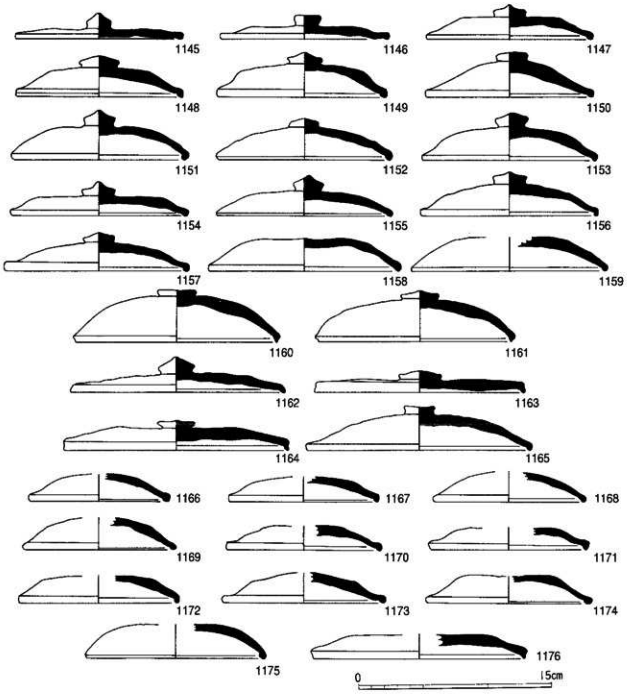
第91図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物13（須恵器９）



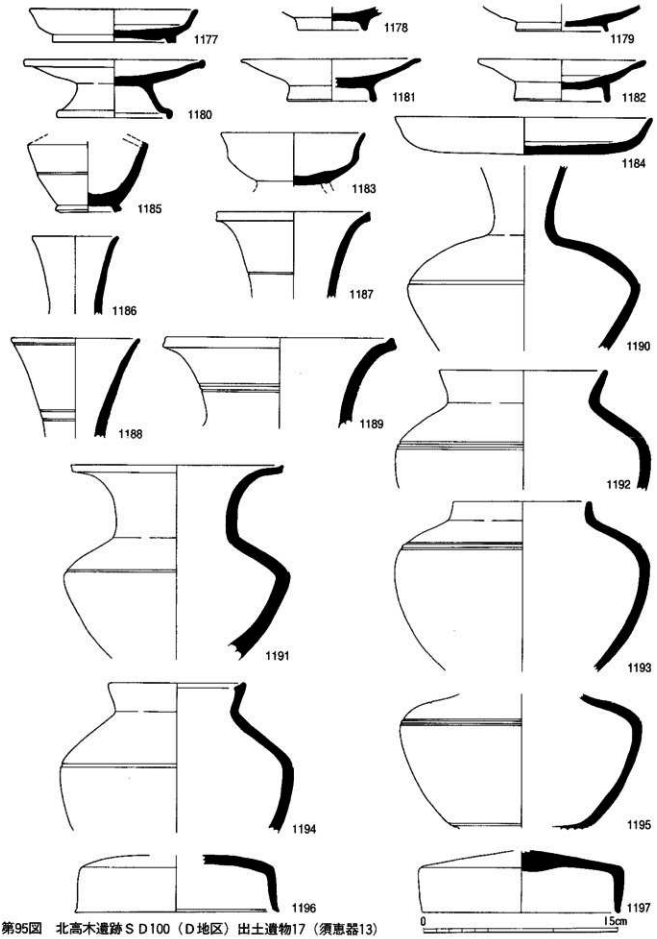
第92図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物14（須恵器10）



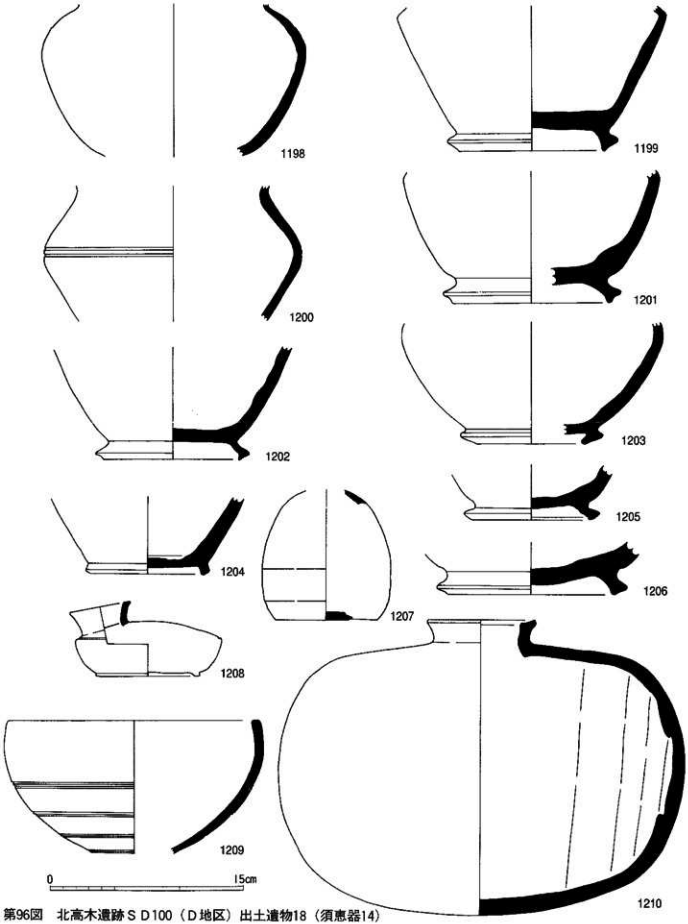
第93図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物15（須恵器11）



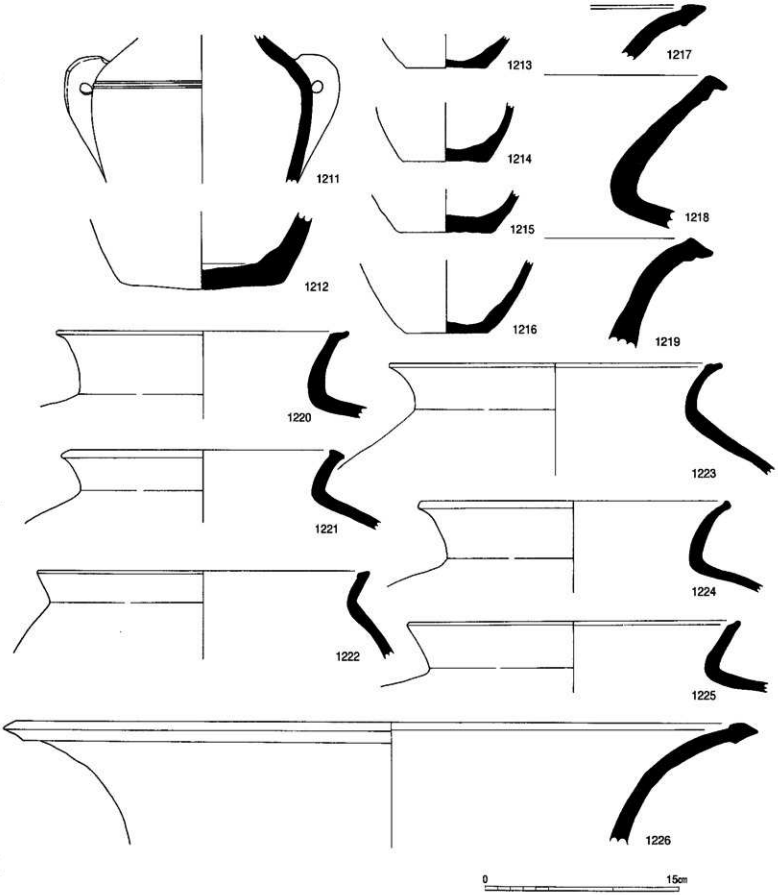
第94図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物16（須恵器12）



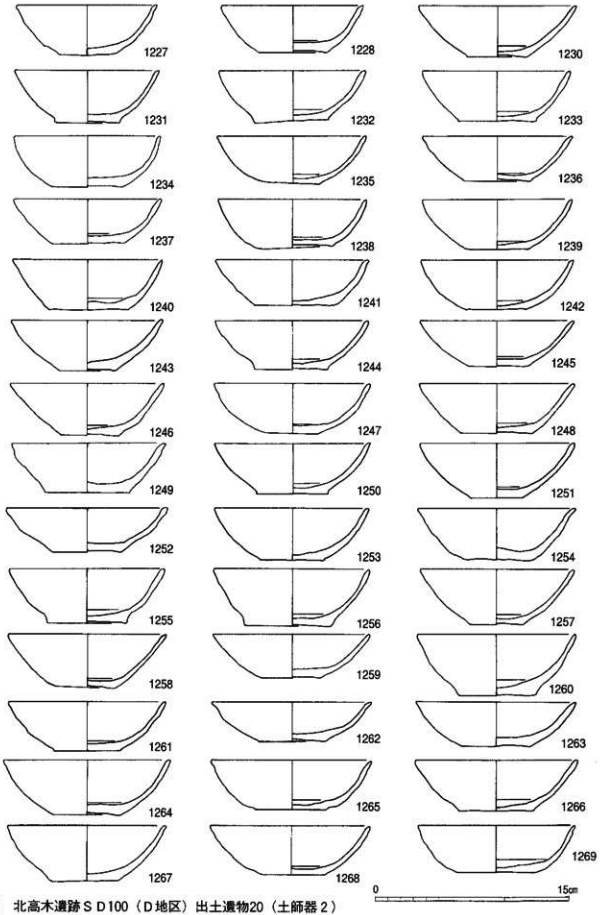
第95図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物17（須恵器13）



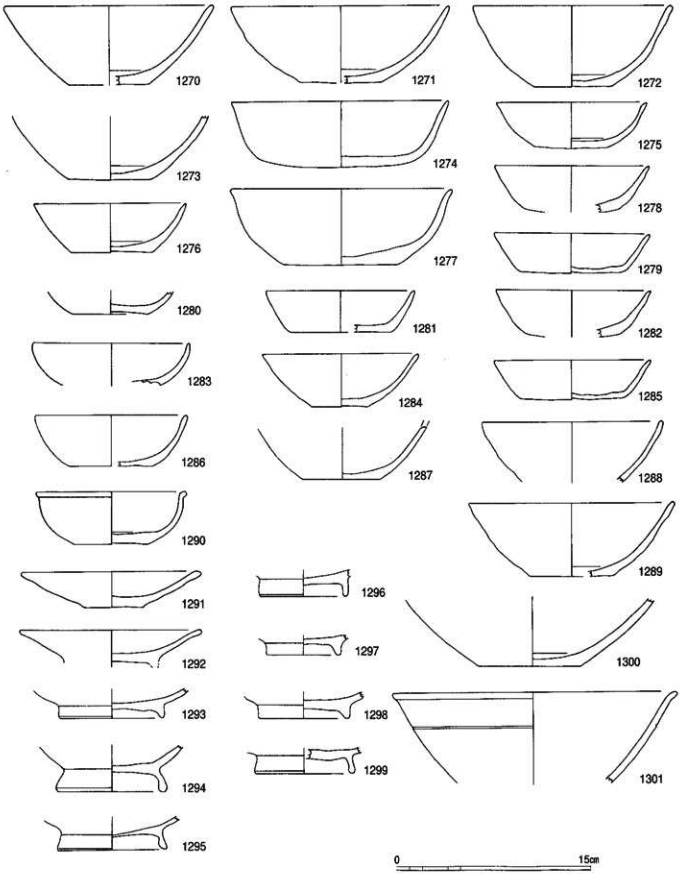
第96図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物18（須恵器14）



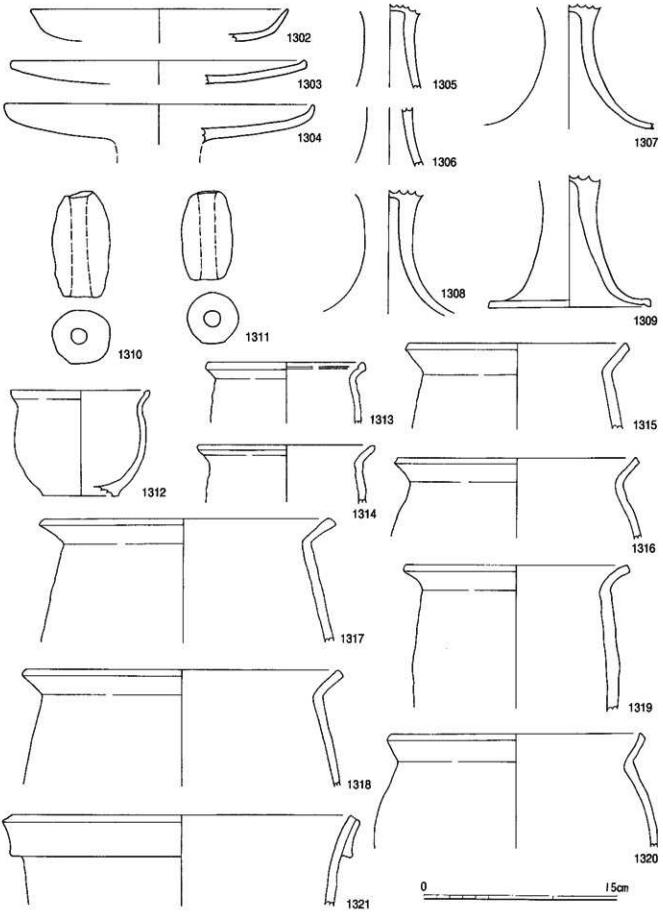
第97図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物19（須恵器15）



第98図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物20（土師器２）



第99図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物21（土師器３）



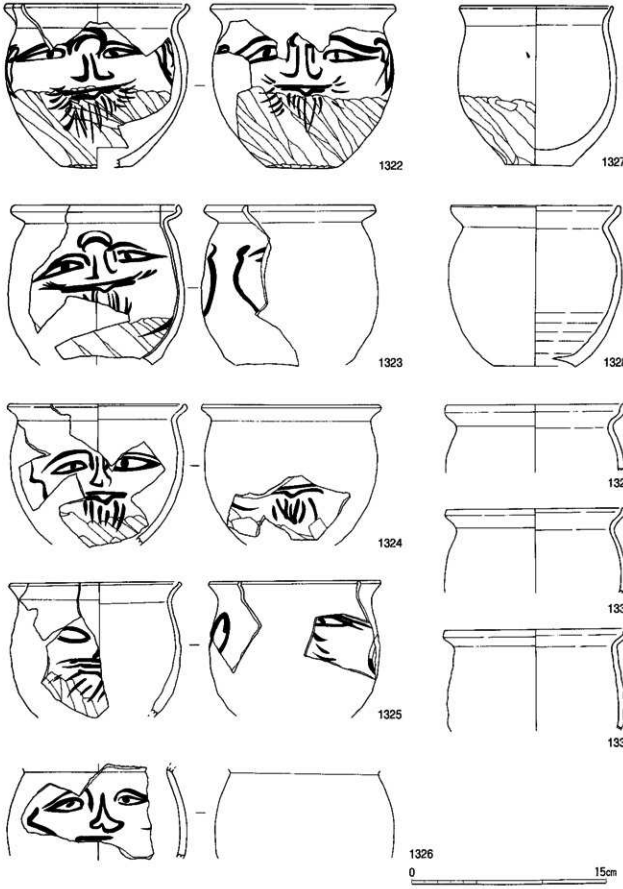
第100図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物22（土師器４）

4 人面墨書土器（第101図）

人面墨書土器は、5個体が出土した。遺存状況は非常に悪く、推定復元で実測した。順に記載する。すべて土師器の人面墨書用壺C（注）を素材とし、D区のSD－100の埋土中から出土した。供伴する須恵器などから8世紀末から9世紀初頭に帰属する。

1322は、表裏面に2つの顔を描く。目・耳・鼻・口・髭が観察されるが、顔の輪郭線は省略される。また、裏面の顔に対し表面の顔の描き方は、やや左側に傾きをもつ。底部を欠損する。口径は16.1cm、胴部径は14.9cm、器高は13.4cmを測る。胴部中央下部を左から右下方向に連続した削りが観察される。X89－Y87から出土した。1323も同様に表裏二面に人面を描く。目・鼻・口・髭を描くほか輪郭が記入され、耳は輪郭線の一部として表現される。1322と同様にやや左側に傾く。裏面はほとんど残存していない。また底部も輪積みから剥離している。確認される状況から表面と同様に輪郭線を描くことが観察される。胴部中央下部を左から右下方向に連続した削りが観察され、口径は15cm、胴部径は15.8cm、器高は14cmを測る。X70－Y63から出土した。1324は、表裏2面の人面を描く土器である。表現される顔は胴部のほぼ中央に目を描くため全体的に響向き加減に表現される。素材となった小瓶自体の調整も底部に近いところを粗く整形しており、他とやや異なる。口径は15.8cm、胴部径は15cm、器高は13cmを測る。X76－Y57から出土した。1325は、残存する部位が少ないため観察しにくいが、同じく表裏2面の顔の表現が描かれる。表面の目は輪郭のみで黒目の部分は薄く観察出来るのみである。また、裏面の左側に楕円形の墨痕が観察されることから耳の表現を加えた可能性がある。下面に施す整形痕は他の土器に加えられる削りより急角度である。口径は15cm、胴部径は14.8cm、器高は12cmを測る。X70－Y63から出土。1326は、片面のみの出土である。顔の表現は、表面右側に輪郭線が確認されるものの非常に雑で特に鼻・口の表現は他のものと著しく異なる。なお、裏面についても同様で不明だが、他の人面墨書土器を参考にすると表裏2面に描かれた可能性がある。また、胴部より下端を大きく欠くため土器全体のプロポーションは不明で、推定される胴部径は15.6cmと他の人面墨書土器とほぼ同一の法量をもつ。X76－Y57から出土した。1327は、ほぼ完形品である。胴部中央より下半分を左から右下方向に連続した削りが観察される。また、中央やや上には墨痕が確認されることから人面を描こうとした可能性がある。ただし、1322～1326までの瓶にくらべプロポーション的にはスリムである。口径は13.8cm、胴部径は14cm、器高は14.2cmを測る。X90－Y87から出土。1328は、底部を欠く瓶である。削りなどは一切確認されないため1327の土器とは異なる。口径は15cm、胴部径は15.2cm、器高は14.2cmを測る。1329～1331は、出土した人面墨書土器とほぼ同一の法量を測る土師器の小瓶である。いずれも口縁部のみの提示であるが、残存する部位に削りなどは観察されず、人面墨書土器と設定しがたい。（高橋）

（注）人面墨書土器の素材となる土器には、日常甕を使用する例と人面墨書用の壺形土器（B・C）が知られる。B・Cの差異は、製作方法による（巽1993）。本遺跡の出土例はすべてロクロ整形と考えられることから壺Cとして考える。ただし平城京・長岡京の人面墨書土器には、篦削りなどは明瞭に観察されないためこの形態を持つ土器を地域性とすべきかは今後の検討課題である。



第101図　北高木遺跡ＳＤ100（Ｄ地区）出土遺物23（人面墨書土器）

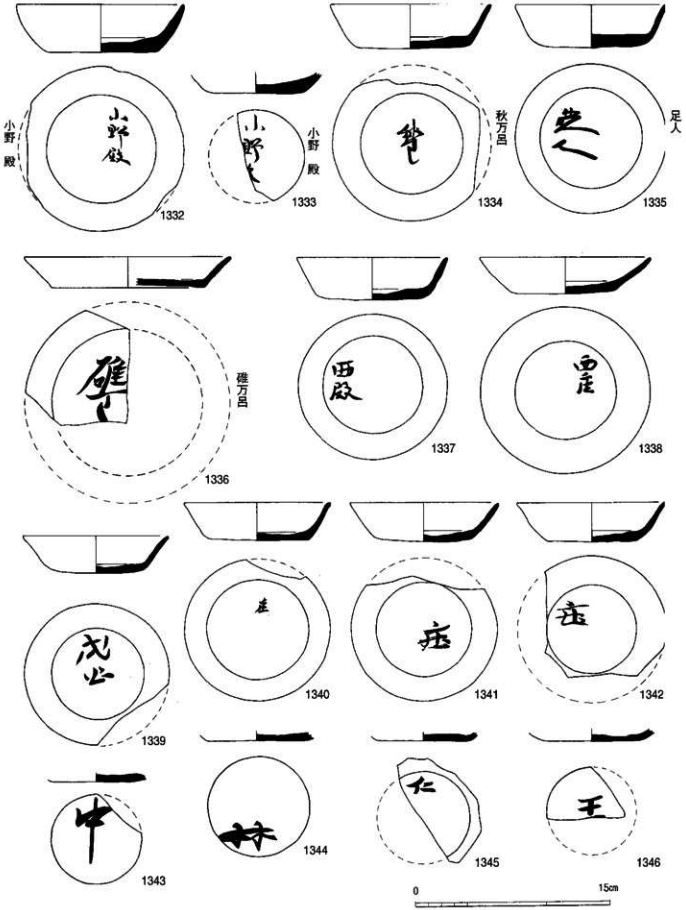
5 墨書土器（第102～107図）

墨書土器観察表 1

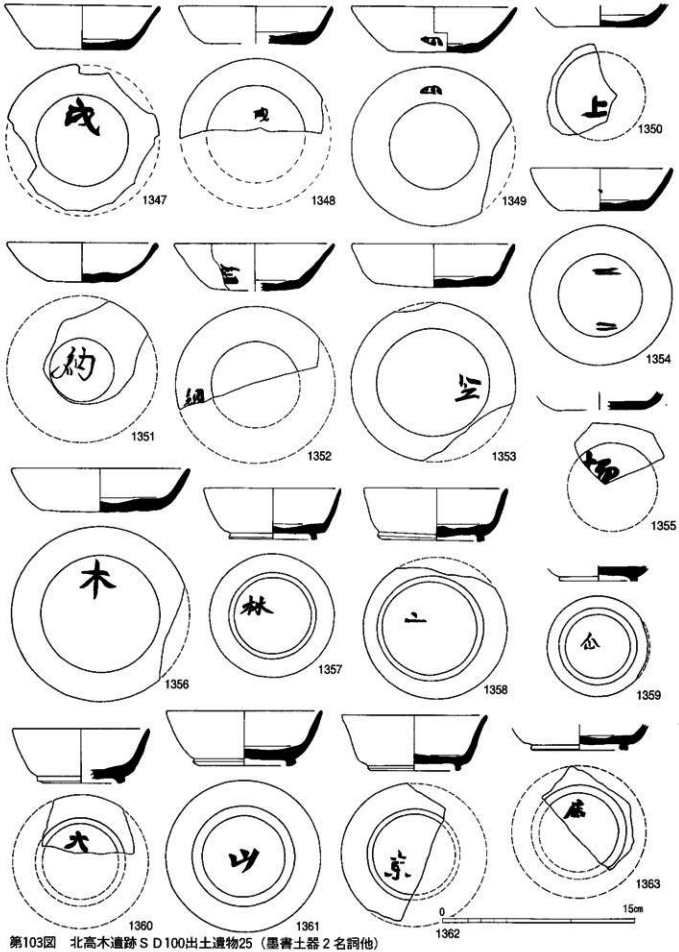
番号	種　類	器　種	墨書銘	墨書部位	文字位置	遺存度
1332	須恵器	杯A	小野殿	底部外面	やや右寄り	ほぼ完形
1333	須恵器	杯A	小野殿	底部外面	中央	底部
1334	須恵器	杯A	秋万呂	底部外面	中央	4／5
1335	須恵器	杯A	足人	底部外面	左	完形
1336	須恵器	杯A	碓万呂	底部外面	左	1／5
1337	須恵器	杯A	西殿	底部外面	左	完形
1338	須恵器	杯A	西庄	底部外面	右上	完形
1339	須恵器	杯A	成公か	底部外面	中央	ほぼ完形
1340	須恵器	杯A	庄	底部外面	中央上	ほぼ完形
1341	須恵器	杯A	庄	底部外面	右下	4／5
1342	須恵器	杯A	庄	底部外面	左上	3／5
1343	須恵器	杯A	中	底部外面	中央	底部のみ
1344	須恵器	杯A	林	底部外面	中央下	底部のみ
1345	須恵器	杯A	仁	底部外面	中央上	底部のみ
1346	須恵器	杯A	王	底部外面	中央	底部のみ
1347	須恵器	杯A	成か	底部外面	中央上	4／5
1348	須恵器	杯A	成か	底部外面	中央	2／5
1349	須恵器	杯A	四	側部外面		ほぼ完形
1350	須恵器	杯A	上	底部外面	中央下寄り	底部
1351	須恵器	杯A	納	底部外面	中央	1／5
1352	須恵器	杯A	納	側部外面		2／5
1353	須恵器	杯A	八之か	底部外面	右	ほぼ完形
1354	須恵器	杯A	二か	底部外面	上と下	完形
1355	須恵器	杯A	福か	底部外面		底部
1356	須恵器	杯B	木	底部外面	中央上	ほぼ完形
1357	須恵器	杯B	林	底部外面	左	完形
1358	須恵器	杯B	二か	底部外面	やや左寄り	ほぼ完形
1359	須恵器	杯B	仁か	底部外面	やや左寄り	底部
1360	須恵器	杯B	大	底部外面	中央上	1／5
1361	須恵器	杯B	山	底部外面	中央	完形
1362	須恵器	杯B	京	底部外面	左下	3／5
1363	須恵器	杯B	麻	底部外面	中央上	底部
1364	須恵器	杯B	□□□	底部外面	やや左寄り	完形
1365	須恵器	杯B	成公か	底部外面	中央上	2／5
1366	須恵器	杯B	成公か	底部外面	中央上	底部
1367	須恵器	杯B	真	底部外面	右	2／5
1368	須恵器	蓋	玖万	底部外面	中央	底部
1369	須恵器	杯B	西	底部外面	中央上	ほぼ完形
1370	須恵器	杯B	□万	底部外面	中央	4／5
1371	須恵器	杯蓋	今木か	頂部外面	中央下	3／5
1372	須恵器	杯蓋	中	頂部外面	中央右	ほぼ完形
1373	須恵器	杯蓋	成公	頂部外面	中央上	完形
1374	須恵器	杯蓋	□	頂部外面	中央下端	完形
1375	須恵器	杯蓋	王	頂部外面	中央上	3／5
1376	須恵器	杯蓋	王	頂部外面	中央右	完形
1377	須恵器	杯蓋	玖万	頂部外面	中央下	4／5
1378	須恵器	杯A	番と十	側部、底部外面		3／5

ＳＤ100出土墨書土器観察表２

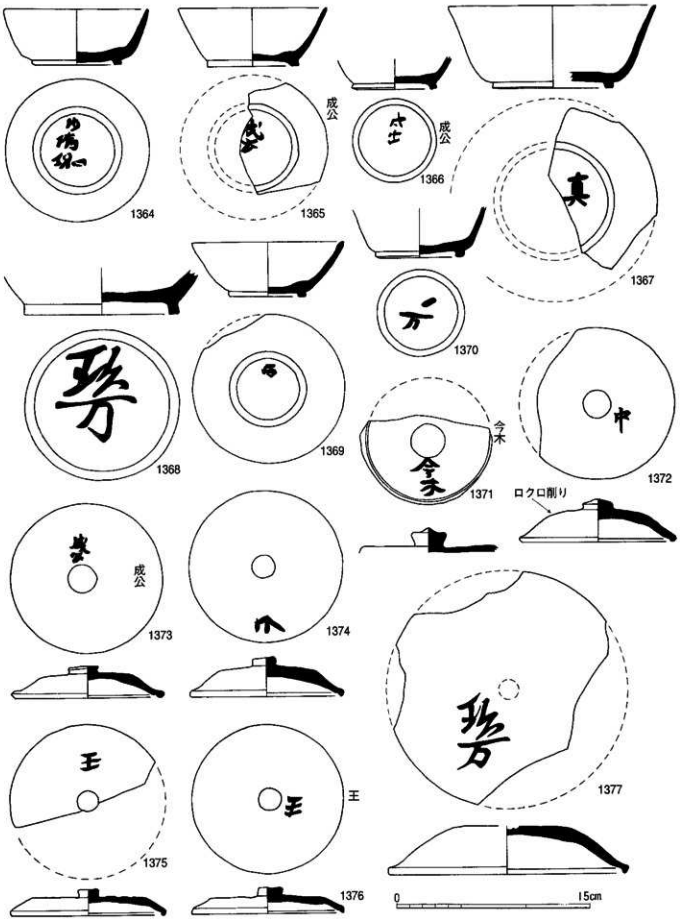
1379	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	3／5
1380	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	4／5
1381	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	完形
1382	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	ほぼ完形
1383	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	完形
1384	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	完形
1385	須恵器	杯A	十	底部外面	中央	完形
1386	須恵器	杯A	十	底部外面	左上	2／5
1387	須恵器	杯B	十	底部外面	中央	完形
1388	須恵器	杯A	十	側部外面		完形
1389	須恵器	杯A	十	側部外面		完形
1390	須恵器	杯A	十	側部外面		完形
1391	須恵器	杯A	十	側部外面		完形
1392	須恵器	杯A	十	側部外面		完形
1393	須恵器	杯B	十	底部外面	中央	ほぼ完形
1394	須恵器	杯B	十	底部外面	中央	2／5
1395	須恵器	杯B	十	側部外面		完形
1396	須恵器	杯B	十	側部外面		完形
1397	須恵器	杯B	十	底部外面	中央	4／5
1398	須恵器	杯B	十	底部外面	中央	底部
1399	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央上	ほぼ完形
1400	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央上	完形
1401	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	右上	ほぼ完形
1402	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央上	完形
1403	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央下端	完形
1404	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央下端	3／5
1405	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央下端	3／5
1406	須恵器	杯蓋	十	頂部外面	中央下端	完形
1407	須恵器	杯A	兎？	底部外面	左	3／5
1408	須恵器	杯A	不か	底部外面	中央上	ほぼ完形
1409	須恵器	杯A	兀？	底部外面	中央	底部
1410	須恵器	杯蓋	人	頂部外面	中央下	完形
1411	須恵器	杯A	十	側部外面		完形
1412	須恵器	杯A	十三	底部外面	中央	底部のみ
1413	須恵器	杯B	一	底部外面	中央	完形
1414	須恵器	杯B	一	底部外面	中央	完形
1415	土師器	椀	中と中	底部内外面	中央	2／5
1416	土師器	椀	佐見御庄と富	側部、底部外面	中央	2／5
1417	土師器	皿	富	底部外面	中央	4／5
1418	土師器	椀	富	側部外面		2／5
1419	土師器	皿	富	底部外面	中央	3／5
1420	土師器	椀	富	底部外面	中央	3／5
1421	土師器	椀	富	底部外面	中央	2／5
1422	土師器	椀	富	側部外面		2／5
1423	須恵器	杯B	富	側部外面		ほぼ完形
1424	土師器	椀	八	底部外面	中央	3／5



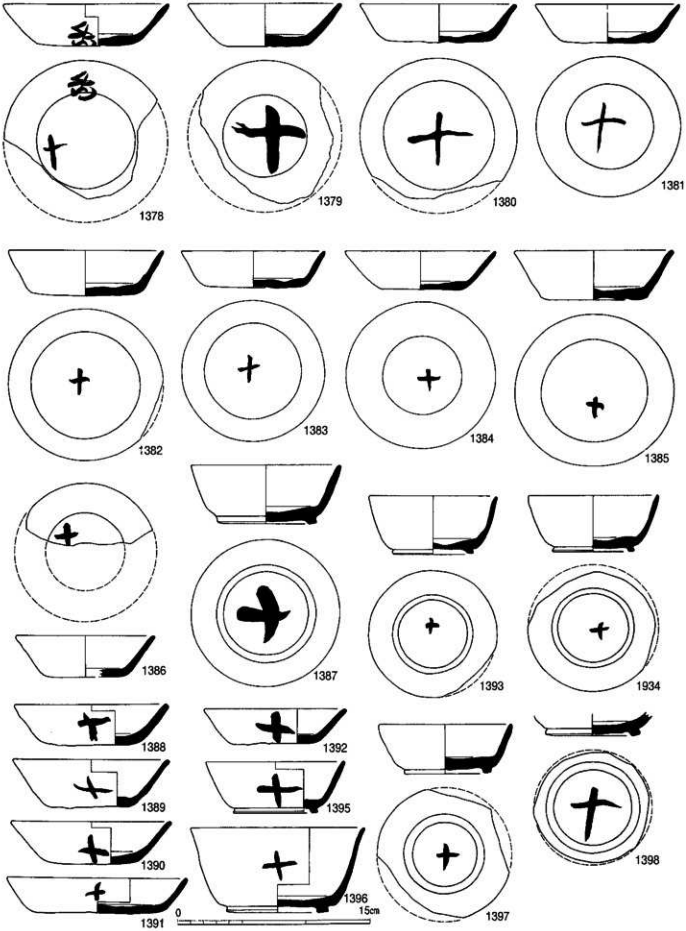
第102図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物24（墨書土器１「小野殿」・「秋万呂」他）



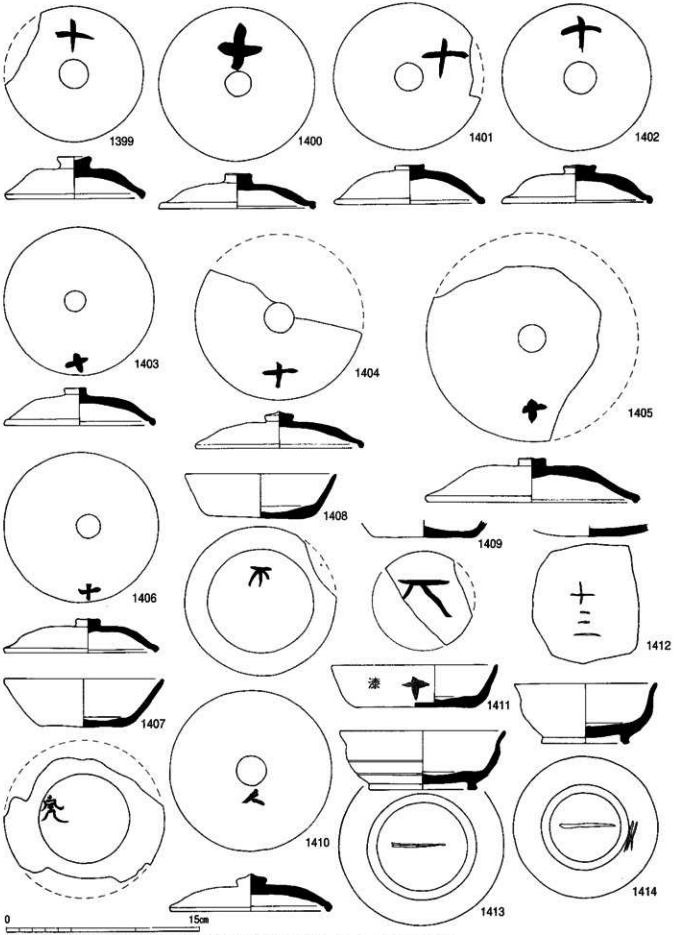
第103図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物25（墨書土器２名詞他）



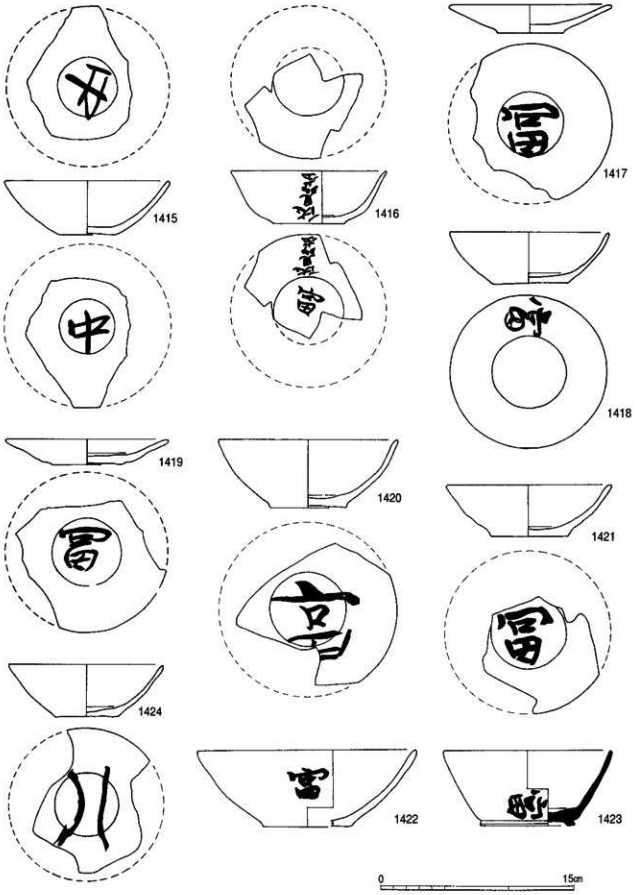
第104図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物26（墨書土器３その他の文字）



第105図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物27（墨書土器４「十」）



第106図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物28（墨書土器５「十」・漆書・箆書）



第107図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物29（墨書土器６「中」・「佐見御庄」・「富」他）

6 木製品（第108～132図）

この河道から出土した木製品は総点数で約1000点を数える。これらの木製品には、土器などと同様に服飾具・容器類などの日常雑器と人形・斎中などの祭祀用具の２種類に分類される。以下に項目をわけて記載する。なお、分類の基準は、『木器集成図録（近畿古代編）』（注１）に準拠した。

日常雑器

日常雑器には、服飾具・容器・食事具等がある。また、実測図を提示していないが、ＳＤ100の河道に補修を加えた際に使用された杭などもこれに含まれる。

服飾具

1425は、簪状木製品である。長さ17.6cm、幅１cmを測り、両面に丁寧な削りを施し、裏面に向ってやや弧を持つように加工する。上端に左右からのノッチ状の加工を施す。1426は、檜扇である。本来数枚以上の単位で用いられると考えられるが、遺存状況が悪く、一点のみの確認である。先端部を欠損するが、要の部分に穿孔を施すことから檜扇とした。全体的に丁寧な削りによる仕上げられ、握部から扇部にかけて外反するようにくびれが確認される。遺存する部分の長さは20cm、最大幅1.4cmを測る。1427・1428は、尺である。1427は、ほぼ完形品で長さ22cm、最大幅3.2cmを測る。表面の加工は丁寧であり、加工痕を観察しにくい。但し、中央部に最終の加工痕と考えられる連続した削りを残す。両端の切取痕も滑らかである。1428は、1427に対し非常に雑な造りで全体的に加工痕が目立つ状況である。厚みもかなりあるため未成品の可能性もある。握部が失われているため全長は不明だが、1427よりも若干長大になると考えられる。遺存する部分の長さは19.6cm、最大幅3.8cmを測る。1429は、横櫛である。約半分を逸している。遺存する部分の幅は4.8cm、高さ５cmを測る。1430は、竪櫛である。左右対称の均整のとれた竪櫛で、櫛歯部を失っているものの遺存状況から12本歯の櫛であったと考えられる。基部には、左右非対称に五つの穿孔を施す。遺存する部分の長さは11cm、最大幅7.8cmを測る。1431は、木履状の木製品である。遺存状況は、非常に悪く、推定復元で提示した。右側面に楕円形の穿孔が観察される。遺存する部分の長さは約20cm、最大幅11cm、器高４cmを測る。

容器類

1432～1441は、挽物である。35点が出土したが、遺存状態の良いものを提示した。器形には平底・二重口縁・高台付等バリエーションが認められる。多くは内外面に不定方向の擦痕が認められる。挽き跡のような製作痕として把握しにくく、使用痕の一種として捉える。1436は、裏面にハの字型の墨痕が観察される。径20.3cm、器高1.8cmを測る。1439は、中央部に一辺約４cmを測る方形の穿孔を施す。再利用品か。1442～1451・1453～1460は、曲物である。点数は、128点を数えるが、遺存状況は極めて悪く、その多くが側と底板が分離した状況で検出された。1453・1460の底板は、中央部に穿孔が認められる。1452は、刳物である。遺存状況は悪いが、左右非対称の容器と考えられる。1461は、楕円形曲物の底板である。木釘が２ヶ所認められる。遺存する部分の長径は38.6cmを測り短径は不明である。

食事具

1462～1466は、杓子状木製品である。1462・1463は、整形が雑だが、1464～1466は、比較的丁寧な削りによって整形している。特に1465は、スプーン状に内反する。遺存する部分の長さは29cm、最大幅8.2cmを測る。

工具類

1467・1468は箆である。1467は、トーンで示した範囲に漆状の付着物が認められるため、実際に使用した可能性がある。実測図中央には穿孔が認められ、柄などに装着したと考えられる。長さは16.2cm、最大幅3.2cmを測る。1468は、柄部を欠損しており、全体の長さは不明である。1472～1474は火臼、1475～1477は、火鑽りである。ただし、1475は未使用品であるが、整形状況から火鑽りとした。他は、トーン部分が被熱す

る。1477は、遺存状態が良く、長さは36cm、直径1.6cmを測る。1479・1480は片側に連続したノッチが観察される板状の不明木製品である。当初火起こしに関する資料と考えたためここに提示したが、211などと同様な“摺り籠”と考えることも可能である。1479は片端、1480は両端を逸しているが、片側側面に連続したノッチが観察される。1481～1484・1487・1489は把手あるいは柄である。1481は、上部に木釘などの孔が観察されることから、何らかの利器の把手と考える。1482には、ほぞが確認されるほか、握部に木製の楔が打込まれている。断面形状は、楕円形である。1483・1484・1489は、先端部を逸するものの、滑り止めが観察されることから鎌あるいは鉈状の工具の柄と考えられる。1487は、自然木の一端を加工した柄である。上部に楔が残ることからほぞ組みの一部と考えられる。完形品で長さは23.2cm、直径5.4cmを測る。1485・1486は木錘である。断面形状は、共に隅丸三角形である。中央片側に紐通し用の穿孔が認められる。

部材

その他の日常雑器の中で何らかの加工が認められるものを部材とした。1469～1471・1488・1490～1509・1512～1524・1633・1634・1637・1638がこれにあたる。1468は飾り具と考えられる。両端を釘などで固定するための孔が確認される。長さは10.2cm、最大幅2.4cmを測る。1470・1471は、木釘である。1470の断面形状は円形を呈する。長さは6.8cm、直径2cmを測る。1471は、断面四角形の釘である。頭部のみ遺存で全体の長さは不明である。頭部の形状は、胴部と同じく四角形で一辺の長さは、3.6cmである。1503は、両端に雄のほぞが観察される。長さは8cm、最大幅2cmを測る。1504は、一端にノッチを施す。ミニチュア品の部品としても考えられる。長さは9.8cm、最大幅1cmを測る。1505は、ほぞが確認される部材である。下端を失う。1506・1507は、机の部材である。1506は机の梁と考えられる。上面に天板を固定した孔が認められる。長さは33.2cm、最大幅6cmを測る。1507は、机の脚部である。上部を欠損しているものの形状・ほぞ孔の状況などから机部材とした。両端に雄のほぞが確認され、長さは24.6cm、最大幅2.8cmを測る。1508は、上端に四角形のほぞが確認されるほか等間隔で5つの穿孔が認められる。1510は、整形が荒く遺存状態も悪い。ほぞが確認されるのみである。1511は鉤である。上部を欠損する。1496～1498はいずれも形態が非常に近似しており、同様な遺物と考えられる。非常に丁寧な削りによって整形され断面形状は、楕円形である。また、下方が尖る状況にある。1499～1502は、正面中央部にほぞ孔が設けられていることから部材として考えられるが、詳細は不明である。1491～1493は、角材である。1491は、下端を鋭角に尖らす杭状の部材である。1492・1493は、胴部に抉りをもつ。共に上端を欠く。1490・1512～1524までは棒状の加工材である。1490・1522は、当初火鑽りとして観察したが、1475などに提示した資料と異なり、やや柔らかめの木材であることから別に提示した。1512～1521までの資料は、片側先端部に鋭角になるように削りを施した例である。また、1517は、舟形の可能性を有しているが、内面に抉りなどの加工を施していないことなどから、棒状の加工材とした。1523は、上端に抉りを、下端に削りを施して鉈状にしたものである。工具とも設定できるが、該当する形状が無いため、ここに分類した。1524は、両端に抉りを加える。1523と同様に工具とも設定できるが、該当する形状が無いため、ここに分類した。完形品で全長8cm、最大幅0.8cmを測る。1633は、先端部がやや細くなるように加工された木釘状の木製品である。胴部にノッチが入ることから部材として報告する。1634・1637は、同一の形態をもつ部材で上部にノッチを持つ。下部を欠くため全体形状は不明である。1638は、連続した穿孔が観察される木製品である。両端を欠き全体の形状は不明であるが、部材と考えられる。1469と同用品かも。遺存する部分の長さは11.8cm、最大幅1.6cmを測る。

武器

木製品の中で日常雑器の中で武器として把握できるものは、1494・1495に提示した弓のみである。1494は、下端を欠くものの削り出しによって弓筈の装着部分が観察される。いわゆる丸木弓で大きな加工は認められない。遺存する長さは45.8cm、直径2.6cmを測る。1495も1494と同様に一端に弓筈状の加工が施されていることから弓とした。ただし、下端に削りを加えていることから再利用の可能性のある木製品である。長さは50cm、

直径1.6cmを測る。

祭祀関連遺物

祭祀遺物には、人形・斎串・舟形・馬形・琴形・付札状木製品等がある。

人形

人形は、遺存状況が良いもので28点を数える。正面全身人形が主体を占め、そのほか札状の木片に顔を描いたものなど複数のタイプが存在する。1525・1526は、基本形と設定できるタイプで削りによって手足頭部が表現され、墨書によって、顔・冠が表現される。1525は、全長16cm、最大幅2.6cmを測る。このタイプには墨による表現が観察されないものの、1527・1528・1532～1536・1544～1546が含まれる。1530・1531は、上記のタイプの小形品である。1538～1542は、比較的寸胴で厚みのある人形である。1539～1541は、頚部に色調変化が認められることから布あるいは樹皮などを巻いて使用された可能性(注２)がある。1538を除き、いずれも頭部が丸形である。1529は、足の表現が省略されたタイプである。顔の表現が施されているものの冠などは省略された状況にある。脚部は、断面形状で尖るため土などに刺した可能性がある。1537・1538・1544の頭部は、削り出しによって鬣状の表現を施す。1543・1547～1550・1552は、本遺跡において特殊なタイプである。順に観察する。1543は、頭部と肩部の間に膨らみを持つ。頭部は、鬣状の表現が施され、脚部の表現は稚拙である。1547は、両面に簡略化した顔の表現を描く。手の表現を上方下方両方向に施しており、極めて特殊である。全長20.4cm、最大幅2.5cmを測る。1548は、当初その他の祭祀遺物として分類していたが、1547に近似した形態を有するため、人形に加えた。顔等の表現はなく、簡略化した人形である。1549はスプーン状の木製品に顔を表現した人形で、手足の表現を簡略化する。なお、頚部に墨痕が観察されること手の表現を施した可能性がある。1550は、当初、斎串に分類したが、1551に形状が似ているため、人形の一種として計上した。1552は、遺存部分で全長51cm、最大幅7.1cmを測る大型の人形である。本遺跡において唯一の大型人形であるが、後述する大型の斎串と出土地点が近いため何らかのセット関係を想定できる。遺存状況から手の表現を削りによって施していたと考えられるが逸している。1551は、頭部などを失うため分類出来ないが、長幅比が大きいため上記のいずれにも属さない可能性がある人形である。遺存する部分では、全長16cm、最大幅1.6cmを測る。

斎串

本遺跡で出土した斎串は、総点数で279点を数えるが、状態の良いものを提示した。提示できた斎串の一般的な形状は、いわゆるＣ－４形式（注３）を主体とする。上端に鈍角を、下端に鋭角を有するもので、上部には両側縁に削りかけを施す。長幅比によって複数のタイプに設定できるが、実測図の1553～1583までがこの一般例である。なお、1554は全長6.8cm、最大幅1.5cmを測り、1568は、全長35cm、最大幅２cmを測る。1584・1585・1588は、下端が平らになるタイプである。この中で1585は、下端にノッチを持つもので出土した斎串の中では特異である。1586は、頭部・胴部の区別が明瞭になされているため人形の可能性のある斎串である。ただし、顔表現及び脚部の表現はされないため斎串とした。全長18.8cm、最大幅2.7cm測る。1587は、下部上部が同じような鈍角で構成される斎串である。上端部にノッチを両側に施す。完形品で全長12.6cm、最大幅1.7cmを測る。1588は、下端を欠くものの1587とほぼ同一のタイプである。1589は、削り・ノッチを加えないタイプである。下端に等間隔に連続する穿孔が３つ観察される。1590は、両端が鈍角で構成される斎串である。完形品で全長15.6cm、最大幅1.9cmを測る。1591・1592は、共に下端のみ角を削出するタイプである。ともに加工は粗い。1592の大きさは全長18.1cm、最大幅1.8cmを測る。1593・1594は、形態的には1590の斎串と同様である。ただし、二等辺三角形を組めるように穿孔が３つ施される。共に完形品で1593は、全長10.3cm、最大幅1.7cmを測る。1595は、付札木簡状の形態を持つ斎串である。胴部に穿孔を施す。遺存状態は悪く、全長８cm、最大幅1.4cmを測る。1596～1604は、斎串の上部である。塔婆型の例になると考えられる。

1604は、遺存する全長が22.4cm最大幅1.8cmを測り、大型の斎串である。

舟形

1605～1618は、舟形とした木製品である。14点を数える。舟状に加工されかつ内面に掘込みを有するものを基本的な形態とし、1類：丸木舟型、2類：和船型、3類：両端が鋭角に尖るものに細分される。この中で3類は内面の抉りが浅く、かつ全体の整形が粗い舟形である。1605は1類に分類され、断面形状は丸木舟状に膨らむ。内面を抉り込む。完形品で全長9.2cm、最大幅1.7cmを測る。1606は、2類である。断面形状は長方形で内面を大きく抉る。前後の区別が明確で実測図上方が先端となる。裏面に縦方向に大きな切り込みが観察される。全長は10.5cm、最大幅2.5cmを測る。1607は、3類である。内面の抉りは小さく正面左下部を大きく欠損する。遺存する全長が12cm、最大幅1.9cmを測る。1608も同様に内面の抉りは深くしっかりしている。完形品で全長12.8cm、最大幅2.3cmを測る。1611・1612・1615は、未成品と考えられる舟形である。すべて粗削りであり、内面の抉りが船尾にのみ施されるのみである。製作過程を知る資料と言える。1610・1613は、3類である。未成品ともとれるが内面の抉りなどが観察されることから製品と考えた。1614は、船尾を欠く舟形である。遺存する全長は7.4cm、最大幅1.9cmを測り、整形は丁寧である。3類か。1616は1類に属し、船尾に二つの穿孔を施すもので。他に例を見ない。完形品で全長9.4cm、最大幅2.4cmを測る。1617は、当初部材と考えたが、内面の抉りが観察されることから舟形とした。端部を欠く。1618は、完形で全長27cm、最大幅4.4cmを測る大型の舟形である。全体的に粗い整形である。3類。

馬形・鳥形・その他の祭祀関連木製品

1620～1623は、馬形である。1623のみ片面に熱痕が観察され、頭部から頸部までの表現がなされる。口先の一部のみ欠損するほかほぼ完形である。長さ20cm、最大幅2.2cmを測る。1620は、尾部を欠損する。概して細身である。遺存する全長が13.8cm、最大幅1.8cmを測る。1621・1623は、同一の形態を持つ馬形である。長さ対幅は3：1であり、太身の馬形と言える。共に完形品で1621が全長10.8cm、最大幅2.1cmを測り、1623は全長が12.8cm、最大幅2.2cmを測る。1629は、鳥形である。二つに折れた状態で出土した。中央部に大きな穿孔が確認されるほか、接合部に二つの小さな留め孔と考えられる孔が穿たれる。完形品であり、全長24.5cm、最大幅3.6cmを測る。1624～1626・1630は鏃形である。1624は茎部に穿孔とほぞが観察され、着柄が想定される。両面ともに丁寧な削りがされ、鏃部の断面形状は凸レンズ状である。先端部を欠損する。遺存する全長が6.3cm、最大幅2.9cmを測る。1630は、茎部に対して鏃部が極めて長い。また、先端部の幅が最も広く茎部に向うほど細くなる傾向にある。完形品で全長13.9cm、最大幅1.3cmを測る。1625・1626は、遺存状況から舟形木製品とも考えられるが、基部を削出する状況から鏃形の未成品とした。1625の全長7.8cm、最大幅1.3cmを測り、1630は全長9.1cm、最大幅1.7cmを測る。1619は、織機のミニチュアである。両端に糸抑えが表現されていることから精巧な作りと言える。全幅10cm、高さ2.4cmを測る。1627は、ミニチュアの琴である。上部に糸通しの孔が四つ穿孔され、対となる刻みが下部に同じく四つ観察出来る。幅2.4cm、長さ14.1cmの板を素材とする。琴柱の痕跡などは確認できないものの、両面の加工は丁寧である。1628は、陽形である。丁寧な削りによって整形される。基部は欠損している。また、断面形状が半円形であることから、「たも網」などの結合部の可能性もある。遺存する全長は21.9cm、最大幅1.8cmを測る。

付札状木製品

長方形の小形の板材を素材とし、長辺中央より上部に対になるようにノッチを加えたなおかつ墨痕などを持たないものを付札状木製品（注4）として定義した。このような木製品は、65点出土した。ここでは特徴的な形状を有するものを取上げた。1645～1648は、ほぼ同一の形状を有する付札状木製品である。大きめのノッチが特徴である。1645は、ほぼ完形品で長辺5cm、短辺2cmを測る。1649～1657・1663は、頂部が弧を描くタイプである。比較的小さめのノッチが特徴的である。特に1653・1663はノッチに接するように2つの穿孔が加えられる。長辺5.7cm、短辺3.1cmを測る。以上は、短辺に対し長辺の比が1：2程度の寸胴の札状

木製品である。1658～1662は、頂部が平らとなるタイプで小さなノッチが施される。短辺に対し長辺が3倍程度の長幅比をもつ。1664～1669は、幅に対し長さの比が1：5以上の比率である。簪状の形状をもつが、長辺にゆがみが観察されないことから付札状木製品とした。

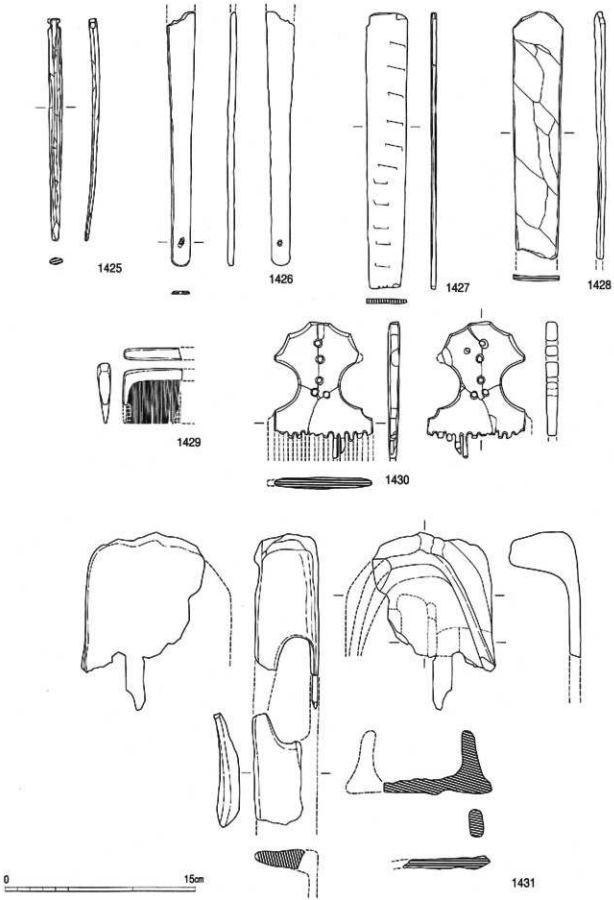
不明木製品

1631は、不明木製品である。中央部にほぞを設け、木製品が斜めに固定されるように貫通する孔が観察される。鳥形の一種か。完形品で全長5.6cm、最大幅1.6cmを測る。なお、立断面は先端部が尖るように整形される。1632は、L字形の木製品である。長辺は断面四角形で7.5cmを測り、短辺は箆状に細く整形される。1635は、摺り籌と考えられる木製品（注1）である。正面右側上部に連続したノッチが観察されるほか外見的な特徴はない。ほぼ完形品で全長12.2cm、最大幅1.5cmを測る。1636も同様に摺り籌と考えられる木製品である。両側縁に連続したノッチが観察される。丁寧な整形によって加工され、全長17.3cm、最大幅2.1cmを測る。1639は、連続する孔が2列に開けられた短冊状の木製品である。丁寧な加工が施される。完形品で長さ7.8cm、最大幅1.8cmを測る。1640は、長方形の短冊状の木製品である。各辺の中央に木釘の残る状況で出土したことから飾具であると考えられる。長さは5.2cm、最大幅2.8cmを測る。1639は、木釘状の木製品で断面は長方形である。先端部を尖らせ、頭部に鈍角を持つことから斎串の可能性もある木製品である。完形品で長さは6.8cm、最大幅0.7cmを測る。1642は、人形状の木製品を縦に半分に割ったような状況である。2つの穿孔が観察される。長さは7.9cm、最大幅0.9cmを測る。1643・1644は、対になる形状でかつ2つの穿孔が観察されることから飾り具の一種と考える。ただし、これに近い形状の木製品を摺り籌としている例もあるため検討を有する。1643は、長さは7cm、最大幅1.4cmを測り、1644は、長さは5.8cm、最大幅1.3cmを測る。

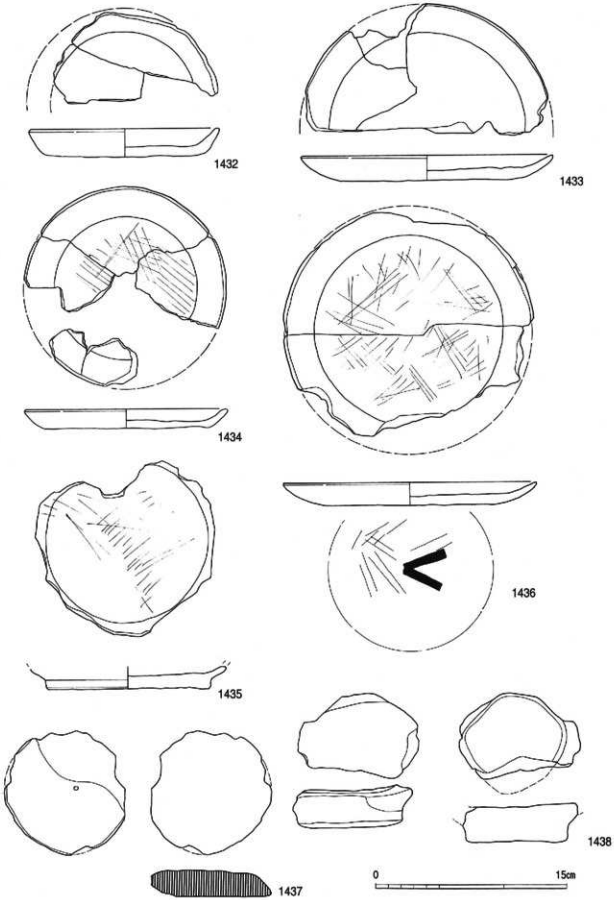
版木状木製品

1670は、版木状木製品である。出土状況は、裏面を上部として出土しており、草などの根による摩滅が観察される。非常に脆く風化しており、亀裂などが入りやすい状況であった。材質は、栗の板材(注5)で、原材となる板材は、下辺に大きな抉りが観察されること、穿孔が1ヶ所確認されることなどから、建物か何かの部材であったと思われる。

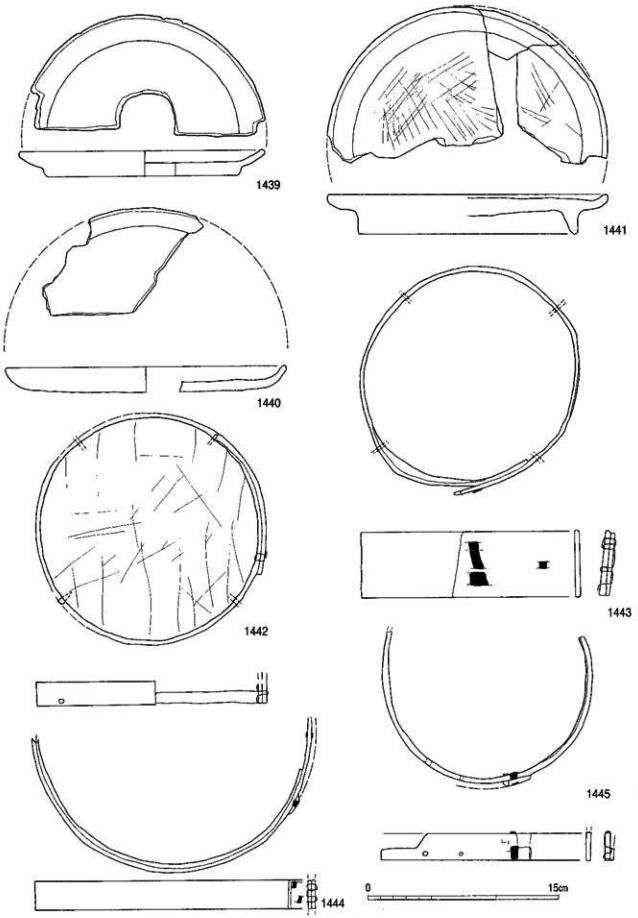
木製品の状況は、長さ38cm、幅21cm、厚さ2cmを測り、刀子状の工具などで両面に草花などの紋様が浮き彫りとなるように刻印される。正面向かって左側には、ウサギ（A）や、山（B）、草花（C・D）をモチーフとした紋様が浮彫りとして描かれる。裏面には、5ヵ所に均等に紋様（E～I）を配置しているが、丁度、川の流れに面していたためか摩耗が激しく細かな紋様のモチーフは不明である。記載される文様B・Cは、「紫地花弁文」で正倉院にある天平遺宝中の『草花文臈纈紫綾』に類例があり注目される。文様Aは、長い耳の表現を持つことから「ウサギ」とした。動きのある文様である。文様Bは、山岳文の一種で「岩」もしくは「山」を表現したものとされる。裏面にある文様Eは、天地逆に示してあり「忍冬文」、他の文様F～Iは、「蓮華文」の可能性がある文様である。



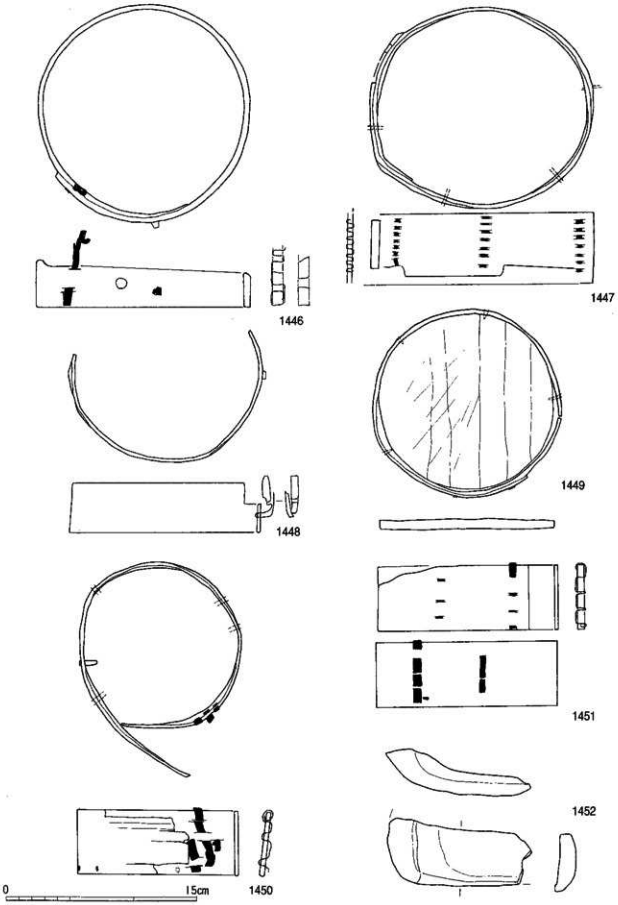
第108図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物30（木製品１服飾具）



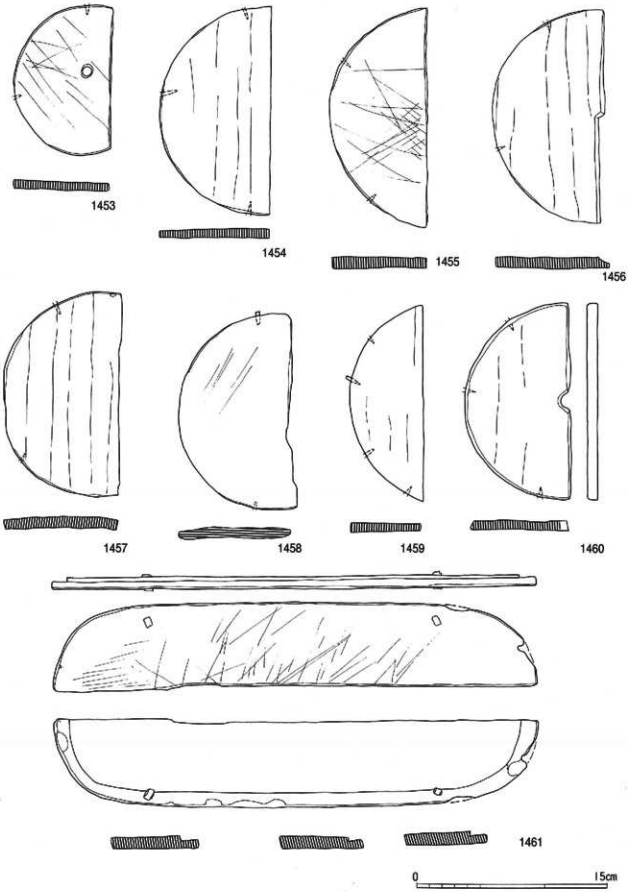
第109図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物31（木製品２容器類１）



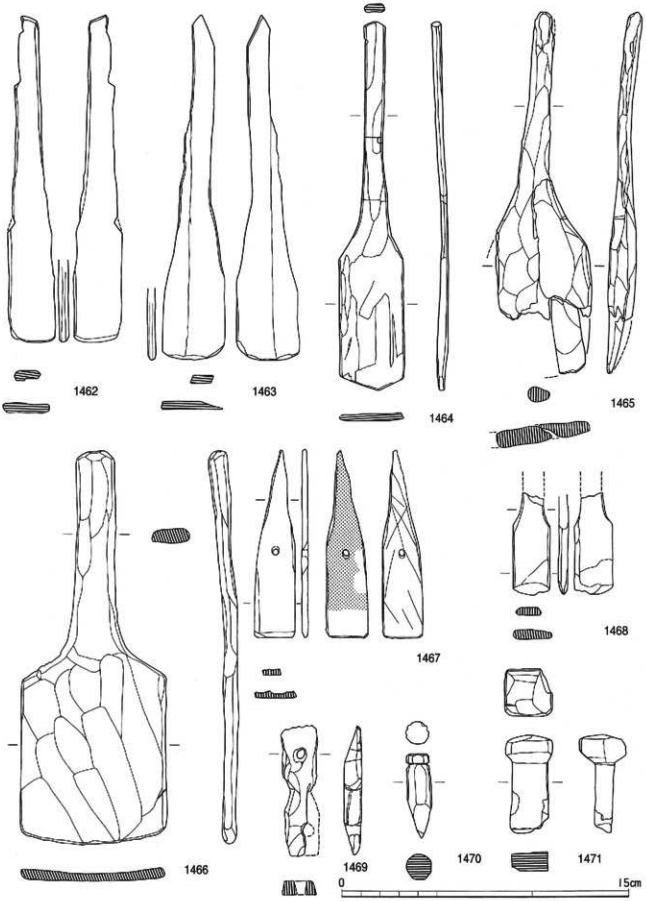
第110図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物32（木製品３容器類２）



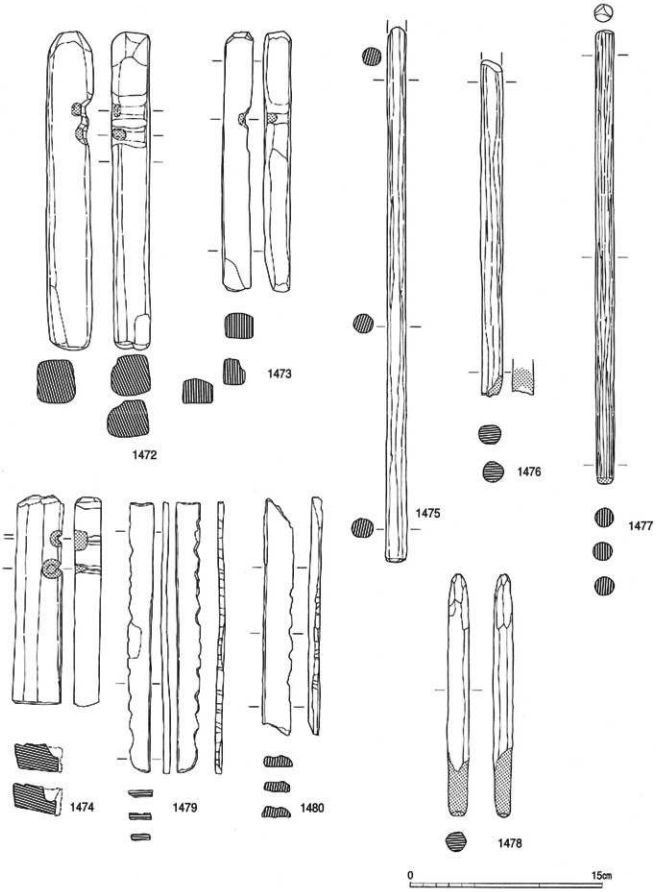
第111図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物33（木製品４容器類３）



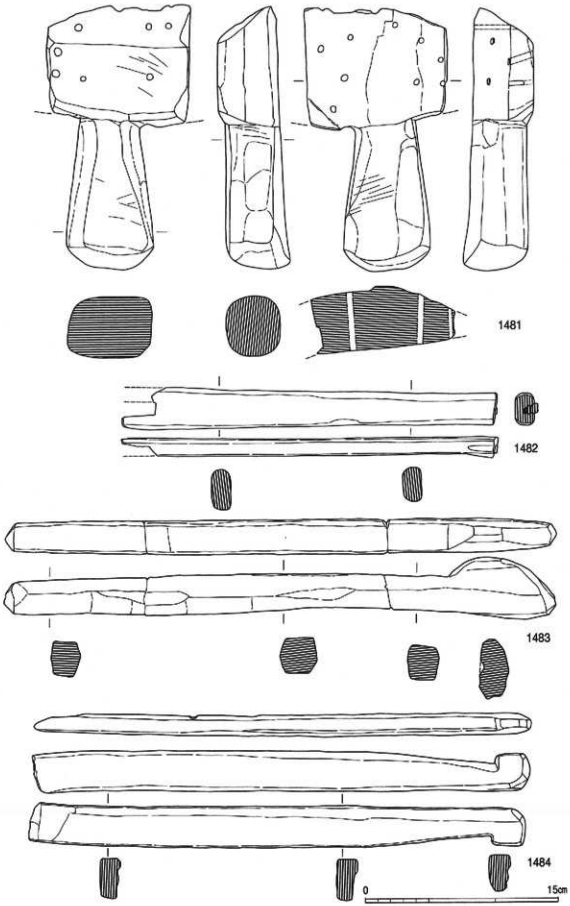
第112図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物34（木製品５容器類４）



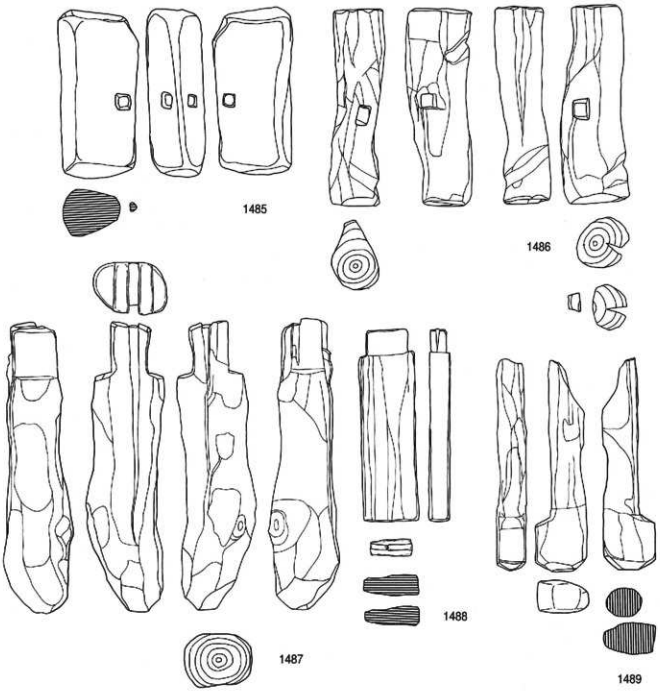
第113図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物35（木製品６食事具他）



第114図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物36（木製品７火起）

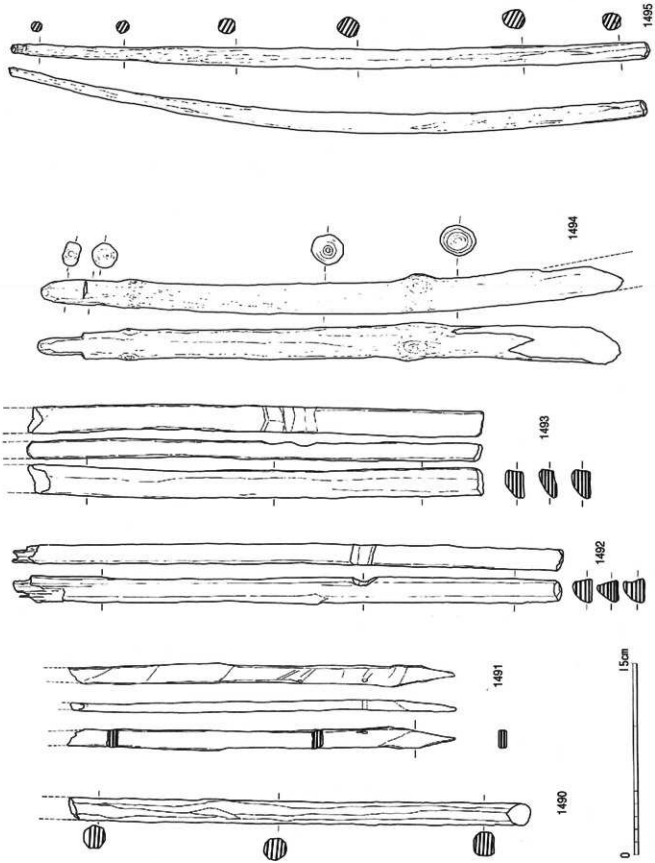


第115図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物37（木製品８工具類１）

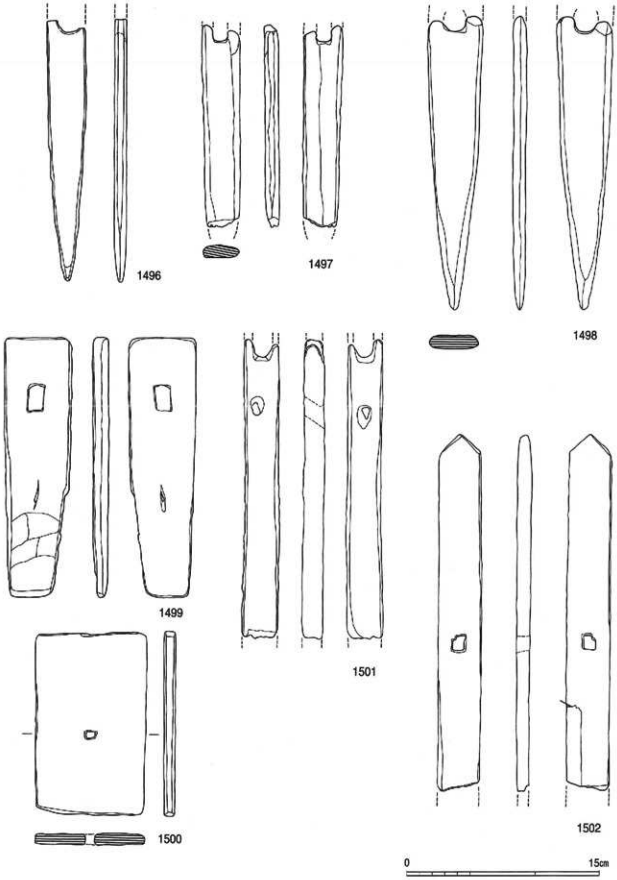


第116図　北高木遺跡SD100出土遺物38（木製品９農具・工具類）

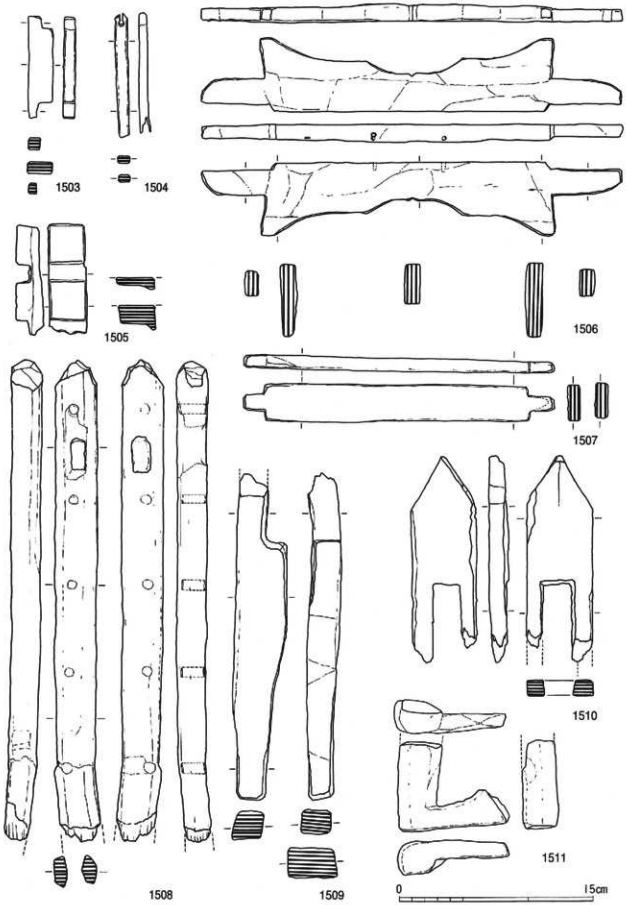
0　15cm



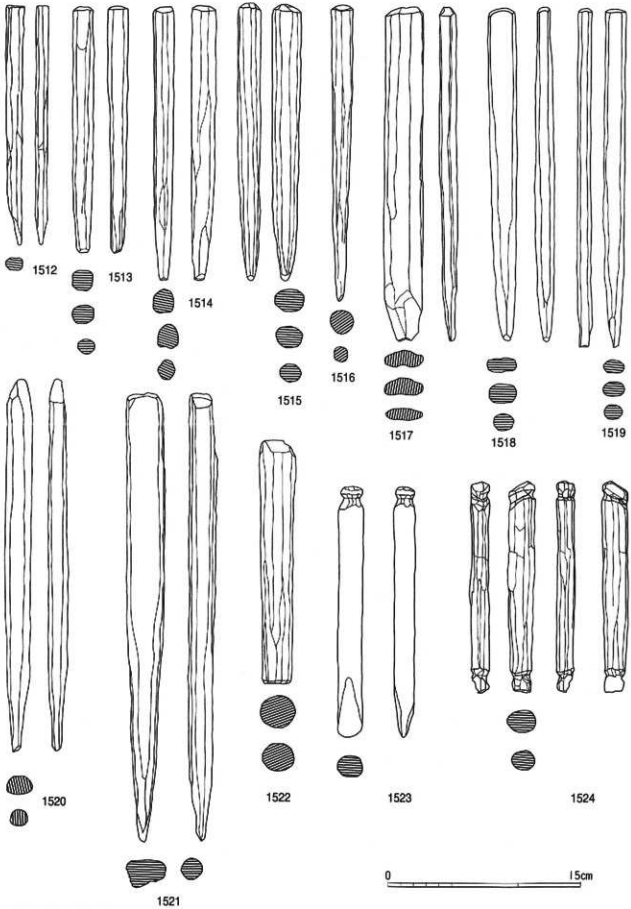
第117図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物39（木製品10工具類・武器）



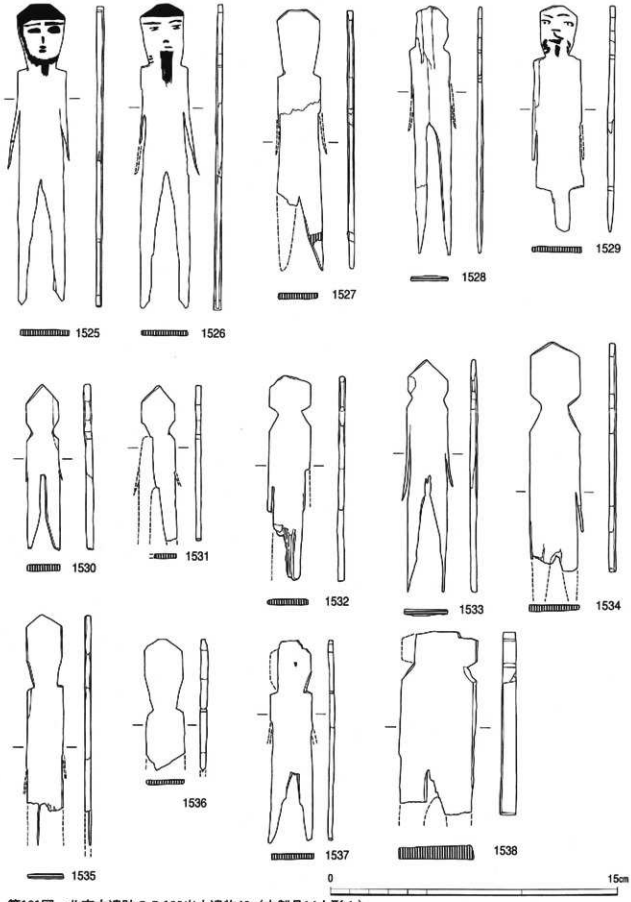
第118図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物40（木製品11工具類２）



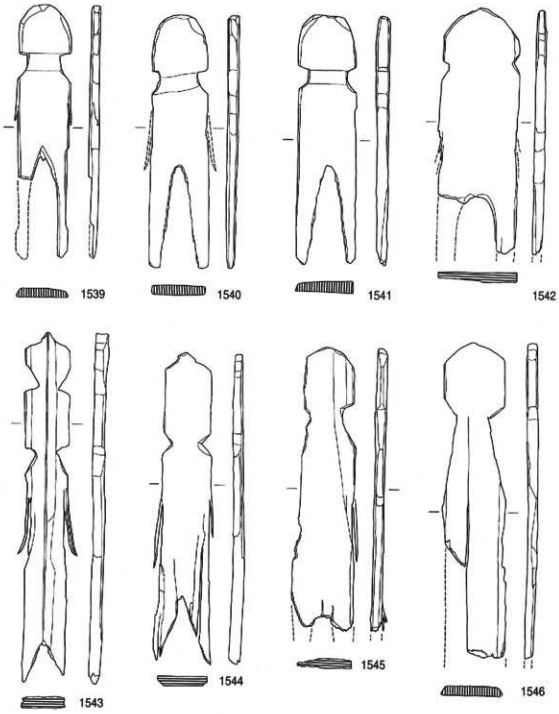
第119図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物41（木製品12部材）



第120図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物42（木製品13工具類）

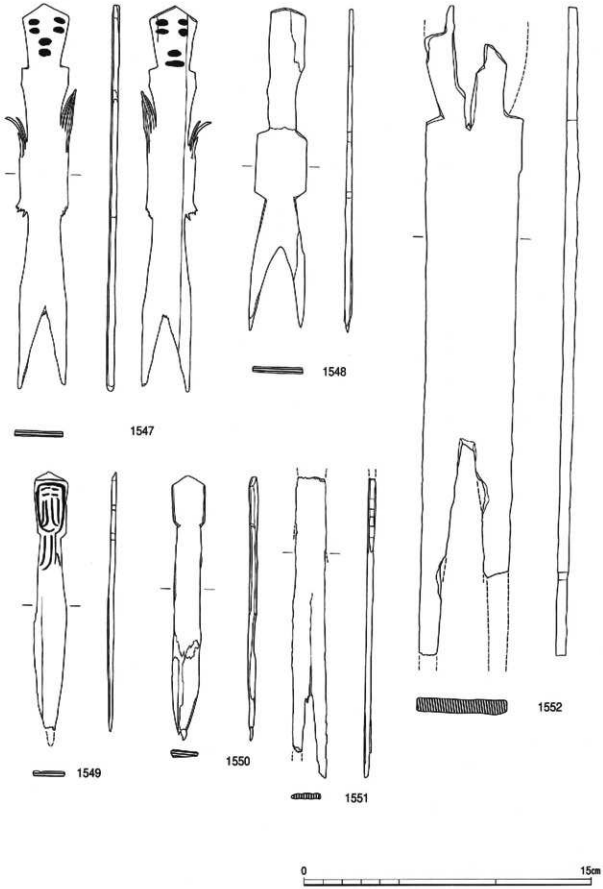


第121図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物43（木製品14人形１）

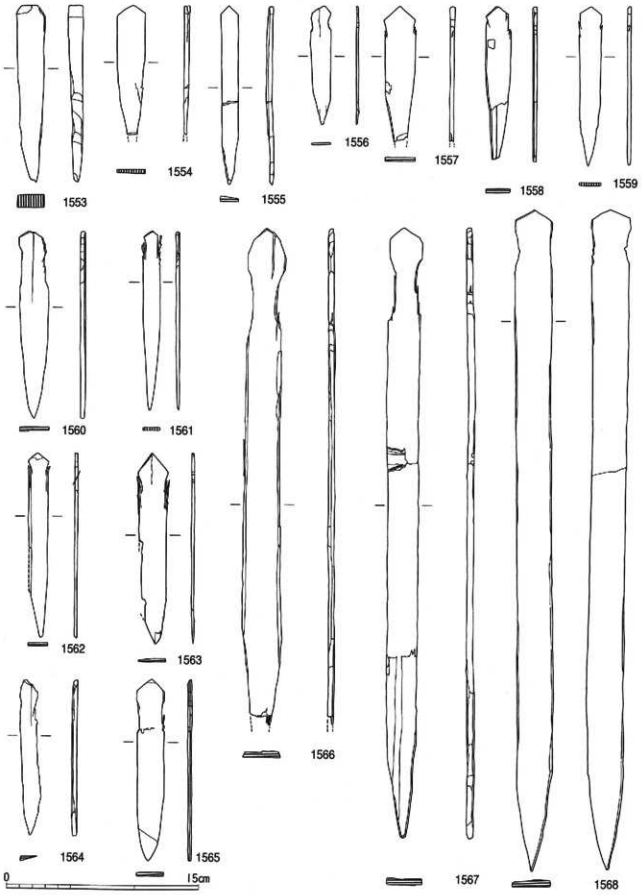


0 15cm

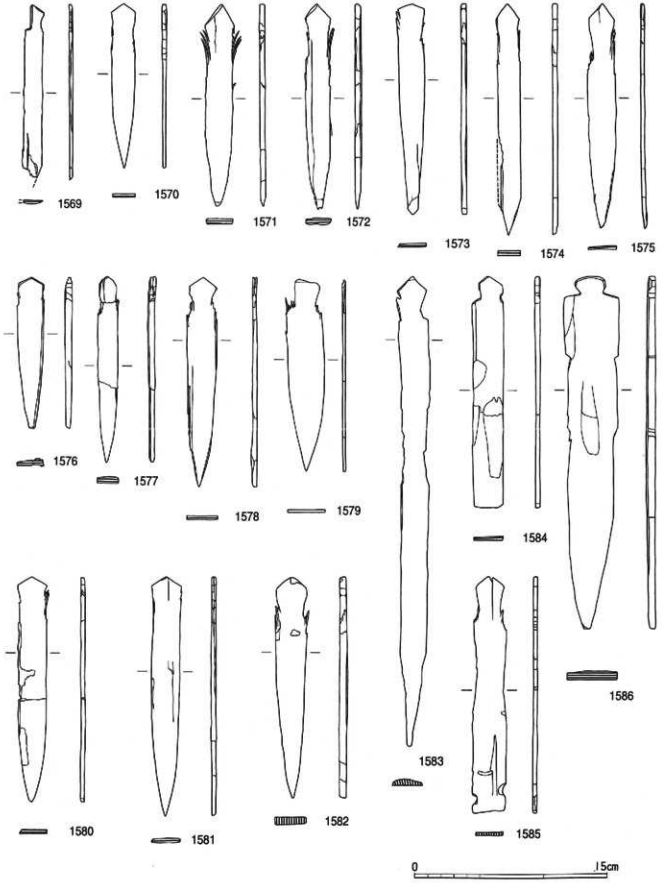
第122図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物44（木製品15人形２）



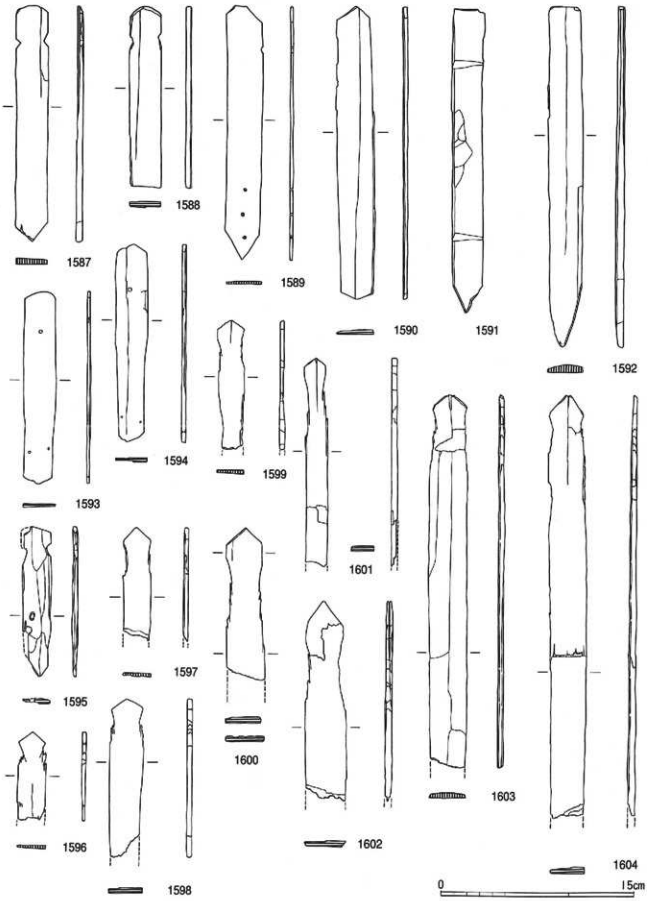
第123図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物45（木製品16人形３）



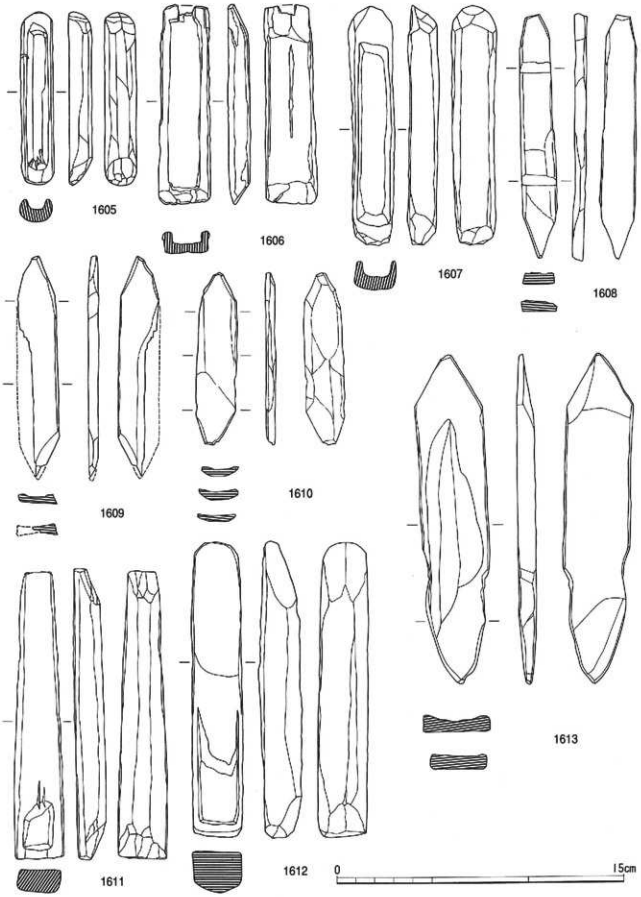
第124図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物46（木製品17斎串１）



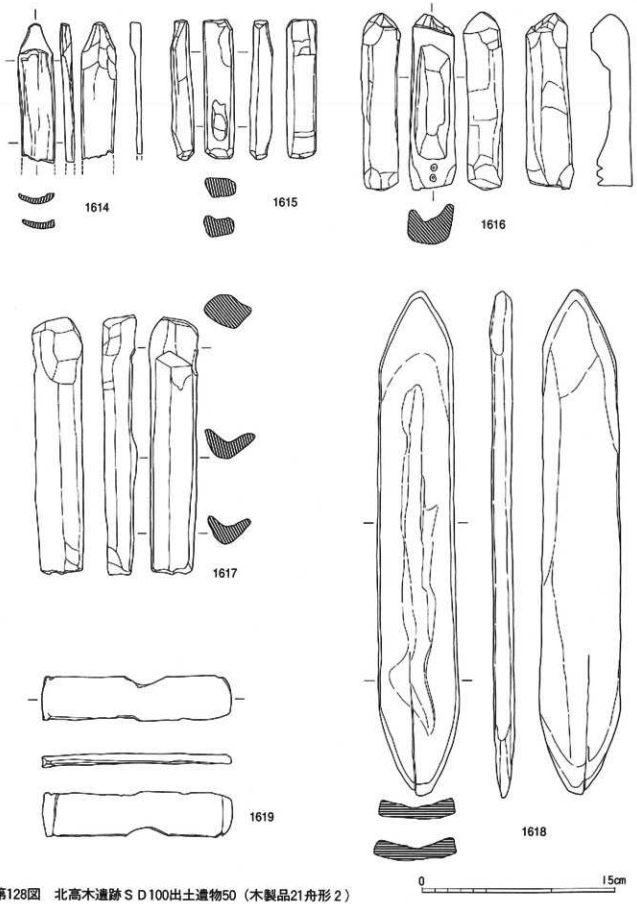
第125図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物47（木製品18斎串２）



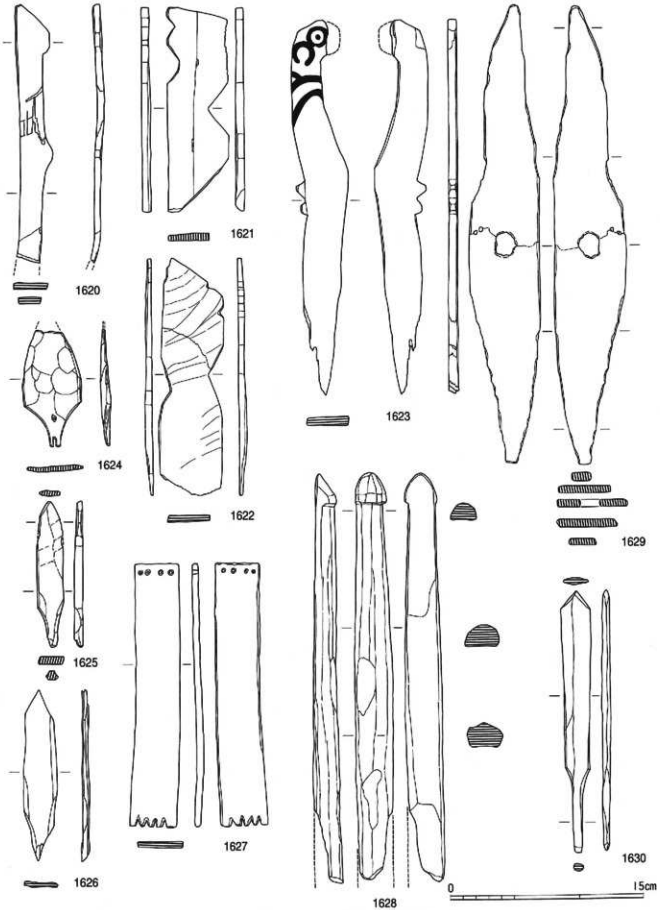
第126図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物48（木製品19斎串３）



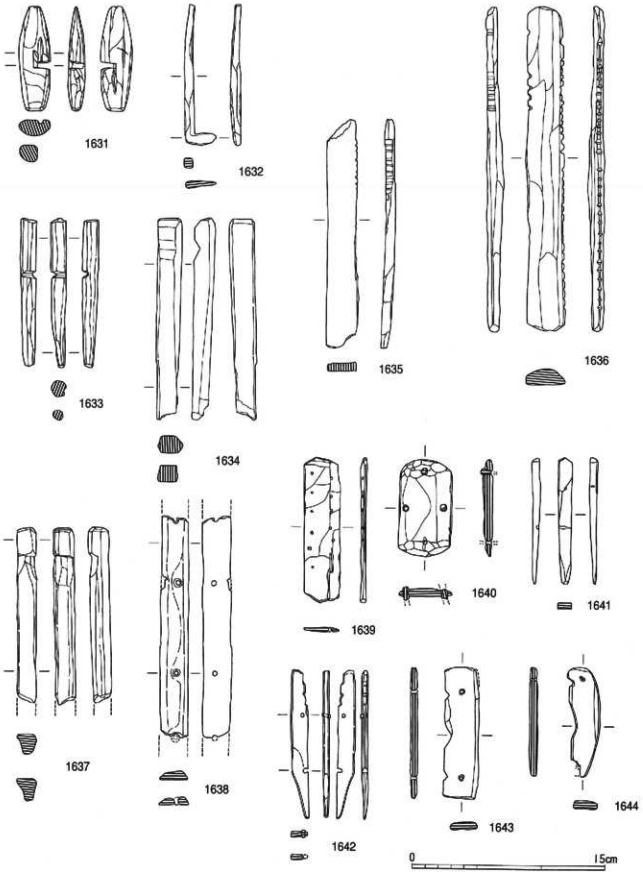
第127図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物49（木製品20舟形１）



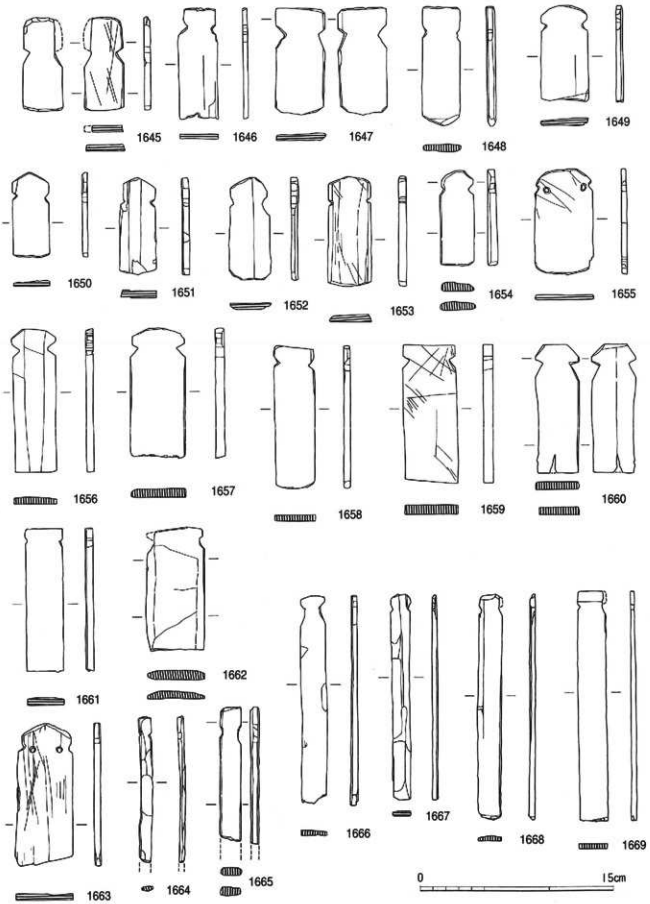
第128図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物50（木製品21舟形２）



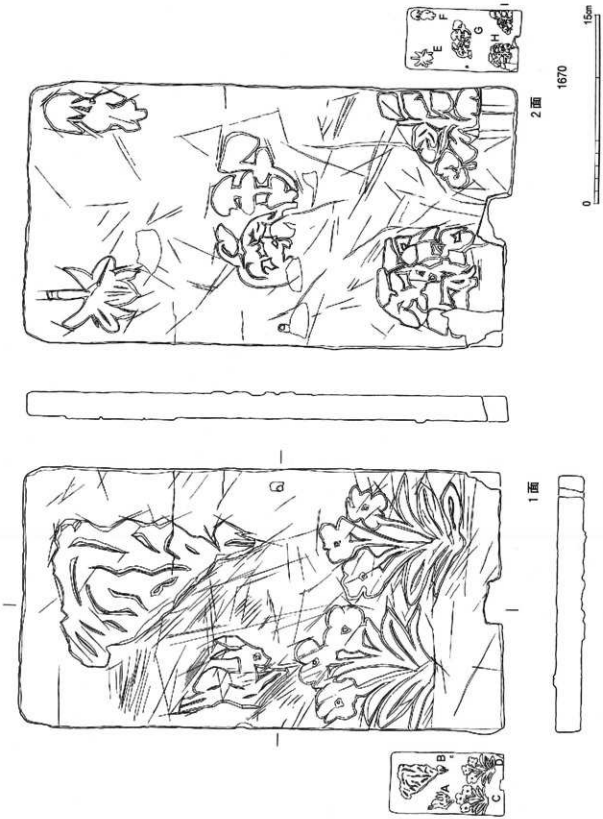
第129図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物51（木製品22その他祭祀関連遺物１）



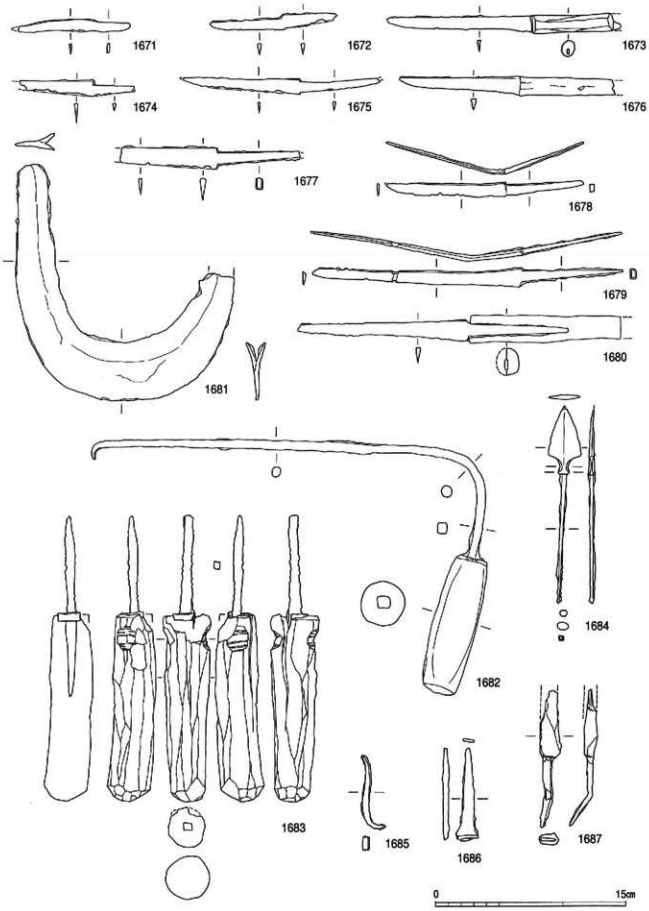
第130図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物52（木製品23その他祭祀関連遺物２）



第131図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物53（木製品24付札状木製品）



第132図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物54（木製品25版木状木製品）



第133図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物55（金属製品）

7　金属製品（第133図）

刀子類

1671～1680までが刀子である。金属製品の中で最も多く出土した。柄と刃部の関係から２種類に分離される。1671・1674・1675・1677～1680までが標準的な柄の付方で刃部の背と刃の中間に柄の中心線が付くタイプである。1672は、柄の中心線がやや上に位置しており特徴的である。柄の材質では1673・1680が木製、1676は竹製である。いずれも刃部と柄を固定する釘などが観察されないことから差込んで固定したものと考えられる。なお、1678・1679は共に大きく曲げられた状態で出土した。1671の全長は9.4㎝、刃の長さ7.2㎝、刃の幅1.2㎝を測る。

鍬

1681は、鍬先である。正面向って右側の一部が欠損している他、ほぼ完形品である。ただし、断面で柄を挟み込む部分には木質部などの遺存が認められないことから、廃棄された時点で柄と分離した可能性がある。鉄製品。幅5.1㎝、高さ19㎝、刃部断面角は５度を測る。

鑓

1682は、鑓（注６）である。断面の形状が円形をした鉄製の棒を大きくＬ字形に折り曲げ長辺の端部を更に折曲げ鈎状とする。短辺には、木製の柄が残存する。長辺の長さは34.8㎝、柄部の材質は広葉樹で、長さ12.6㎝、直径3.6㎝である。

鎌

1684は、鋼鎌である。全長16㎝を測り、茎部と鎌部の比は2：1である。中子に木質部が明瞭に残ることから、着柄状態で遺棄されたと考えられる。なお、鎌部には、錆が観察されない。刃部の開角は５度である。

工具類

1683は、柄のついた工具である。鉄製の鑿状の刃部を持つが、器種名は不明である。柄の上部には、刃部を固定するための締金具が遺存する。また、刀子状の工具によるノッチの削りが柄の上部に対になるように２ヶ所観察される。全長23㎝、刃部と柄の比は、１：２である。また、柄部の直径は３㎝である。1685は、Ｓ字形に曲がる鉄製品である。釣り針とも考えられるが、断面形状は、長辺１㎝を測る長方形で実用品とするには大きめと考える。やはりニードル状の工具とすべきか。1686は、鑿状の形態をもつ鉄製品である。下端の断面形状が鋭く尖ることから、この部分が刃部であると考えられる。長さ7.4㎝、下端の幅２㎝を測る。1687は、柄の残存が認められることから工具の一部と考えられる。残存する長さは11㎝、幅1.6㎝を測る。

8　石製品（第134図）

1688は、紡錘車で滑石製を素材とし両面に線刻を施す。上面の文様は、二重の同心円内に直線により斜格子を基本とする。下面は、２重となる同心円を外周に持ち中心部に向ってランダムに直線を引き文様とする。

1689・1690は、砥石である。共に端部を欠くことから破損により廃棄したものと考える。　（高橋）

第134図　北高木遺跡ＳＤ100出土遺物56（石製品）

（注１）金子裕之（1996）は、「鋸歯状木器」を『厳島念仏絵巻』などの記載から“摺り鄰”としての評価を加えている。このような木製品を祭祀具の一種として捉えている研究（水野）もある。また、刻みの規則性、反覆性などから同一形状の木製品を織機のスケールとする論考（渡辺1985）があり、類例などの検討が必要である。また、1486に類似する木製品についても渡辺は、同じ文献の中（pp180）で新潟県の“コモヅチ”を紹介する。

（注２）金子裕之（1981）は、文献上の記録などから複数の人形をヒモ等によって結束し、祭祀に使用した可能性を挙げている。

（注３）『木器集成図録（近畿古代編）』記載の分類基準による。

（注４）高島・石守（1992）は、未使用木簡と考えられない「付札状木製品」の用途として“ささら”の可能性を挙げている。

（注５）富山県木材試験場長谷川益太氏の同体分析による。

（注６）鑓の名称は、木器集成図録（近畿古代編）などを参考にした。あるいは、鈎状鉄製品と呼ぶべきか？合田芳正（1992ａ，ｂ）は、古代鉸前の研究の中でこのような鉄製品に「クルリ鐵」あるいは、「鉸」と名称付けて集成を行なう。

参考文献

大　島　町　1989　『大島町史』

金子　裕之　1973　「古代の木製模造品」

『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所　第38冊

金子　裕之　1981　「歴史時代の人形」『神道考古学講座』第３巻　雄山閣

金子　裕之　1985　「平城京と祭場」

『国立歴史民俗博物館研究報告第７集－共同研究「古代の祭祀と信仰」』

金子　裕之　1988　『律令制祭祀遺物集成』律令祭祀研究会

金子　裕之　1996　『まじないの世界Ⅰ』日本の美術　No.360

黒崎　　直　1976　「斉串考」『古代研究』10

合田　芳正　1992ａ　「いわゆるクルリ（クルル）鍵について」『青山史学』

合田　芳正　1992ｂ　「古代の錠前・鍵」『考古学雑誌』第78巻第２号

国立歴史民俗博物館　1985

『国立歴史民俗博物館研究報告第７集－共同研究「古代の祭祀と信仰」附編』

酒井　重洋　1976　「上市町限目新丸山Ａ遺跡」『大境』６号

酒井　重洋　1986　「井口村井口遺跡出土の晩期の土器」『大境』10号

巽　淳一郎　1993　「都城における墨書人面土器祭祀」『月刊文化財』

高島　英之・石守　晃　1992

「いわゆる「付札状木製品」について」

『研究紀要－9－』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

高堀　勝喜編　1983　『真脇遺跡』

水野　正好　1985　「招福・除災－その考古学－」

『国立歴史民俗博物館研究報告第７集－共同研究「古代の祭祀と信仰」』

渡辺　　誠　1985　「編布の研究」

『日本史の黎明－八幡一郎先生頒寿記念考古学論集』六興出版

第５章まとめ

第１節　土器

１　土器

発掘調査で出土した遺物は、須恵器、土師器、木簡、木製品等である。特に溝ＳＤ01及び溝ＳＤ100を中心に豊富な土器類が出土した。

また、溝ＳＤ100では層位及び土器出土位置の観察から、下層部出土遺物と上層部出土遺物に区分することできる。便宜上ここでは、下層部出土遺物をⅠ期、上層部出土遺物をⅡ期とし、それぞれについて述べたい。

県内では奈良・平安時代に属する集落遺跡の発掘調査はかなり報告されている。しかし県中央部に位置し、国庁があった射水郡域での発掘例は少ない。したがって、この郡域のこの時期の土器ついても不明な点が多く、他の郡の事例を参考にせざるえなっかた。

今回の発掘調査で特に溝ＳＤ01及び溝ＳＤ100から出土の土器は、溝内出土土器であることから個々の土器の示す時期には一定の幅が必要であるとしても、量的にも豊富であり、同郡域における集落遺跡の土器組成を知るうえで良好な資料であると考えられる。

Ⅰ期

整理箱約200箱と多量に出土した。その内訳は須恵器が約８割強と圧倒的に多く、他は土師器である。須恵器は食膳具（杯・杯蓋・皿・高杯等）が全体の７割を占め、残りが貯蔵具（壺甕類）である。また、器種別には食膳具の杯・杯蓋類の割合が圧倒的に多く須恵器の約半分を占める量であり、ついで貯蔵具の壺類が多く出土した。

器種として、須恵器杯・杯蓋類の占める割合が極めて高く煮沸具等の割合が少ないのは、従来確認されている集落遺跡と異なる。

須恵器に比べ土師器の量は少ないが、その大部分は甕である。

土器の製作技法としては、須恵器杯は内外面をロクロナデしたのちヘラ切りするものが大半を占める。数点ではあるが糸切り技法による杯もある。土師器の甕は、その成形・調整方法は体部上半部では内外面カキメ、体部下半部では外面をケズリ、内面をハケメ調整するものが大半を占める。少ないが体部上半部の内外面ともハケメ調整する甕もある。

なお、溝ＳＤ01から出土した土器もこの時期に属する。

Ⅱ期

整理箱にして30箱程出土した。Ⅰ期に比べ量は少ない。しかし他の同時期の集落遺跡から出土する土器量に比べれば、一溝から出土した土器量としては決して少なくはない。

Ⅰ期では多量に出土した須恵器はこの時期には減少し、代わって土師器の杯・椀が激増する。土師器杯椀類だけで全体の約半分を占める。また、新たに土師器の有台皿が加わる。

土器の製作は全体に雑である。技法としては、須恵器の杯・椀は内外面はロクロナデで底部糸切り、土師器杯・椀・皿も内外面はロクロナデで底部糸切りで調整する。土師器の甕は、その成形・調整方法は体部上半部では内外面カキメ、体部下半部では外面をケズリ、内面をハケメ調整するものがほとんどである。

北陸地域における８世紀代の集落遺跡から出土する遺物で主体をなすのは、須恵器と土師器である。またそれぞれのあり方は、食膳具(杯・皿・椀・高杯・鉢等)・貯蔵具(壺・甕)は須恵器、煮炊き具(甕・鍋・釜等)は土師器が使用されている。また、越中の集落遺跡では、この時期の一遺跡から出土する須恵器と土師器の割合は、地域差や遺跡の性格等によって多少の異なるものの須恵器類は５割強～６割であり、わずかではあ

るが須恵器類が土師器類を上回っている。これが一般的な遺跡の状況である。9世紀後半にはいると逆転し土師器類が須恵器類を上回る。

出土土器の推定年代にあたっては、上記の特徴を考慮し発掘調査から出土した紀年木簡等を年代推定の根拠としている平城京や平安京等の土器編年、北陸または県内の編年を参考とした。したっがてⅠ期は8世紀後半から9世紀第2四半期、Ⅱ期は9世紀第3四半期から10世紀第1四半期に属すると考えられる。（安念）

2　墨書土器

墨書土器は、溝ＳＤ01からは22点、ＳＤ100はから92点、判読不明を含めるとあわせて120点あまりが出土した。

Ⅰ期はですべてが須恵器であるのに対し、Ⅱ期では1点のみが須恵器で、その他はすべて土師器である。器種別には須恵器の無台杯（52点）、有台杯（29点）、蓋（19点）、土師器の無台椀（7点）皿（2点）に記載がある。墨書の判読が可能な93点の記載内容は、おおまか下記のように分類できる。

Ⅰ期に属するもの

①施設　西庄・庄(以上ＳＤ100)

②人名　丈部・賞万呂(以上ＳＤ01)、小野殿・秋万呂・芝万呂・碓万呂・成公・玖万(以上ＳＤ100)

③官職関係　介？(ＳＤ01)、西殿・王(以上ＳＤ100)

④地名及び場所　山(以上ＳＤ100)

⑤物品　木(ＳＤ01)、木・林(以上ＳＤ100)

⑥数字　十(ＳＤ01)、二・四・十(以上ＳＤ100)

⑦その他　成・秋・中・法・大(ＳＤ－01)、上・中・大・仁・成・納・西・真・番・人(以上ＳＤ100)

「①施設」の建物を意味すると考えられるもの「西庄」(1点)、「庄」(4点)が5点。「②人名」に確実に推定できるもの8種類12点ある。いずれも2文字以上で構成されている。しかし「⑦その他」に類別した「成」(2点)「秋」(2点)「西」(1点)の文字は、「②人名」に示した人物名の一字としても考えられる。「⑥数字」の「十」は30点もあり、今回出土した墨書土器の中でも最も多い。何を意味しているかは不明である。

Ⅱ期に属するもの

①施設　佐見御庄(ＳＤ100)

②その他　富・冨・中(以上ＳＤ100)

「庄」について北陸地方を中心とする初期荘園に関する遺跡から出土する墨書は「庄」墨書と人名墨書を中心に構成される傾向が強いとされている。この北高木遺跡のⅠ期では「庄」墨書と人名墨書を中心に構成している。県内では入善町じょうべのま遺跡からは「西庄」の墨書土器が出土している。（安念）

第2節　木製品

1　祭祀関連木製品

北高木遺跡で出土した木製品は、祭祀に関連したものと日常的な道具に大きく分類される。特にC・D地区を流れるSD100は、その旧流路内に多くの木製品が含まれていたことは、すでに触れたとおりである。

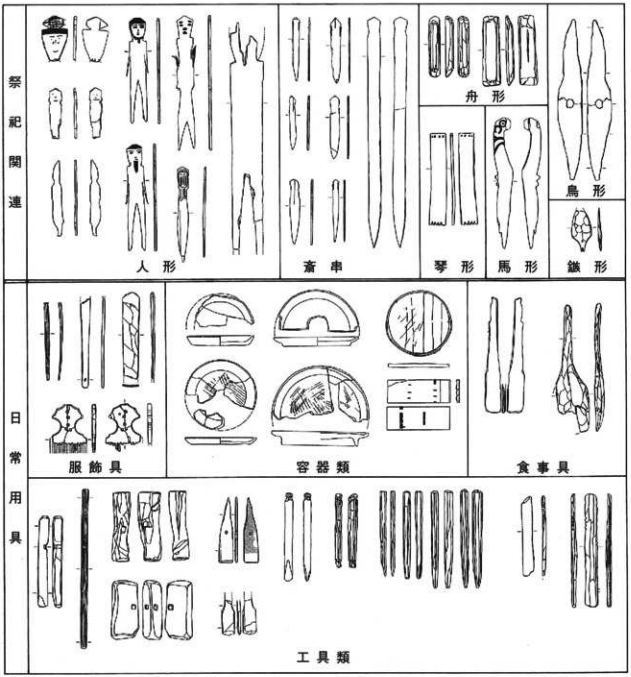
この木製品を、日常用具遺物と祭祀関連遺物に分類したものは、第135図の北高木遺跡出土木製品組成図に掲げた。ただし、版木状木製品のみ考察を別に設けたため、ここでは触れない。

祭祀関連木製品の器種構成について

祭祀関連木製品には、下記の7種類に分類できる。

人　形

B・C・D区の溝状遺構からそれぞれ出土した。総数で40点程度である。この内大半がC・D区を流れる

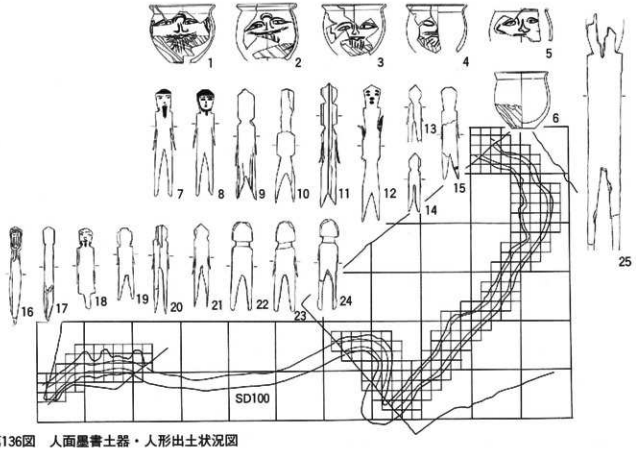


第135図　北高木遺跡出土木製品組成図

ＳＤ100から出土した。大きさ的には例外的に第123図－1552のように高さが45cmを超える大形のものもあるが、基本的には20cm前後のものがおおい。本文でも触れたが、このうち顔表現が施されるものは、５点とわずかである。顔の表現率からいえばＢ区出土の人形は、大半で表現がなされるのに対し、Ｄ区出土の人形ではその多くが表現されない状況にある。ただし、人形には必ずしも顔の要素が必要でないとされるため、人形とする定義には原則として文字どおり人の形をとる木製品をあてた。また顔の表現が記載された木製品についても人形としている。シルエット的には、人間型のものが主体を占め、サジ状の形態を有するもの付札木簡状のものが若干含まれる。結束痕と考えられる痕跡を有する人形も若干出土する。第122図に提示した。

斎　串

Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区の溝状遺構からそれぞれ出土した。大半がＣ・Ｄ区で出土したが、総数にして約279点を数える。この中には、付け札状のものも含まれることはすでに述べた。ただし基本的には、頭部が鈍角からなり下端が鋭角になる形状のものが多く、通称“削りかけ”といわれる切り込みが観察される。『木器集成図録』における分類基準を適応すると出土した斎串の大半がＣ－４形式と呼ばれるものであることが窺える。切り込みの単位は、遺存状況が悪いため検討していない。なお、実測可能な斎串のうち最大のものは第124図－1568に提示したもので長さ35cm幅２cmを測り、反対に最小のものは第124図－1554に提示したもので長さ6.8cm幅1.5cmを測る斎串である。さらに斎串の中には厚みが他のものに比べ極端に厚いものが存在する（第125図－1582など）。このような斎串の中には縦方向に刀子状の工具による切り傷が観察されることから、さらに細かくスライスして複数の斎串を作製しようとした可能性を提示できる。



第136図　人面墨書土器・人形出土状況図

舟　形

D区のみで出土を確認した。形状分類は、本文に触れたように大きくA～Cまでの3つの形状に分類できる。それぞれの特徴についてはここでは詳しく触れないが、外観的な特徴はAがいわゆる丸木舟形、Bが平底の和船形、Cがその他の形状となる。大きさ的な分類では、20cm前後の木製品が大半であるが、約27cmを測る大型の舟形も含まれる。また、出土した舟形には未製品と考えられるものも含まれており、祭祀を行う際に素材となるブランク（粗形）を搬入し最終的な船の形に仕上げたと考えられる。

馬　形

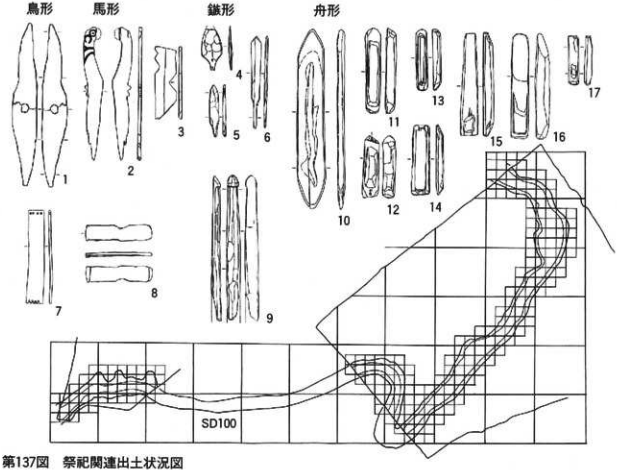
D区のみで出土を確認した。合計で3点の出土である。うち1点は片面のみであるが、頭部・頚部の墨書表現がされる。

鳥　形

D区のみで出土を確認した。1点のみの出土である。2点に割れて出土した。墨痕は確認できない。

付札状木製品

この種の形態を有する木製品が、祭祀関連遺物と考えられるかどうかについては異論があると思われる。本文中の注においてもすでに触れたが、高島・石守は、墨痕がなく木簡と認定できない同様な形態の遺物の用途について「鮨」を想定している。金子裕之にも同様な見解が紹介されており、祭祀具としてあつかっている。加えて県内の民俗資料では五箇山に伝わるコキリコの初原的な形態として131図に提示するものをあつかっている。従ってここでは祭祀具に準ずる扱いとする。確認できたのは総数で65点である。また、摺鮨（第130図1635・1636）とされる木製品も出土するが、これについては以下のような異論がありここでは触れない。渡辺誠は、このような規則的な刻み目を有する木製品として新潟県一之口遺跡例を提示し、「目盛板」と称し網布用の目盛板とする。



第137図　祭祀関連出土状況図

日常的な木製品のあり方

日常的な木製品には、容器類（曲げ物・刳物）、食事具（箸・杓子など）建築部材、什器類が含まれる。B地区でのＳＤ01には、祭祀的な遺物のみの出土に対し、Ｃ・Ｄ地区でのＳＤ100には、このような日常的な用品が多く含まれる。組成的に最も多いものが、容器類である。下に項目立てて確認する。

容器類

器形的には、曲物が多い。しかし、総点数については、破損が多いため、実測が可能な30点のみを提示した。刳物は、高台を意識したタイプ、そうでないタイプに２分されるが、基本的には盤状の土師器の模倣品と考えられる。しかしこの種の遺物にも方形の穿孔を穿つものが含まれており、やはり祭祀に用いられる文物であった可能性を有する。

服飾具

服飾具には、靴、杓、桧扇などが含まれる。いずれも県内では出土例は少ない。

什器類

什器類には机などの部在も含まれる。これらの文物はこれ自体が祭祀関連遺物というよりも祭壇などの用途を想定できる。

北高木遺跡での祭祀形態のあり方

第136図および第137図に示したものは、墨書土器を除く祭祀関連遺物の出土状況である。大きく集中地点が観察できる。ここは、杭列などによって護岸を行なった箇所として把握できたところである。調査時には杭列から陸地側でも遺物の出土が多く見られたことから、護岸を行なう前段としての祭祀が想定される。主として８世紀末から９世紀初頭にかけての祭祀では、須恵器とともに大量の木製遺物を用いる祭祀が営まれていたことが窺える。

まとめ

地方の遺跡で古代の祭祀が明瞭な形で確認できた遺跡は、俵田遺跡（山形県）などが知られる。この遺跡では、人面墨書土器内に斎串と人形を数本入れ置き、その周囲に斎串を配置するものであった。

今回、報告してきた北高木遺跡では、継続的かつ断続的に祭祀が行なわれたため明確でない。しかしながら墨書土器に確認できる文字に「納」などが含まれることから、ここで出土した日常的な木製遺物においても「捧げ物」の容器であった可能性が多分にある。更に明確に古代の建物遺構として確認できた遺構は、明確な居住を前提とした遺構は含まれない。このことからも本遺跡において確認した日常的な木製遺物は、祭祀に用いるために敢えて搬入したものとみるのが妥当である。

また、県内での人面墨書土器の出土例は、現時点では、南太閤山１遺跡例・小矢部市埴生南遺跡例などそれぞれの遺跡で１点ずつと数が極めて少なく、加えて、1327のように人面墨書土器としての未成品も存在し、また、土器の器形・調整具合などから、この遺跡で人面墨書土器として使用された土器は、そのためのオーダーメイド的な特殊な土器と言える。この意味においては、都城における祭祀での人面墨書土器と同じような位置付けが出来よう。

（高橋）

2　版木状木製品

北高木遺跡から出土した版木状木製品の概略とその出土状況については、第４章第３節にすでに記した。ここでは、そこに描かれた文様の検討を通して版木状木製品の用途について以下検討する。

文様の検討

版木状木製品の文様は、大きく見て草花文とそれ以外のものとに分類できる。第139図に拓影を示したように、上段の枠内が草花文の範疇で捉えられるものであり、花弁文・忍冬文・蓮華文である。そのなかで花弁文（文様Ｃ・Ｄ）は、正倉院の「草花文臈纈紫綾」「臈纈綾雑帖」のなかに類例が認められ（第138図－ａ）、明石染人はこれを天平期に多く用いられた文様のひとつとしている（明石1927）。文様Ｇの草花文は法隆寺献納宝物の「鸚鵡文臈纈帔代」の中に類例が認められる文様である。その他の文様のうち動物文に分類される文様Ａ（第139図）は、明らかにウサギを表現したものである。文様Ｂは山岳文であるが、これもやはり正倉院「山水纈纈屏風」中に描かれたそれと酷似している。このように草木文・山岳文については、古代の文様中に類例を見出すことができるが、動物文としたウサギのモチーフは他に類例を見出すことが見られない珍7である。

用途の検討

この版木状木製品は、表面に染料などの付着痕跡こそ確認できなかったが、染色の際に使用された版木の一種と考えられる。古代の染織技術について明石染人は、正倉院遺宝などの調査から奈良時代の染色・彩色方法には、臈纈・纈纈・絞纈をはじめ摺文など24種類があったことを指摘している（明石1930）。この版木状木製品は、その中でも「摺文」に用いられた版木と考えることができる。この木製品には両面に文様が施されていること、表現された個々の文様は天地がまちまちであることなどがその根拠となる。

一方、これを臈纈用の版木とみる考えもあるが、染織研究者らによると、木版は木製素材のため蝋が固まりやすく連続して布に施文するには適さないとされる。加えて、吉岡幸雄らは、古代の臈纈染めの版は蝋の性格上、木版ではなく金版を用いたとする（吉岡他1978）。纈纈用具の場合は、インドなどに伝わるその版木には文様を線状に浮彫りにし、凹んだ文様の内側に染料が入るように穿孔が施される。また、現代の纈纈染めは左右対称の２枚の版木を一組で用い、染め抜かれる布が折り曲げられるため、文様はシンメトリックに表現されたものが多い。したがって、この版木状木製品を臈纈・纈纈用の版木と考えることは困難である。また、版木を用いない絞纈用は当然除外される。

以上の検討から、版木状木製品としてとりあげたこの木製品は、摺文に用いられた「版木」そのものであり、その一種と考えるのがもっとも妥当であろう。そこで想起されるのは、この版木の大きさである。すなわち、この版木は栗の柾目板を素材とし、長辺38cm、幅21cmの大きさである。奈良・平安時代の調庸の布の幅は２尺４寸が基本であり、この版木の長辺（約１尺２寸）は、その二分の一にあたる。このことからもこの版木は布に摺文を施すためのものであり、おそらく調庸布の規格を考慮して、長辺はその半分の大きさに作られたものと推定されるのである。

なお、古代以降の版木の出土例は、全国的にみても平城京例と京都府定山遺跡例などごく数例が知られているのみであり、この版木は古代の染織技術を知る上できわめて貴重な資料である。

（高橋）

参考文献

明石　染人　1927　「天平時代の染色工芸に就いて」『染織史考』磯部甲陽堂

明石　染人　1930　『日本上代の染色技術について』

小林　行雄　1962　「2　機織」『古代の技術』塙書房

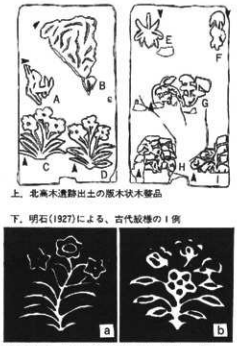
角山　幸洋　1968　『改訂増補版　日本染織発達史』田畑書房

角山　幸洋　1983　「古代の染織」『講座　日本技術の社会史　第3巻　紡績』

関根　真隆　1974　『奈良朝服飾の研究　本文編』吉川弘文館

沢田むつ代　1988　『日本の美術4　№263　染織（原始古代編）』

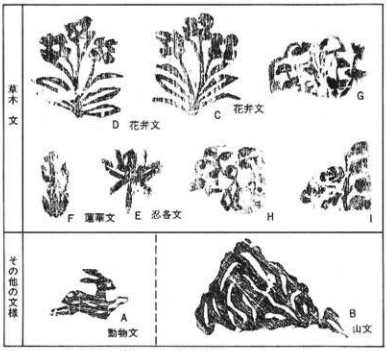
吉岡　幸雄　他　1978　『別冊太陽　古代の染色』



上．北高木遺跡出土の版木状木製品

下．明石(1927)による、古代版様の1例

第138図　版木状木製品と古代文様

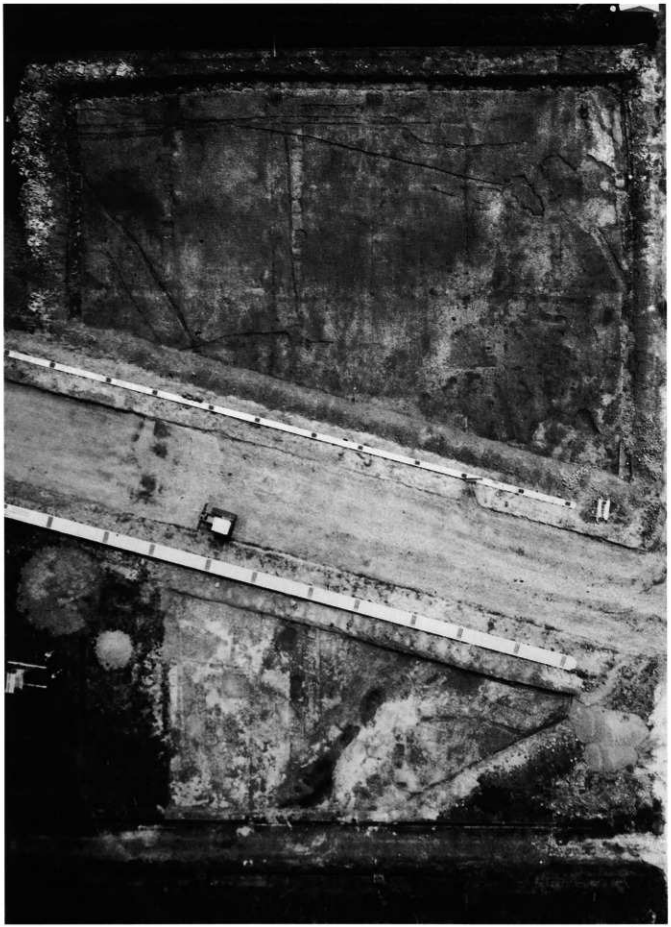


第139図　版木状木製品の文様構成図

写真図版 1
北高木遺跡
付近の
航空写真
（1990年頃撮影）

写真図版 2
町道地区 1
（完掘状況・
S D01
完掘状況・
遺物出土状況）

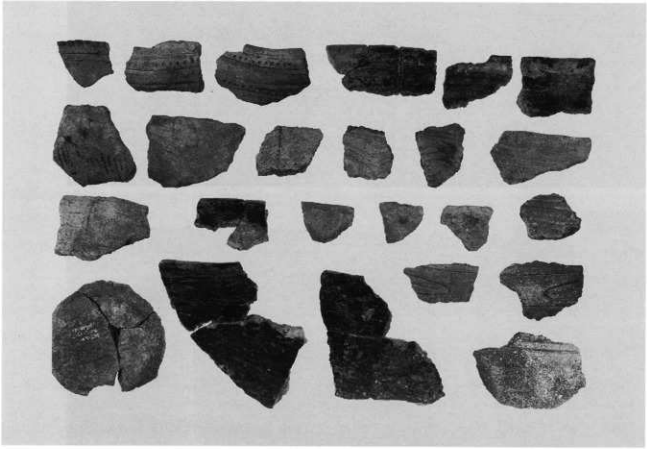
写真図版 3
A地区 1
全景（上空）

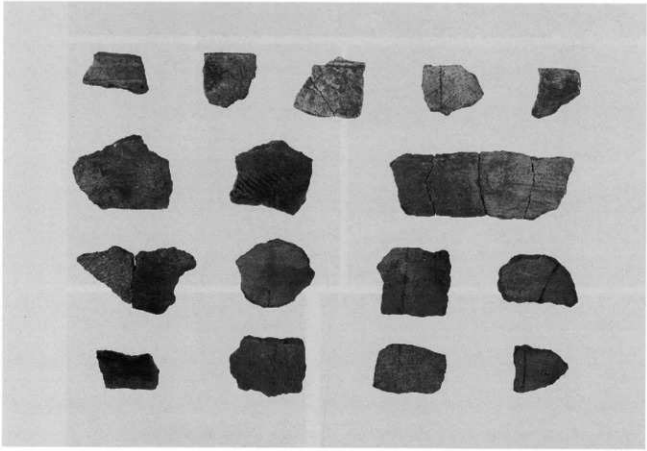


写真図版 4
A地区 2
西区
（完掘状況）

写真図版 5
A地区3
東区
（完掘状況）

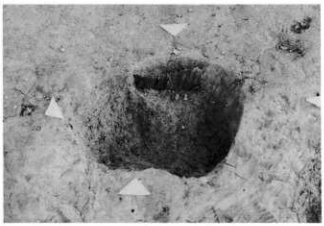
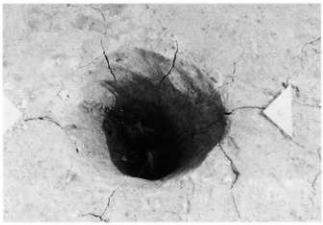
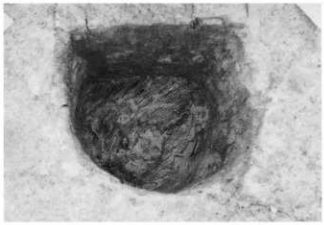
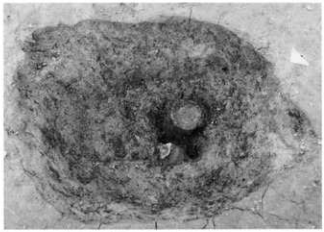
写真図版 6
A 地区 4
出土遺物
縄文土器





写真図版 7
B地区 1
全景（上空）

写真図版 8
B地区 2
S D01
（遺物出土
状況他）

写真図版10
B地区4
出土遺物(1)
須恵器1

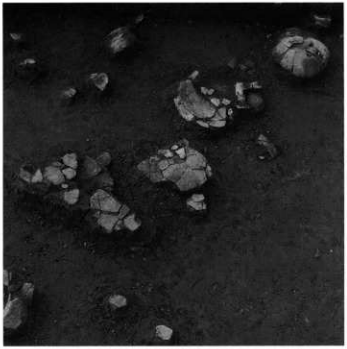
写真図版11
B地区5
出土遺物(2)
須恵器2

写真図版12
B地区6
出土遺物(3)
須恵器3・土師器

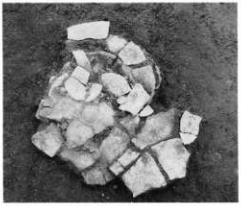
写真図版14
B地区8
出土遺物(5)
須恵器5

写真図版15
C地区1
93年度調査区(1)
全景（上空）

写真図版16
C地区2
93年度調査区(2)
弥生土器等出土状況1

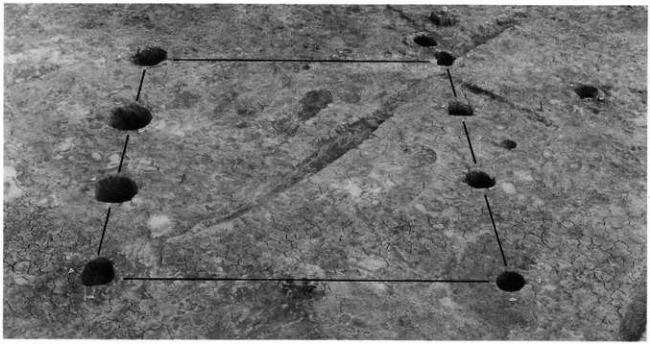


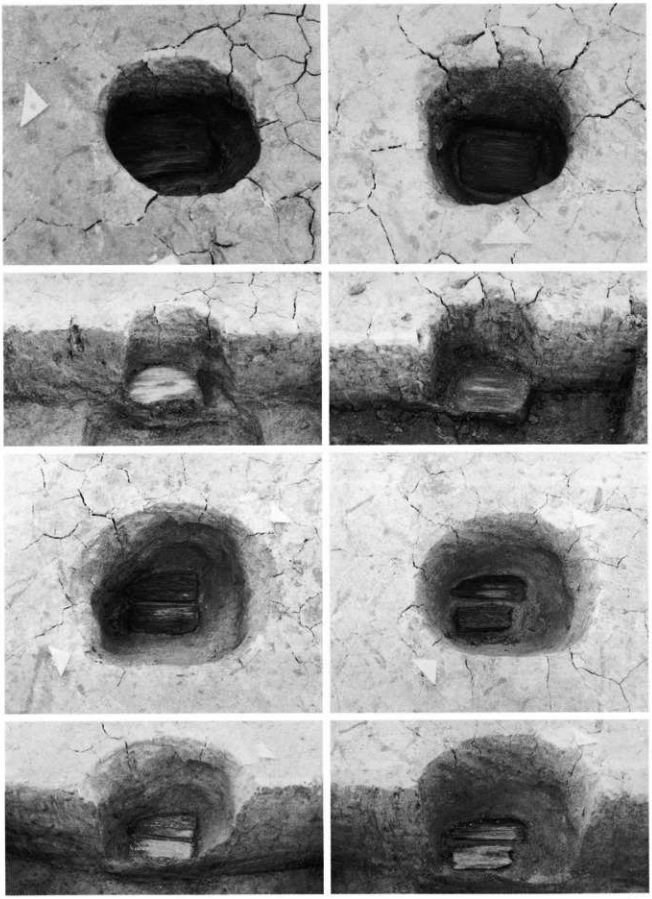
写真図版17
C地区3
93年度調査区(3)
弥生土器等出土状況2



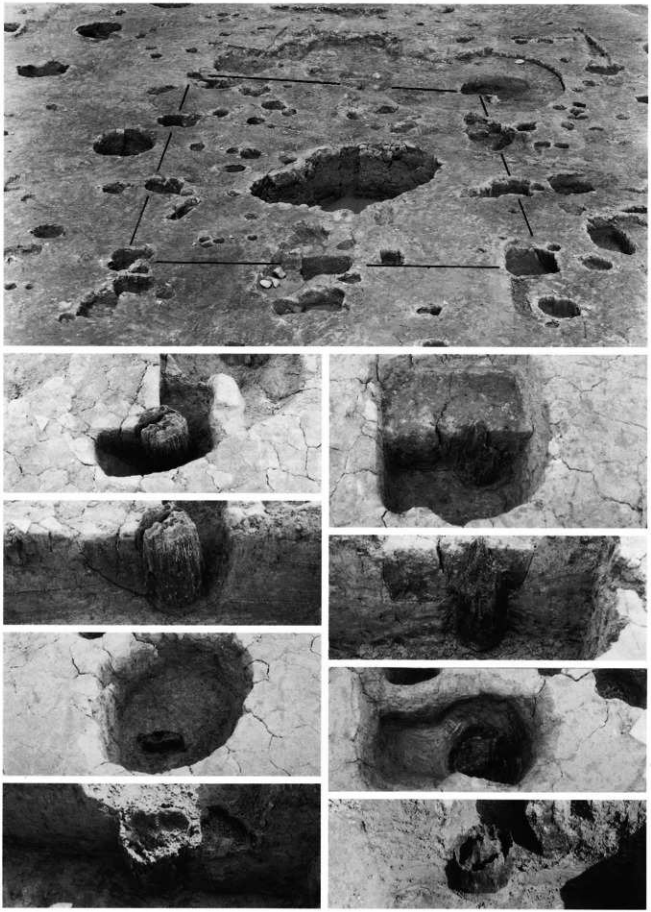
写真図版18
C地区4
93年度調査区(4)
古代の遺構1

写真図版20
C地区6
93年度調査区(6)
古代の道構3

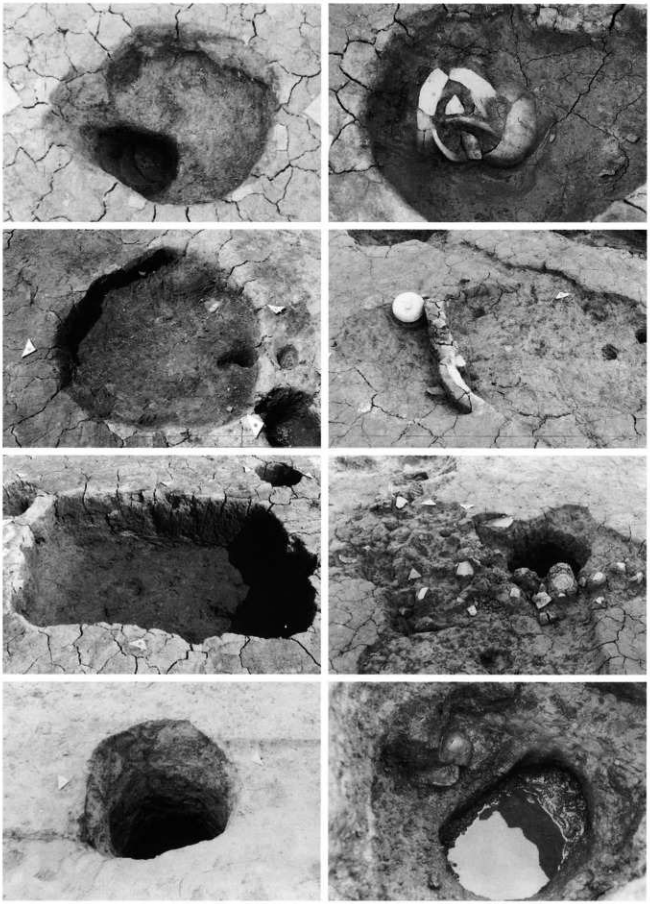




写真図版22
C地区8
93年度調査区(8)
古代の遺構5

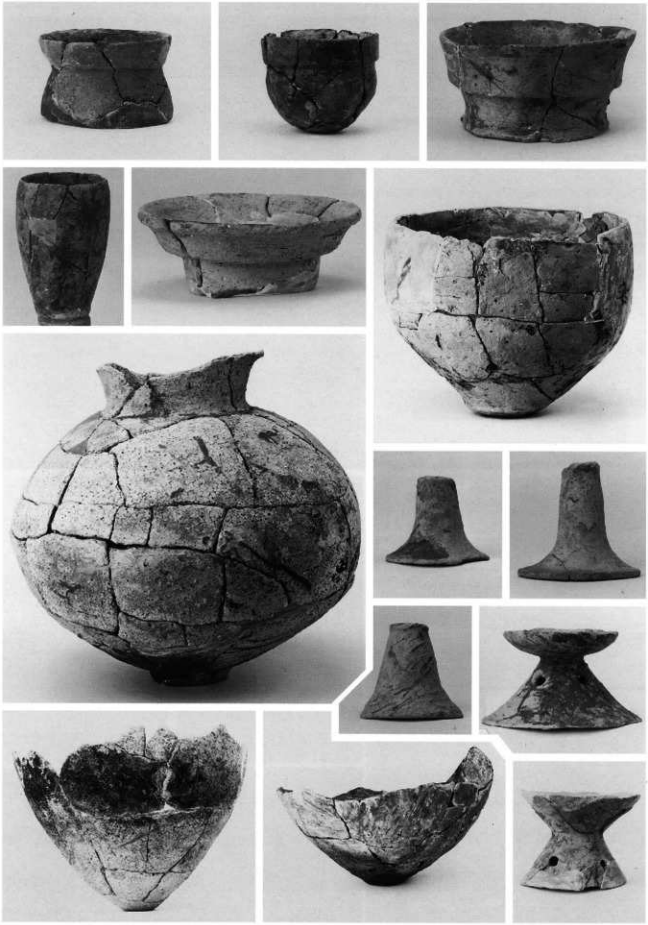


写真図版23
C地区9
93年度調査区(9)
遺物出土状況



写真図版24
C地区10
94年度調査区(1)

写真図版26
C地区12
出土遺物(1)
弥生土器



写真図版27
C地区13
出土遺物(2)
弥生土器

写真図版28
D地区1
93年度調査区(1)全景（上空）

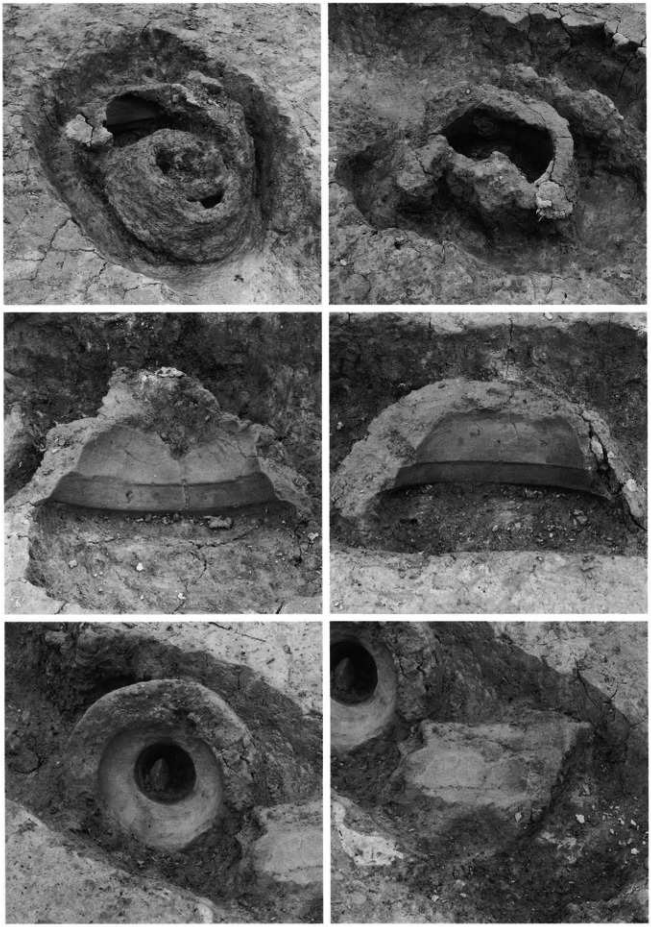
写真図版29
D地区2
93年度調査区(2)
完掘状況1

写真図版30
D地区3
93年度調査区(3)
完掘状況2

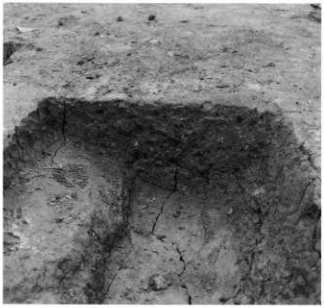
写真図版31
D地区4
93年度調査区(4)
鋳造関連遺構群

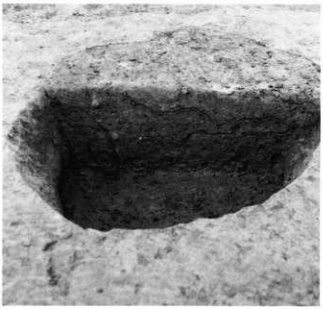
写真図版32
D地区5
93年度調査区(5)　鋳型関連遺構（ＳＤ17）

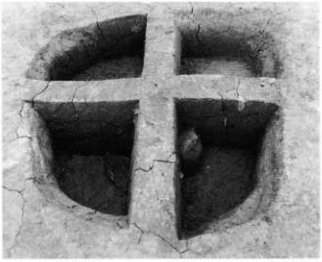
写真図版33
D地区6
93年度調査区(6)
鋳型



写真図版34
D地区7
93年度調査区(7)
その他の遺構1

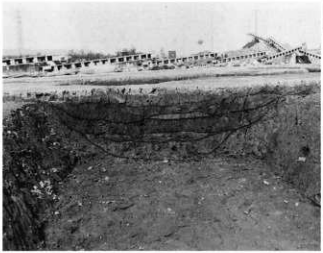




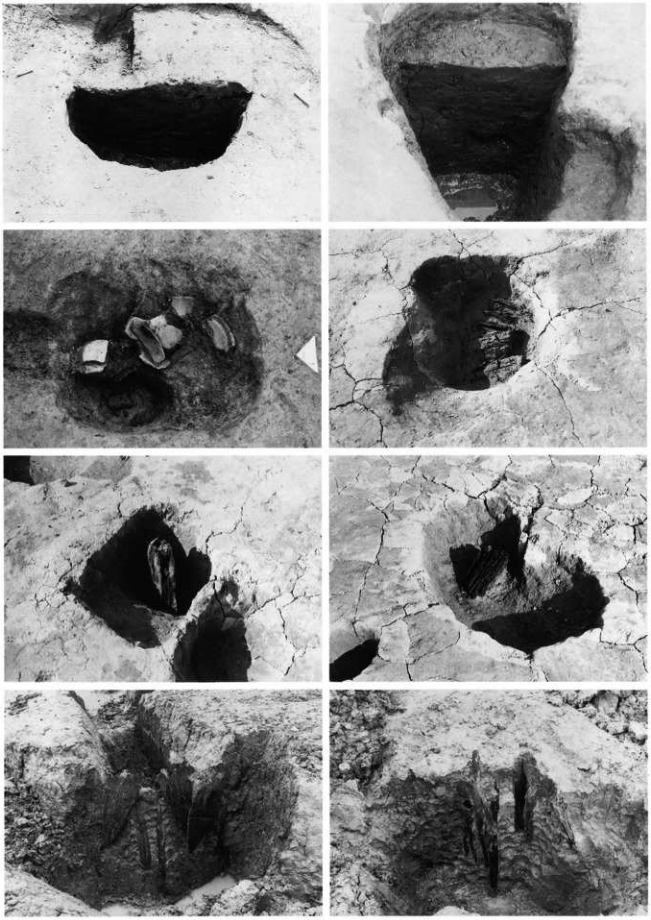


写真図版36
D地区9
94年度調査区(1)
古代の遺構1

写真図版38
D地区11
94年度調査区(3)
古代の遺構3



写真図版40
D地区13
94年度調査区(5)
古代の遺構5

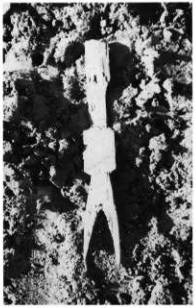


写真図版42
E地区1
全景（上空）

写真図版43
E地区2
道　構
（土坑他）

写真図版44
ＳＤ100
遺物出土状況１

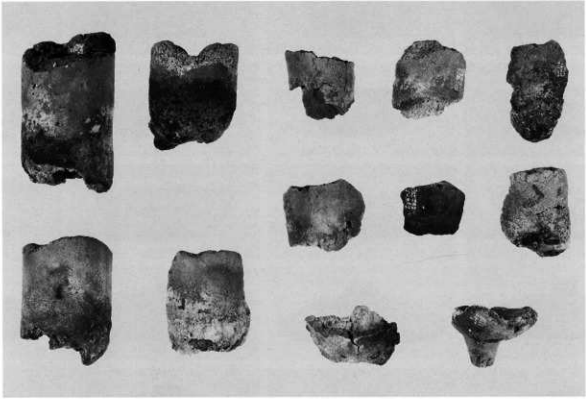
写真図版45
ＳＤ100
遺物出土状況２
木簡と人形等出土状況

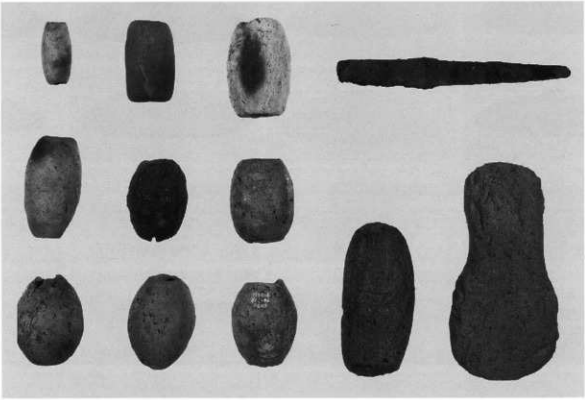


写真図版46
ＳＤ100出土遺物１
須恵器１

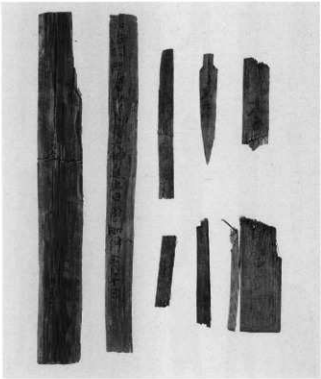
写真図版47
ＳＤ100出土遺物２
須恵器２

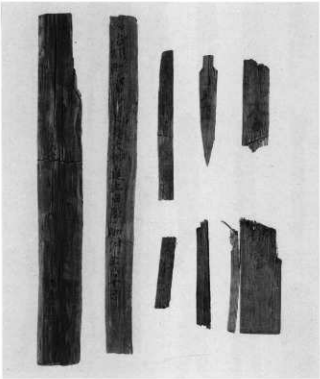
写真図版48
ＳＤ100出土遺物３
土師器

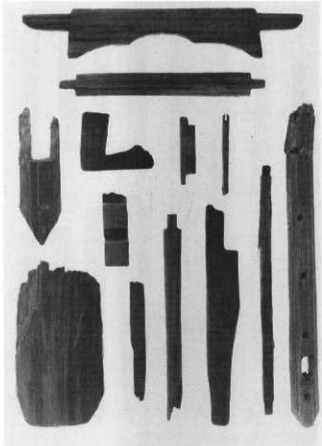


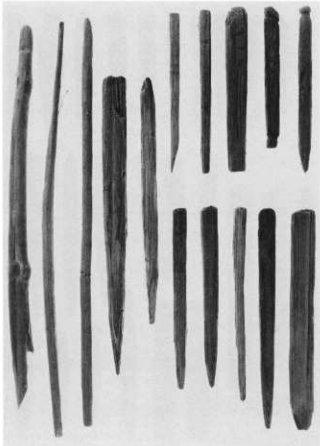


写真図版49
ＳＤ100出土遺物４
木製品(1)
木簡他

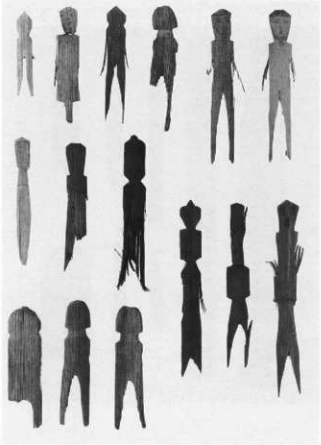


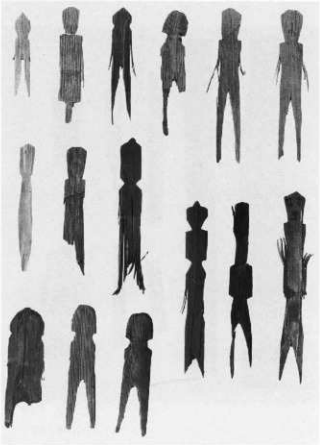


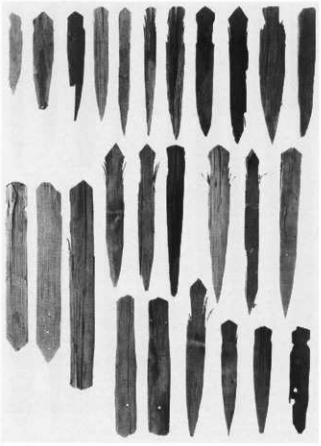


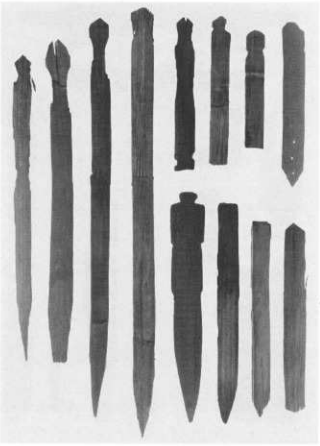


写真図版50
ＳＤ100出土遺物５
木製品(2)
人形・斎串

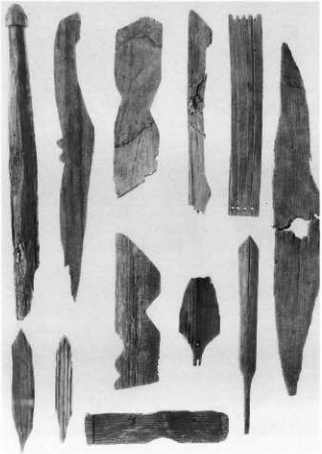


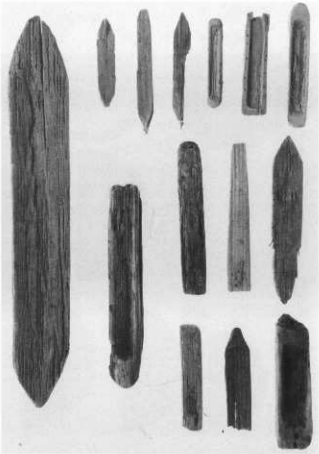


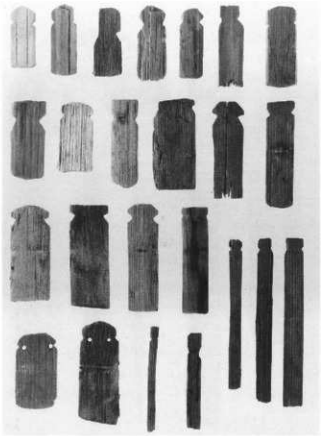




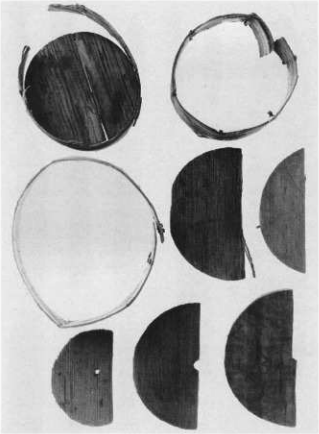
写真図版51
ＳＤ100出土遺物６
木製品(3)
鳥形他

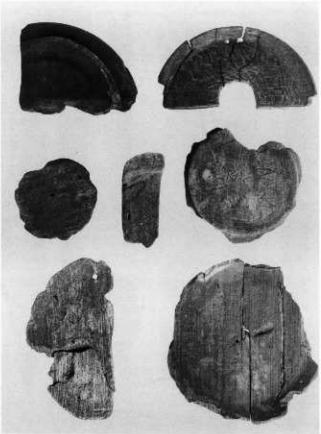




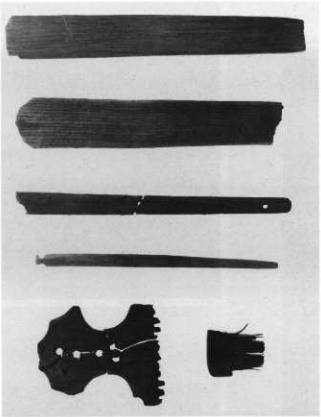


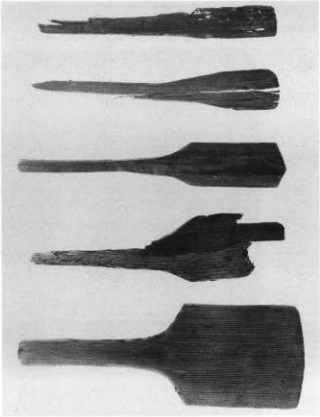
写真図版52
ＳＤ100出土遺物７
木製品(4)
容器類他

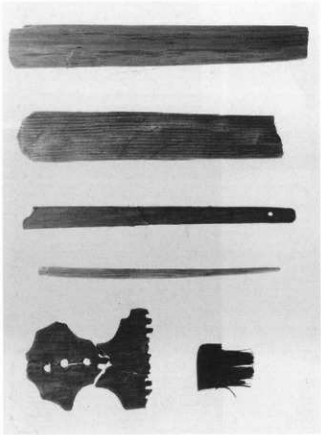


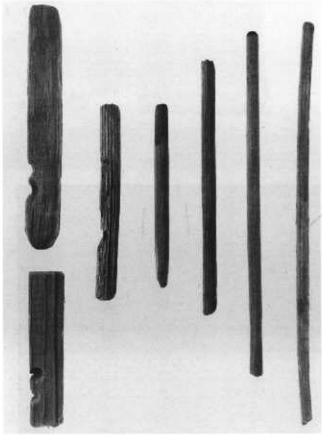


写真図版53
ＳＤ100出土遺物８
木製品(5)
器物他





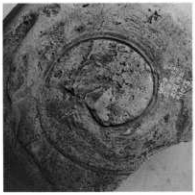


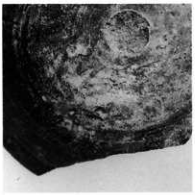


写真図版54
ＳＤ100出土遺物９
木製品(6)
版木状木製品１

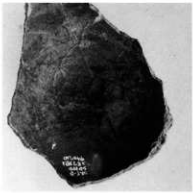
写真図版55
ＳＤ100出土遺物10
木製品(7)
版木状木製品２

写真図版56
ＳＤ100出土遺物11
墨書土器(1)
人名他



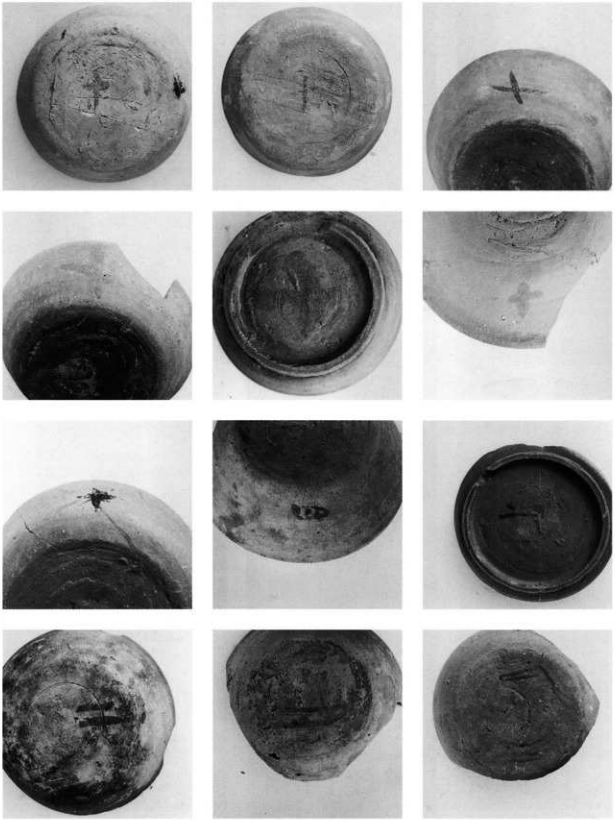


写真図版57
ＳＤ100出土遺物12
墨書土器(2)
地名他

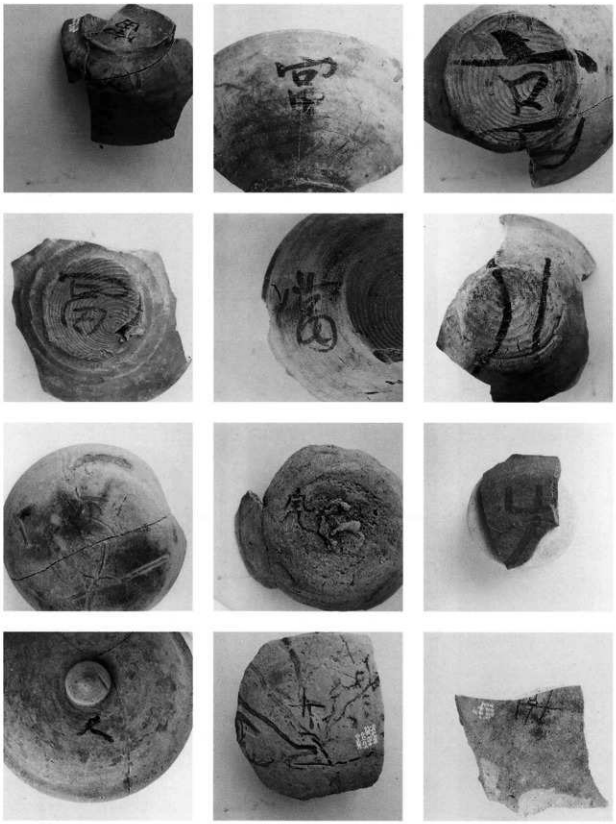


写真図版58
ＳＤ100出土遺物13
墨書土器(3)
名詞他

写真図版59
ＳＤ100出土遺物14
墨書土器(4)
数字他



写真図版60
ＳＤ100出土遺物16
墨書土器(5)
その他の文字



富山県大島町
北高木遺跡発掘調査報告書

発行日　平成7年3月31日
編　集　富山県埋蔵文化財センター
発　行　大島町教育委員会
〒939-0292　富山県射水郡大島町小島703
☎（0766）52－3854
FAX（0766）52－6130
印　刷　日興印刷株式会社